

# 海外平安 文学研究 ジャーナル 《インド編 2016》

Journal of Heian Literature Research Overseas - Indian version 2016



伊藤鉄也 編

<謝辞 Acknowledgement >

本研究は JSPS 科研費 25244012 の助成を受けたものです。

This was financed with JSPS KAKENHI Grant Number 25244012.



## はじめに

昨秋、インドのニューデリーで「第8回 インド国際日本文学研究集会」を、2日間にわたって開催しました。

あれから5ヶ月。

参加者のみなさまには、当日の発表などを原稿として提出していただきました。

また、パネルディスカッションやシンポジウムは、テープ起こしの原稿を元に編集しました。

そのはずでした。

しかし、2日間の集会をコーディネートした私の不手際から、パネルとシンポの録音等が不完全だったためにその作業は難渋しました。その窮地を、麻田豊先生が根気強くフォローしてくださいました。当日のみなさま方からいただいた貴重な意見や示唆に富む発言および提言は、麻田先生によってみごとに蘇りました。あらためて、この場を借りてお礼申し上げます。

ページを繰っていただくとおわかりのように、インドの8言語をめぐる多彩な問題が噴き出しています。このような記録がかつてあったでしょうか。しかも、『源氏物語』という日本の古典文学に関する問題が、インドで討議されているのです。これまで取り組んできたことが、確実に一歩前進したことを実感していただけるジャーナルに仕上がったと思います。

今回も、たくさんの種をインドの地に蒔くことができました。今秋には、インド南部にあるハイデラバードで「第9回 インド国際日本文学研究集会」を開催しようと、早くも準備を進めています。牛歩のようであっても、着実に足跡を印して進んでいるはずです。

インドにおける日本文学研究を通して、日本文化の往還と変容を研究テーマとしたこの国際研究集会は、今後ともさらなる展開を目指して取

り組む所存です。変わらぬご支援のほどを、よろしく申し上げます。

最後になりましたが、国際交流基金ニューデリー日本文化センターの宮本薫所長と野口晃佑さんには、準備段階からきめ細かなご高配をたまわりました。今後ともこうした文化活動に対するご理解とご協力を、どうかよろしく願いいたします。

2017年3月1日

日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A)

「海外における源氏物語を中心とした平安文学及び各国語翻訳に関する  
総合的調査研究」(課題番号：25244012)

研究代表者

大学共同利用機関法人人間文化研究機構

国立大学法人総合研究大学院大学

国文学研究資料館 伊藤鉄也

## 第8回インド国際日本文学研究集会

『源氏物語』をインド7言語に翻訳するためのシンポジウム  
—ダイジェスト版『十帖源氏』を世界33言語で翻訳するプロジェクト—

時期：2016年11月11日（金）～12日（土）[2日間]

会場：国際交流基金・日本文化センター（ニューデリー／インド）

([http://www.jfindia.org.in/?page\\_id=38](http://www.jfindia.org.in/?page_id=38))



◇ プログラム ◇

11日（金） 公開パネルディスカッション

10:00～11:15 開会式と講演

総合司会 伊藤鉄也（国文学研究資料館）

挨拶 宮本 薫（国際交流基金ニューデリー事務所長）

趣旨説明 伊藤鉄也（国文学研究資料館）

基調講演 高田智和（国立国語研究所）  
「変体仮名の国際標準化について」

講演 伊藤鉄也（国文学研究資料館）  
「インド8言語訳『源氏物語』の書誌」

11:15～11:30（休憩）

11:30～13:30

講演 入口敦志（国文学研究資料館）  
「江戸時代のダイジェスト版『十帖源氏』について」

問題提起 コメンテーター 麻田豊（元東京外国語大学）  
アルン・シャーム（English and Foreign Languages University）  
「マラヤラム語訳の問題点」（ドラヴィダ語族）  
菊池智子（翻訳家）  
「ヒンディー語訳の問題点」  
（インド・アリア諸語の中央語群西部ヒンディー語）  
村上明香（University of Allahabad）  
「ウルドゥー語訳の問題点」  
（インド・アリア諸語の中央語群西部ヒンディー語）

13:30～14:45（昼食）

14:45～17:30 パネルディスカッション

テーマ：（1）『十帖源氏』を多言語翻訳するための問題点  
コメンテーター アニタ・カンナー（ネルー大学）  
麻田豊

## 12日（土） 公開シンポジウム

10:00～11:15

挨拶 伊藤鉄也

基調講演 伊藤鉄也「〈海外源氏情報〉を科研の成果から見る」

講演 須藤圭（立命館大学）『源氏物語』の英訳について」

11:15～11:30（休憩）

11:30～13:15

問題提起 コメンテーター 麻田豊

リーマ・シン（Ph.D candidate, University of Delhi）

「パンジャブ語訳の問題点」

（インド・アリア諸語の中央語群）

タリク・シェーク

（English and Foreign Languages University）

「ベンガル語訳の問題点」

（インド・アリア諸語の東部語群）

ナビン・パンダ（Delhi University）

「オディアー語訳の問題点」

（インド・アリア諸語の東部語群）

13:15～14:30（昼食）

14:30～17:30 シンポジウム

テーマ：（2）『十帖源氏』を多言語翻訳するための方法と課題

司会・進行 伊藤鉄也

コメンテーター アニタ・カンナー

麻田豊

# 目次

はじめに	伊藤 鉄也
大会プログラム	
◎ ご挨拶	宮本 薫 15
◎ 第8回研究集会の趣旨	伊藤 鉄也 16
◎ 講演	
基調講演「変体仮名の国際標準化について」	高田 智和 25
講演「インド8言語訳『源氏物語』の書誌」	伊藤 鉄也 31
講演「江戸時代のダイジェスト版『十帖源氏』について」	入口 敦志 40
講演「『源氏物語』の英訳について」	須藤 圭 49
◎ 問題提起	
「マラヤラム語訳の問題点」(ドラヴィダ語族)	アルン・シャーム 71
「ヒンディー語訳の問題点」 (インド・アリア諸語の中央語群西部ヒンディー語)	菊池 智子 74

「ウルドゥー語訳の問題点」

(インド・アールリア諸語の中央語群西部ヒンディー語)

村上 明香 80

「パンジャービー語訳の問題点」(インド・アールリア諸語の中央語群)

リーマ・シン 86

「ベンガル語訳の問題点」(インド・アールリア諸語の東部語群)

タリク・シェーク 92

◎ パネルディスカッション

『『十帖源氏』を多言語翻訳するための問題点』 101

◎ シンポジウム

『『十帖源氏』を多言語翻訳するための方法と課題』 129

◎ 資料集 (各国訳訳『十帖源氏』「桐壺」)

現代語訳 (日本語) 畠山 大二郎 (Daijirou Hatakeyam)、  
渋谷 栄一 (Eiichi Shibuya)、  
浅川 槇子 (Makiko Asakawa) 157

マラヤーラム語訳 Arun Shyam (アルン・シャーム) 167

ヒンディー語訳 菊池 智子 179

ウルドゥー語訳 村上 明香 191

ウルドゥー語訳 (デーヴァナーガリー文字)

Mohammad Naushad Kamran

(ムハンマド・ノーシャード・カームラーン) 199

パンジャービー語訳	Reema Singh(リーマ・シン)	217
ベンガル語訳	Tariq Sheikh(タリク・シェーク)	223
オディア語訳	Nabin Panda(ナビン・パンダ)	233
<u>執筆者一覧</u>		243
<u>編集後記</u>		244
<u>研究組織</u>		245

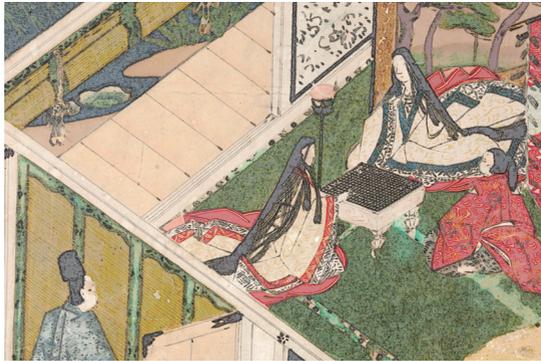


このいりつる△うしはまた  
△△ねはひま見ゆるに△りて  
にしさまにみとをし給へは  
△のきはにたて屏風はしの  
△たをしたゝまれたるにまきるへき  
木丁などもあつければにやうら  
かけていとよく見△れ△△

(色紙詞書)

\*表紙・前扉・扉 人間文化研究機構・国文学研究資料館所蔵  
『源氏物語屏風』「空蟬」巻の色紙  
(金箔散下絵入の詞書、金泥彩色画／番号：ラ1-18)

## 挨拶と趣旨





## ご挨拶

宮本 薫

この度「第8回インド国際日本文学研究集会」を当センターで開催できることを大変光栄に感じています。平成16年度から続く歴史ある当研究会の今回のテーマは「翻訳」だと伺っています。国際交流基金としても日本書籍の出版翻訳の助成プログラムもあり、また当センターとしても漫画の出版翻訳助成を行ったこともあり、非常に興味のある分野です。本日の研究者の皆さんの発表および意見交換を大変楽しみにしています。また、今回の研究集会のように「源氏物語」という決まった作品をインド国内の7つの言語に翻訳することを前提に、それぞれの言語における翻訳の問題点や課題を共有し、解決方法を探っていくという手法も大変興味深いものです。また、そうした研究者だけの閉じられた空間になりがちな研究の場を一般にも公開し、日本語や日本文学を学ぶ学生にも参加する機会を与えていただけたことにも大変感謝いたしています。翻訳作業には本当にさまざまなお苦勞があり、簡単にひとつの答えを見るけられるものではないことは承知しておりますが、あえてひとつだけ国際交流基金としての立場からお願いしたいのは、「読者が原文である日本語で読みたくなるような翻訳」というものを是非意識していただきたいということです。皆さんの翻訳した作品を読み、そこから新しい日本語学習者や日本研究者が生まれることを願っております。本日の研究集会のために膨大な準備作業があったことは想像に堅くありません。伊藤先生をはじめとする研究者の皆様、それから国文学研究資料館の事務スタッフの皆様にご挨拶申し上げます。それでは本日はどうぞ宜しくお願いいたします。

(国際交流基金 ニューデリー日本文化センター・所長)

## 第8回研究集会の趣旨

伊藤 鉄也

今回の国際日本文学研究集会は、第8回と銘打ちました。今までの7回目までとは全く違う形をとっています。

2011年に「インド国際日本文学研究集会の記録」という報告書をつくりました。これは第1回から第7回の活動を掲載しています。第1回にはカンナー先生、バルマ先生、当時の榎大使が参加されました。今回もいらっしゃる入口先生も、第1回と第4回に参加なさっています。

さて、今回発表したシンさん、タリクさんは過去の発表者です。ささやかな集会ではありますが、このように何人かの方が研究者として育ち、いま、若手として日本文学の研究をなさっています。今後も、過去の研究集会の長所を酌み取って刺激を与え合う場にしてもらい、彼らには育って行って欲しいと願っています。

そのためにも、この集会はずっと日本語でやっています。日本語以外は使わないのが原則です。その理由は、現地の方が得意なヒンディー語などの母国語、あるいは英語でディスカッションすると、日本人が全く参加できないのです。それではこのインドでの日本文学の研究は絶対に進みません。日本人が日本語でコメントをつけられないと、その発表なり、相手の研究生が成長していかないのです。逆に言えば、まだまだインドでの研究には、伸びしろが大きいと思います。日本の文学だからこそ、日本人がいろいろなことを手伝わなければならない時期だと考えています。

当面は、日本語で通す必要があるでしょう。日本語で研究集会をするのであれば、日本の研究者がやって来ます。第8回までの間、私はずっとそういう日本の研究者たちを連れてきました。もし、英語で発表するとなると、全く日本人が集まらないのです。特に、古典文学の分野では皆無だと言えます。古典を専門とする人たちは、英語や外国語は自分たちの研究範囲だとは思っていないからです。今後も、「日本語を使った海外の研究集会」、そういう集会を持ちたいと思っています。

過去の研究集会では、インド側担当者としてネルー大学とデリー大学で1回ずつ交互に開催してきました。本来ならば、第8回はデリー大学で行うはずでした。しかし、2012年の2月以降開催がストップしていました。約3年以上停止したままだったので、もう一度動かすために大分パワーが要りました。第8回の開催を実現し、これからも続けていくためには、デリー大学とネルー大学にお世話になるばかりではなく、研究集会として主体的に企画していく必要があるのではないかと考えました。新しいやり方でやる、ということを中心に心がけたつもりです。加えて、若い研究者に継いでいただくことも目的にしました。これで、新しいスタートになったと思っています。回数としては8回ではあります。しかし、今回が初回であるという気持ちでいます。

第8回の趣旨を説明します。

基本として、源氏物語は世界で33種類の言語で翻訳されています。日本の現代作家では村上春樹が有名ですが、それでもせいぜい10言語です。インドの言語でいうと、村上春樹の翻訳でも、英訳からのマラヤラム語とベンガル語の2つです。

『源氏物語』はサーヒティヤ・アカデミーが8種類のインドの言語に翻訳したけれども、元がアーサー・ウェイリーの英訳なんです。つまり、重訳であって、日本語の原文を元にしていないのです。アーサー・ウェイリーの訳のいろんな問題点は、日本で今でも研究されており、あくまでもある意味で抄訳なのです。それを使って読んでこれが『源氏物語』だと言われたら、我々としては頷くわけにはいきません。きちんとした日本語の原文からの翻訳で読んでほしいと思います。

『源氏物語』は重訳も含め、現在33種類の言語で翻訳されています。このプロジェクトの目標として、『十帖源氏』の原文で、33種類の訳を完成させたいのです。さらに、私は34番目の訳ができる言語を探しています。なかなか見つからず、33言語で大体地球を覆ってしまったかなと思っています。しかし、ひとつの国にもいろいろな民族がいて、インドでもまだ8種類の言語です。今回で、インドは新しく2種類を追加

し、10種類にしました。他の国にも多くの言語があるはずですが、日本でいえば、関東方言と関西方言があるように、ローカルな言語がまだ世界には数多くあります。とりあえず、当面は33種類の各国語訳（これを私は多言語翻訳と言っています）をして行きたいと思っています。現在は、イタリア語訳、スペイン語訳、英訳、ロシア語訳の『十帖源氏』を並行して進めています。

サーヒティヤ・アカデミーで行われたインド諸言語の翻訳は『源氏物語』54巻のうちの第9巻「葵」まででした。その理由は、原典が長いからです。長過ぎるので全訳は難しいということであれば、ダイジェスト版なら大丈夫だろうと考えました。カンナー先生が日本にいらっしまったとき、『おさな源氏』という短いダイジェスト版の本があり、当初はそれでチャレンジをしていました。しかし、余りにも省略し過ぎて訳がわからず、日本人が読んでも理解が難しいものでした。しかも、『源氏物語』内の和歌は、約900全てあるのです。それなのに物語はダイジェストなので、これでは無理だと思い、もう少し長い『十帖源氏』ならいいだろうということで、再スタートを切ったのです。

現代語訳した「桐壺」の巻は、第8回の資料として全て収録しました。『十帖源氏』の「桐壺」の訳、古文とその翻字です。日本語として文字にして、現代語訳をつけました。これはいろいろな国の方の意見を聞いて、訳しやすいようにした現代語訳です。

将来的な目標として、日本の文化が各国にどういうふうに形を変えて意識されて伝わっていくのかを明らかにしたいと思っています。

例えば、3年前にスペイン語訳ではこういうことがありました。『源氏物語』に「花も紅葉も なかりけり」という下りがあります。スペインには紅葉がない、と言われました。それなら花々でいいとしました。こだわってしまって、単語や植物、道具、着物、アクセサリーは自分の国にはないので、翻訳できないとなると、そこで作業が止まってしまうのです。そこで下手に置きかえられると全然違うイメージの訳ができてしまうという問題があり、そういう意味では各国の調整が必要です。逆

に言えば、日本に独特な紅葉が、スペインでどう訳されていくのかと追いかけて、ひとつの文化がどう形を変えて伝わっていくかを調べれば、立派に研究になります。そこをやってみたいと思っています。

ほかに、イギリスにはセミがありません。『源氏物語』の3巻目、「空蟬」はセミの抜け殻のことです。光源氏が行ったとき、相手の女性が着物を脱ぎ捨てて、本人は逃げ出してしまいます。その部屋には着物だけが残っているという情景です。セミを知らない人は、この巻のメインテーマであるタイトルの意味がわからなくなります。その場合、イギリスではどう訳すのでしょうか。そこには何か工夫があります。文化の変容、つまり、文化をどういうふうに、例えをどう変えるなりして訳して、その国の人に伝えるのかという命題が私の最終目標です

その前段階として、まず33種類の言語を揃えて、みんなで各国の訳を読む必要があります。そこにやはり日本人が要ると思うのです。前述の例なら、セミはこういうもので、空蟬はこういう意味だ、という説明は日本人がすればいいと思います。その意味では、コラボレーションともいえます。そういうことをやっていくには、『源氏物語』は54巻あるので、今回で1巻目の「桐壺」ですから1年に1回やっても54年かかる計算になります。ひとりの人間でどうにかできる分量には限界があるので、これは何百年もかかるプロジェクトだと思っています。その中でインドセクションとして、インド諸言語を活発にやってほしい、と若手の方々に期待しています。

別の面での課題として、原文から翻訳している国が大変に少ないということがあります。ほとんどが重訳で、アーサー・ウェイリーの英訳からです。その次がサイデンステッカー訳です。最近だと、ロイヤル・タイラー訳で翻訳する例もあります。

昨年、アメリカ合衆国では、また新しい英訳が出ました。こうして、次々に各国訳が出ています。何を元にして訳しているかが問題です。インドに近い地域だと、例えば、エジプトのアハマド・ファトヒ先生が『源氏物語』を訳しています。これは瀬戸内寂聴の『源氏物語』の抄訳でやっ

ています。以前、ここの国際交流基金の宮本所長のご助力により直接アハマド先生とお会いできたとき、「日本の原文から訳してください」と言ってみたら、忙しくてできないとおっしゃるのです。原文からの翻訳については、十分な知識と実績を持った方なので、何とか時間を作れないでしょうか、と聞いてみたのですが、とにかく『源氏物語』は長く、一生のうちにできないだろうから、なかなか着手できないとのことでした。だから、エジプトの若手が一生をかけてやるくらいの仕事といえます。これは日本でも同じことで、円地文子は命をかけて最後の仕事として現代語訳をしました。瀬戸内寂聴も相当時間をかけています。原文から訳すとはそういうことです。

ほかに、トルコのアンカラ大学にエルキン・ジャン先生という方がいます。この先生は、古文から訳しました。これは理想的です。そうするといろいろな方が続きました。日本でもたくさんの方が現代語にしています。海外でも、いろいろな方が原文から訳したら同じように、もっと数多くの訳が出ると思います。

最近ではオルシ先生が古文からのイタリア語訳を出しました。この方は以前からよく知っている先生で、日本人と同じように、いや日本人以上に古文の読解力があります。そういう方々は翻訳のレベルが違うと思います。しかし、そこまで行かなくても構いません。場合によっては日本の現代語訳からでもよいので、とにかく日本語から訳してほしいと思います。英語からの重訳をしないでほしいのです。

インターネットを通せば、分量が多くても重さや厚さとしては感じられないので、Web サイトなどの場で発表していけばよいと思います。良いものは読まれます。印刷物の形にすると場所を取ります。しかし、電子ファイルではそういうことはありません。私は、どんどん電子ブックにして出していこうと思っています。

『源氏物語』の外国語翻訳の歴史は、末松謙澄という人が明治 15 年に英訳をしたことから始まりました。英訳を皮切りに、ドイツ語訳、フランス語訳ができていきました。アーサー・ウェイリーは、意外と後に

なってからで、末松謙澄の約 70 年後です。それまでは、末松謙澄の英訳をいろいろな国の人たちが訳していたのです。ちなみに、末松謙澄は伊藤博文の娘婿という人物で、のちに政治家になりました。

このように翻訳の歴史もとても長く、いろいろな話があります。インドでも、ぜひ若手に「インドの翻訳史」を研究して、サーヒティヤ・アカデミーはどうやってその 8 言語を選んだのか、8 言語の担当者をどうやって決めたのか、担当者はどうやって訳をしたのか、ということ进行を明らかにして欲しいと思います。

翻訳の環境も疑問を感じることを思います。翻訳者の方は辞書をどうしているのでしょうか。今回の『十帖源氏』を 10 種類の言語で訳した後、翻訳の対照表を作れば、自然と辞書ができてきます。古語「あはれ」が現代語の「しみじみしたこと」に紐づけられ、そこにウルドゥー語、ヒンディー語、マラヤーラム語などではどう訳すのかを並べるのです。そうすると対訳辞書の形になります。そういう辞書を、『十帖源氏』のテキストを手始めに、こつこつと積み重ねて行くと、辞書として膨大なデータになっていきます。

これを進めると対訳用の辞書は自然にできてしまいます。それをインターネットに公開したら、誰でも検索さえすれば、「日本のこの古語は、インドのこの言語では、この言葉で訳している」などが見えてきます。それは、次に古典を訳すときに利用できます。こういった副産物がたくさんできてくるでしょう。ウルドゥー語と日本語の古語の辞書をわざわざつくる必要はなくなるのです。

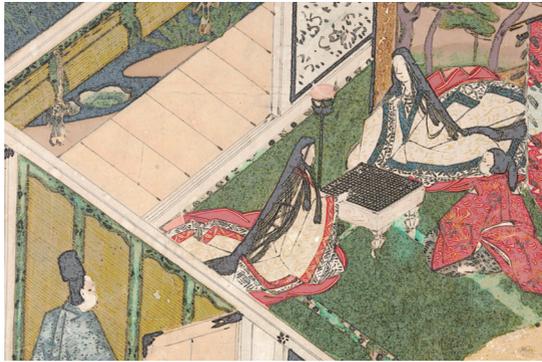
そうなれば、若い方の感性も入れて、訳がたくさんあった方がよい、ということになります。言葉の意味はひとつではありませんから。

この研究集会は、未来への大きな展望があります。そこに向かうためのきっかけとして、若い方々におもしろさを感じてほしいと考えています。

(国文学研究資料館・教授)



# 講演





# 変体仮名の標準化について

高田 智和  
(たかだ ともかず)

## ● 1. はじめに

パソコンやスマートフォンなどの電子機器では、文字を数字列に置き換えて扱う。電子機器で文字を扱う仕組みを文字コードと言う。20世紀の終わり頃から、インターネットによる通信環境の広がりとともに、電子機器は業務用から家庭用・個人用に浸透し、文字コードも多文字環境となっていく。現時点では、現代通用の世界中の文字の文字コードの規格化（JIS規格やISO規格）は終了し、規格化の対象は歴史的文字へと移行しつつある。日本語文字においても同様であり、国書・漢籍・仏典など歴史的典籍の文字のコンピュータ利用に対して、文字コード標準化の中心が移りつつある。そのような文字の中に、変体仮名も含まれている。本稿では、変体仮名の文字コード標準化（国際規格化）の現状を述べる。

## ● 2. 行政情報処理と変体仮名

変体仮名は歴史的文字であるが、蕎麦屋の暖簾や和菓子の包装などに用いられ、現代日本の商業用文字としても現役である。しかし、電子機器での利用という観点では、最大のニーズは行政用途での人名処理と言って良い。

戸籍法施行規則第60条（昭和23〔1948〕年1月1日施行）では、名付けに用いることができる文字として、次のように規定されている。

- 一 常用漢字表に掲げる漢字
- 二 別表第二に掲げる漢字
- 三 片仮名又は平仮名（変体仮名を除く。）

ここで、第3項の括弧書き「変体仮名を除く」に注目してほしい。昭和23年に戸籍法施行規則が施行されるまで、この決まりはなかったのである。つまり、昭和22年末までは、法的に変体仮名の名付けでの使用が許容されていたということである。昭和22年生まれならば、平成28年現在68歳か69歳であり、最後に変体仮名で名付けが行われた最後の世代に相当する。それ以前の世代であれば、名前に変体仮名を使う方はさらに多くなる。また、除籍簿（亡くなった方の戸籍）の保存期間は150年であるから、今後200年近く変体仮名は行政情報処理で必要とされるのである。このように、市役所等の戸籍窓口では、現在日常的に変体仮名を使っているのであり、そして、変体仮名の使用はこれからも続くのである。

法務省民事局は、戸籍で使うことができる文字の集合として、戸籍統一文字（改正平成16年12月6日付け法務省民一第3464号）を定めている。戸籍統一文字には168字の変体仮名が収録されている。戸籍統一文字変体仮名は、行政用途の変体仮名集合として位置づけられる。

### ◎ 3. 学術情報処理と変体仮名

日本文学、日本史学、日本語学、文献学、書誌学、書学書道史、印刷史など、およそ日本についての歴史的研究を行おうとすれば、変体仮名の習得は必須である。また、パソコンやインターネットの利用が日常化した今日では、ワープロソフトでの論文作成や電子入稿で変体仮名を使う、あるいは、データベースで変体仮名を用い共有するなど、電子機器で変体仮名を扱うニーズが生じている。例えば、日本語表記史での仮名字体の記述や、仮名消息などの古文書翻刻などである。

しかし、学術用途での情報交換にそのまま使えるような「標準的な」変体仮名セット、すなわち、行政用途における戸籍統一文字変体仮名に相当するようなものは存在しない。そのため、学術情報処理での変体仮名のニーズに応えるためには、変体仮名セットの作成から着手せねばならない。

そこで、国立国語研究所共同研究プロジェクト「文字環境のモデル化と社会言語科学への応用」（リーダー：横山詔一、研究期間：平成21年10月～平成28年3月）において、変体仮名セットの作成を行うことにした。選字チームは、矢田勉（大阪大）、斎藤達哉（専修大）、銭谷真人（早稲田大）、當山日出夫（立命館大）、小助川貞次（富山大）、高田の6名である。選字目標は下記2点である。

- (1) 電子機器で変体仮名を扱うニーズが明らかな日本語表記史分野と古文書翻刻で最低限必要なセットとする。
- (2) 図形文字として十分に同定可能な安定したセットとする。

選字目標の(2)について解説を加える。かつてのJIS規格拡張の折、変体仮名の収録が議論されたことがある。結果として収録は見送られたが、断念の理由がJIS X 0213:2000規格票の解説（pp.512）に記述されている。

4.4.5 変体仮名 変体仮名は、少数例ながら、書道の教科書などから採取され、採録の要望も出されていた。

しかしながら、文字セットとしての変体仮名のレパトリの確定が非常に困難であると判断されたことと、採取例などにに基づき、幾つかの変体仮名を追加することを想定した場合でも、“図形文字として十分に同定可能な安定した字形を示すこと”、“変体仮名とそのもになった漢字の草書体とを明確に区別すること”などが困難であり、採録規準を満たせないと判断されたことから、変体仮名は、採録しないこととした。

情報交換のための符号化文字集合を考える上で、JIS規格票の指摘は重要であり、新たに選字を行うための教訓でもある。古筆の仮名からセットを作ろうとすれば、個人差・資料差が大きく、バリエーションは無限となる。図形としてある程度パターン化されたものに依拠しなくて

は、セットを作ることは困難であろう。そこで、活字やデジタルフォントとして実現されている近代以降の変体仮名をベースに選字を行うことにした。選字作業の詳細は高田・矢田・斎藤（2015）を参照されたいが、下記6点の変体仮名から基本集合を作成し、主要な仮名字体研究論考や、東京大学史料編纂所の『大日本古記録』『大日本古文書』で使用実績のある仮名を加えて、「学術情報交換用変体仮名」セットを作成した。もとより、このセットで学術需要のすべてを満たせるとは思っていない。将来に渡ってメンテナンスが必要であることは言うまでもない。

1. 精興社変体仮名
2. 中西印刷変体仮名
3. 築地活版五号明朝体活字変体仮名（明治27年）〔府川充男『聚珍録 第三編仮名』（三省堂、2005）より〕
4. 教科書活字（明治25年・明治27年）〔板倉雅宣『教科書体変遷史』（朗文堂、2003）より〕
5. 今昔文字鏡変体仮名
6. Koin 変体仮名（<http://www10.plala.or.jp/koin/koinhentaigana.html>）

現在の「学術情報交換用変体仮名」セットは293字である。国立国語研究所サイトで公開している（<http://kana.ninjal.ac.jp/>）。

#### ◎ 4. 変体仮名の ISO 提案

2015年10月に、日本からISO規格に対して変体仮名の追加収録を提案した。提案に際して、ISO規格の国内対応を担当する情報処理学会情報規格調査会SC2専門委員会において、日本提案変体仮名セットを作成した。戸籍統一文字168字と「学術情報交換用変体仮名」セット293字を調整し、原則として両者の和集合を日本提案変体仮名セットとした。戸籍統一文字168字は全て採用、「学術情報交換用変体仮名」

は 293 字のうち 264 字が採用され、和集合は 286 字となった。日本提案変体仮名セットは、情報処理推進機構サイトにおいて「MJ 文字情報一覧表変体仮名編」として公開されている (<http://mojikiban.ipa.go.jp/xb164/>)。日本提案変体仮名のレパートリと符号化アーキテクチャについては、高田・小林・田代・矢田 (2015) を参照されたい。

ISO 規格を検討する 2015 年 10 月の国際会議で日本の提案は受理され、その後審議が続いている。審議時の他国の関心は、図 1 のような字母を同じくする複数の仮名字体に集中している。仮名は表音文字であるのに何故複数数字体を必要とするのか、書き分ける必然性があるのかという質問やコメントが、欧米の文字コード専門家から提起されている。これに対する反論は容易ではない。草体化の程度によって別字体として扱い、活字やデジタルフォントで扱われてきた歴史的経緯を尊重してほしいと繰り返すのみである。

ゐ	HENTAIGANA LETTER KA-3 ・Derived From 53EF 可
う	HENTAIGANA LETTER KA-4 ・Derived From 53EF 可

図 1 同一字母複数数字体の変体仮名

最後に変体仮名文字コード標準化の今後の展望を述べる。ISO 規格への文字追加審議では、国際会議において数次の投票を行われる。会議に参加する各国の合意が得られなければ、規格収録は実現しない。2017 年 3 月に第 1 回目の投票 (ISO/IEC 10646 第 5 版追補 1) が予定されており、審議は今後も継続する。否決されればそこで終了であり、提案者の一員として鋭意努力を続けていくが、関係各所の支援も必要不可欠である。また、仮に、変体仮名が ISO 規格に収録されたとしても、電子機器ですぐに変体仮名が使えるようになるわけではない。Unicode 対応フォントや変換ソフトなどの実装は、文字コードと密接に関わるものの、レイヤーの異なる技術である。電子機器での実装を到達点とすれば、道はまだ半ばにもさしかかっていない。

参考文献

高田智和・矢田勉・斎藤達哉（2015）「変体仮名のこれまでとこれから—情報交換のための標準化—」『情報管理』Vol. 58, No.6, pp.438-446 (<http://doi.org/10.1241/johokanri.58.438>)

高田智和・小林龍生・田代秀一・矢田勉（2015）「ISO/IEC 10646 への変体仮名収録提案—レパートリと符号化アーキテクチャー—」『情報処理学会研究報告』2016-CH-109, pp.1-5

（国立国語研究所 准教授）

# インド 8 言語訳『源氏物語』の書誌

伊藤 鉄也  
(いとう てつや)

## ◎ はじめに

会場では、インドで発行された 8 種類の言語による『源氏物語』の書誌情報（カラー）を配布した。こうした翻訳を周知するとともに、現物の所在を現地で探す必要があることにも言及した。

これらの本を刊行したサーヒティヤ・アカデミーは、なぜこの 8 種類の言語を選んだのか。なぜその 8 人を選定したか。選定したのはどのような組織だったのか。そういった経緯はまったくわかっていない。このような翻訳史の周辺事情を含めて、インドの『源氏物語』の翻訳史として、現地の研究者が取り組む必要があると考える。

## ◎ 1. 33 言語に翻訳された『源氏物語』（日本語 50 音順）

インドの諸言語については太字で示している。適宜、ご参照いただきたい。

アッサム語・アラビア語・イタリア語・ウルドゥー語・英語・エスペラント・オランダ語・オディア語（オリヤー語）・クロアチア語・スウェーデン語・スペイン語・スロベニア語・セルビア語・タミル語・チェコ語・中国語（簡体字）・中国語（繁体字）・テルグ語・ドイツ語・トルコ語・現代日本語・ハンガリー語・韓国語・パンジャービー語・ヒンディー語・フィンランド語・フランス語・ベトナム語・ポルトガル語・マラヤーラム語・モンゴル語・リトアニア語・ロシア語

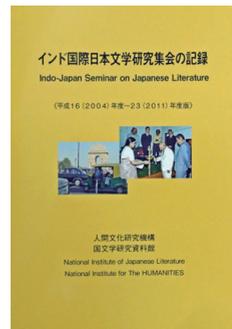
## ◎ 2. 国際集会で対象となるインド諸言語（プログラム記載順）

マラヤラム語・ヒンディー語・ベンガル語・ウルドゥー語・オディア語（オリヤー語）・パンジャーブ語
☆『源氏物語』の翻訳が存在する言語（日本語 50 音順） →アッサム語・ウルドゥー語・オディア語（オリヤー語）・タミル語・テルグ語・パンジャービー語・ヒンディー語・マラヤラム語
★『十帖源氏』の翻訳が存在する言語（日本語 50 音順） →ウルドゥー語・ヒンディー語・ベンガル語

## ◎ 3. 『インド国際日本文学研究集会の記録』（第 1 回～第 7 回）について

目次等は、「鷺水庵より」2012 年 4 月 5 日の記事を参照していただきたい。

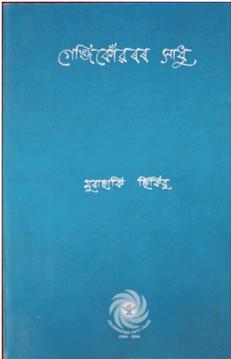
<http://genjiito.sblo.jp/article/178946073.html>



#### ④ 4. インド諸言語訳『源氏物語』の書誌について(日本語 50 音順)

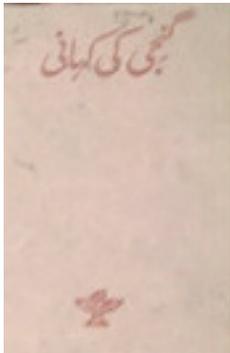
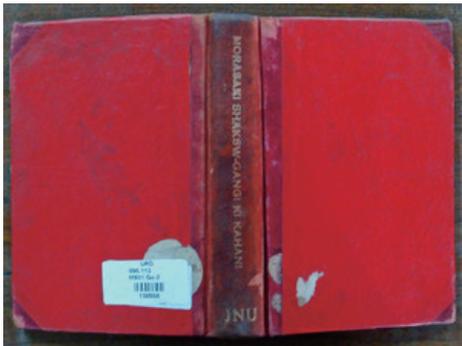
底本はいずれも Arthur Waley, The Tale of Genji で、発行機関はサーヒティア・アカデミーである。画像の出典について、年月日とURLを記載したものは、伊藤鉄也のブログ「鷺水庵より」から引用した。

##### (1) アッサム語訳

タイトル	Genjikonvarar Sadhu	翻訳者	Atul chandra Hszarika
刊行年	2005 年	再版	情報ナシ
表紙	青い地にサーヒティア・アカデミーのマークが入っている。		
	<p>・「鷺水庵より」2010年8月5日  <a href="http://genjiito.sblo.jp/article/178934831.html">http://genjiito.sblo.jp/article/178934831.html</a></p>		

## (2) ウルドゥー語訳

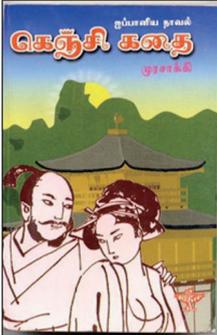
※詳細は、拙稿「インド紀行」(『海外平安文学研究ジャーナル 4.0』掲載)を参照していただきたい。

タイトル	Genji ki Kahani	翻訳者	SYED EHTISHAM HUSAIN
刊行年	1975 年	再版	情報ナシ
表紙	(アラハバード大学蔵) 完本		
			
	・「鷺水庵より」2016年2月19日 <a href="http://genjiito.sblo.jp/article/179012654.html">http://genjiito.sblo.jp/article/179012654.html</a>		
	<hr/>		
	(ネルー大学蔵) ネルー大学で表紙を新たにつけたもの。奥付もない。		
			
	・「鷺水庵より」2009年3月5日 <a href="http://genjiito.sblo.jp/article/178933881.html">http://genjiito.sblo.jp/article/178933881.html</a>		

### (3) オディア語（オリヤー語）訳

タイトル	Genji Carita	翻訳者	Prabhāsa Candra Satapathī
刊行年	1984年	再版	情報ナシ
表紙	<p>伝藤原隆能筆『国宝 源氏物語絵巻』第38帖「鈴虫（二）」（五島美術館蔵）で、夕霧が笛を吹いている場面を加工したもの。</p> <p>・大英図書館所蔵の画像</p>		

### (4) タミル語訳

タイトル	Genji Katai	翻訳者	K. Appadurai
刊行年	1965年	再版	2002年（新版）
表紙	<p>太陽と金閣寺の前で、近世風の男女が並んでいる絵である。右下にサーヒティヤ・アカデミーのマークが入っている。</p> <p>・「鷺水庵より」2014年2月16日  <a href="http://genjiito.sblo.jp/article/178971893.html">http://genjiito.sblo.jp/article/178971893.html</a></p>		

◎タミル語訳『源氏物語』の表紙絵について

表紙絵の作者や画題は不明であるものの、影響が感じられる錦絵が存在する。『都名所源氏合 金閣寺桜の遊覧』である。作者は孟斎とも呼ばれる歌川芳虎という浮世絵師である。三枚続の大判錦絵で、東京府神田須田町2丁目にいた版元 沢村屋清吉により、明治8（1875）年に発行された。現在は早稲田大学にある九曜文庫の所蔵（文庫 30 B0303）である。



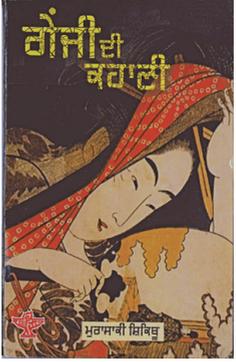
・「鷺水庵より」2014年2月16日

<http://genjiito.sblo.jp/article/178971893.html>

(5) テルグ語訳

タイトル	Genji Gatha	翻訳者	N.V.R.Krishnamacharya
刊行年	1962年	再版	情報ナシ
表紙	<p>オレンジ色の表紙に、和服を着た女性が立っている絵。作者および画題は不明である。印刷の関係で表紙は山吹色になっている。</p> <p>・国際交流基金ライブラリーが所蔵する本を撮影したものである。</p>		

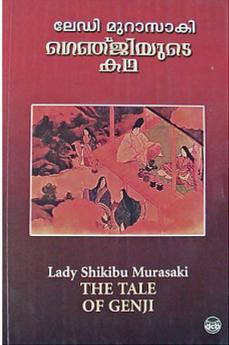
(6) パンジャービー語訳

タイトル	Genji di Kahānī	翻訳者	Jagjit Singh Ahand
刊行年	1961年	再版	情報ナシ
表紙	<p>一楽亭栄水作『美人五節句・扇屋内さかき わかは』を加工したものである。5人の女性を五節句（人日 1/7・上巳 3/3・端午 5/5・七夕 7/7・重陽 9/9）になぞらえて描いたシリーズ物で、江戸時代の寛政年間（1789～1801）に制作された。浅草の扇屋という店で働いていた女性 滝川が、狩衣姿の男性が描かれたうちわを持って蚊帳をめくっている場面である。左上にある扇の横に、秋の七草（女郎花・桔梗・撫子〈現在のかわらなでしこ〉・萩・尾花〈現在のすすき〉・葛・藤袴）である桔梗と女郎花が描かれていることから、七夕の節句を描いたとされる。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <p>・「鷺水庵より」2010年8月9日  <a href="http://genjiito.sblo.jp/article/178934835.html">http://genjiito.sblo.jp/article/178934835.html</a>          ・神奈川県立歴史博物館  <a href="http://ch.kanagawa-museum.jp/dm/ukiyoereki/ougon/d_ougon10.html">http://ch.kanagawa-museum.jp/dm/ukiyoereki/ougon/d_ougon10.html</a>          ・参考文献「57 栄水／美人五節句・扇屋内さかき わかは（大判錦絵）」ページ表記ナシ          （菊池貞夫担当『浮世絵大系 6 歌麿・栄之：二代歌麿・長喜・栄昌』、座右宝刊行会、1976年）</p>		

## (7) ヒンディー語訳

タイトル	Gējī ki Kathā (Genji Ki Kahani)	翻訳者	Chavinath Pandey
刊行年	1957年	再版	2000年、2010年
表紙	『枕草子絵詞』第一段で中宮定子と対面する、妹の藤原原子（淑景舎）の姿をモデルにしたものと思われる。背表紙の下部にサーヒティヤ・アカデミーのマークが入っている。		
			
	(左) 発表者所蔵の本、(右) 小松茂美編『日本絵巻大成10 葉月物語絵巻・枕草子絵詞・隆房卿艶詞絵巻』p.34 (岩波書店、1979年)		

## (8) マラヤーラム語訳

タイトル	Genjiyude Katha	翻訳者	P.P.Eapan
刊行年	1984年	再版	2008年
表紙	国際聚像館（広島県福山市の坂本デニム株式会社が創設した美術館）が所蔵する『絵入源氏挿絵貼屏風』（六曲一双）「初音」巻と、構図が似ている絵を使用していると思われる。		
			
	・「鷺水庵より」2010年6月30日 <a href="http://genjiito.sblo.jp/article/178934610.html">http://genjiito.sblo.jp/article/178934610.html</a>		
	・「びんご文化ニュース 104回」2012年11月16日発行 <a href="http://www.bes.ne.jp/bingo_e/bunka/113/bunka.html">http://www.bes.ne.jp/bingo_e/bunka/113/bunka.html</a>		

(国文学研究資料館・教授)

## 江戸時代のダイジェスト版『十帖源氏』について

人口 敦志  
(いりぐち あつし)

### ◎ はじめに

はじめに『十帖源氏』について、その作者と作品に関する基本事項をおさえておこう。

#### ◆ 作者・画者、立圃<sup>りゅうぼ</sup>

江戸前期の俳人。野々口氏。名親重<sup>ちかしげ</sup>。通称庄右衛門。別号松翁、松齋、如入齋。京の人。家業により籬屋<sup>ひなや</sup>と称し、別に紅屋ともいった。貞門<sup>ていもん</sup>の古的存在であったが、『犬子集（えのこしゅう）』（1633）編集の件で同門の重頼<sup>しげより</sup>と争い、師のもとを去り、以後独自で優雅な俳風を確立。京より江戸、福山、大坂などに移り住み、多くの門人を育て、晩年はまた京に戻った。早くより連歌や和歌を学び、古典にも精通して『源氏物語』の梗概書<sup>こうがい</sup>『十帖源氏』『おさな源氏』の著もある。絵画にも優れ、その軽妙な筆致は俳画の祖と称されている。撰集<sup>せんしゅう</sup>に『誹諧発句帳』『小町踊』、作法・俳論書に『はなひ草』『河船付徳万歳』、句集に『そらつぶて』がある。

[雲英末雄] 天も花にゑへるか雲の乱足（『世界大百科事典』）

作者の立圃は貞門俳諧の俳人である。貞門とは、松永貞徳によって始められた俳諧の流派のひとつで、古典や連歌に通ずる端正な詠みぶりをその特徴としている。よって、古典文学に関する知識も要求されていた。そのなかに『源氏物語』も含まれている。『源氏物語』は単に物語として読まれていただけではなく、和歌や連歌、あるいは俳諧のためにも必須の教養として読まれていた。例えば、織豊期を代表する連歌師である里村紹巴が『源氏物語』の写本を多く残していることなどは、その例証となるだろう。

『十帖源氏』の基本的なことは以下のとおり。

◆ 『十帖源氏』

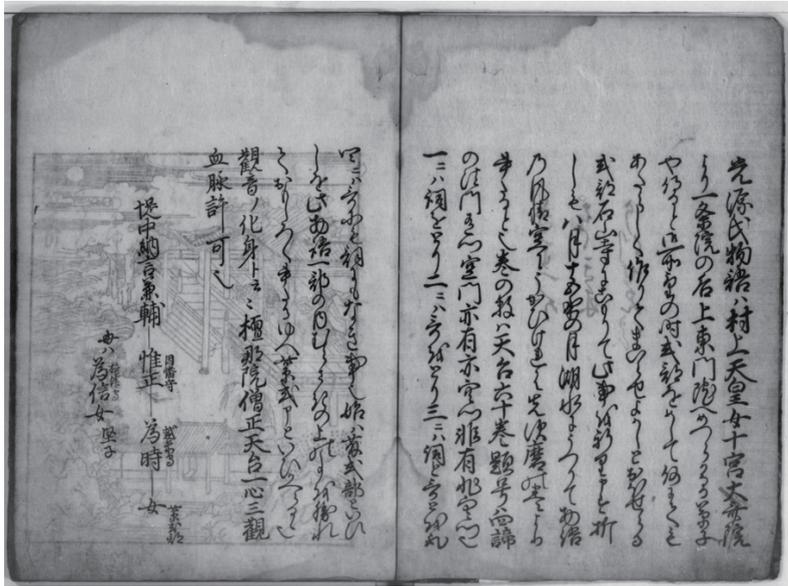
じゅうじょうげんじ 十巻十冊。仮名草子。野々口立圃作・画。跋文に「老て二たび児に成りたりといふにや」とあり、これが著者の還暦を言うとするれば、承応三年（一六五四）頃の成立。【内容】巻頭に「光源氏物語」の由来を説き、紫式部が石山寺参籠中に湖上の名月に想を得て須磨の巻より書き始めたこと、紫式部が叡山檀那院の一心三観の血脈を受けて巻々の名に天台四諦の法門を盛ったこと等を述べて序文とし、次に桐壺から夢の浮き橋までを巻ごとに分け、所々引用を交えながら便概をまとめる。歌を掲出すること多く、原作の和歌をほとんど網羅する。また、自画の一二九図に及ぶ挿絵を添える。なお、本書の内容をさらに簡略にした『おさな源氏』がある。（略）（渡辺守邦）（『日本古典文学大辞典』）

傍線部にあるように、和歌を省略していないということに注目したい。以上の二点をおさえたうえで、以下『十帖源氏』の特徴を詳しく見ていくこととする。

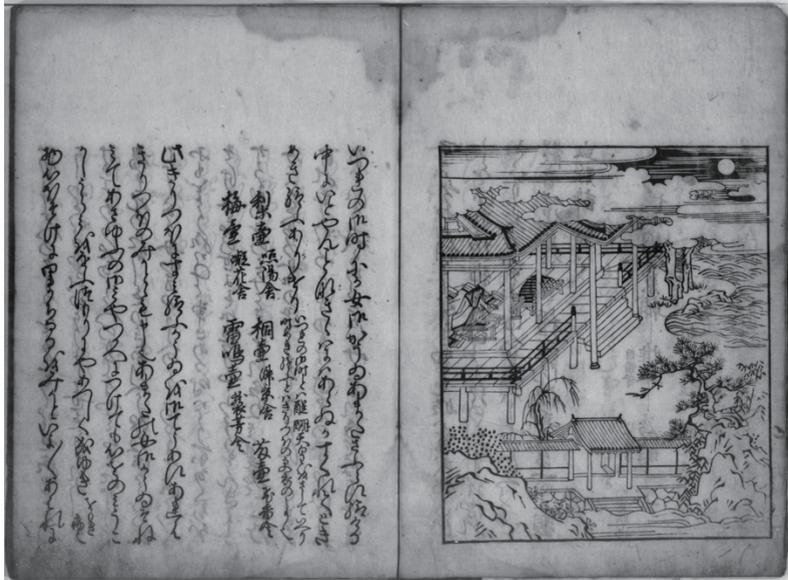


『十帖源氏』表紙

※以下、『十帖源氏』の画像は『日本古典籍データセット』（国文研所蔵）による



『十帖源氏』序



『十帖源氏』「桐壺」の冒頭部分

## ◎ 歌書としての『源氏物語』

『源氏物語』をはじめとする平安朝の物語は、物語として読まれたものではあるが、一方では歌書、つまり和歌を学ぶための書物としても読まれてきた。『十帖源氏』において、ストーリーについては五十四帖を十帖に圧縮してしまったにもかかわらず、和歌は省略していないのは、その歌書としての意味が大きかったからだと考えられる。一つの証左として、江戸時代の出版目録である『書籍目録』類の初期のものでは、『源氏物語』も『古今和歌集』も〈歌書〉として分類されており、区別されていないことが挙げられる。

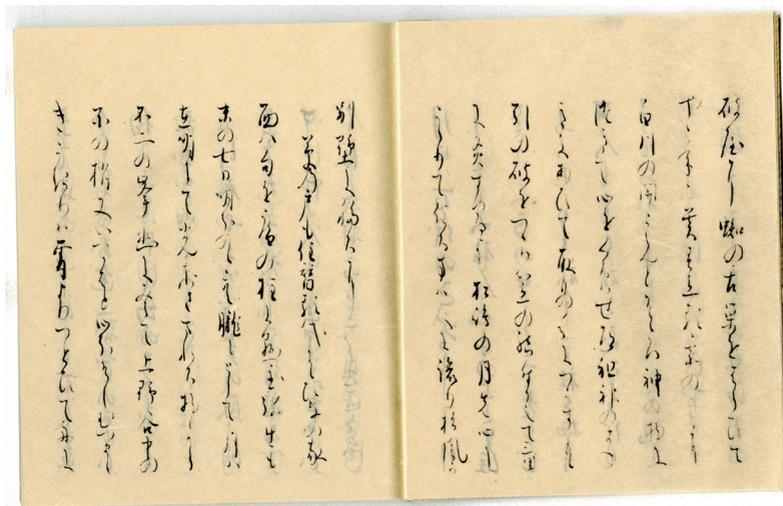
連歌から派生した俳諧は、江戸期に入っていくつかの流派に別れていく。松永貞徳の貞門、西山宗因の談林、松尾芭蕉の蕉風などがそれである。そのうち、立圃もその一門であった貞門は、最も古典的な穏健な俳風であった。連歌に近いものであったと言える。連歌師は『源氏物語』を勉強することが当然のこととして求められていた。例えば、織豊期から江戸初期にかけて活躍した里村家の紹巴は活発な古典籍の書写活動を行っており、その書写した『源氏物語』も多く伝えられている。北村季吟が、『源氏物語湖月抄』を著し、江戸時代の『源氏物語』普及に大きな影響を与えたのも、季吟が貞門の俳人であったからだろう。

談林は、斬新な作風であった。特に著名な井原西鶴は、阿蘭陀西鶴と呼ばれるなど、古典を離れて当時最新の流行を詠み込む。しかも、西鶴は和歌を作らないのである。だからといって西鶴は『源氏物語』を知らなかったわけではない。きちんと読み込んでいたと考えられている。例えば、西鶴の代表作の一つで、浮世草子の最初の作品である『好色一代男』は、世之介という一介の町人を主人公とした好色物である。『好色一代男』はその目次をみればわかるように、世之介七歳から六十歳まで、五十四章によって成り立っている。これは、当然のように『源氏物語』五十四帖に基づいているわけで、世之介の好色も光源氏のパロディということが出来る。ところが、世之介は和歌を詠まない。世之介だけではない、西鶴の浮世草子作品の登場人物は、一人として和歌を詠まないのだ。ま

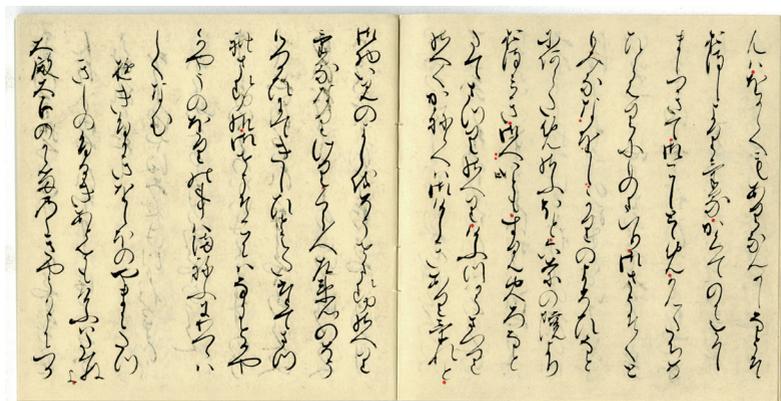
た、西鶴その人も和歌を詠まないのである。立圃が和歌や連歌を良くしたのとは対照的である。この和歌との関係を切ったところに江戸時代の独自の文学が登場したと言える。

このことは、蕉門の芭蕉も同様である。芭蕉も和歌を詠まない。しかし、だからといって『源氏物語』を代表とする平安朝の物語や『古今和歌集』をはじめとする勅撰和歌集を知らなかったわけではない。きちんと勉強をしていることは明らかである。しかし、和歌を詠まない。

芭蕉の代表作とされる『おくのほそ道』の西村本は、弟子の素龍が清書したものだが、芭蕉が没する直前まで大事に持っていた本であり、現在の『おくのほそ道』の底本とされるものである。これは枡形本で、ひらがなで書かれており、発句は字下げである。見た目は『源氏物語』の古写本と同じである。しかし、そこには和歌がないのである。意識しながらも、新しい文学として和歌とは決別してしまったということが出来る。



『おくのほそ道』素龍が清書したもの。正方形の袋綴枡形本。(複製本)

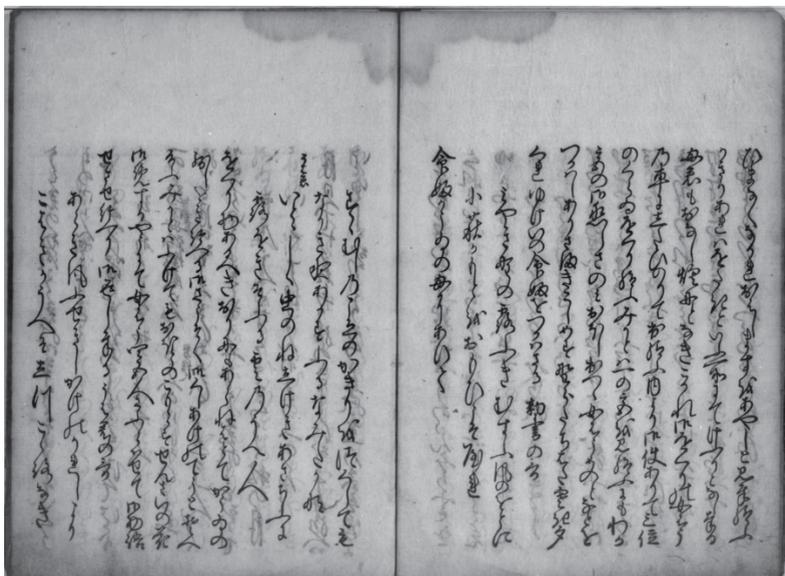


『源氏物語』「行幸」鎌倉時代の古写本。正方形の列帖装柘形本。(複製本)

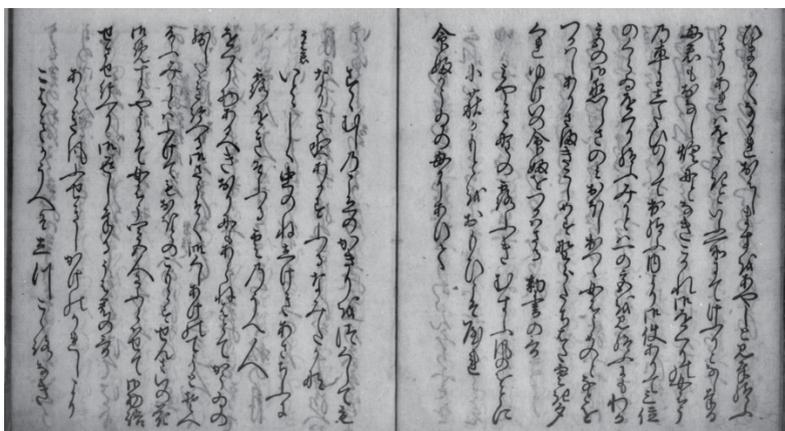
このような、物語類を正方形の柘形本に仕立てる伝統は、かなり根強く残っていたと考えられる。江戸時代においても、『源氏物語』の柘形本は数多く製作されている。

『十帖源氏』についてみてみよう。その書型は縦長のものであるが、本文の書き方に注目してみると、柘形本の書き方に近いことが分かる。上部に余白が多くあるのだが、これを切ってしまうと、ほぼ柘形本の形式にあった本文となる。書型そのものは縦長であるのに、記された本文は柘形本と同様なのである。俳諧に関する書物にもこのような例は多い。形式的な保守性があったとみるべきだろう。

西鶴、芭蕉の和歌離れこそが、近世文学の始まりといえるだろう。しかし、詠まないとはいえ、和歌そのものの勉強は必須であったこともまた、確かなことである。



『十帖源氏』「桐壺」縦長で、上部の余白が多い。

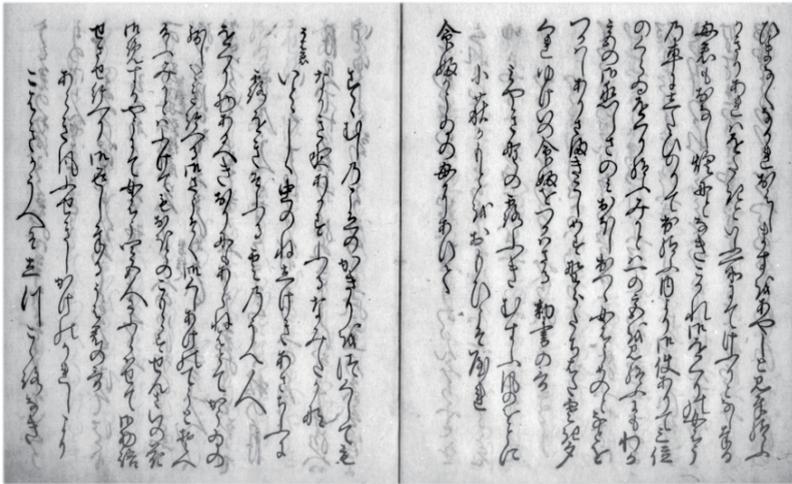


『十帖源氏』上図の余白をトリミングしてみたもの。本文はきれいに正方形（枳形）に収まる。

## ◎ インデックスとしての和歌

目次や章題を持たない物語においては、和歌がインデックスとしての役割を担っていたとも考えられる。和歌の位置によって、ストーリーのおよその位置がわかるのである。どういう使い方をしていたのかはわからないが、『源氏物語』の和歌だけを抜書した書物も伝わっている。これなどは、目次としての用途も考えて良いのではないだろうか。

『十帖源氏』も同様である。梗概を読みながら『源氏物語』の原文に戻る場合には、和歌を探せばよい。和歌は、基本的に本文とは一・二字下げで書記するので、すぐに見つけることができる。というよりも、和歌以外の形式的な区切りはないのである。



『十帖源氏』「桐壺」和歌は字下げで書かれ、区切りのない本文に対し目印となっている。

先に、西鶴の浮世草子には和歌が無いということを行った。では、浮世草子は何によって区切られているかという、それは章題である。章題によって、物語は小さな単位に区切られており、その章題が巻頭に集

められて目次となるのである。和歌ではないのだが、章題も必ず字下げでレイアウトされているのも、和歌との関係性を思わせるものがあるだろう。和歌がなくなった代わりに、章題が取り入れられたと考えたい。

この変化は、いきなり西鶴によって起こされたわけではない。『好色一代男』の登場以前、十七世紀には仮名草子という文芸があったのだが、その中に和歌から章題へと変化する過渡的な様相を見ることができる。その傾向を推し進め、近世小説の型を作り上げたのが西鶴といえるだろう。

### ◎『十帖源氏』の意義

以上のように考えてみると、『十帖源氏』の意義もはっきりするだろう。和歌は訳すこともなく、そのままの形でほぼすべて収録される。しかし、本文は当時の縮約現代語訳となっている。俳諧師が和歌を勉強するための教科書であったと考えられる。絵入であることから、女性や子供に向けた、本来の意味での啓蒙的な書物としての意味もあっただろう。和歌を中心とした日本の古典文学を理解するには、大変ふさわしい作品といえるのである。

(国文学研究資料館 准教授)

講演  
『源氏物語』の英訳について  
—これからの翻訳研究に向けて—

須藤 圭  
(すどう けい)

◎ はじめに

翻訳する、という行為は、いったい、どのような営みなのでしょう。ある言語で表現されたことがらを別の言語に置き換えること……このように考えてみたところで、しかし、ある言語と別の言語は、いうまでもなく、相異なる言語なのですから、一対一の関係にはありません。置き換えるというその作業は、単純明快なものではなく、複雑なプロセスを経たうえでなされるものだ、といわなければなりません。そしてまた、こうして翻訳されたものを読む行為は、いったい、どのような営みとして考えてみることができるのでしょうか。

わたしは、これまで、英訳された『源氏物語』に関するいくつかの考察を行ってきました<sup>1</sup>。本日はその報告を兼ねながら、英訳、また、広く外国語訳を扱うことが、どのような意味をもつのか、『源氏物語』には、現在、33種類の言語での翻訳が確認されていますが<sup>2</sup>、それらの多彩な

---

1 本稿で述べた内容のいくつかは、以下の拙稿で詳しく論じています。ご笑覧いただけましたら幸いです。

須藤圭「源氏物語の「京都」はどう英訳されたか—創造された京都と、変貌する源氏物語—」(『海外平安文学研究ジャーナル』1、国文学研究資料館、2014年11月)

須藤圭「源氏物語の「女にて見る」をどう訳すか—翻訳のなかのジェンダーバイアス—」(『第39回国際日本文学研究集会会議録』国文学研究資料館、2016年3月)

須藤圭「源氏物語の「女にて見る」をどう訳すか(承前)—翻訳のなかのジェンダーバイアス—」(『平安文学研究・衣笠編』7、2016年3月)

2 伊藤鉄也編『海外における源氏物語』(国文学研究資料館、2003年)には、11種類の言語による『源氏物語』の外国語訳が紹介されています。なお、伊藤鉄也氏のご教示によれば、その後の調査によって、33種類の言語が確認されている、

翻訳に、どういった価値があり、何をもたらしてくれるのか、といった話をしたいと思います。

## ◎ 1. 『源氏物語』外国語訳の歴史

いま、『源氏物語』の外国語訳の歴史を、代表的なもののみにかぎって、一覧表（次頁）にしてみました。もっとも初期の外国語訳は、末松謙澄による英訳で、今から130年ほどまえ、1882年〈明治15年〉のことでした。当初は、末松謙澄の目論みと異なって、この物語が高く評価されることはなかったらしいのですが、ウェイリー英訳が1925年〈大正14年〉から1933年〈昭和8年〉にかけて刊行されたことで、その価値が認められていったようです。レディ・ムラサキ（紫式部）によって書かれたこの長編物語は、世界的にも類を見ない、繊細で洗練された筆致、そして、驚くべきリアリズムで描かれ、疑いなく最高の文学だ、と評価されることになりました<sup>3</sup>。その後も、キク・ヤマタのフランス語訳、豊子愷の中国語訳、ベンルのドイツ語訳など、多くの言語に翻訳されつづけています。

『源氏物語』は、原文でも楽しめて、英語でも、フランス語でも、中国語でも、ドイツ語でも、それこそ、世界中で使われている言語で読むことができる……わたしは、もっぱら、現代日本語訳でしか読んでいないのですが、まさしく、選り取り見取りの品揃えになっている、とってよいでしょう<sup>4</sup>。

---

とのことです。

3 詳しくは、宮本昭三郎『源氏物語に魅せられた男 アーサー・ウェイリー伝』第4章「眠れる森の美女」（新潮社、1993年）、緑川真知子「「退屈」な小説が「現存する偉大な小説のひとつ」になるまで—『源氏物語』の英語圏における初期受容—」（『日本文学研究ジャーナル』3、2009年3月）、同「小説として読まれた英訳源氏物語」（『海外平安文学研究ジャーナル』2、2015年3月）の考察を参照してください。

4 『源氏物語』にとどまらず、たくさんの日本文学が、多く言語で翻訳され、世界中で読まれています。沼澤龍雄『日本文学史表覧』「外国語訳国文学年表」（明治書院、1934年、pp.178-206）や、日本比較文学会編『越境する言の葉—世界と

表 『源氏物語』の外国語訳の歴史

1882年	末松謙澄 英訳(桐壺～絵合)
1925年～1933年	アーサー・ウェイリー 英訳(全)
1928年	キク・ヤマタ フランス語訳(Le Roman de Genji)(桐壺～葵)
1965年 (1980年～1983年刊)	豊子愷 中国語訳(全)
1966年	オスカー・ベンル ドイツ語訳(Die Geschichte vom Prinzen Genji)(全)
1973年	柳呈 韓国語訳(겐지 이야기)(全)
1973年～1978年	林文月 中国語訳(全)
1976年	サイデンステッカー 英訳(全)
1977年～1988年	ルネ・シフェール フランス語訳(Le Dit du Genji)(全)
1991年～1993年	タチアナ・ソコロウ・デリューシナ ロシア語訳(Povest o Gendzi)(全)
1994年	ヘレン・C・マッカラ 英訳(抄)
1999年	田溶新 韓国語訳(겐지 이야기)(全)
2001年	ロイヤル・タイラー 英訳(全)
2002年～2008年	カレル・フィアラ チェコ語訳(Pribeh prince Gendziho)(全)
2007年	金蘭周 韓国語訳(겐지 이야기)(全)
2012年	マリア・テレサ・オルシ イタリア語訳(La Storia di Genji)(全)
2015年	デニス・ウォッシュバーン 英訳(全)

\* 代表的なもののみをとりあげ、全訳、抄訳、部分訳の別も掲げました。

## 2. 英訳とどう向きあうか

たくさんの『源氏物語』が、わたしたちの目のまえにある……そのなかで、今日は、英訳をとりあげてみることにします。わたしたちは、こ

---

出会う日本文学』「日本文学翻訳史年表(1904～2000年)」(彩流社、2011年)、伊藤鉄也編『日本古典文学翻訳事典1〈英語改訂編〉』(2014年)、同編『日本古典文学翻訳事典2〈平安外語編〉』(2016年)などを眺めてみてください。

の英訳に対して、どのように向きあうことができるでしょうか。たとえば、純粋にその文章を読んでみることができます。じっくりと腰をすえて読んでみたり、寝転がって読んでみたり、また、声に出してみれば、いっそう、立体的な像が浮かびあがってきます。

さて、そうして読んでいると、ふと、違和感を抱くことがあります。次の文章を見てください。

【A 1】原文（帚木巻 ①・p.55）

つれづれと降り暮らして、しめやかなる宵の雨に、殿上にもをさをさ人少なに、御宿直所も例よりはのどやかなる心地するに、大殿油近くて書どもなど見たまふ。

一日じゅう、所在なく降り暮して、しめやかな宵の雨に、殿上の間も、ほとんど人影がなく、源氏の君のお部屋もいつもよりはゆったりとした気分なので、灯火を近寄せて書物などをごらんになる。

【A 2】ウェイリー英訳（The Broom-Tree p.19）

It was on a night when the rain never ceased its dismal downpour. There were not many people about in the palace and Genji's rooms seemed even quieter than usual. He was sitting by the lamp, looking at various books and papers.

帚木巻、「雨夜の品定め」が今まさにはじまろうとする一節を、【A 1】には、現在、もっともポピュラーであると思われる『新編日本古典文学全集』（小学館）から原文と現代日本語訳を引用しました。また、【A 2】には、英訳のうち、ウェイリーによるものを掲げてみました。一見して、【A 1】の傍線部「殿上」を、【A 2】の傍線部「the palace」と訳していることに、どこか不思議な感じがすることでしょう。もっと違う言いかたはできなかったのでしょうか。わたしたちは、イギリスのバッキンガム宮殿のことを「Buckingham Palace」といいますし、インドのラージャスターン州にあるハワー・マハルのことを、別名「風の宮殿」、つ

まり、「Palace of Breeze」や「Palace of Wind」といいます。『源氏物語』に描かれた「殿上」、清涼殿は、バッキンガム宮殿やハワー・マハルとは、大きく異なっています。そうだとすれば、「ウェイリー英訳の「the palace」には、もっとよい訳語があったのではないか？」と疑問を抱くのは、当然のことといえるでしょう<sup>5</sup>。

別の言いかたをしてみます。わたしたちは、英訳に対して、次のような向きあいかたをすることができます。それは、「この英訳は、はたして、『源氏物語』のことばを正しく訳しているのだろうか？」といった姿勢です。翻訳は、ある言語を全く異なる別の言語に置き換える行為なのですから、もとの言語のすべてを訳すことはできません。それでも、わたしたちは、翻訳に対して、可能なかぎり、物語の本質をつかみとってほしい、枝葉末節まで削ぎ落とさず、その雰囲気を感じられるように訳してほしい、と求めています。

次の文章はどうでしょうか。

【B1】原文（桐壺巻 ①・p.17）

いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。

帝はどなたの御代であったか、女御や更衣が大勢お仕えしておられた中に、最高の身分とはいえぬお方で、格別に帝のご寵愛をこうむっていらっしゃるお方があった。

【B2】ウェイリー英訳（Kiritsubo p.4）

At the Court of an Emperor (he lived it matters not when) there

---

5 もっとも、英訳において、「palace」を選択することは一般的であるようです。たとえば、サイデンステッカー英訳は、「It had been raining all day. There were fewer courtiers than usual in the royal presence. Back in his own palace quarters, also unusually quiet, Genji pulled a lamp near and sought to while away the time with his books.」(The Broom Tree Vol.1・p.21)としています。なお、「palace」について、LONGMAN Dictionary of Contemporary English, 6th edition (Harlow: Pearson Education, 2014) は、「the official home of a person of very high rank, especially a king or queen - often used in names: *Buckingham Palace*」などと説明しています。

was among the many gentlewomen of the Wardrobe and Chamber one, who though she was not of very high rank was favored far beyond all the rest; …

【B 3】サイデステッカー英訳 (The Paulownia Court Vol.1・p.3)

In a certain reign there was a lady not of the first rank whom the emperor loved more than any of the others.

【B 4】タイラー英訳 (The Paulownia Pavilion p.5)

In a certain reign (whose can it have been?) someone of no very great rank, among all His Majesty's Consorts and Intimates, enjoyed exceptional favor.

【B 5】ウォッシュバーン英訳 (Kiritsubo: The Lady of the Paulownia-Courtyard Chambers p.3)

In whose reign was it that a woman of rather undistinguished lineage captured the heart of the Emperor and enjoyed his favor above all the other imperial wives and concubines?

もはや、詳しい説明を加える必要はないでしょう。あの有名な、桐壺巻のはじまりです。【B 1】には、原文と現代日本語訳を、【B 2】から【B 5】には、ウェイリー英訳を含め、あわせて、4種類の英訳を示しました<sup>6</sup>。この4種類の英訳は、違和感のない正しい訳をしているのでしょうか。

冒頭の傍線部「いづれの御時にか」は、「いつの時代のことでしょうか」などと解釈してはいけません。「帝はどなたの御代であったか」あるいは「どの帝の時代であったか」と現代日本語訳をしなければなりません。「when」ではなく「whose」です。『源氏物語』の時代において、年月を区切る指標は、帝の存在でした。別の箇所の原文をいくつか掲げ

---

6 本文中には掲げませんでしたが、末松謙澄の英訳は、「In the reign of a certain Emperor, whose name is unknown to us, there was, among the Niogo and Kōyi of the Imperial Court, one who, though she was not of high birth, enjoyed the full tide of Royal favor.」(The Chamber of Kiri p.17) とはじまっています。

ておくと、「先帝の御時の人」（桐壺巻 ①・p.41）「父帝の御時より」（玉鬘巻 ③・p.113）「故院の御時に」（若菜上巻 ④・p.41）などがあり、帝の存在が常に意識されていたと分かります。【B 3】【B 4】【B 5】が「reign」<sup>7</sup>を用いていたり、【B 2】がことさらに「he lived it matters not when」と補っていたりするのは、このことをふまえているからだ、とあってよいでしょう。

ところで、4種類の英訳のうち、唯一、【B 2】だけが「reign」を使用していませんでした。【B 2】には、さらに、仲間はずれといってよい点が指摘できます。それぞれの書き出しに注目してみてください。【B 3】【B 4】【B 5】が、傍線部「In the reign」「In a certain reign」「In whose reign」として、「ある帝の治世の話」と語りだしているのに対して、【B 2】だけが、傍線部「At the Court of an Emperor」として、「ある帝の住む宮廷の話」と語りだしているのです。和光大学の教員であった武田孝の研究が明らかにしたところによれば、【B 2】のウェイリー英訳は、王室に対する意識が強いようなのですけれども、このことともかかわっているのでしょうか<sup>8</sup>。時代に注目するか、場所に注目するか。どちらが、『源氏物語』の雰囲気をもより正しく伝えているのでしょうか。さらに、次の文章はどうでしょうか。

#### 【C 1】原文（匂兵部卿巻 ⑤・p.17）

光隠れたまひし後、かの御影にたちつぎたまふべき人、そこらの御

---

7 「reign」について、LONGMAN Dictionary of Contemporary English, 6th edition (Harlow: Pearson Education, 2014) は、「the period when someone is king, queen, or EMPEROR: changes that took place during Charlemagne's reign | the reign of James」などと説明しています。

8 武田孝「『源氏物語』の敬語とその英訳—桐壺の巻のウェイリー訳を中心に—」（古田拓・高杉一郎・武田孝・松永巖『源氏物語の英訳の研究』教育出版センター、1980年）は、固有名詞といえないにもかかわらず、はじめの一字を大文字で表記しているものとして、「Emperor」や「Palace」「Court」などを指摘して、「Waleyの訳文の中には、伝統的な習慣であり、固有名詞であるから当然だ、という解釈をも承知した上で、なお、王室およびそれに関連のある人や事物に対する敬意が、強く示されているように思われる。」(pp.266-267)と述べています。

末々にありがたかりけり。

源氏の光る君がこの世から隠れておしまいになったのち、あの輝くお姿のあとをお継ぎになれるような人は、大勢のご子孫のなかにもいらっしやらないのであった。

【C 2】 ウェイリー英訳 (Niou p.756)

Genji was dead, and there was no one to take his place. True, he left behind him a considerable number of descendants. But in one way or another many of these were disqualified.

【C 3】 サイデンステッカー英訳 (His Perfumed Highness Vol.2・p.735)

The shining Genji was dead, and there was no one quite like him.

【C 4】 タイラー英訳 (The Perfumed Prince p.785)

His light was gone, and none among his many descendants could compare to what he had been.

【C 5】 ウォッシュバーン英訳 (Niou miya: The Fragrant Prince p.883)

With Genji's radiance extinguished, not one among all of his descendants shone with the same glorious light.

光源氏没後の物語を語る、そのはじめの巻が、匂兵部卿巻です。匂兵部卿巻は、光源氏が既にこの世にいないこと、そして、新たな主人公として、匂宮と薫を紹介することからはじまります。ここでは、光源氏が亡くなったことを示す一節だけを掲げました。「光源氏は存在しないし、肩を並べるひとさえもない」と、改めて、光源氏の素晴らしさが語られていることは、この物語にとって、光源氏がいかに巨大な存在であったかを知ることができます。その光源氏は、【C 1】で、傍線部「光」と、たったひと言であらわされています。「院」や「故六条院」「源氏の大殿」ではなく「光」とある……物語上での光源氏の位置づけを考えあわせると、この表現には相応の意図があった、と認めざるをえません。

ということは、【C 2】から【C 5】の英訳のうち、【C 3】の傍線部

「The shining Genji was dead」がよさそうでしょうか。もっとも、「The shining Genji」という表現は、どこかおかしくて、苦笑いをしてしまいそうです。【C 4】の傍線部「His light was gone」もよさそうです。ただし、このままでは、「His」が誰を指すのかよく分かりません。わたしは、【C 5】の傍線部「With Genji's radiance extinguished」を評価しているのですが、いかがでしょうか。どの英訳が、『源氏物語』の雰囲気をもっとよく伝えているのでしょうか。

もうひとつだけ見ておきたいと思います。次の文章はどうでしょうか。

【D 1】 原文 (少女巻 ③・p.31)

大臣、太政大臣にあがりたまひて、大将、内大臣になりたまひぬ。世の中のこともまつりごちたまふべく、譲りきこえたまふ。

源氏の内大臣は太政大臣にご昇進になり、右大将は内大臣におなりになった。源氏の大大臣は、天下の政治を新内大臣がお執りになるようにと、実権をお譲り申される。

【D 2】 ウェイリー英訳 (The Maiden p.407)

About this time To no Chujo became Palace Minister and Genji began to hand over to him most of the business of state.

【D 3】 サイデンステッカー英訳 (The Maiden Vol.1・p.365)

There were promotions, Genji to chancellor and Tō no Chūjō to Minister of the Center. Genji left the everyday conduct of government to his friend, …

【D 4】 タイラー英訳 (The Maidens p.384)

His Grace rose to Chancellor and the Commander<sup>23</sup> to Palace Minister. Genji ceded all the affairs of government to him.

23. Tō no Chūjō.

【D 5】 ウォッシュバーン英訳 (Otome: Maidens of the Dance p.431)

Genji rose to the position of Chancellor, and Tō no Chūjō was promoted to Palace Minister. Genji then ceded all day-to-day

responsibilities for administering affairs of state to his old friend.

『源氏物語』を読んでいてやっかいだと感じるもののひとつは、人物の呼称が常に変化していくことです。登場人物たちは、官職に依拠した名称で呼ばれることが多く、物語全体を貫く統一した呼称が与えられることはほとんどありません。光源氏であれば、「若宮」「中将」「右大将」「内大臣」「太政大臣」「六条院」などと変化していきますし、頭中将であれば、「中将」「中納言」「右大将」「内大臣」「太政大臣」「致仕の大臣」などと変化します。

さて、【D 1】に掲げたのは、「大臣」が「太政大臣」に、「大将」が「内大臣」に昇進することを述べた少女巻の一節です。誰のことを指しているのでしょうか。これだけで分かったとすれば、よほど熱心な『源氏物語』読者でしょう。先に正解を示しておきますと、前者が光源氏で、後者が頭中将です。けれども、この文章だけで判別することは、かなりの難問といわなければなりません。だから、【D 2】【D 3】【D 5】は、光源氏や頭中将に物語全体を貫く統一した呼称を与え、「Genji」「Tō no Chūjō」と示しているのです。「Tō no Chūjō」をとりあげてみましょう。頭中将というのは、近衛中将であり、なおかつ、蔵人頭を兼任しているひとを指す呼びかたです。大将や内大臣に昇進すれば、とうぜん、頭中将ではなくなってしまいます。それでも、【D 2】【D 3】【D 5】は傍線部「Tō no Chūjō」と呼んでいるのですから、まるで、それが人名であるかのような扱いをしている、といってよいでしょう。これに対して、【D 4】のタイラー英訳は、原文の表現をふまえ、傍線部「His Grace」「the Commander」としています。即座に理解することはできませんが、もっとも、タイラー英訳には、こうした事態への配慮が全くなされていないわけでもありません。【D 4】の二文目に見られるとおり、光源氏を「Genji」と呼ぶことがあったり、また、ここでも示されている脚注や、各巻のはじめに設けられた人物紹介が、理解を助ける役目をはたしていたりもいます。少女巻の人物紹介には、「His Grace, the Chancellor, Genji, age 33 to 35」「The Commander, then His Excellency, the Palace

Minister (Tō no Chūjō)』(The Maidens p.378)とありました<sup>9</sup>。それでは、これらの英訳のうち、どれが、『源氏物語』の雰囲気をより正しく伝えているのでしょうか。

このようにとりあげてみていくと、いったい、どの英訳が、『源氏物語』の雰囲気をより正しく伝えているか、その判断に迷う箇所が次から次へとあらわれてきます。むしろ、問題なのは、英訳のありかたではなく、「正しく伝えているか」というときの、その「正しさ」の根拠なのではないか、とも思われてきます。『源氏物語』を正しく翻訳するとは、どういった行為なのか。「大将」を「the Commander」と訳してみることでしょうか、それとも、「Tō no Chūjō」と示してみることでしょうか。英訳を断罪するまえに、立ちどまり、考えてみなければならない問題であるに違いありません。

### ◎ 3. 英訳から分かること その1

翻訳の誤りを指摘することは、重要な作業です。日本の文学や文化を本当に理解してもらうためには、誤解があってはなりません。しかし、翻訳に対する向きあいかたは、これだけではないはずで、

ここまで、いくつかの英訳を眺めてきました。そこで分かったことは、英訳の誤りを指摘しようとするアプローチがあるいっぽうで、「正しさ」

---

9 この問題について、サイデンステッカーは、「私は登場人物には決まった名前がなければならないと思っています。読者の便のために。」と述べ、タイラー英訳の方法を批判しています(伊井春樹編『世界文学としての源氏物語 サイデンステッカー氏に訊く』笠間書院、2005年、pp.117-118)。サイデンステッカー「翻訳—積年の課題を再考する」(伊井春樹編『大阪大学国際日本文学研究集会 講演とシンポジウム 国際化の中の日本文学研究—その課題と方法への模索—』大阪大学国語国文学会、2002年 →国際日本文学研究報告集1『国際化の中の日本文学研究』風間書房、2004年)にも、同様の発言が見られます。詳しくは、緑川真知子『『源氏物語』英訳についての研究』第3部第1章2「呼称の英訳」(武蔵野書院、2010年 初出・「タイラー訳『源氏物語』における呼称翻訳の機能」(『文学・語学』177、2003年10月))、元島淳志『『源氏物語』英訳研究—〈言語的差異による物語の体裁〉Edward G. Seidensticker 訳を中心に—」(『学習院大学国語国文学会誌』59、2016年3月)の考察を参照してください。

そのものに疑問が生じたように、英訳が、全く別の側面にも光をあててくれる、ということでした。英訳から新たに発見できることがあるのではないかと考えて、さらに検討をつづけていくことにします。

わたしたちは、『源氏物語』の英訳から何を学ぶことができるのでしょうか。ひとつめは、『源氏物語』それじたいの理解をいっそう深めていくことができる、という点です。

【E 1】原文（椎本巻 ⑤・p.178）

都にはまだ入りたたぬ秋のけしきを、…

都にまではまだ訪れていない秋の気配を…

【E 2】ウェイリー英訳（At the Foot of the Oak-Tree p.829）

In the City there was as yet no sign of autumn.

都では、まだ、秋の兆しはなかった。

椎本巻の一節、薫が京都から宇治へ向かう場面です。【E 1】には原文と現代日本語訳を、【E 2】にはウェイリー英訳を、ウェイリー英訳にはわたしが付けた現代日本語訳とともに掲げました。ここにあらわれる傍線部「都」ということばに注目したい、と思います。この「都」は、薫が暮らす京都（平安京）のことです。【E 2】は、これを傍線部「the City」と訳しています。ウェイリー英訳は、京都のことを「the City」と呼ぶことがある、と分かります。

ところが、ウェイリー英訳では、京都のことを、いつも、「the City」と呼んでいるわけではありません。

【F 1】原文（若紫巻 ①・p.225）

君はまづ内裏に参りたまひて、…

源氏の君は、まづ宮中にまいられて、…

【F 2】ウェイリー英訳（Murasaki p.91）

On his return to the Capital he went straight to the Palace …

彼が都に戻ってくると、彼はまっすぐ内裏に向かって…

ここに掲げたのは、病を患った光源氏が、治療を終えて、北山から京都へ戻ってくるくだりです。【F 1】には波線部「内裏」とあり、京都に戻ってきたことが明らかのため、それと明記されることはありません。しかし、【F 2】を見ると、傍線部「the Capital」と付け加えられていることが分かります。ここでは、京都のことを「the Capital」と呼んでいるのです。

【G 1】原文（東屋巻 ⑥・p.93）

ほどもなう明けぬる心地するに、鶏などは鳴かで、大路近き所に、おぼとれたる声して、いかにとか聞きも知らぬ名のりをして、うち群れて行くなどぞ聞こゆる。

ほどもなく夜が明けてしまったという心地がするけれど、鶏の声などは聞えず、大路近いあたりに、聞のびのした声で、何を言っているのか聞き分けられない売り物の名を呼ばわりながら、群れていくのなどが聞えてくる。

【G 2】ウェイリー英訳（The Eastern House p.1005）

It was beginning to grow light, but it seemed that in this part of the town the dawn was heralded, not by the crowing of cocks, but by the raucous voices of peddlers crying their wares - if indeed that was what they were doing, for the noises they made were entirely unintelligible.

空は薄明るくなってきたが、しかし、都のこのあたりにおいて、夜明けは、鶏の鳴き声でなく、品物を売ろうと叫ぶ商人の耳障りな声で告げられた——もし、じっさいに彼らがそうしているならば。というのは、彼らが立てているその騒音は、まったく理解できなかったのだ。

もうひとつだけ見てみましょう。薫が、浮舟の住む三条の小家を訪れ、そこで一夜を過ごした翌朝の場面です。三条の小家ですから、とうぜん、ここは京都です。その京都で、薫は、【G 1】の波線部「おぼとれたる

声して、いかにか聞きも知らぬ名のりをして」物売る商人の声を聞いています。【G 2】でも、波線部「the raucous voices of peddlers」（商人の耳障りな声）を聞いたとあり、さらに、この声は、波線部「the noises they made were entirely unintelligible」（彼らが立てているその騒音は、全く理解できなかつたのだ）とあるように、何を売ろうとしているのか、本当に物売る声であるかどうか、全く聞き分けることができないものでもあったといえます。たしかに、三条の小家は、京都にあります。しかし、同じ京都で生きる薫にとって、三条の小家のあたりは、理解することさえできない者たちの住むところでもあった、と書かれています。そして、得体の知れない者たちが行き来する三条の小家のあたりを、【G 2】は、傍線部「the town」と言いあらわしているのです。

【E 2】【F 2】【G 2】と、ウェイリー英訳を見てきました。わたしたちは、京都のことを、華やかで賑やかな都として考えがちです。しかし、これらの英訳は、『源氏物語』の京都という場所が、「the City」でもあり「the Capital」でもあり「the town」でもある、そうした複数の性質をもつ場所である、という事実を教えてくれるのです。わたしは、ウェイリー英訳をなんとはいはなしに眺めていて、このことに気づいたのですが、「ウェイリーは『源氏物語』に描かれた京都の本質をあばきだしていたのだ！」と驚嘆の声をあげたものでした。

#### ◎ 4. 英訳から分かること その2

『源氏物語』の英訳から何が得られるのでしょうか。ふたつめは、言語、あるいは、時代による文化の違いを発見することができる、という点です。たとえば、日本語と英語の違い、たとえば、『源氏物語』が書かれた平安時代と英訳がなされた時代との違い、たとえば、日本とアメリカの文化の違いが分かってくる、ということです。どういうことでしょうか。具体的に見てみます。

【H1】原文（帚木巻 ①・p.61）

白き御衣どものなよよかなるに、直衣ばかりをしどけなく着なしたまひて、紐などもうち捨てて添ひ臥したまへる御灯影いとめでたく、女にて見たてまつらまほし。

白い柔らかなお召物の上に、直衣だけをわざとしどけなげにお召しになり、紐なども結ばぬまま物に寄りかかっている、その灯影のお姿はまことに美しく、女にして拝見していたくらいである。

【H2】タイラー英訳（The Broom Tree p.24）

Over soft, layered white gowns he had on only a dress cloak, unlaced at the neck, and, lying there in the lamplight, against a pillar, he looked so beautiful that one could have wished him a woman.

光源氏は、普段着だけを身につけ、やわらかく、白い上着を重ねて、首もとを緩めていて、そして、燭台の明かりの中で、柱にもたれかかっていたのだが、その彼はとても美しく、人は、彼が女だったらよかったのに、と願うほどだった。

【H3】シフェール フランス語訳（L'arbre-balai volume1 p.89）

Sur une robe blanche d'étoffe souple, il s'était contenté de jeter négligemment une casaque aux cordons dénoués et, nonchalamment accoudé, à la lueur de la lampe, il était si charmant que l'on eût aimé le voir sous les traits d'une femme.

柔らかな布地の白い着物を身につけ、光源氏は、紐をほどいたままの上着を無造作にはおっただけで、くつろいで肘をついていたのだが、燭台のほのかな明かりのなかで、彼はとても魅力的だったので、彼を女性の様子に見たいほどだった。

【H1】は、帚木巻の「雨夜の品定め」の一場面、頭中将が灯火に照らしだされた光源氏のすがたを見て、傍線部「女にて見たてまつらまほし」、すなわち、「女にして拝見していたくらいである」と評するところ

ろです<sup>10</sup>。頭中将は、服をゆるめ、燭台の明かりに照らされた光源氏を見て、その光源氏を「女にして見たい」と思っています。ここでは、男である頭中将が、男である光源氏を見て、しかし、男であるはずの光源氏を「女にして見たい」と希求する、そうした錯綜した場面である、ということが出来ます。

【H 2】は、この「女にて見たてまつらまほし」を、傍線部「one could have wished him a woman」（彼（＝光源氏）が女だったらよかった）と訳しています。男としての性別をもつ光源氏の、その性別が、むしろ、女だったらよかったのに、と思っているのであり、光源氏の性別の転換を求めていることになります。

そのいっぽうで、【H 3】に掲げた、シフェールのフランス語訳はどうなっているのでしょうか。ここでは、傍線部「l'on eût aimé le voir sous les traits d'une femme.」（彼（＝光源氏）がとても愛らしいので、女の見た目として（女を装わせて、としてもよいかもしれません）見たいほどだ）と訳しています。【H 3】には、「sous les traits」（女性の見た目として）が選ばれていることから分かるように、どうやら、先に掲げた【H 2】ほど、光源氏の性別を転換してしまおうとする意識が稀薄である、といえそうです。あくまでも、男である光源氏を男のまま、ただ、女の見た目として見たい、と願っているわけです。

【H 1】がどのように訳されているかを眺めたとき、【H 2】のタイラー英訳と【H 3】のシフェールのフランス語訳では、性別というもののへの意識が少なからず異なっている、といえるでしょう<sup>11</sup>。

---

10 じつは、この一節は、古くからさまざまな議論が重ねられてきたところでした。拙稿「源氏物語の「女にて見る」をどう訳すか―翻訳のなかのジェンダーバイアス―」（注1）に詳述しました。

11 タイラーは、他にも、須磨巻「涙のこぼるるをかき払ひたまへる御手つき黒き御数珠に映えたまへるは、古里の女恋しき人々の、心みな慰みにけり。」（涙がこぼれてくるのをお払いになるお手つきが、黒い数珠に映えてひとしお引き立っていらっしやる、そのお姿を拝しては、故郷の女が恋しい供人たちも、心がすっかり和むのであった。）（須磨巻 ②・p.201）のくだりなどに「性的なニュアンス」を読みとろうとする姿勢が認められます（ロイヤル・タイラー「男性のイメージを覆う女性のベール」〈講座源氏物語研究 11『海外における源氏物語』おうふう、

もちろん、この違いを、短絡的に、英語とフランス語の差異、あるいは、その文化圏の差異に起因するものだ、と断言することはできません。しかし、翻訳は、それが原文を解釈した結果としての訳文であるため、必ず、訳者の意識が反映しています。そして、その訳者の意識なるものは、とうぜん、訳者が属する社会や文化とも密接にかかわっているはずです。【H2】【H3】の外国語訳からは、そうした社会や文化のありようが、微かながら、観測されるように思うのです。

## ◎ おわりに

『源氏物語』の外国語訳、とりわけ、英訳を対象に、あらあらと話をしてきました。わたしは、これらの外国語訳に強い関心があります。しかし、自分じんで外国語訳をしてみようとは思いません。もちろん、現代日本語訳をしてみようとも全く思いません。そうではあるのですけれども、『源氏物語』の一節を研究するとき、原文とともに、手のとどく範囲ではありますが、外国語訳や現代日本語訳に目をとおすようにしています。これらの翻訳されたものを見比べる作業に、大きな意味があると思うからです。

多彩な『源氏物語』の外国語訳と、どう向きあうことができるのでしょうか。あるいは、向きあっていくべきなのでしょう。わたしは、次のように述べました。

ひとつ、『源氏物語』それじたいの理解を深めるため。いまから1000年以上もまえに書かれた『源氏物語』を、わたしたちは、いったい、どれだけ理解できているのでしょうか。なにしろ、1000年もまえのことです。現在の日本語や日本文化と比べてみたところで、そこには、深くて広い溝があるといわなければなりません。そう捉えてみたとき、日本文化のなかで生きるひとびとが考えたことと、違う文化のなかで生きるひとびとが考えたことに、大きな差異など存在しないのだ、といって

---

2008年)。わたしには、深読みにしか思えません。

よいはずです。日本文化とは異なる文化のなかで生きるひとびとが考えたこと、つまり、原文から離れすぎないことを基本としながらも、違う言語に置き換えてみたり、異なる文化圏の事物で代用してみたり、大きく省略したりするなかで、外国語訳というかたちで示された解釈が、『源氏物語』の本質に切りこんでいくことも十分に考えられるのです。

ふたつ、言語や時代、文化の違いを知り、それぞれがもつ性質を理解するため。『源氏物語』の主人公である光源氏は男ですが、多くの場面で、女らしく、なよなよと弱々しいすがたを見せています。すぐに泣きます。しかし、その男でもあり、女でもあるありかたが、とても美しいのです。平安時代において、光源氏をはじめ、物語の主人公たちは、例外なく、このように描かれていました。それが、理想的な男君のすがただったわけです。ムキムキのマッチョなイメージでは、決して、ありません。インドでは、どうでしょうか。翻訳されたものには、訳者や訳者が属する社会や文化の枠組みが、少なからず反映することは間違いありません。それをさぐることによって、異なる社会や文化の存在を発見し、理解していこうとする行為も、外国語訳と向きあうひとつの姿勢ではないでしょうか。『源氏物語』の翻訳を考えていくことは、単純に『源氏物語』だけを考えるのではない、もっと広い意味をもつものといってよいに違いありません。

『源氏物語』の外国語訳を考えることは、じつにさまざまなことをわたしたちに教えてくれます。本日のわたしの話では、ほぼ英訳だけを扱いました。しかし、英訳からの考察だけでは不十分だ、と断言しておきます。こんなにもたくさんの外国語訳があるのです。どうして、そのなかからたったひとつ、英訳だけしか扱わないのでしょうか。英訳や中国語訳、フランス語訳、そして、インドの各言語の翻訳を見わたし、貫いていくことによってこそ、もっとたくさんのが明らかになるのではないのでしょうか。ぜひ、皆さまに、インドの『源氏物語』のことを教えていただきたい、ということを経最後に述べまして、わたしの講演をおわりにしたいと思います。ありがとうございました。

## 付記 1

本文の引用は、以下の文献により、巻名・頁数を示しました。引用にさいしては、私に、傍線・波線を付し、ゴシック体にしたものがあります。

▽『源氏物語』 新編日本古典文学全集(20—25)『源氏物語(①—⑥)』  
(小学館、1994年—1998年)

▽末松謙澄英訳 Kencho Suematsu, *The tale of Genji*. (Tokyo/Rutland, Vermont/Singapore: Tuttle, 2006) 初刊・1882年

▽ウェイリー英訳 Arthur Waley, *The tale of Genji: The Arthur Waley translation of Lady Murasaki's masterpiece with a new foreword by Dennis Washburn*. (Tokyo/Rutland, Vermont/Singapore: Tuttle, 2010) 初刊・1925年—1933年

▽サイデンステッカー英訳 Edward G. Seidensticker, *The Tale of Genji*. (Tokyo/Rutland, Vermont/Singapore: Tuttle, 2007) 初刊・1976年

▽タイラー英訳 Royall Tyler, *The Tale of Genji*. (Harmondsworth: Penguin Books, 2003) 初刊・2001年

▽ウォッシュバーン英訳 Dennis Washburn, *The Tale of Genji*. (New York/London: W. W. Norton & Company, 2015) 初刊同じ

▽シフェール仏訳 René Sieffert, *Le Dit Du Genji*. (Paris: Diane De Selliers, 2007) 初刊・1977年—1988年

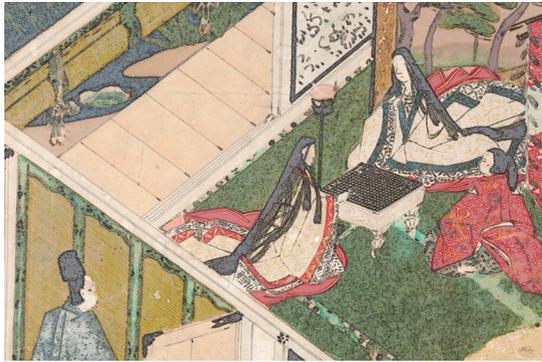
## 付記 2

本稿は、国際交流基金ニューデリー日本文化センター(インド)において行われた、第8回インド国際日本文学研究集会(平成28年11月11日・12日)での講演「『源氏物語』の英訳について」を活字化したものです。活字化にあたって、大幅な修正を加えました。

(立命館大学 助教)



## 問題提起





# 「桐壺」のマラヤーラム語訳における問題点

アルン・シャーム

「桐壺」のマラヤーラム語訳における主な問題点としては以下の点が挙げられる。

## 1. 時期

旧暦の「八月十五夜」をそのまま「എടാം ചന്ദ്രമാസത്തിലെ പതിനഞ്ചാം ദിനം / Etam Chandramasathile Pathinanjaam Dinam」(15th day of the Eighth Lunar Month)として訳すと、違和感を覚えるし、しかも、読者によっては、「കർക്കടകം / Karkadakam」という飢餓のイメージを思い起こさせてしまうかもしれない。

従って、旧暦の「八月十五夜」の訳語として、ケララ州固有のマラヤーラム語である「കൊല്ലവർഷം / Kollavarsham」の「ചിങ്ങം / Chingam」(8月～9月)、「കന്നി / Kanni」(9月～10月)を訳語の候補として選んだ。时期的には後者のほうがふさわしいのですが、8月末から9月上旬の間にケララ州で豊穰をお祝いするオナムという祭りは前者(ചിങ്ങം / Chingam)の時期に祝われており、どれにすれば良いのか迷った。やがて、両方の時期を指す「കൊയ്ത്തുകാലം / Koithukalam」(収穫の時期)を使うことにした。

## 2. 和歌

俳句に比べて、和歌はあまり知られていないので、「和歌+詩」または「和歌という詩」を意味する「'വക്' കാവ്യം / Waka kavyam」を用いた。スタンザまたは詩節を意味する「പദ്യശൃകലം / Padhyashakalam」も検討したのだが、最終的には、起点言語の文化を維持して伝えるストラテジー(異質化)を選んだ。

また、和歌の翻訳において、主に三つの問題点が挙げられる。

- ①掛詞：桐壺の更衣が詠む「かぎりとてわかるゝみちのかなしきにかまほしきはいのちなりけり」の「いかまほしき」は「行かまほしき」と「生かまほしき」や「雲のうへも涙に暮るる秋の月いかですむらむ浅茅生の宿」の「すむ」は「澄む」と「住む」という掛詞は訳せなかった。
- ②隠喩：「雲のうへも涙に暮るる秋の月いかですむらむ浅茅生の宿」の宮中を指す「雲のうへ」や「いとゞしく虫の音しげき浅茅生に露おき添ふる雲のうへ人」の命婦を指す「雲のうへ人」などはそれぞれ「宮中」、「命婦」として訳せざるを得なかった。
- ③順序・配置：例えば、同じ詩の「かなしきに」は「かぎりとてわかるゝみちのかなしきにかまほしきはいのちなりけり」のなかで重要な言葉だと思われ、訳文の冒頭に配置した。和歌の翻訳における、訳語の順序・配置についての話し合いが必要だと感じた。

### 3. 位

「天皇」「帝」を「ചക്രവർത്തി」(Chakravarti) という訳語に統一。また、「女御・更衣」の上下関係を明確に表す訳語がなく、「അന്ദപുരസ്തീ」(Andapurasthree) として訳した。

### 4. 儀式名

造語を使用。「袴着」は「കാൽച്ചടയണിയൽ/Kaalchattayaniyal」{ കാൽച്ചട/Kaalchatta(腰から覆うように使う衣装)+യണിയൽ/aniyal(着る)}を使用。「元服」は「പ്രായപൂർത്തി ചടങ്ങ് / Prayapoorthi Chadangu」(大人になった儀式)として訳した。

### 5. 仏教用語

「四諦/したい」・「一心参観/いっしんさんがん」など：「一心参観」と違って、「四諦」は比較的知られているので、四諦のマラヤーラ

ム語訳をそのまま使うことにした。「一心参観」は 'Dictionary of Asian Philosophies' に使われている 'Triple Truth' という語彙はあったが、あまり知られてないので省いた。

## 6. 人名・地名

日本語の小説の殆どは英語からの重訳で、特に人名の字訳の場合、音を長く引き延ばす傾向が見られる。例えば、マラヤーラム母語話者は「芭蕉」を「ബാഷോ」(Baasho) (バーショ) として訳・発音しがちなので、今回の訳文の全ての人名・地名を上記のことを考慮に入れて訳した。

## 7. 建物

「打橋・渡殿・中廊下」に当たる用語がなく、「帝の在所への道」に訳した。建築史の専門家に相談し、適切な言葉の有無も検討したのだが、「帝の在所への道」として訳しても、特に物語の流れを害しないし、その上、読者の便宜を図り、限られた人しか理解できない建築専門用語を使わないことにした。

当プロジェクトは研究課題であるものの、結局は物語の翻訳でもあるので、読者対象が決まらなると、解説・注釈などある程度の基準を設定するのは難しいかと思われる。従って、当プロジェクトの訳に関しては、「目標言語における適切な訳語の選出」、「読者の便宜」と「異質化」との妥協点を見出すのが翻訳の目的になったと思われる。

(英語・外国語大学 /English and Foreign Languages University)

# 「桐壺」のヒンディー語訳における問題点 (インド・アリア諸語の中央語群西部ヒンディー語)

菊池 智子  
(きくち ともこ)

## ◎ 1. 「十帖源氏」の訳

2015年訳では「गेंजि की कहानी」源氏の物語 genji ki kahaniとしたが、「十帖源氏」というダイジェスト版を表すニュアンスを込めることを再検討。

ヒンディー語で適当な単語の候補は以下ふたつ。

सार saar 概要、エッセンス、エキス、抜粋、大要、概略  
संक्षिप्त sankshipt 簡略な、簡潔な、要約された、短縮された

## ◎ 2. 難解な仏教用語

現代語訳：

「巻の名前は四諦の法門、『有門、空門、亦有亦空門、非有非空門』という文を参考にして名づけました。」

2015年訳：

बौद्ध धर्म में चार सत्य का सिद्धान्त बताया जाता है कि “अस्तित्व, शून्य, अस्तित्व एवं शून्य और गैर अस्तित्व एवं गैर शून्य” । उनके आधार पर “गेंजिकी कहानी” के खंडों का नाम रखा गया।”

(boudh dharm men char satya ka siddhant bataya jata hai ki “astitv, shunya, astitv evan shunya aur gair astitv evan gair shunya” unke adhar par “genji ki kahani” ke khandon ka nam rakha gaya)

訳戻し：

「仏教では4つの真理の教義が説かれる、それは“有、空、有と空、

非有と非空”だ。それらに基づいて源氏の物語の巻の名前がつけられた」

「四諦の法門」や「有門、空門、亦有亦空門、非有非空門」という仏教用語は難解で、一般に知られていない。現代語訳を統一したわかりやすい解釈にしたほうが、各言語で統一した翻訳が可能になると思う。

### ◎ 3. 読みの表記と翻訳

#### (1) 「若君」

現代語：

「この<光源氏(若君)>の美しさには、とうてい勝つことができません」

2015年訳：

हिकारुगेंजि (वाकागमि) के सौंदर्य के सामने उनकी छवि भी क्षीण हो जाती थी

(hikarugenji (wakagimi) ke soundarya ke samane unki chhavi bhi kshin ho jati thi)

2015年当時は、「若君」を読みのまま表記したが、サヒティヤアカデミー版を基に再考し、「若君」のヒンディー語訳「राजकुमार」(rajkumar) (王子の意) を再検討。

#### (2) (若君) の頻出

現代語には12回「光源氏(若君)」の表記が見られる。本文中は一度のみ「若君」とかっこ抜きの表記がある。

ヒンディー語の翻訳において「हिकारुगेंजि (वाकागमि)」「hikarugenji (wakagimi)」と何度も記載するのは不自然な印象がある。

現代語訳中で「光源氏(若君)」を何度も表記する理由を確認。

### (3) 「光る君」

現代語訳：

「この人を光源氏（光る君）といいます」

2015年訳の例：

उसे हिकारुगेंजि (हिकारुनोकमि) का नाम दिया गया

(use hikarugenji (hikarunokimi) ka nam diya gaya)

2015年の訳では、「光る君」を読みそのまま表記したが、サヒティヤ  
アカデミー版を参考に、ヒンディー語訳「राजकुमार प्रियदर्शन」  
(rajkumar priyadarshan) も可能かと再検討。

## ◎ 4. インドには無い言葉の翻訳

### (1) インドには無い宮中の位等。皇后、中宮、女御、更衣、右大臣、 左大臣

日本の妃の位や大臣の位に完全に一致する概念はないが、インド人の  
アドバイスを基に以下にした。

皇后	महारानी maharani
中宮	मंझली रानी manjhali rani
女御	संझली रानी sanjhali rani
更衣	छोटी रानी choti rani

左大臣	महामंत्री mahamantri
右大臣	उपमहामंत्री upamahamantri

### (2) インドには無い役所。左馬寮、藏人所

読者が読みやすいように脚注はできるだけ少なくし、本文中で説明と  
ともに翻訳する努力をした。

現代語訳：

「左馬寮という役所が所有する馬に、蔵人所という役所が所有する鷹を添えて左大臣にあげました。」

2015年訳：

सामार्यो नामक सरकारी दफ्तर में घोड़े की देखभाल की जाती थी, वहाँ से एक घोड़ा महामंत्री को भेंट किया गया । कुरोदोदोकोरो नामक सरकारी दफ्तर में बाज का इंतजाम किया जाता था, वहाँ से एक बाज उन्हें दिया गया ।

(samaryo namak sarkari daphtar men ghore ki dekhbhal ki jati thi, vahan se ek ghora mahamantri ko bhent kiya gaya. kurododokoro namak sarkari daphtar men baj ka intzam kiya jata tha, vahan se ek baj unhen diya gaya.)

訳戻し：

「samaryo という名の政府の役所では馬を管理していた。その一頭の馬が左大臣に贈られた。kurododokoro という名の政府の役所では鷹を管理していた。その一羽の鷹がその方に渡された」

### (3) インドには無い儀式。元服 袴着の儀式

インドで人間の成長に伴う儀式の数は16とも数限りないとも言われる。これほど多くの儀式があっても、元服や袴着などの日本の儀式と完全に一致するものはない。

現代語訳:

「光源氏は12歳で元服と呼ばれる成人式をして」

2015年訳：

बारह साल की उम्र में हकिरुगेजिका गेंपुकु हुआ, जो वयस्क होने का संस्कार है  
(barah sal ki umr men hikarugenji ka genpuku hua jo vayask hone ka sanskar hai)

訳戻し：

「12歳でhikarugenjiは元服という名の成人の儀式をした」

袴着の儀式については、訳文の直後にカッコ内で説明をした。

現代語訳：

「袴着の儀式をしました」

2015年訳：

उनके “हाकामागि-संस्कार” का आयोजन हुआ । (हाकामागि पाजामा जैसा जापानी पोशाक है, जिसे इस संस्कार में लड़के को पहली बार पहनवाया जाता है और इस संस्कार के साथ लड़का किशोरावस्था से युवावस्था में प्रवेश करता है )

(unke hakamagi-sanskar ka ayojan hua. [hakamagi pajama jaisa japani poshak hai, jise is sanskar men larake ko pahali bar pahanvaya jata hai aur is sanskar ke sath laraka kishoravastha se yuvavastha men pravesh karta hai.] )

訳戻し：

「彼の hakamagi の儀式が開催された。(hakamagi とはズボンのような日本の衣服で、それをこの儀式で男子に初めて着せる。この儀式とともに男子は児童期から青年期に入る。)」

#### (4) インドには無い建物・場所。打橋、渡殿

打橋や渡殿といった宮殿の廊下。このような建築様式はインドには見られず、説明が難しい。

現代語訳：

「打橋や渡殿といって宮殿の廊下など、桐壺の更衣が通る……」

2015年訳:

कलि में उचिहाशि और वातादोनो नामक रास्ते से निकल कर किरित्सुबो की छोटी रानी सम्राट के पास जाती थी,

(kile men uchihashi aur watadono namak raste se nikal kar kiritshubo ki choti rani samrat ke pas jati thi)

訳戻し：

「城の uchibashi や watadono という名の道を通って桐壺の更衣は帝のおそばへ行っていた」

#### (5) 人相見

人相見はインドにはいないため、適当な単語はない。

現代語訳：

「そのころ高麗人の相人がやってきて」

2015年訳：

एक दिन कोरिया से मुख-वशिषज्ञ आया ।

(ek din koriya se mukh-visheshgy aya.)

訳戻し：

「ある日朝鮮から人相見が来た」

更に「占い師」「jyotish」を再検討。

\* 以上、ヒンディー語の読み方をアルファベット表記したが、短母音長母音、日本語にない発音など明確に立て分けたものではなく、あくまでも参考の表記となる。

(翻訳家)

## ウルドゥー語版『源氏物語』（桐壺）における 翻訳の問題点

村上 明香  
(むらかみ あすか)

翻訳には様々な疑問・困難が伴う。中でも、文化や社会を色濃く反映し、登場人物の感情の機微が巧みに描かれる文学作品を外国語に翻訳することは容易ではない。以下では、『十帖源氏』「桐壺」をウルドゥー語に翻訳する上で感じた問題点をまとめ、今後の翻訳活動につなげるための、一つの記録としたい。

まず問題となったのが、宗教的な単語・言い回しの翻訳である。というのも、ウルドゥー語は過去 300 年、その主たる文学言語として使用してきたイスラーム教徒と密接な関係を維持している。そのため、宗教的な表現がどうしてもイスラームと結びついてしまうからである。その例として、故人の名前につける「故」や「亡き」にあたる語をどう訳すか、という問題があった。1971 年にインド国立文学アカデミー (Sahitya Akademi) から刊行されたウルドゥー語訳『源氏物語』<sup>1</sup>の中で、訳者サイヤド・エヘテシャーム・フサイン Syed Ehtesham Hussain (1912-1972) は、アラビア語起源の「マルフーム (男性形) / マルフーマ (女性形) marḥūm/marḥūmah アッラーの慈悲を受けたの意」という語を使用した。しかし、この語は一般的にイスラーム教徒に付与されることに加え、死者復活の教義をもつイスラームでは火葬はタブーとされている。よって、今回の翻訳ではこの単語の使用を避け、イスラームと直接関係のない「アーン・ジャハーニー (ān jahānī) 来世へ向かった、の意」を用いることとした。

---

1 Laiḍī Mūrāsākī, Sayyid Ihtishām Ḥusain tr., Ginjī kī kahānī, New Delhi: Sahitya Akademi, 1971 はこれまでにウルドゥー語に翻訳された唯一の『源氏物語』で、「桐壺」から「葵」までが収録されている。底本についての記載はないが、訳文を吟味するとアーサー・ウェイリーの英語訳をもとにしたことがわかる。

宗教的な単語のもう一つの例として、「火葬」が挙げられる。前述のように、イスラームには火葬の概念がなく、それに当てはまる単語が見つからなかった。そのため、「遺体を燃やす儀式」と説明調に訳した。

もう一つ問題となったのは、官職名、調度品、建物やその部位、色名といった固有名詞の翻訳方法である。この点に関しては、サーヒティヤアカデミー版のウルドゥー訳『源氏物語』が大変参考になった。その上で、今回は対応する語彙が見つからない場合、①「サーヒティヤアカデミー版に則る」、②「類似の単語を充てる」、③「訳さない」、④「説明調に訳す」の4つの方法を適宜用いて翻訳を行った。注を付与するという方法も考えられたが、その場合、読者は文章の途中で注へ飛び、その内容を確認しなければならず、物語の流れを阻害してしまうことになる。そのため、注の使用は最低限に抑える、という方針をとった。実際、「桐壺」では注は使用していない。

まず方法①は、主に官職名や役所名に用いた。その例は以下のようなものがある。

例①－ 1 「鞆負の命婦」

【原文】

風が強くて肌寒い夕暮れに、**〈鞆負の命婦〉**という女官を〈桐壺の更衣〉の母の所へ行かせました。

【戻訳】

天皇は自分の**弓筒持ちの娘 (tarkash bardaar kii laRkii)**に亡き王妃の母親に宛てた一通の手紙を託して届けさせました。

例①－ 2 「左大臣」、「右大臣」

【原文】

**〈左大臣〉**の息子の〈蔵人少将〉は、**〈右大臣〉**の〈四の君〉と結婚することになりました。

【戻訳】

**左大臣 (Waziir-e yasaaruddaulah)**の息子も**右大臣 (Waziir-e yamiinuddaulah)**の4番目の娘と結婚することが決まりました。

### 例①－ 3 「左馬寮」、「蔵人所」

#### 【原文】

左馬寮という役所が所有する馬に、蔵人所という役所が所有する鷹を添えて、〈左大臣〉にあげました。

#### 【戻訳】

天皇は左大臣に天皇の馬舎 (shaahii astabal) から一頭の馬と、天皇の狩場 (shaahii shikaar khaanah) から一頭の鷹を贈り物として与えました。

次に用いた方法は、②「類似の単語を充てる」である。この手段は調度品に多く用いた。その例は以下のようなものがある。

### 例②－ 1 「輦車」

#### 【原文】

帝は、〈桐壺の更衣〉に輦車に乗ることを許し、〈桐壺の更衣〉は実家に帰りました。

#### 【戻訳】

天皇は《桐壺》王妃に輿 (paalkii) に乗ることを許し、彼女は自分の実家へと帰っていきました。

### 例②－ 2 「御簾」、「琴」、「笛」

#### 【原文】

大人になってからは、子供の時のように〈藤壺〉と同じ御簾の中にも入れません。合奏をする時々、琴や笛の音色に気持ちをこめ、かすかに聞えてくる〈藤壺〉の声を慰めにして、〈光源氏〉は宮殿でばかり過ごしています。

#### 【戻訳】

成人してからは以前のように《藤壺》皇妃の御簾 (cilman) の中へ入ることができませんでした。ですので、彼は楽器を演奏する時、自分の愛を琴 (barbat) や笛 (baansrii) の甘美な調べに共鳴させて皇妃のもとへ届けようとしていました。

今回の翻訳では、対応する単語が見つからず、さらに訳さなくとも物語の内容に直接影響を与えないと判断した固有名詞については、省略するという方針をとった。そのうちの 하나가、建物名である。

例③-1 「梨壺（照陽舎）」、「桐壺（淑景舎）」、「藤壺（飛香舎）」、「梅壺（凝花舎）」、「雷鳴壺（襲芳舎）」

【原文】

宮殿の梨壺という建物は照陽舎の別名です。桐壺という建物は淑景舎の別名、藤壺という建物は飛香舎の別名、梅壺という建物は凝花舎の別名、雷鳴壺という建物は襲芳舎の別名です。（お後の名前は、それぞれの住んでいる建物の名前で呼びます）

【戻訳】

王宮の中には王妃たちの住居がいくつもあり、それぞれの住居に別々の名前がっていました。例えば、梨壺、桐壺、藤壺などです。そして王妃たちも自分が住んでいる住居の名前で呼ばれていました。

この照陽舎、淑景舎、飛香舎、凝花舎、襲芳舎といった別称は、日本語非母語話者にとって難解かつ省略しても話の内容に影響を及ぼさないと判断したため、省略した。もう一つ、省略の例として、「女御」、「更衣」が挙げられる。

例③-2 「女御」、「更衣」

【原文】

いつの時代のことでしょうか、女御や更衣などといったお后が大勢いらした中に、特に高貴な身分ではなく、帝にとっても愛されていらっしゃる女性がいました。

【戻訳】

どの天皇の時代だったでしょう、王宮に多くの王妃たちが住んでいました。その中で一人、特に位が高いわけではありませんでしたが、天皇のご寵姫となった方がおりました。

省略に関する判断は、「桐壺」のみを訳した現段階における判断であり、今後翻訳を進めていく中で、その対応に変化が生じる可能性があることも、記しておかなければならないだろう。

最後に、④「説明調に訳す」の例である。この手法は主に儀式名と和歌の翻訳に用いた。宗教的語彙の翻訳例で挙げた、「火葬」もその一つである。その結果、「袴着の儀式」は「初めて儀礼用の衣装を身に着けさせる祝いの儀式 (pahlii baar rasmii libaas pahnaane kii tahniyatii taqriib)」、「読書始めの儀式」は「勉学始めの儀式 (maktab nashiinii kii taqriib)」、「元服」は「成人の儀 (baaligh hone kii taqriib)」と訳した。今回は、和歌の翻訳にもこの手法を用いた。ウルドゥー語は韻文文学が盛んな言語であり、今回のような説明調の散文ではなく、韻文の形式で訳すことができれば、ウルドゥー語を母語とする読者の大きな興味を引く要素となりうる。しかし、和歌自体の意味に加え、ウルドゥー詩の押韻や韻律などにも留意しなければならず、現段階では説明調の散文による訳にとどめている。この点は、今後の課題のひとつにしたい。

例④-1 「いときなきはつもとゆひにながきよを」

【原文】

いときなきはつもとゆひにながきよを ちぎるころはむすびこめつ  
や

【戻訳】

詩の意味：成人前のこの子供の髪を糸で結んだ時、そなたはこの糸が  
両家の絆も永遠に強く結び付けてくれるようにとの祈りも込めました  
か。

例④-2 「すゞむしのこ糸のかぎりをつくしても」

【原文】

すゞむしのこ糸のかぎりをつくしても ながき夜あかずふるなみだか  
な

【戻訳】

詩の意味：鈴虫が力の限り夜通しジーン、ジーンという声を出し続けるように、秋のこの長い夜にわたしの目からも止めどなく涙が流れます。

和歌の翻訳を通して浮かび上がったもうひとつの問題は、日本人であれば感覚的に感じ取ることができるであろう情緒・季節感などに関連する事物・事例をどう訳すか、ということであった。この点については、語彙の補足や説明調にする、といった対処法を考えている。例えば、例④-2において「ながき夜」の訳に「秋のこの長い夜に」と「秋」という語彙を補足したのが、これにあたる。

最後に、『十帖源氏』『桐壺』に対するウルドゥー語話者の反応の中から、気になった問題を挙げておきたい。「桐壺」の翻訳完成後、筆者は数人のウルドゥー語話者に翻訳を見せ、感想を求めたところ、「物語の流れ、文章と文章のつながりに違和感がある」という意見があった。これは『十帖源氏』の持つ特徴の一つに起因する。『十帖源氏』は、本来54帖あった物語を10帖に圧縮した簡略版であるが、和歌についてはほぼすべてが収録されている。その結果、物語部分のみが大幅に抄訳されることとなり、ストーリーの流れに不自然さが生まれてしまっているのである。読者に易しい翻訳を目指す上で、この点は大きな問題となると考える。

(インド・アラハバード大学・大学院生)

## パンジャービー語訳の問題点

リーマ・シン

文学翻訳という行為は非常に面白くて、責任感をとても感じさせるものだと思う。言語的な問題もあり、対象言語で異国の風景、事物、感情表現などを訳する難しさが数えないほど含まれている。『十帖源氏』をパンジャービー語に訳する際の問題点及び翻訳者として私の立場みた点をいくつか取り上げたいと思う。

### ① 1. タイトルの決定

世界中で知られている『源氏物語』と、それほど知られていない『十帖源氏』をインド人のパンジャービー語話者にアピールするのに、翻訳でもタイトルを区別する必要があると思った。だから、パンジャービー語訳のタイトルでは『十帖源氏』は『源氏物語』のダイジェスト版であることがはっきり分かるように『光源氏の簡潔な物語』(ਰਾਜਰੂਮਾਰ ਗੋਜੀ ਦੀ ਸਾਰਾਂਸ਼ ਕਹਾਣੀ)と意味するパンジャービー語のタイトルを付けることにした。文学翻訳という行為には、さまざまな社会言語的や文化的な判断が含まれており、対象言語の読者にソース言語の未知の世界を紹介することの重要さは忘れてはいけない。しかし、ソース言語(ここでは日本語)の代表的な文学である『十帖源氏』をインドの公用語の一つであるパンジャービー語に訳す際にも、読者に読みやすい異国の古典文学にする責任も翻訳者にあるので、いくつかの判断をしないとイケない。

## ◎ 2. 日本的な事物、人物、女御たちの位等の訳

—日本語とパンジャービー語の音韻的な違いから生じる人物の名前のパンジャービー語の表記—

Kiri-tsubo Fuji-tsubo が **ਕੁਰੀਤਸੁਬੋ**: Fujeet-subo **ਕਰੀਤਸੁਬੋ**: Kireet-subo になる。パンジャービー語は「つ」という音がなくて、「す」である。坪（つぼ）の「つ」を「霧」（きり）と一緒にくっ付けざるを得ない。そして、女御たちの位や桐壺・藤壺の女御、『左馬寮』や『蔵人所』などの肩書きの翻訳もパンジャービー語に訳すのが難しかった。私のパンジャービー語訳では女御たちの位を無視することにした。

## ◎ 3. ソース言語（日本語）の文化や物語が執筆された時代を対象言語に置き換える難しさ

固有名詞などをいくつかそのまま残すことによって、対象言語（パンジャービー語）の読者の関心を掻き立てる。インド人のパンジャービー語話者に日本を紹介するこれは文学翻訳にはとても重要なことだと思う。

- a. 袴儀 → hakama paan di rasam hui **ਹਕਾਮਾ ਪਾਣ ਦੀ ਰਸਮ ਹੋਈ** —  
はかまをそのまま残す
- b. 読書始めの儀式 → vidya arambbhi rasam **ਵਿਦਿਆ ਅਰੰਭੀ ਰਸਮ** —  
北インドには同じ儀式がないので、説明調で書く

## ◎ 4. 対象言語で物語り風な言い方にし、文化的な概念を訳しなくても自然な流れを生み出す方法。

例：ストーリーの自然な流れによって対象言語の読者を楽しませるのは悪くないと思います。

帝が部屋の外の庭に咲いている花を見ながら、回りにいる 4～5 人の

侍女たちの話を聞いていました。

Samraat apne kamre de bahar bagiche ich khide phull vekh  
reya si te **usdi seva lai khadiyaan** chaar panj sevakaavaan  
usda mann behlaan lae usnu kahaniya suna rahiyann sann.

パンジャービー語の中で説明調で書かなければ、文章の流れが不自然になるため、「侍女」の前に修飾語として少し説明「世話するために立つていた侍女」にして、パンジャービー語で読みやすくする。

## ◎ 5. 対象言語（パンジャービー語）の特徴

対象言語（パンジャービー語）の特徴をよく頭に置くのが当然であるが、ソース言語の古典文学のようなものを訳す場合は特に、ソース言語の細かいニュアンスまで意識し、より効果的で読みやすい翻訳ができると思う。これができるには、ソース言語の言葉の順序や言い方にあまりにもこだわらずに、ソース言語に自然に表現する必要がある。パンジャービー語訳をする時には、ソース原稿になかった一人称代名詞を加えなければならなかった。これは一人称代名詞の多いパンジャービー語では文章の流れをよくする役割を果たすので、文中に一人称代名詞をいくつか加えた。

例：桐壺の母が目に涙を浮かべ、帝に娘を実家に帰らせてもらおう場面。  
一人称代名詞を避けるとパンジャービー語では自然な流れにならない。

ਜਦੋ ਉਸਦੀ ਹਾਲਤ ਬਹੁਤ ਖਰਾਬ ਹੋ ਗਈ ਤਾਂ ਉਸਦੀ ਮਾਂ ਨੇ ਆਪਣੀਆਂ ਅੱਖਾਂ ਵਿਚ ਅੱਥਰੂ ਭਰ ਕੇ ਆਪਣੀ ਬੇਟੀ ਨੂੰ ਆਪਣੇ ਪੁੱਤਰ ਨੂੰ ਰਾਜਮਹਿਲ ਵਿਚ ਛੱਡ ਕੇ ਆਪਣੇ ਘਰ ਆਣ ਦੀ ਇਜਾਜ਼ਤ ਮੰਗੀ।

jadon **usdi** (彼女の (一人称代名詞)) haalat bahut kharab ho gai  
taan **usdi** (彼女の (一人称代名詞)) maan ne apniyaan (自分の目を意味する (一人称代名詞)) akkhan wich athhru bhar ke **apni** (自分の (一人称代名詞)) beti nuun puttar hikaru nu rajmahal vich

chod ke, **aapne** (一人称代名詞) ghar aun di ijaazat manggi.

## ⑥ 6. 和歌を訳す難しさ

和歌や短歌はとても日本的なもので、パンジャービー語話者にその比喩や遠回しな言い方等を自然に訳すことはなかなか簡単ではないと感じた。以下の和歌では「露」を涙として捉えてパンジャービー語に訳した。和歌のリズムを保つのは難しかった。そして、何を対象言語に訳さないことにするのも大事な決定点になると思う。

帝からの手紙に書いてあった和歌です。

(「書いてあった」は、パンジャービー語で「書いてありました」になる)

みやぎ野の露ふきむすぶ風もとに、子萩がもとをおもひこそやれ

us chitthi ich samraat ne **Waaka di ek kavita** likkhi hoi si

ਉਸ ਚਿੱਠੀ ਵਿਚ ਸਮਰਾਟ ਨੇ ਵਾਕਾ ਦੀ ਇਕ ਕਵਿਤਾ ਲਿਖੀ ਹੋਈ ਸੀ।

Miyaagi de patjhad di os dian bundaan lae jaundiyaan hawaan,

Mere khayallan vich aunda ae **tu** hagi da phull banke.. (— little

boy を訳しないという判断)

ਮਿਯਾਗੀ ਦੇ ਪੱਤਝੜ ਦੀ ਔਸ ਦੀਆਂ ਬੂੰਦਾਂ ਲੈ ਜਾਂਦੀਆਂ ਹਵਾਵਾਂ,

ਮੇਰੇ ਖਿਆਲਾਂ ਵਿਚ ਆਉਂਦਾ ਏਂ ਤੂੰ ਹਾਗੀ ਦਾ ਫੁੱਲ ਬਣਕੇ।

平行して二つのストーリーが動いているソース言語の特徴を、対象言語でも守るのは難しい。

以下の和歌でも「露」をパンジャービー語で涙として捉えて訳した。これはいくつかの英訳を参考にし、判断した。しかし、和歌ののリズムを保つのはパンジャービー語では無理だったので、リズムをあまり気にせず、翻訳した。

(桐壺の母が返事で書いた和歌)

いとどしく虫のねしげきあさぢふに

露ときそふる雲のうへ人

Khaali ghaan de khetaan wich tidde hor vi zor de ronde ne,

Badlaan ich disdaa manukh, hor vi hanju vagaunda hae

ਸੁੰਨੇ ਘਾਹ ਦੇ ਖੇਤਾਂ ਵਿਚ ਟਿੱਡੇ ਹੋਰ ਵੀ ਜੋਰ ਦੇ ਰੋਂਦੇ ਦੇ ,

ਬਦਲਾਂ ਵਿਚ ਦਿਸਦਾ ਮਨੁੱਖ , ਹੋਰ ਵੀ ਹੰਝੂ ਵਗਾਉਂਦਾ ਏ।

## ◎ 8. 日本語の自動詞・他動詞で表された動作の

### パンジャービー語訳

桐壺の母が娘の燃やされた遺体の煙と共に消えたい場面も、パンジャービー語では翻訳しがたい場面であった。日本語における自動詞・他動詞の使い方はパンジャービー語での使い方とは異なるので、自然に訳すのは挑戦的だった。

The old woman wanted to disappear with the smoke of her daughter's pyre.

パンジャービー語 (ローマ字) usdi buddhi maan beti di chikha te dhuen di tarah aap vi udd jaana chaundi si..par wo is tarah naa kar saki te dhii da saskaar karan lai gaddi wich bae ke picche picche chali gai.

ਉਸਦੀ ਬੁੱਢੀ ਮਾਂ ਬੇਟੀ ਦੀ ਚਿੱਖਾ ਤੇ ਧੂਏਂ ਦੀ ਤਰਾਂ ਆਪ ਵੀ ਉੱਡ ਜਾਣਾ ਚਾਹੁੰਦੀ ਸੀ। ਪਰ ਓ ਇਸ ਤਰਾਂ ਨਾ ਕਰ ਸਕੀ ਤੇ ਧੀ ਦਾ ਸਸਕਾਰ ਕਰਨ ਲਈ ਗੱਡੀ ਵਿਚ ਬੈ ਕੇ ਪਿੱਛੇ-ਪਿੱਛੇ ਚਲੀ ਗਈ।

このような問題点に直面しながらも、『十帖源氏』のような美しい日本の古典文学を母語のパンジャービー語に訳す機会をいただき、本当に光栄に思う。パンジャービー語訳を全部終えた時に、声を出してパン

ジャービー語で読んだら、隣にいた叔母も私も感動して涙を流し、物語における切なさを母語で感じられた。翻訳する行為の魅力は確かにこれに違いない。

(デリー大学博士課程3年生 (文学翻訳))

## 『十帖源氏』第一巻「桐壺」巻のベンガル語訳について

Tariq Sheikh  
(タリク シェイク)

ベンガル語はバングラデシュ全国、インド東部の西ベンガル州、トリプラ州、アッサム州などで話されている言語である。話者数は2億人を超え、世界7番目の言語である。アジア初のノーベル文学賞受賞者のタゴールの文学作品をはじめ、南アジアで最も豊富な文学を有する言語の一つなので、源氏物語をベンガル語に翻訳する重要さは言うまでもない。しかし、翻訳をすることに当たって多様な困難と闘わなければならなかった。

題名「源氏物語」の「源氏」をそのまま “গেন্জি” (Genji) と翻字すると、ベンガル語の同音の言葉で「上半身に着る下着」の事になってしまい、どうも印象が悪く、読者を笑わせてしまう恐れがある。もともとは源(みなもと)の氏(うじ)なので、GenとJiの間にハイフンをつけても構わなかったかもしれないが、ベンガル語では母音のついていない子音を書くと、子音で終わるようにも読めるし、後舌母音で終わるようにも読めるので、判断しにくい。源氏物語は平安時代に『光る源氏の物語』という題名で知られていたこともあって、その意識として “রাজকুমার জ্যোতিমব্বের কাহিনী” (光王子の物語) という題名を今回の翻訳で使った。

またベンガル語には日本語と同じように文語 (সধু ভাষা, sadhu bhasha) と口語 (চলিত ভাষা, cholit bhasha) があり、日本語と同じく20世紀前半に言文一致されている。源氏物語は昔書かれた文学作品なので文語にした方が自然なのかもしれないが、今回の翻訳のテキストとして使われているのが十帖源氏の現代語訳なので口語に訳すことにした。だが、ベンガル語の文学ではインド独立前(70年前)までは文語が使われていたので、なんとなく違和感がある。

日本語の名前や固有名詞をローマ字で書くときは、ヘボン式などの標準があるので読み書きに困らないが、ベンガル語の場合は翻字しにくい音がたくさんある。

例えば、「つ」という音はベンガル語にはない。無理して書こうと思えば書けるが、日本語ができないベンガル人にはとても読みにくいのである。「ざ」、「ず」、「ぜ」、「ぞ」、「づ」の音も同様である。

例：

紫式部の系図

堤中納言兼輔…

মুরাসাকি শিকিবির বংশাবলী :

কানেসুকে (ৎসুৎসুমি মধ্যবতরী পরামশর্দাতা) . . .

*[Murasaki shikibur bongshaboli: Kanesuke (tsutsumi modhyoborti poramorshodata)...]*

ここでは、話の前後を考えると、「つつみ」という言葉はそれほど重要ではないため、略した。

日本語の長音をヘボン式ローマ字ではマクロンで表記するが、ベンガル語では「トー・シキブ」を「ト・シキブ」のような書き方にしなければならない。

例：

もともと「藤式部」と呼ばれていましたのを...

প্রথমে লেখিকার নাম 'তো শিকিবু' হিসেবে প্রচলিত হলেও. . .

*[Prothome lekhikar naam 'To Shikibu' hisebe procholito holeo...]*

日本語のひとつの子音の対してベンガル語には無気と有気の2種類の子音があり、日本語の名前などを書くときはできるだけ日本語の発音に近い子音をとったのである。

例：

越前守為時 ——— এটিজেনের পরশাসক থামেতোকি [*Echijener proshashok Tametoki*]

日本語の文の中で出てくる中国の名前を日本語の発音で読むことが普通であるが、ベンガル語では元々の中国語の発音にできるだけ近い表記をした。

例：

中国で〈玄宗皇帝〉を夢中にさせた〈楊貴妃〉の話に例えられそうになりました

সম্রাটের তুলনা ইয়াং গুইফেই-এর পেরমে বিভোর হওয়া চীনের সম্রাট শুএনসুঙ-এর সাথে করা শুরু হলো।

[*Somrater tulona Yang Guifei -er preme bibhor howa chiner somrat Shuensung-er sathe kora shuru holo*]

「ひぎょうしゃ」の小さい「よ」の音はそのまま書けられず、「ひぎよしゃ」にするしかなかった。

例：

藤壺という建物は飛香舎の別名…

হিগিয়োশা অট্টালিকার আরেক নাম ফুজিৎসুবো…

[*Higiyosha ottalikaar aarek naam Fujitsubo*]

「桐壺」に出てくる旧暦の月をまず新暦に変え、それからベンガル歴に変えるということも、簡単にできることではなかった。旧暦の8月15日は新暦で言うと9月中旬から10月上旬の間なのでベンガル歴で言うと6番目の月アッシン（アশ্বিন）になる。季節は同じく秋だが、ベンガルの文化では秋の月イコール綺麗な月という決まりが全然ないので「満月」のかわりに「美しい満月」というような言い方をしなければならなかつ

た。

例：

すると、《八月十五夜の満月》が、《琵琶湖》の水面に映って、物語の風情が頭に浮かんだので…

আশিবন মাসের মনোরম পূর্ণিমা চাঁদ বিওয়া হরুদের জলে পর্তিকলিত হতেই শিকিবুর মসিতষেক কাহিনীর উৎপন্ন হয়. এবং…

*[Asshin masher monorom purnima chaand Biwa hroder jole protifolito hotei Shikibur mostishke kahinir utponno hoy ebong…]*

仏教用語を訳す際にも困難に陥った。仏教はインドで生まれた宗教だからといって菩薩の名前をもとものインドの名前にしてしまっていていかどうか判断するのも難しかった。観音というのはサンスクリット語のアヴァローキテーシュヴァラの意識から生じた言葉だと言われ、同じ人物のことなのだが、英訳などでは「Kannon」となっている。アヴァローキテーシュヴァラを使うと古代インドのイメージが強いかもしいが、そのまま Kannon と書くと脚注をつけなければならぬのでアヴァローキテーシュヴァラにした。

例：

〈紫式部〉は、観音の化身だという伝説もあります。

এমনও লোককাহিনী আছে যে মুরাসাকি শিকিবু আসলে অবলোকিতেশ্বর বোধিসত্ত্বের এক অবতারা।

*[Emono lokokahini aachhe je Murasaki Shikibu asole Obolokiteshshor bodhishotter ek obotar]*

「桐壺」に出てくる宮殿の中の建物の名前にはそれぞれ意味があるし、源氏物語の有名な英訳には建物名の一つひとつの漢字が直訳されていることもあるが、日本語の人名や地名は意味の付いている漢字で出来ているため、その一つひとつの漢字を直訳したら切りがないように思われたので、建物の名前はそのままにしておいた。

また、日本語の現代語訳には「A という建物は B の別名です」という文型を使っているが、それではベンガル語でわかりにくいので、「A という建物の別名は B です」にしなければならなかった。

例：

宮殿の梨壺という建物は照陽舎の別名です。

পরাসাদের মধ্যে শোযে শা নামক যে অট্টালিকা আছে তার আরেক নাম নশীৎসুবো।

*[Prasader moddhe Shoyosha namok je ottalika aachhe taar aarek naam Nashitsubo]*

女御、更衣、后、侍女、女官など、平安宮廷の女性の位階は多様だが、ベンガル語にはそこまで様々な言葉がない。帝のすべての妻のことを「女王」（রানী）と訳し、侍女を「女王に仕える女性」（রানীর সঙ্গিনী）、女官を「宮中で仕事をする女性」（রাজ পরিচারিকা）と訳している。

例：

お后が大勢いらした中に、特に高貴な身分ではなく、帝にとても愛されていらっしゃる女性がいました… ---- পরাসাদের অসংখ্য রানীদের মধ্যে একটি মহিলাকে সমরাত বিশেষ স্নেহ করতেন… *[Prasader osonkho ranider moddhe ekti mohilake somrat bisesh sneho korten …]*

見送りや出迎えの侍女の… ---- ওনার সাথে যে সঙ্গিনীরা যাওযা আশা করতো… *[onar sathe je songinira jawa asha korto…]*

女官が主人である帝に伝えました… ---- এক রাজ-পরিচারিকা সমরাতকে খবর দিলেন যে… *[ek raaj-poricharika somratke khobor dilen je]*

和歌の中では光源氏のことを表す隠喩として「小萩」という言葉が使われるが、萩という植物はベンガル語が話される地方にはないので、ベンガル語の言葉はない。似たような花も見つからなかったので、脚注をつ

けて「ハギ」とそのまま書いた。脚注にはハギとは光源氏の隠喩だということも書いた。

例：

みやぎ野の露ふきむすぶ風のをとに 小萩がもとをおもひこそやれ

মিযাগি মাঠের শিশির উড়ি যে, ফেলা বাতাসের আওয়াজে, ছোট্ট হাগি ফুলটির কথা মনে পরে

[Miyagi mather shishir uriye fela batasher awaje, chhotto hagi phultir kotha mone pore]

同じく、日本の笛と似ている楽器がインドにもあるのでその言葉を使ったが、琴に近い楽器はないのでそのまま「コト」と書き、脚注をつけて「日本の弦楽器のこと」と説明した。

例：

勉強はいうまでもなく、琴や笛といった楽器もよくできて、宮殿の人々を驚かせました。

লেখাপড়া তো বটেই, কোতো বা বাঁশির মতো বাদ্যযন্ত্রতেও নিদারুন দক্ষতা দেখিয়ে. তিনি রাজপ্রাসাদের সকলকে অভিভূত করে তুললেন

[Lekhapora to botei, koto ba banshir moto badyojontreo nidarun dokkhota dekhiye tini rajprasader sokolke obhibhuto kore tullen]

現代の日本では注を読みながら古典の詩歌を鑑賞するのが普通だが、一首の和歌に何回も脚注が出てくると読みづらくなる。本文に端的な言葉を入れるだけで説明がつき、わかりやすく読めるようになるころには、「露(涙)」や「雲の上の(宮殿の)」のようにカッコの中に説明を入れた。

例：

露をきそふる雲のうへ人

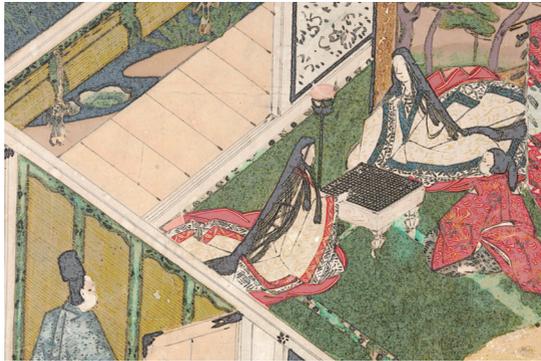
আরও শিশির (অশ্রু) বয়ে. যায., হে মেঘের (প্রাসাদের) মানুষ।

[aaro shishir (oshru) boye jaay, he megher (prasader) manush]

上記の問題点以外にも多様な困難があったが、日本の平安時代中期の作品を 21 世紀のベンガル語に翻訳をしようとするのが当然なことである。しかし、人間の感情には時代や地域を問わず普遍性があるので、現代のベンガル語話者が今回の翻訳を読んで楽しむことができるのであろう。

(ハイデラバード大学 准教授)

## パネルディスカッション





## 第8回インド国際日本文学研究集会 パネルディスカッション

司 会            入口 敦志  
コメンテーター   アニタ・カンナー  
                         麻田 豊

入口 これからパネルディスカッションに移りたいと思います。先生方  
とご発表者の皆さんは壇上の席におつきください。

麻田 今、各言語で桐壺の冒頭部分を担当者の方々に読んでいただきま  
したが、実はこの企画はおととい決めさせていただきました。特に日  
本から来られた先生方が、インドの言語に全くなじみがないままこの  
プロジェクトを進行なさっているのは、ややおかしいなと思ったから  
です。そこでインドの言葉を生で提示することでバラエティーがどれ  
だけあるのかということをし少しでも理解出来たらいいなと思って決め  
たんです。まあ、少しだけ聞いてわかるようなら苦労しないんですが。

そうしてまず、インドを地理的に北部と南部に分けてみますと、言  
語も北インドのインド・アーリア諸語と南インドのドラヴィダ諸語に  
分類されます。今回はドラヴィダ諸語は1言語しかありませんが、大  
変大きな言語圏を形成しています。というわけで、北インドの東のベ  
ンガル地方のベンガル語から始まり、その南隣のオディアー語それか  
ら西部ヒンディー語群に入る北インド中央部のヒンディー語とウル  
ドゥー語、次にその西隣のパンジャービー語、そしてインド最南端で  
話されている今回ただひとつのドラヴィダ諸語のマラヤーラム語のサ  
ンプルをそれぞれ提示していただきました。どれだけの違いがあるか  
幾分なりともお分かりいただけたでしょうか。

僕自身はウルドゥー語、ヒンディー語以外はまったくわかりません。  
特にマラヤーラム語などは耳で聞いても何の取っ掛かりもないんです  
ね。反り舌音と巻き舌音がクルクル回っているようにしか聞こえない。

いつも思うことながら、それほど違うということなんですね。

ところが、北インドのインド・アリア諸語でも、中央から西のほうのヒンディー語、ウルドゥー語、パンジャービー語はひとつにまとめられるものの、東部のオディア語とベンガル語のグループとはやはり随分違いがあるんですね。今回取り上げられる6言語だけを見てもインドの多様な言語事情の一端が見て取れたかと思います。

先ほど午前の部において、3言語の発表がありました。それぞれの言語による翻訳上の問題点に関してですが重複する問題点、箇所が多かったように思います。最初に幾つか僕のほうから、コメントでも何でもないんですけども、ちょっと述べさせていただきます。

先ほどから話が出ておりますけれども、1950年代以降でしょうか、インド国立文学アカデミーであるサーヒティヤ・アカデミー Sahitya Akademi から、アーサー・ウェイリー訳を底本とした、インドの8言語での『源氏物語』が出ているんですね。それで、この8言語による翻訳本を集めるのに伊藤先生が苦勞なさっているのを、僕の研究室にいた当時院生だった村上明香が、何かのきっかけで知ったんです。

**村上** ネルー大学でウルドゥー語版『源氏物語』発見についての記事を先生のブログでたまたまみつけたんです。その中で先生が、この書誌情報について、何か説明できる方はいらっしゃいませんかということを見て、そこにコメントをさせていただいたのがこの翻訳に携わることになったきっかけです。

**麻田** これはたまたま見つけたんですね。それを見つけないければ僕たちウルドゥー語を東京外国語大学でやっていたから、『源氏物語』の訳とは接点がなかったんです。ところが、今はネット社会ですので、いろいろ調べているうちに、というか村上明香も『源氏物語』は何らかの方法で、何かつてがあればいつかは訳したいと思っていた心が通じたということでしょうか、伊藤先生の研究室を訪ねたんです。

カンナー先生がいらっしゃいました。先生、こちらのお席にどうぞ。

で、じつはその昔、伊藤鉄也先生の『新文学資料整理術 パソコン奮戦記』（桜楓社、1986年）を読み、パソコンを駆使したまったく

新しい文学研究のアプローチに感銘を受けたんです。その先生と数十年後にじかにお会いできるとは思ってもよらないことでした。そんな出会いから、結局、僕のような門外漢までもが今回この国際研究集会に参加することになりました。インドではさまざまな文学集会に参加してきましたが、もちろん専門のウルドゥー語や文学に関するものなのでウルドゥー語を使ってきました。今回インドで初めて日本語で喋る自分のことをやや奇異に感じています。

さて、サーヒティヤ・アカデミーの翻訳本に話を戻します。僕はこの翻訳本に関しては、ウルドゥー語のものしか見ておりませんが、ウルドゥー語訳は大変いい訳だと思います。イラーハーバード大学ウルドゥー語学科長をつとめたサイヤド・エヘテシャーム・フサイン先生の訳です。やはりさすがサーヒティヤ・アカデミーの人選かなと思いました。ほかの7言語の訳者についてもネットで調べてみました。皆さんはご存じでしょうか。

こちらの冊子のほうの講演「インド8言語訳『源氏物語』の書誌」の2ページ目のところから載っておりますが、訳者は各言語の文学者ないしはジャーナリストで、ネットに一応名前が載っている人々でした。要するに無名の人ではないということなので、一応は信頼に足る人々を選定したようです。

しかしこれ以上のことは僕にはわかりませんし、何しろ1950年代ということで、ほとんどの訳者がもう存命していないはずで。ところが、1番最後まで存命していた訳者がひとりいました。昨年亡くなったパンジャービー語の訳者はパンジャープ州のジャランダル市から発行され、海外のパンジャープ人でも広く読まれていた『nawaan zamaanaa 新時代』という日刊新聞の編集長で、文学界ではかなり知られた人物です。その程度のことはわかりました。伊藤先生が会われていれば、興味深い話が聞けたかと思えますねえ。

ところで、ヒンディー語の訳者、何ていいましたっけ、チャヴィナート・パーンデー。これは有名な方なんですか。ネット上にあまり出てきません。ただ、しつこく調べたら、同じくサーヒティヤ・アカデミー

から『ドン・キホーテ』のヒンディー語訳を出しているのではないですか。

ですから、各言語の翻訳担当の方は、まずは、自分たちよりも前に、たとえ完全・不完全でも訳の良し悪しなど問わず一体どういう人がどの程度の仕事をしたのか、やはり知っておく必要があると思うんです。

そのような意味で、このサーヒティヤ・アカデミーから翻訳が出ていたという事実はやはり非常に重要かと思います。伊藤先生もそこから始められたことで、このインド多言語翻訳プロジェクトというのを。各担当者も翻訳本をもう少し調べるとおもしろいかと思いました。

それから、先ほどの発表を聞いていて思ったことですが、やはりネルー大学とかデリー大学で日本語をきちんと勉強してこられた人たちはみんな優秀かつ真面目過ぎるようですね。もちろん真面目でなきゃだめなんです、かなりの重圧がかかったようで、微に入り細にわたるようなかなり細かい点、それもほとんどが共通している点が多かったですね。

つまり、日本特有のあるいは平安時代特有の事物とかを皆さん気になさっている。翻って考えると、日本は大いなる翻訳文化の国なんです。これほど多くの言語から翻訳しているところはないのではないかと。例えば、我々、ヨーロッパの中世の事物をそんなに難しく考えないでしょう。だから、それは訳されていることをいかに受容できるかどうかの問題ではないでしょうか。

だから、日本文化、日本文化ってあまり考えてしまうと、これはもう切りがないんです。インドにおいても、大学等々で日本語を勉強して日本のことを本当に知りたいという人は別ですが、一般読者にとっては、細かい事物のことなどに余り神経を注がなくてもいい程度ぐらいで物語の進行やテーマのほうに重きを置いて訳出したほうが読者にとっては親切でしょうし、アピールもするでしょう。

訳の完璧さを求めるがゆえに逆につまづくかもしれない。さまざま方法で置きかえるとか説明とかを入れながら可能かと思います。もちろん、古典作品の翻訳にはそれ相応の格調さが求められるでしょ

う。軽々しく考えちゃいけないと思ってしまう。でも所詮翻訳ですので、その点は妥協もあり得ると頭に入れておいていいのかなと思います。

それから、翻訳論でよく言われるのは、原文が難しければ翻訳文もそれ相応に難しく、易しければ同様に易しくということです。ただ内容だけを移しかえるのではなく、リズムとか、難しい、易しいとかそういうのも含めて考えると、語彙選定にあたって、古典作品の場合は原文の文体や雰囲気や考慮しながらクラシカルな語彙を選定するか、そこら辺は翻訳の常識の範囲内で考えていくべきでしょう。

先ほどの事物とかいろいろな官職や位階とかがありましたけれども、余りにもそれも考えてしまうと、妙に逐語訳的になってしまう。要は雰囲気が醸し出せればいいのではないのでしょうか。

インドに到着した晩に例の高額紙幣廃止が発表され、我々もずいぶん往生しました。換金する前に ATM が閉まってしまったので、我々には現金の持ち合わせがないんです。いまだにです。ところが、インド政府考古局管轄の遺跡では旧紙幣が使えるとのニュースを聞いたので、手持ちの旧紙幣を持って昨日、ラール・キラール（Red Fort 赤い砦）に行ってきました。菊池さんのヒンディー語訳では冒頭にキラール（城砦）が出てきましたが、そのラール・キラールの中に入ってみると、やはり国文学の先生方は違いますね。多分ここにあれがあってとか、あの橋が似てるよねとか、なにかしら感慨深げな様子でした。同じ物でなくても相通じるものがあるし、だからこそそれは代用ということでもいような気がします。

また、日本特有のものが出てきた場合、菊池さんの発表にもありましたが、注釈的に「これこれこういうような＜浮き橋＞」のような表現は避けたほうがいいと思います。訳文にこういう日本語が入ると、その個所でつかかってしまう。よほど置きかえできない場合は仕方ないでしょうが。例えば、廊下ですが、廊下ないしは廊下のようなものは、形状は違えどもインドにもありますし、だから各地域の廊下を表す語でいいかと。

それから、今我々は現代を生きているので意外と知らないのですが、例えば、ムガル王朝の宮廷文化はウルドゥー語 / ヒンディー語の世界では、映画『ムガレ・アーザム Mughal-E-Azam (偉大なるムガル)』(1960年)をはじめとして身近にあります。それも意外とわかりやすく伝わっていると思います。でも、官職の名前などはなかなかわからないですね。でも、いろいろ探索してみるとそれなりの文献に出くわします。ムガル朝時代の官職名簿のような研究書なんてのもあるんです。でもそれは、文学とか外国語をやっている我々にとっては当然知識の外にあるものだから、歴史学とかからのアプローチも必要ではないかと思いました。

またおおいいろいろな問題が提示されるでしょうから、まずは全体的な点をいくつか問題提起を兼ねてお話しさせていただきました。カンナー先生のほうからもお願いします。

カンナー たしかに、日本特有の物などはインドのそれぞれの公用語には見られない文化的な要因ですので、それらをどう翻訳するかは翻訳者の皆様が今後直面する課題かもしれません。やはり、翻訳するという行為も、時代とともに変わってゆくものなので、古典的な事柄、風景、概念などを現代の人々に理解してもらうように工夫するのが、ひとつ大きなチャレンジだと思います。

例えば、日本の「紅葉(もみじ)」は我々都会に住む人たちにはイメージがなかなか沸かないですよ。しかし、ヒマラヤや他の北インドの山地の方に行くと、紅葉した葉っぱがたくさんあるので、理解できるかと思います。でも、「もみじ」はデリー育ちの私たちの美感にはなぜか訴えないんです。

日本に柿がありますよね。私はこの柿を初めて日本で食べましたが、その味は大好きになりました。日本の伝統的な果物ですけど、ここ数年、デリーあたりには、ほかの州からも果物がいろいろ流入しているんで、店先に柿が目につくことがあります。インドで採れたものです。形も色も大体同じ、それほどおいしくないかな。ところが、名前を聞いてビックリしました。普通はラームパル(raam-phal)と

言いますが、ときにはジャーパーニー・パル (jaapaanii-phal、日本の果物) と言うんですよ。

村上 パキスタンでもウルドゥー語でジャーパーニー・パルですね。

菊池 英語で Japanese persimmon とも。

カンナー はい、ヒンディー語の名前がジャーパーニー・パル。これには本当に感動しました。こうした文化的なおもしろい例は本当に切りがないほどありますよね。私たちが想像できない言葉に出くわすことがありますもの。

菊池さんはいつもインドで日本文学などをヒンディー語に翻訳されていますが、例えば、今日の光源氏の「ヒカル」の名前のところで「美貌の」を意味する priydarshan が出てきました。これを見て、なるほどと思いました。直接的に「輝き、光彩」を表す raunaq という語も出てきましたよね。そこで1つ聞きたいんですが、日本語での「ヒカル」は比喩的なのか、それとも本当に光っていたのか。もちろん、比喩的ですよね。そうなら、ここは同じ比喩的な priydarshan にしたほうがいいかもしれないと思いました。そう私は自分では納得したわけです。

カンナー 同じように人相見に用いている mukh-visheshagy ですが、これだと「顔の専門医」といった漠然とした意味を連想してしまいますが。

菊池 ちょっと医学的に聞こえます。

カンナー ちょっと不自然かな。人相は簡単に言うなら cehraa-mohraa でしょうし、人相見は顔の mukh を使いたいなら、「表情とか形相の専門家」の mukhaakrti-visheshagy がいいのではないのでしょうか。まあ、これも造語ですが。

菊池 ムカークリティ・シャーストリー mukhaakriti-shaastrii っていう可能性もあります。「表情・形相の学者」という意味です。

麻田 ウルドゥー語には人相見として cehra-shanaas、cehra-xwaan、qiyaafa-shanaas などがあるけどね。

村上 いずれも造語ですね。

麻田 そう、造語なんだけど、すでに辞書に収録されているんです。

菊池 最後、ジョーティシー jyotishii はインドでは一般的ですよ。でも、これは占星術師。

カンナー 手相見までならいいでしょうが。

麻田 人相見と占星術師・手相見は似て非なるもの。占う、ということでは共通していますが。

菊池 でも、インドの文脈では占星術師がびったりくる。

麻田 人相見というのはどういう人をいうんですか。

菊池 役割は何ですか。

麻田 でもこれは、コリアから来たというんですよ。

伊藤 そうです。高麗人の相人ですからね。

麻田 人相見は日本にもいたんですか。

入口 いません。基本的にはいません。

シャーム マラヤーラム語では、1つはそのジョーティシーに近い単語だとジョウツェンになるんですけど、意味は同じなんです。また、プラワーチャカンという、いわゆるこう預言者みたいな、未来を占うという、いわゆるキリスト教のそういう考え、先生がおっしゃるとおり外から入ってくる人のイメージがありますね。ジョウツェンだと、やはりその現地の人として捉えてしまうので、外から来る人であれば、プラワーチャカンがいいのかもしれない。

カンナー 外から来た人、外国から入ってきた人は自然と偉い存在であるような。外国から入ってきたという。

シャーム そうです、そうです、そうです。

麻田 まあ、原文が相人、すなわち人相見でありますからね。やっぱり、皆さんはちょっと真面目に考え過ぎる傾向にありますね。だから、何かある程度置きかえられる語があれば、それを使って、わかるように文章を練ったほうがいいような気がしますね。ここまでありがとうございました。では、この辺で10分間の休憩に入りましょうか。

【休憩】

麻田 そろそろ始めましょうか。閉会の5時半まであと1時間ほどあります。

伊藤 それでは、後半を始めます。先ほどの議論を聞きながら、私のほうからおわびをまず申し上げます。つまり、訳をしてもらうに当たって、私のほうから現代語訳を提示しましたが、2月の段階以降にお願いした方の現代語訳と、もう2、3年前にお願いした人の現代語訳が異なっていました。

例えば、先ほど人相見ってありましたよね。相人とか。済みません、ヒンディー語は、もう相当昔のバージョンでした。ウルドゥー語は2年ぐらい前のでした。我々のほうは、毎年現代語訳を見直してきました(笑)。

ネットには、常時この改訂版を掲載しています。例えば、最新の現代語訳がバージョン4だと思います。現代語訳は結構見直しをしております。なぜ頻繁に見直しをするかということ、海外のいろいろな方から、うちの国ではそれを訳せないなどと言われてたり、主語がないと困るんだと言われると、じゃあ主語を入れてあげましょうとか、そういう細かいことをやっています。

先ほどの人相見の部分ですが、このテキストの最後の資料の、この資料は最新版ですが、9ページから10ページをごらんください。後ろから、9ページの1番下の段、つまり古文ですね、翻字本文、古文は「そのころ、高麗人(こまうど)の相人」。これが原文です。

麻田 あ、相人。

伊藤 これに対応する現代語訳をごらんになると、「高麗人(こまびと)の相人」になっていますね。ところが、菊池さんと村上さんがお持ちの、これ以前のバージョンでは、人相見になった現代語訳をもとに訳しているはずですが。ちょうど元になる現代語訳のバージョンが異なっていた部分が話題になったものですから補足説明をさせていただきました。

つまり、ヒンディー語とウルドゥー語は人相見という現代語訳から訳されているわけです。ことしの2月からお願いしたそれ以外の方全

てには、現代語訳でも相人としてあります。なぜこれを変えたかという  
うと、ある国の人から、人相見では、いろんな訳ができて困るという  
話がありました。それだったら、下手にこちらが人相と訳さない。現  
代語訳もだから原文どおりのままにしておいて、あとはおたくの国で  
考えてくださいと、それしかないんですね。下手にこっちが規定して、  
その国で、そんなのもいろいろな意味があってだめだと言われたら、  
じゃあ原文に戻る。

ですから、ここは原文が高麗人（こまうど）の相人だから、現代語  
訳も高麗人（こまびと）の相人になっています。ですから、ネットに  
出ているのを最新バージョンとさせていただきます。

じつはこの次、来年また新しいバージョンになると思うんです。い  
ろいろな国から言われてくるんです。この間はロシアからいっぱい来  
ました。この現代語訳、もうちょっと何とかならないのか。あまり  
聞いていても切りがないですけどね。ですから、今後は現代語訳に手  
を入れたらそこを赤にすることにします。

麻田 でも、今、先生がおっしゃった相人について『源氏物語』の注釈  
本を見ると、相人はやっぱり人相見のこととありますが。だから相人  
だろうが人相見だろうが、同じではないでしょうか。

入口 日本語の意味としては。

麻田 そう、意味として同じ。だから、逆に現代語訳で相人にしたら  
わからないのでは。あくまでも人相を見る人なんですから。ちなみに  
相人って現代国語辞書に載っていますか？ 載っていないんですよ。  
『岩波古語辞典』では「人相・家相などを見て、うらない、予言する者」  
とありますが。

伊藤 でもね、その国の文化の中で、人相を見ることがないとか……

麻田 違うのではないですか。なぜ翻訳される言語に合わせるんです  
か。

伊藤 その国に移しかえてもらえばいい、何か違う言葉に。

麻田 違いますって。人相見だろうが相人だろうが同じなんです。原  
文は相人なんです。注釈本にも人相を見ると書いてある。だから、わ

かりやすいように、現代語訳で人相見としたらロシアから、人相など見ないですと。じゃあ何を見るんですか。手相なのか何なのか。でもここでは、あくまでも人相にしなけりゃだめなんですよ？ そうでしょう、先生？

伊藤 はい、僕はそう思う。

麻田 ね、ほら。翻訳される側の文化とか言語を考える必要はないんです。原文ないしはその現代語訳をいかに各外国語へ訳すか、翻訳力の力量が問われるんです。

伊藤 うーん、わからなくなってきた。はははは。

須藤 相人、あるいは、人相見をどう訳せばよいか、ということについて、参考になるかと思っていることがあるのですが、英訳ですと、たとえば、官職に決まった訳し方があります。『源氏物語』だけではなくて、他の文学も含めた英訳の歴史の中で、この官職はこの訳し方をしようと決まってきたわけです。それが正しいかは別にしても、でも、歴史の中で淘汰され、生き残った訳し方であることには違いないわけです。それぞれの言語、それぞれの翻訳者の独自性は薄れてしまうかもしれませんが、以前になされていた訳を参考にしてみてもよいか、と感じました。

菊池 まったく違う質問なんですけど、これだけは知りたいもので。「桐壺」が始まる前のところに「第1には物語の本文から、第2には和歌から、第3には本文と和歌から、第4には和歌にも本文にもないところから巻の名前を決めました」とあるのですが、この第1、第2、第3、第4は何なのか……

伊藤 はい、つまり54巻に名前がついていますが、ついたのは鎌倉時代以降です。平安時代に巻に名前をつけたという確証はないんです。つまり、作者はあずかり知らないんです。鎌倉時代以降に、注釈を書く人が、この巻は、その巻の中の、この本文とあるのは地の文ということですが、その本文から言葉を持ってきたり、たとえば「若紫」は和歌からとってきています。「桐壺」は、文章の中の建物の名前から持ってきています。だから第1は物語の本文から名前をつくりました、2

つ目が和歌から名前をつけました、という意味です。

**菊池** 巻名のつけ方の種類なんですね。

**伊藤** 歌にも言葉にもないってことは、どこから持ってきたかわからない巻の名前もあるわけです。理由がわからない。例えば、ウルドゥー語ではどうですか。

**村上** そのこの部分の私の戻し訳を読むと、「巻の名前は第1には物語の本文から、第2には詩から、第3には本文と詩から、第4にはどこか別のところから採用されました」。

**菊池** ありがとうございます。納得できました。

**伊藤** あと、菊池さんが、あした参加ができないんで、きょうしか参加できないんで、きょうちょっと集中的にですね……

**入口** ウェブサイトの英訳の1番最後の琴、笛ですが、これは大丈夫なんでしょうか。ちょっと英訳がおかしいと思ったんですけども。

**麻田** koto と flute ですか。

**伊藤** すみません、補足します。このプロジェクトは、要するにネイティブの方と非ネイティブの方の二人に訳してもらうことを原則にして進めています。ですから、イタリア語ならイタリアにいるネイティブの方と日本にいてイタリア語の得意な方というふうに。スペイン語もそうです。ロシア語も英語もそう。

特に、英語の場合は、読む人が一番多いと思って相当厳選しました。日本は緑川真知子という、英訳ではもう一番の成果を上げている人、アメリカはカーンさんという若手で、今一番勢いのある人。早稲田で勉強して帰ったばかりです。だから英訳は相当レベルの高いものを2つ並べたはずなんです。

違いを出したかったんです。違う文化圏で育った人が同じ文章を読んだときにどうするか。だから2つ出しています。だからさっきの発言で、誰かに見てもらうっていう話は、逆に非ネイティブの方は、ネイティブの方に見てもらっちゃ困るんですよ。

**麻田** いや、まったく違うような……。

**伊藤** 全然違いますか(笑)。

麻田 僕の認識は伊藤先生のと違うんですけども、先ほどから先生がおっしゃっているのは、今年度までは科研費のプロジェクトなので上述のような研究目的があるんだと。文科省から研究費をもらっているんだから、一般読者向けのポピュラーなものを目指さないっていうのはわかりますよ。

しかし、翻訳の前提条件は「良質な訳」ではないのでしょうか。つまり非ネイティブの日本人が訳す場合でも限りなく良質なものでなければだめなのでは？これが前提となりませんか。

先生がおっしゃるように、非ネイティブの訳とネイティブの訳とでどんな違いが出るかなんて、そんな違いを期待しちゃいけないんです。もちろん文化理解度における、はたまた当該言語の運用能力における差異は当然出てくるでしょう。しかしながら、いま問題としている「桐壺」の巻を見た場合、最初から最後まで、双方の訳がそれぞれ滑らかな訳文になっていなくてはいけません。そこが肝腎な点ではないのでしょうか。

そうすると、僕が常々思っていることは、いま英訳の話が出ましたけど、やはり英訳には長い歴史がありますよね。歴史があるということは、各英訳のバージョンが多くの人に読まれてきたことを意味します。インドの言語の訳なんてそんなに読まれませんか。サーヒティヤ・アカデミーが出したのだから読まれていないんです。図書館にもそろっていない。

だから、このような実情を考えると、今回、さまざまな言語で訳してもらいたい場合は、インドはもともとが英語圏であることもあり、だからこそこれまでなされてきた様々な英訳を大いに活用すべきだと思うんです。そうすると各人の発表でも出されたいろいろな問題、事物の名前、琴とか笛もそうですよね、過去のいろいろな英訳のバージョンではどう訳されてきたか、どう表現されてきたかを参照しながら訳すと、よりよい訳語が見つかるのではないのでしょうか。先人の訳文、それも特に英訳を吟味することは最低限必要な作業かと思いますが。

たとえば帝をどう訳すかですがきょう聞いていても、ウルドゥー語

以外は「samraat (皇帝、帝王)」系が多いですね。マラヤーラム語では……ああ、「cakravartii (世界を支配する王)」ね。やはりいろいろありますね。

僕に身近なウルドゥー語では、誰かが「スルターン」とか「バードシャー」とか訳そうとした人がいたんです。でも帝、現代語での天皇は「シャハンシャー」という定訳があるんです。日本の天皇は「シャハンシャーへ・ジャーパーン」以外はジャーナリズムでもあり得ません。なので、「スルターン」等々は論外です。

だから、さきほど須藤君が言ったように、ある程度言語によって決まっているんですよね。でも、最低限その決まりを踏襲していけば何とかうまくいくはずなんです。その意味でも、最低限サーヒティヤ・アカデミー版は一度目を通されることをおすすめします。マラヤーラム語版もありましたよね。

シャーム はい、あります、あります。

麻田 あ、そうです、マラヤーラム語訳はサーヒティヤ・アカデミー版のが現在、別の出版社から再版されていますね。珍しく需要があるんですね。

シャーム 初版がサーヒティヤ・アカデミーから1965年に出ていて、現行の再版本は8年前の2008年に別の出版社から出ていますね。

麻田 一応参照すればおおよその見当がつくし、かなりヒントが得られると思います。だけど、この言い回しとかは嫌だとか感じれば、それはそれで新たに挑戦すればいいわけです。先人の訳を無視しては先人に対して失礼でもありますし。

あと何かフロアからありませんか。きょうの3人の発表に限りませんが、できるだけきょうの3人の方々から出された問題点について、いかがでしょう。

菊池 別の疑問点です。『十帖源氏』の「十帖」についてです。54帖を10帖に短くまとめた梗概、要約、短縮版の意味ですよ。古賀勝郎・高橋明『ヒンディー語＝日本語辞典』(大修館、2006年)には「sankshipt」があり、語義は「簡略な；要約された；簡潔な」とあり

ます。これを使えないかと。

リーマ sankshipt だと「簡潔されたもの」に解釈されてしまうので、私の意見では saaraanshの方が「ダイジェスト版」に近いから、パンジャービー語訳のタイトルでは「源氏物語のダイジェスト版」という意味を伝える saaraansh を用いたい。

菊池 サール saar とか saaraansh は確かにいい言葉だと思います。ただ、題名につけたときに、うまくきれいに収まるかということ……。そうになると、「genjii kii kahaanii (sankshipt) 源氏物語 (簡略版)」あたりになるのかなと。

リーマ なら、「genjii kii kahaanii (ek saaraansh) 源氏物語 (ある要約)」ではどうでしょうか。

村上 ウルドゥー語だと「genjii kii muxtasar kahaanii 源氏の簡約物語」ですかね。

麻田 そうね。

須藤 私は『十帖源氏』の「十帖」という部分を活かすことができないか、と思っているのですが、どうでしょうか。

麻田 なぜ 10 帖なのかという事情がインドの読者に前もってわかっているといいんでしょうが。

須藤 いま提示されたタイトルは、ただ簡潔なとか省略した、という言葉をつけています。でも、『十帖源氏』は、『源氏物語』は全部で 54 帖もあるけれども、それをわずか 10 帖にまとめたんだ、という意味で付けられたタイトルです。そのことを、何らかのかたちで反映できないでしょうか。『十帖源氏』の「十帖」を何とか活かした訳が模索できないかな、と。

麻田 細かい点ですが、元本の観点から考える価値はありますね。54 が 10 になったんだから。だから、それを考慮して菊池さんも、「短縮した」的なものを入れたかったわけですよね。

菊池 せめてそれぐらいは入れたい。

伊藤 あのね、この『十帖源氏』の前は『おさな源氏』を、アニタ・カンナー先生とやり始めたわけですよ。つまりもっと短いやつね。『おさな源氏』

をもし全巻やったら名前は どうするんでしょう。つまり……。

菊池 そう。だから、やっぱり同じく「要約」とかを入れる……。

伊藤 要約はいっぱいあるんですよ、何種類も。『雛鶴源氏物語』もあるし。

菊池 たとえば、扉のところに、これは『十帖源氏』というものをもとにして、と書き足したらどうですか。扉に説明を書いておけば区別がつくし。

須藤 私は、でも、やはり、タイトルに「十」が欲しいと思っています。単に短縮したわけではない。この「十」を切り捨ててしまうには違和感があって……。

菊池 切り捨てるわけではないけど。そうするかどうかの瀬戸際にある。

村上 急に 10 巻って言われると、ただでさえ日本文化や文学に馴染みのない読者は混乱すると思いますが。

タリク 本来の『源氏物語』が 54 巻で、それを要約する形で『十帖源氏』が出来たとかの説明がいますよね。

パンダ 菊池さんは、あしたいらっしゃらないそうなので、ひとつ伺いたいことがあります。「いつの時代のことか」の訳なんですけど、菊池さんの訳を戻し訳すると、「古い時代の話です。その時～」のようになっていることがわかります。どうしてこういう訳になったのか、きっと何か理由があると思いますけれども、その理由を少し説明してくださいませんか。

菊池 「いつの時代のことでしょうか」というのは、直訳すれば *na jaane kab kii baat hai*（一体いつの話でしょう）になりますが、これは口語過ぎるので、もう少しフォーマルな形にしたような訳も考えたのですが、そのように始めるとわかりづらいと思ったんです。昔の話です、と言った方が読者にとって、あ、これから昔の話を読む準備態勢に入れると思いました。ですからもう最初から断言して *praaciin kaal kii baat hai*（古い時代の話です）で始めることにしたわけです。

麻田 翻訳者によってそれぞれ翻訳が異なるのは当然ですが、でもこの原文の「いつれの御時にか」は門外漢の僕の耳にも非常に心地よく響

く日本語として独特な表現ですよ。だから翻訳も難しく感じてしまう。

今日、僕は冒頭で「難しい表現は難しく訳す」と言いましたが、できるだけ原文の持つ文体やリズムをできる限り映す。それが単なる訳でなく翻訳だと思えます。こういうところで翻訳者の技量が問われるんです。この出だしの表現で『源氏物語』はずいぶん得をしているんじゃないですか。「いづれの御時にか」。いやー、じつにうまい言い方だ。

**伊藤** 皆さん、ご存じのとおり、例えば『竹取物語』は「今は昔」、『今昔物語』も「今は昔」、『伊勢物語』は「昔、男ありけり」で始まります。「今は昔」って、今から見たら昔という時間的な過去です。ところが『源氏物語』は、「いづれの御時」なんですよ。「いづれ」っていうのは時間じゃないんです。これに関してはまたいっぱい論文があります。従来は、時間的に「今は昔」だったのが、ここでは「いづれの御時」。つまり、読者は頭にどの時代かを想定できる。あ、あの天皇のときのお話なんだな、と思わせるような背景があるものの、はっきり言わないわけです。

**カンナー** そうですね。はい。

**伊藤** 注釈書によると、醍醐天皇の頃だったんだろうなという感じで、だけれども言葉には出てきていない。だから読まれてきたんですよ。いづれって誰、どなたか、ですからね。そういう意味では斬新な表現です。私は、菊池さんの訳を聞きながら、ああ、それもありだなと、うん。

**カンナー** イエス。ありえますよ。

**伊藤** まず、読者をつかまなくちゃならないですよ。

**麻田** それでは、リーマさんはウルドゥー語もわかるでしょうから、例えばウルドゥー語訳の出だし部分をもう一度提示してみても。どういうふうに響くか、意見をいただけますか。

**村上** そのまま、「いづれの御時にか」ですが、kis shahanshaah kaa zamaana thaa です。訳し戻すと「どの天皇の時代だったでしょう」。

伊藤 いづれと、どのはどう違うんでしょう。

村上 いづれでもいいんですが、どのでも同じじゃないでしょうか。両者ともに類語だと思っていただければいいのでは？

伊藤 ああ、そうか。

麻田 今のはどうですか、リーマさん。

リーマ まあ、それもありでしょうね。

麻田 na jaane は「一体全体何かはわからないのだけれど……」の意味ですよ。

リーマ それもありますけどね。

菊池 「わからないけれども……」。

麻田 そうそう。パンジャービー語はどうでしたっけ。最初の出だし。na jaane でしたっけ。

リーマ kaun jaane kis …

麻田 「誰が知ろうか」。

リーマ 「誰も知らない」ですね。

須藤 今、話題になっている冒頭部分なのですが、明日の私の報告資料に、いくつかの英訳を引用しています。ウェイリーとサイデンステッカー、タイラーの英訳です。これを見てもみますと、ウェイリーは、「ある帝の話」だと言いつつ、「その帝がいつ生きていたかは問題ではない」と訳しています。原文が「いづれの御時にか」というのは、つまり、疑問文ではない、いつの時代か特定したいわけではない、そういうのは問題にしない、いつでもいいんだと。サイデンステッカーとタイラーも、意識としては同じだと思います。どの帝の時代であるかは、ここでは問わない、という姿勢です。これらの英訳が示しているように、原文の「いづれの御時にか」、現代語訳ですと「いつの時代のことでしょうか」とありますが、これは、純粋な質問、問いかけとは全く異なっているのだと思います。当時の『源氏物語』の読者たちは、ああ、これはあの帝の時代だな、と想像して読んだはずですから、そのことから考えてみても、どの時代のことでしか、という質問ではなくて、敢えて言いませんけど……という姿勢として捉えてみなければならない

のだ、と感じます。

麻田 そうですね、in a certain reign のようにかな。kisii shahanshaah (samraat) kaa zamaana thaa。意味は「いずれかの皇帝の時代だった」。長すぎる。

須藤 例えば、タイラーとサイデンステッカーですが、タイラーがサイデンステッカーを踏まえていると思います。タイラーもあれこれとよい訳を考えたのだと思いますが、何も思いつかなくて、やはり、サイデンステッカーと同じく in a certain reign で始めようと悩んだ結果、一緒にしたのだと思います。この訳し方でよいのかどうかは、なおいっそう、考えていかなければなりません、自分自身の訳し方を考えるためのヒントとして、以前の翻訳を活用する姿勢はやはり必要だな、と感じます。

麻田 おっしゃるとおりです。さて、今度は遺体を焼くという場面のことですか。ウルドゥー語の背景にあるイスラームでは土葬で、火葬にしないですもんね。だからといって火葬を表現できないことはない。また、一般論として、ウルドゥー語はイスラーム色が強いとか、ヒンディー語はヒンドゥー色が強いとか言われますね。つまり言語と宗教の関係が常について回るんです。何々語は宗教的 (religious) なのか世俗的 (secular) なのかとね。異なる宗教の習慣とか儀礼を扱う場合は当然語彙を変えることになる。だから、ウルドゥー語の場合はヒンディー語的な要素がミックスにならざるを得ないんですよ。

パンダ 菊池さんが発表の時に元服とのかかわりの中で言及された janeuu ジャネーウーの儀式は、ヒンドゥー教の上位カーストの再生族、すなわちバラモン、クシャトリヤ、ヴァイシヤの男子が聖なる紐を身に着けることですが、これなどはヒンドゥー的もいいところですよ。

麻田 ははは、まあね。

菊池 私が janeuu をそこで持ち出したのは、皆さんのご参考までにといいことで、こんなに似ている儀式がインドにはありますよという例として紹介したまでのことで、janeuu を元服の訳に使おうとは思っ

てもいません。

麻田 ひとつひとつ取り上げては切りがありません。現段階では試訳、試みの訳であるわけですから、各自の訳をできるだけ多くの関係者に読んでいただき、さまざまな意見を頂戴する必要がありますよね。1人の頭の中で考えていても、堂々巡りするだけです。今年の春にオンラインジャーナルにヒンディー語とウルドゥー語の訳例が掲載されたのはいいことです。今度は6言語の訳が掲載されるんですよ。

そろそろ時間ですが、あともう1つだけ。またまたウルドゥー語の問題で恐縮ですが、ウルドゥー語は今やインド国内においてもムスリムの家庭の子弟たちでもペルシャ・アラビア文字が読めないんです。というのも、学校教育で教えられないので、みんなヒンディー語のデーヴァナーガリー文字しか読めないんです。シャバーナ・アーズミーというムスリムの大女優がありますが、彼女は英語を教育媒介語とするミッション系の学校で教育を受けたのですが、家庭内でのウルドゥー語の雰囲気よかったために、彼女のウルドゥー語はピカイチなんです。ところがウルドゥー語のペルシャ・アラビア文字の読み書きができない。このような現象がインドにはあるんですね。非常に奇妙で不思議な感じですが、これが現実なんです。

今日も各言語での朗読をしてもらいましたが、ヒンディー語とウルドゥー語は同一言語のふたつのヴァリエーションなんです。One language, two scripts などとも言われます。ですから耳で聞けば理解できる範囲がぐっと広がります。それだけ意見を徴することも可能となります。

そこで、提案です。このような言語的状況が現にあるため、源氏のウルドゥー語訳はアラビア文字とデーヴァナーガリー文字両方のバージョンを出していただいたらいかがかと。アラビア文字からデーヴァナーガリー文字に自動的に変えればいいんです。つまり「翻字」です。ヒンディー語では「リピヤンタラン lipyantaran」といいます。よろしいですか。ああ、よかった。ありがとうございます。

例えばリーマさんが好きだという19世紀のウルドゥー語詩人ガー

リブの詩集とか、もう様々なウルドゥー語の古典作品がデーヴァナーガリー文字に翻字されています。なので、教養人は皆さんウルドゥー文学を理解しているんです。

もうひとつ例を挙げます。数年前に今言及した女優シャバーナ・アーズミーの母親シャオーカト・カイフィーの自叙伝が出ました。夫君は進歩主義詩人だった故カイフィー・アーズミーです。これを村上明香と2人で日本語に訳して研究室から刊行したんですが、オリジナルは最初にウルドゥー語版が出たんです。そのあとにヒンディー語版が出ました。てっきりヒンディー語訳かなと思って取り寄せてみたら、文章は全く同じで文字だけを変えたヒンディー語版だったんです。こうすることで多くの読者を獲得できる仕組みになっているんです。ほかにどなたか。

**菊池** はい、葬儀のところの現代語訳が気になりました。「きまり通り、愛宕という所で、葬儀を行いました。母君も、〈桐壺の更衣〉と一緒に、火葬の煙となって消えてしまいたいと、泣いて」云々です。ヒンディー語訳は以下のとおりです。paranparaanusaar atago naamak jagah par uskaa daah-sanskaar kiyaa gayaa. kiritsubo kii chotii raanii kii maataa ne apnii betii ke saath wahiin apne ko bhii khatm karnaa chaahaa. にしました。火葬の煙というのは、全く無視しています。葬儀というのは daah-sanskaar にしました。火葬は、出しませんでした。私の今の部分を訳し戻しますと、「伝統にしたがって、愛宕という名前の場所で彼女を燃やす儀式（火葬）がなされました。桐壺の更衣のお母さんは娘と一緒に、そこで、自分をも消し去りたいと欲しました」という訳が直訳です。

**伊藤** はい、理解できました。ただ、我々というか、古典をやっている人間は、この現代語訳から意識がスタートしないものですから。つまり、古文から見ちゃう。そうすると、皆さんこの7ページをざらぐださい。原文、古文はどうなっているかといいますと、「をたぎといふところにて、けぶりになし奉る」ですね。つまり、現代語訳は、葬儀となっていますが、そのもとの文章は、けぶりというだけなんです。

菊池 葬儀という言葉自体がないのですね。

伊藤 だから、ないのはいいなと思ったんですよ。もう1つは、その続き。「母君も、同じ煙にと、なきこがれ」。その現代語訳が「母君も、＜桐壺の更衣＞と一緒に火葬の煙となって消えて」。つまり、現代語訳をつくる時に、いろんな工夫をしているってこういうところなんですけどね。だから……。

菊池 煙になるにしたほうが……。

伊藤 だからそこはね、つまり、原文まで戻ってほしいという要求は難しいと思っています。ただ、何かのときにひゅっと原文を見てもらえたらと。つまり現代語訳も大分いろんな言葉を補い、わかりやすくすると、今も2つ目だったら、「火葬の煙になって」という訳になっていますよね。原文は、「同じ煙にと」です。火葬という言葉は原文にはありません。もとはね、だからそこからわかりやすいだろうと思うことで、土葬じゃなくてという……。

村上 茶毘にふす儀式。

須藤 私は、「煙」というのを活かした訳にして欲しいと思っています。原文では、「けぶりになし奉る」とあって、火葬にしたことが大切だったのではなくて、煙にしたんだ、とっています。一方で、母君の「おなじ煙に」というのは、単に、私も死んで火葬にして欲しいということではなくて、桐壺更衣と同じ煙になって、同じ空に消えていきたい、つまり、空にただよった煙はやがて同じ空に消えて一つになっていく、そうした煙がもつイメージ、思想が反映しているのだ、と思っています。

伊藤 葬儀とか火葬って言葉をもう使わない。

麻田 なるほど。婉曲な話法みたいでいいですね。

須藤 いずれにしても、ここは、桐壺更衣が「煙」になって、それに対して、母君も「同じ煙」になりたいと願うところですから、現代語訳には、両方に「煙」があって欲しい。今の現代語訳は、桐壺更衣が「葬儀」とだけあって、母君が「火葬の煙」となっています。そうしたとき、『源氏物語』が何を重要視していたのかが見えにくかった。今回の議論で、

この場面のキーワードである「煙」をもっと活かした現代語訳を作らなければならなかったのだ、ということが分かってきたのだと思います。

伊藤 現代語訳は何回も何回も練ってきましたからね、10年近くも。

須藤 やっぱり、いろんな方に見てもらおうと、現代語訳にも不備がまだまだたくさん見つかります。

伊藤 はい、次は須藤訳を使いましょう。でもありがたいよね。どういう工夫をしたらいいのか、よろしくね。

須藤 そうですね、いろいろ意見は聞いているんですけども、まだいろんな意見を聞く余地がある。

伊藤 主語をいっぱい入れていますけど、それだってスペイン語からは余計なお世話だって言われてるし。スペイン語も、主語がなくても訳せるんだそうです。

麻田 へー。

伊藤 当然、ヨーロッパの言語はみんな主語がいるんだろうと思ったら、スペイン語は主語はいらないから、邪魔って言われるんですよ。

菊池 ヒンディー語もなくて済みますよ。

伊藤 ヒンディー語もそうですか。

菊池 何回も何回も同じ主語が出てくると邪魔になります。

麻田 主語のあるなしはその言語の特質ゆえの問題で、どうにでもできるはずですよ。ウルドゥー語やヒンディー語でも暗黙の了解が成り立つ場合は、主語を省略できますしね。前後関係の文脈から、あるいは菊池さんがおっしゃった何度も何度も同じ主語が頻繁に出てくる場合は主語の削除は可能となります。

日本語は元来、彼・彼女といった人称代名詞を使わない言語ですよ。それが翻訳文になると、やたら彼・彼女等々の人称代名詞を使う傾向にあるようです。それに反旗を翻したのがT. コラゲッサン・ボイル『ケロログ博士』の訳者、柳瀬尚紀氏で、人称代名詞を一切使用しない「全657頁、新しい翻訳矯正文体を実践した」というのです。

このように、日本語は彼・彼女らを使わない代わりに人名や職業名

をこれでもかというほど使います。これはもう各言語の特質や事情によって訳文の翻訳文体は自ずから決まる問題ではないでしょうか。何度もしつこいですが、あくまでも、流れるような良い文章に、というのが必要最低条件になるかと。

**伊藤** いや、それを聞きながら、さっきの菊池さんが指摘した、何回も出てくるといふ、これを聞きたいんですが、訳の4ページのところに、上のほうの翻字本文の最後に、「この君の御にほひ」その下に「此みこ生れ給て」とありますね。その現代語訳が、下の2行で「この〈光源氏(若君)〉の美しさ」それから「〈光源氏(若君)〉が生まれて」。つまり、この君もこの御子も混乱しないように一緒にしてしまった、いや、統一したんです。

同じように、その下、1番下から2行目です。「一のみこの女御は、おぼしうたがへり。」の「一のみこの女御は」は、現代語訳を見てみると、「第一皇子の母である妃」つまり、冒頭の「いづれの御時にか、女御」の女御は、これは残しているんです。これは余りにも有名で、日本人がみんな暗記しているので、ここの女御を置きかえたら皆さんが混乱してしまう。だから、もうそれから以降は、女御はほとんど置き換えています。それから、ほかのところも、侍女に統一したりね。

だから、皆さん最初に何か階級とかにこだわっておられたようですが、現代語訳をする立場からすると、階級差が出ないように、帝は置いておきますけれども、それ以外はもう統一しちゃったほうがいいだろうと考えました。下手に階級をずっと引っ張っていくと大変ですからね。

ですから、女性や女御とかそういう関係の人は、みんな侍女に統一しました。もっと後の巻だともっといっぱい出てくるんで、ある意味で一括置換みたいなものですけどね。須藤君、いかがですか。

**須藤** 『源氏物語』の原文ですと、更衣と女御には、もちろん、決定的な階級差があります。でも、いくつかの外国語訳を眺めていますと、そのことはあまり意識されていないように感じます。たしかに、その方がわかりやすいと思います。身分というのは、当時は、かなり意識

していたはずなのですが、それをひとまず取り払ってみて、まずは、物語の展開や叙述の美しさを翻訳してみるというのも、ひとつのアプローチだと感じます。あるいは逆に、身分差をつけてもらったときに、どういう訳が生まれてくるのかということも面白いアプローチだとは思っているのですが……。

**伊藤** まあ、現代語訳にもいろいろな課題を突きつけられております。何らかの新たな方針を作らないと、とは思っています。次は第5巻の「若紫」を予定していますので、現代語訳の提供に関しては少し考えさせてもらいます。よかれと思ってやっているのは当然なですけども、余りにも突っ込んではいけませんし、余りにも勝手にやってもだめでしょうし、頃合が難しいところです。

ただ敬語に関してはずっと方針は変わらないはずですが。帝に関する部分では敬語は訳すけれども、それ以外は訳さない。光源氏に関しては、一切敬語はないはずですが。

**麻田** ウルドゥー語は敬語を多用する言語ですが、今回は、帝に関して敬語は一切使用せずの方針のようですね。

**村上** はい、過去の話ですから、帝に敬語は使用しなくても違和感は感じないはずですが。また、サーヒティヤ・アカデミー版でも帝に敬語は使っていません。

**麻田** パンジャービー語ではどうですか。敬語を使うか使わないか。

**リーマ** 帝だけに敬語を使うのもおかしいかな、と疑問符がつく問題ですね。当時のインドに存在しなかった概念や肩書きを無理やり古典的に描写することに私は少し違和感があります。私ならここで、普通の「帝」のパンジャービー語に当たる言葉を用いたいですね。

**伊藤** それでは予定の時間を過ぎましたのでこの辺で閉めたいと思います。明日さらに3つの言語があります。明日、今日の3言語も含め、6言語を全てまとめてという流れになっています。また明日も、今日の議論を踏まえながら、いろいろな言語のことを考えていきましょう。

私個人としては、非常におもしろくて、何度もへーと思いました(笑)。本当にへーですよ。ただ1つ思ったのは、それぞれの言語が別

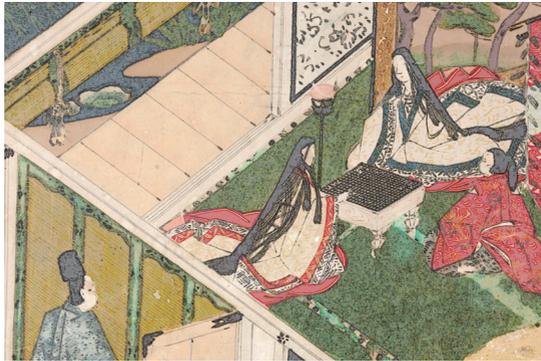
個で、あんたのとはそうだけど、うちは違うよと分かれちゃうのかなと思っていたんですよ。ところが、何かみんな接点があったっていうのが、私にとっては非常に意外でした。つまり、話をしていけばいくほど、みんなが語れるんですね。あんたの勝手でしょじゃないところがよく感じられて、非常に意味のある議論でした。

つまり、コラボレーションというみんなと一緒に協働でやりましょうというのが、ここまで成立するとは思っていませんでした。それぞれが、ただ、違いがわかっただけいいかなという、そのばらばらな状態がわかっただけいいかなという程度に考えていたんですが、日本の文化に関して、ばらばらでも一緒に共通の部分が見えたというね、これはおもしろいなと思いましたね。明日の言語数は6つです。進行役の麻田先生は大変でしょうが、よろしく。

**麻田** いえいえとんでもありません。やっぱり各言語とも非常に大きなインド文化圏に属しているわけなので、共通のインド性があるのかもしれないですね。この翻訳のプロジェクトにおいても、インドのモットーである Unity in diversity（多様性の中の統一）が現れたような感じがします。皆さん、長時間どうもありがとうございました。

(拍手)

# シンポジウム





## 第8回インド国際日本文学研究集会シンポジウム

司会・進行 伊藤 鉄也  
コメンテーター アニタ・カンナー  
麻田 豊

伊藤 それでは、2日間にわたる研究集会の最後のセッションに入りたいと思います。

当初の時間より予定をちょっと早めていますので、午後5時終了をめぐりに、昨日と同じように6言語の問題や課題を含めていただければ、と。

麻田 一応きのうときょう、題目がちょっと違うんですが、きのうもいろいろの問題が出されました。全体を聞いていますと、きのう、きょう、やはり気になるところは同じところのようです。『十帖源氏』の本文に入る前の部分、そこに日本語としてやや難しい語が出てきたりするので、皆さん、引っかかるようですね。

始める前にひとつだけ確認させていただきます。各言語名をどうカタカナ表記にするかという問題です。ヒンディー語とウルドゥー語はこのカナ表記ですでに定着しています。パンジャービー語についてはパンジャーブ語とパンジャービー語の両方が通用していますが、担当のリーマさん自身、レジюмеではパンジャーブ語と書いているのに、発表ではパンジャービー語と発音しています。

シン 実は日本語では州の名前、例えばパンジャーブ Punjab/Panjab に語を付けてパンジャーブ語とする傾向がありまして、日本人には分かりやすくずっとそう使われていたので、書く際にも私は日本人には分かりやすいだろうと思って、伝統的な表記「パンジャーブ語」にしたのです。しかし、インドではパンジャービー（語）と呼ばれるので、口頭だどついパンジャービー語を使ってしまいます。こういうことを考えると、今回インドで開かれているこの国際集会の場を借り

て、実際に発音・書記されている表記に直すいいタイミングだと思います。今こそが、日本語での慣例的・伝統的な表記と実際にその国で使われている言語の名前を一致させるタイミングであると思うので、インドのパンジャービー語話者にも通じるパンジャービー語 Punjabi/Panjabi にした方がよい、と私は考えます。

**麻田** ところがタイミングがいいというか、運よくというか、昨年(2015年)5月に三省堂から本邦初の本格的な辞書が刊行されました。その書名が『パンジャービー語・日本語辞典』です。これを採用しないわけにはいかないでしょう。昨年と今年、シンハラ語、ヒンディー語、カンナダ語の辞書も三省堂から出ました。いずれも東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所のプロジェクトによる成果刊行物です。

日本語式ならパンジャープ語でもいいんです。国名や地域名に語を付加する方式が日本方式ですから。フランス語、ドイツ語などなど。パンジャービーというのはパンジャープの形容詞のほかに、パンジャープの人やパンジャープの言語を表します。僕自身はインドでの言語名に語をつける方式を支持しますが、それが伝統的日本方式にしてしまうと、オディシャー州(旧オリッサ州)の言語はオディシャー語になってしまいます。これは混乱を来すので、まずいでしょう。ちなみに、ヒンディーのもと Hind ヒンドで、これはペルシャ語でインドを意味します。それに形容詞の「ii イー」がついて形容詞になったんです。ヒンド語としますか。しませんよね。

日本で通用しているカナ表記を信用してはいけません。マスコミの無知ゆえに間違ったカナ表記が横行しています。みな、気に留めないんですね。ですからこの際、伊藤プロジェクトにおけるインド諸語カナ表記を変えてしまうのはいかがでしょう。ところが、もうひとつ問題があります。ベンガル語、これ自体日本方式ですね、これをそうするかです。ベンガルとは地域名です。インドの州で言うと、西ベンガル州です。その東にバングラデシュがありますが、大きなベンガル地域が東西に分断されています。日本語ではベンガルですが、タリクさん、英語では何と言いますか。ベンガル語では……？

シェーク 英語では Bengali ベンゴリー、ベンガル語では「Bangla バングラ」が妥当でしょうか。ヒンディー語では banglaa バングラー ないしは bangaalii バンガーリーですね。

麻田 日本では、2012年4月に東京外国語大学にこれまでのウルドゥー語、ヒンディー語に加え「ベンガル語」が新設されました。

余談になりますが、日本でのウルドゥー語の表記は長らく「ウルドゥ」だったんです。「ドゥ」が日本語にないからとの理由で。1990年代に「ウルドゥー」に直させたんなんですが、大変な量の作文をして書類を文科省に提出しました。文科省のみならず法務省宛にもです。法律文書の中にもあるもので。5年以上かかりましたかね。決められているものを変えるのは並大抵ではないんです。そこでです。どうすればいいか、に戻りましょう。

そうそう、その昔、フランス語とかドイツ語などと同じように、ウルドゥー語は印度語とかインド語と呼ばれていたんですよ。この夏に西ベンガル州政府議会は州名変更の決議をしたそうですが……。

シェーク ああ、はいはい。西ベンガル州の名称は Paschim Banga と書いて、発音は「ポスチム・ボンゴ」。でも、まだ提案のままです。

麻田 言語名も変更される可能性がありますか？ やっぱり「ベンガル語」でいいのかな。

パンダさん、昔 Orissa オリッサ州と書かれていたのが最近変更されて Odisha になりましたよね。そして、言語名が Odia オディアー語です。これでいいですか。

パンダ オディアー語で結構です。

伊藤 きょう確定してしまいますよ。あと確認すべきはマラヤラム語ですか。

麻田 これはマラヤラム語でいいのでは。

伊藤 ヤーだけを伸ばす。はい。それからヒンディー語。

麻田 これは問題ないですよ。最後を音引きにする。ウルドゥーも同様に。あと、何がありましたっけ。

伊藤 確認しますよ。パンジャービー語。ジャーと伸ばして、ビーと伸

ばす。

麻田 はい。

伊藤 それからベンガル語にオディア語。では、これで今回の言語名は確定です。フェイスブックに登録しておきます。もう1つありますね。ニシムさん担当のマラーティー。

麻田 マラーティー語。長音が2つです。

伊藤 了解です。マラーティー語ですね。もう1つ何でしたっけ。

バス テルグ。どこも伸びない。

伊藤 はい。これで8言語ですね。念のために皆さんの名前のカナ表記の確認はいいですか。

麻田 これも厄介ですね。日本語をきちんと勉強していてもなかなかカタカナに正しく直せない。

伊藤 今回は皆さんのメールの最後を書いてあるものをコピー・アンド・ペーストで。今、わかる範囲で。シャム・アルンさん。

シャム シャムは伸びます。

麻田 シャムなんだけど、マラーヤラム語ではどう発音するかです。伸びますか。

シャム 伸びますね。

伊藤 氏名の順番はいかがですか。つまり、シャム・アルンかアルン・シャムか。

シャム インドでの順番はアルン・シャムになります。

伊藤 従来の表記や順番がことごとく崩れることに。この際、新しい歴史をつくりましょう。

アンビカさんがつい最近学位をとりましたが、学位にはどう書いてあるの？

バス バス・アンビカ。

伊藤 バス・アンビカ。あなた自身の順番は。

バス アンビカ・バス。おかしいでしょ？

麻田 おかしいと思っても何も言えないんですよ。日本の機関は強制的に日本の氏名の順番を盾に、変えられてしまうんですね。

伊藤 申請書自体が日本の書式に合わせているから仕方ないのかな。

パンダ 私の学位記にもパンダ・ナビンの順番で書かれていますよ。

麻田 日本人のローマ字での書き方はどうなってます。

伊藤 私の場合は名字は大文字で、名前の1文字目だけは大きいというふうに書いてますが。

麻田 順番は？

伊藤 私は先に伊藤を書きます。

麻田 僕も先に麻田です。フランスは名前、姓の順番ですが、通常は、姓に相当する部分を大文字で書きますね。わかりやすいようにでしょう。ハンガリーのマジャール語では日本と同じように、姓が先なんです。まあ、国によっていろいろなパターンがある。だから日本式に統一する必要など全くありません。

須藤 インドに来る少し前に、日本人監督のある映画を見たのですが、その監督の氏名が、漢字ではなくローマ字表記で、なおかつ、名前、名字の順番でした。どうやら、これにはこだわりがあるようで、その監督によれば、自分はハリウッドで映画を学んでいて、ハリウッド育ちだということにプライドがある、それを何とか氏名の表記にもあらわしたい、だから、ローマ字で、名前、名字の順番にしたのだ、と書いていました。表記の順番というのは、それぞれの主張ともかかわってくるものだと思うのですが、どうでしょうか。個人個人でこだわりもあると思うので、一律に、これと規定するのは……。

麻田 こだわりで名前の順番を変えるんですか。アイデンティティの喪失では。一般論として、日本人はローマ字表記をするときに逆転したがるんです。よくある話に「毛沢東はどう転んでも毛沢東」がありますが、ローマ字表記の順番は一貫して Mao Tse-tung なんですよ。沢東毛にはならない。ところで今、我々は国際交流基金ニューデリー事務所にはいますが、国際交流基金本部から1980年代に出ていた季刊ニューズレターは革命的でした。各号の1ページ目の下に「これまでの慣例を廃し、このニューズレターでは日本人の名前は名字・名前の順番に書く」と注記され、そのとおりに実行されていたんです。しか

し、今は昔、もとに戻ってしまったようです。どうしてあの方針は頓挫してしまったのか。欧米かぶれ組に負けたのでしょうか。

伊藤 日本文化センターの野口さんの名刺には、コウスケ・ノグチとありますね。

麻田 やっぱりねー。普通の人に成り下がっちゃってる（笑）。これはもう大多数の日本人のメンタリティーなんでしょうね。西欧先進諸国の方式に盲目的に倣ってしまう。その点、伊藤先生のやり方は素晴らしいし凄いですね。

シャーム も一度言いますが、私の場合はアルン・シャームで、この順番が正式です。

麻田 リーマさんはどうですか。

シン 日本方式に合わせるのは個人的に全然問題ありません。しかし、自分のアイデンティティーを先におくと、確かに最初はリーマと書いて、名字のシンは後になる形の方がインド人としては落ち着きます。

麻田 実際の発音に近いカナ表記の「スィン」になぜしないんですか。

シン うん。「シン」でいいです。インドではスィンと発音されるけど、日本語で表記できないし、できても中国人っぽく聞こえるので、『シン』と書きたいです。

麻田 できますよ。

シン でも、カタカナにすると中国人っぽい名前に聞こえるので。

麻田 この「スィ」の問題も厄介なんですけど、いまだに『広辞苑』でも「ス」に小さい「ィ」の「スィ」は採用されていません。でも、ずいぶん前のことになりますが、「ウ」に「ゝ」の「ヴ」は採用されたんです。だから、次に採用されるのは「スィ」だと思います。『広辞苑』を発行している岩波書店から『岩波イスラーム辞典』が2002年に刊行されましたが、ここで初めて「スィ」の表記が採用されたんです。ここまで実例を挙げて、リーマさんの心は変わりませんか。

シン 日本人が困らない限り大丈夫だと今まで思っていたんですが、日本人がインドのことについて無知でない時代が変わってきているので、少なくともインド人としての自分のアイデンティティーをアピールで

きるのではないかと思います。なので、リーマ・シンと書けば、私の心が落ち着きます。シンには少し違和感があるけどなあ。何度も言いますが、なんか中国人みたいだもん（笑）。

麻田 それはわかるんですが……。

伊藤 本人がシンでいって言ってるんだから、それでいきませんか。

麻田 仕方ないなあ。

伊藤 今回はプログラムのあちこちに名前が出てくるから、この1冊の中では統一したいですね。

麻田 もうリーマさんは死ぬまでこのカタカナ表記「シン」でいくんだと決めればいいでしょう。

伊藤 決断を。

シン では、リーマ・シンでお願いしたいと思います。

伊藤 じゃ、結論としては、リーマ・シンとして残したいということですね。

伊藤 じゃあ次。シェーク・タリクはどうですか。

麻田 シェークが前につく場合と後ろにつく場合の二通りがありますよね。

シェーク 私の場合はタリク・シェークの順です。

麻田 本来はアラビア語のターリクだけど、ベンガル語に入ってタリクですな。

シェーク はい。

麻田 本来伸びるべき音節がベンガル語に入ると伸びずにタリク。シェークは伸びますか。

シェーク はい。

麻田 そうするとこれまでのシェーク・タリクからタリク・シェークに逆転させる。

シェーク はい。

伊藤 このタリクは日本でいう名字？

シェーク シェークのほうが名字ですな。

伊藤 ああ、シェークが名字。じゃあ、あなたは日本式に順番を逆にし

てメールの最後に書いてくれている。

シェーク そうです。

伊藤 名前を先に持ってきて、名字は後ね。パンダ先生の場合は？

パンダ 私の名前はナビン・パンダです。母語ではナビンが最初で、そのあとにパンダの順です。

伊藤 じゃあ、今後はインドの方々の名前をこういう研究集会で使うときは、名+姓、つまり名前+名字の順番でというのが、一応ここで決議されたんですね。

麻田 はい。

麻田 ナビンですか、ナビーンですか？

パンダ 伸びるんですが、私はナビンのほうがいいです。

麻田 すみません。長いことうるさく言いまして。カナ表記の問題はかように厄介なんです。

伊藤 アニタ・カンナ先生もこうですね。これで姓、名。

カンナー いえ、名、姓。

伊藤 いや、ここで翻るかなと思って(笑)。相当日本化されているから。

麻田 カンナ先生は、これまでの長い歴史の中で、ご自身のカタカナ表記が定着してしまっているから、もう古い世代と思って、もうこれは残しましょう。

カンナー 新しい世代に入りたいので、カンナーにします(笑)。

伊藤 はい、じゃあそれで確定しましょう。カンナーと伸ばしていいですね？

カンナー はい。伸びる。

伊藤 伸ばすんですか。今まで書いたことないですよ。

麻田 だから、生まれ変わりたいんですって。

伊藤 きょうから突然生まれ変わって……。何かカンナーさん、困った顔して。

カンナー 大丈夫。

麻田 先生は少し戸惑っておられるんですよ。どっちでもいいのに、うるさいなーとか思っているんでしょう。

伊藤 みんな、アドレスブックをこれで変えますからね。確定。

麻田 まあ、これで一番基本的な問題が片付いたので、ここから翻訳に  
関しての問題と課題に移ろうかと思います。

きょうは3人の方から発表がありました。きのうと同様、大体同じような点が問題になりましたね。パンダさんから最後にお話があったように、方針というか心構えは、みなさん大体同じだと思います。例えば、僕の場合はウルドゥー語から日本語への翻訳が圧倒的に多いんです。もう40年以上、ウルドゥー語の文学作品を訳してきていますが、みなさんと同じような問題に引っかかるんですよ。その土地や国に特有の事物の固有名詞が一番引っかかりますが、古い時代の色名にも悩まされます。それらが解決すれば、あとは流暢な訳文を作り上げればいい。もちろん推敲に推敲を重ねるわけですが。

きょうのお昼休みに、マンジュシュリー・チョーハーン先生が村上明香の発表原稿をのぞきながら直されていました。ローマ字表記があったからこそ、添削が可能だったんです。これがペルシャ・アラビア文字だけで書かれていたらお手上げだったでしょう。どんな訳をしているか知る由もない。でもローマ字表記があることで、他人から意見や指摘を受けることができます。特にヒンディー語とウルドゥー語は理解する人の数が他の言語に比べて圧倒的に多いため、ローマ字を介して翻訳に関する意見を集めやすい。他の言語の方も、いろいろな人から意見を聞かれるのがいいかと思います。

伊藤 今のお話でもう1回確認を。この会は今後とも続きますので、今後この国際集会では資料にローマ字を併記したものを提出することを原則にすればいいということですね。

麻田 はい、今回発表者に依頼したように、発表原稿の中で『十帖源氏』からの訳の引用をする場合などはローマ字表記をつけたほうがいいでしょうね。というより、読者に対して、より親切でしょうね。

シャーム そうですよ。

麻田 きのも触れたように、『十帖源氏』翻訳に関して言えば、ヒンディー語とウルドゥー語は同一言語ですから、文字の問題が解決すれ

ば、つまりローマ字表記が提供されれば、理解できる層が膨れるので有益でしょう。パンジャービー語の文法的要素もヒンディー語・ウルドゥー語とかなり重なっているので、やっぱりローマ字表記があればわかりやすくなるでしょうね。

伊藤 ジャーナルに載せる際の手稿ではどうしますか？

麻田 発表原稿にはローマ字表記も併記するわけですから、そのままジャーナルに掲載すればいいでしょう。『十帖源氏』の翻訳文は各言語の文字だけでいいでしょうが、ただ、ウルドゥー語のみ、ペルシャ・アラビア文字とデーヴァナーガリー文字の両方で表記する、ではどうでしょうか。

伊藤 村上さん、それでいいですか。

村上 はい、結構です。

シン 私もパンジャービー語にローマ字表記をつけたいです。

伊藤 まとめると、どうなりますか。

麻田 ウルドゥー語はペルシャ・アラビア文字とヒンディー語を表記するデーヴァナーガリー文字の併用で。そしてパンジャービー語は固有のグルムキー文字とローマ字で。

伊藤 まとめると、全部につけてもらったほうがいいんじゃないの。違うの？

村上 全部につける意味はあるのかなという……。

麻田 いや、発表原稿と翻訳文を混同していませんか。全部に、の意味は、各人の発表原稿に引用されるであろう『十帖源氏』の翻訳文などにはローマ字表記も併記するという意味です。別データである『十帖源氏』の翻訳文そのものは各言語の固有文字だけでいいでしょう。ですから例外はウルドゥー語とパンジャービー語だけになります。

伊藤 今後のことがあるので。今回は一応7言語、きのうときょうとでは6言語やりましたよね。でも今後10言語まで広がりますから、その時に問題は出ないかなと。

麻田 大丈夫のはずです。

伊藤 あとテルグ語とマラーティー語にもいらない？

麻田 いりません。

男性 そうですね。発表原稿にローマ字表記があれば理解度が高まりますね。

伊藤 翻訳データベースだけは、ウルドゥーだけが例外的扱いになるんですね。あ、それとリーマさんがさきほどローマ字表記併記の希望を出したパンジャービー語。バージョンが2つ出るわけよね。

麻田 はい、そうです。

伊藤 今後ウルドゥー語で何か翻訳をしたり、ここでウルドゥー語で発表する人が両方をつくって出すのは嫌だという可能性はないわけですね。

麻田 特にインドにおいては、ウルドゥー語を表記するにはペルシャ・アラビア文字だけでいいという時代は終わったような気がします。プラスチックアルファとしてデーヴァナーガリー文字が加われば鬼に金棒ですよ（笑）。

バザールの本屋へ行けばウルドゥー語の古典文学作品のデーヴァナーガリー文字版はほぼ全て揃うでしょう。中身はそのまま、文字だけがヒンディー語で使用するデーヴァナーガリー文字に変換されている。翻訳ではなく、翻字なんです。これをヒンディー語で lipyantaran リピヤンタランと言います。しかし、各言語の固有の文字ももちろん重要です。

伊藤 大変な言語社会というか言語生活が行われてるんですね。政治的に、それは中立なんですか。

麻田 はい、我々はすごくいい方向に進んでいると思いますよ。

伊藤 『十帖源氏』をデータベース化して公開するときには、ウルドゥー語に関してはペルシャ・アラビア文字とデーヴァナーガリー文字の2つのバージョンができる。これでいいのかな。やっとな飲み込めた感じ。

麻田 いやあ、すいぶん長い議論になっちゃった。

伊藤 まだまだ入り口ですよ。

麻田 この表記の問題は重要であるにもかかわらず、なんか避けてこられてた感じがしたもので、問題提起させていただきました。

パンダ 話を変えます。発表のときも申し上げましたが、特殊な事物を表す単語が出てきた場合、解説的な文章で説明することになるかもしれませんが、図解や挿絵などを入れることができるでしょうか。

伊藤 これは編集する立場から言いますと、写真とか絵を入れる場合には、手元にオリジナルがあればいいんですが、なければ著作権の問題を処理するのに膨大なエネルギーと、場合によってはお金がかかるもので、できれば私たちの負担を重くしないでほしいんですね。でも、今回の『十帖源氏』については、先ほど入口先生がスクリーンに投影してくれた絵があるんですね。1つの巻に多い場合は3枚ぐらい入っているかな。総数は何枚でしたっけ。

入口 全巻で120図あります。

麻田 ずいぶんありますね。

バス それは自由に使えますか。

伊藤 はい、使えます。その絵を活用することは1つの方法ですよ。この絵で処理できれば、さっきの紅葉の段のところの絵だって、あれで十分でしょう。

入口 もう十分ですね。

伊藤 絵にはいろいろな情報が入っていますから。そして、この手元の資料で『十帖源氏』の現代語訳の中で、挿絵に簡単な説明がついていますが、これは意識してつけているんです。

この桐壺の巻には絵は3枚入っていると思います。例えば3枚目の絵には「<光源氏>十二歳のときに、宮殿で<光源氏>が元服の儀式をした場面」と説明がついています。この文章はこちらのほうで絵を読み取ってつけた説明書きです。つまり、絵が検索できるように、キーワードを入れた説明になっています。

麻田 だから各翻訳者にはその絵が入っている現代語訳が提供されるべきだったんですね。3枚だけでもあれば少しは翻訳の助けになるでしょう。

伊藤 でもさっきサイト一覧を紹介しましたよね。あそこに衣服とかお菓子とか、いろんなサイトのアドレスが一覧になっていますから、そ

こから見たらすぐ絵が出てきます。それは『十帖源氏』の版本自身の絵も全て、さっきのデータベースから見てもらえば、早稲田とか資料館とかが持っている画像をすぐ確認してもらえます。最終バージョンは全ての画像にリンクしていますので、ここのページは国文研の何丁だったとか、クリックすればその画像が出るようになっています。

**麻田** きのうから議論されている短縮版という意味を各言語版でどうつけるかですが、リーマさんからは、ヒンディー語なら「源氏の物語」のあとに「ek saaraansh (ある要約)」をつけたらどうかとの案が出されました。ところが、須藤先生からは、「十帖」をなんとか入れるよう工夫できないかとの要望がありました。この問題は今後の課題としますが、まあ、各言語の表現法に則り、「短縮された」がはっきりわかればいいのではないのでしょうか。例えば、ウルドゥー語ではどうなりますかね？

**村上** きのうも述べましたが、「簡約」を入れるなら genjii kii muxtasar kahaanii (源氏の簡約物語)、そして「十帖」を入れるなら、やや長いですが das (10) jildoN par mushtamil genjii kii kahaanii (10 巻からなる源氏の物語)。あるいは短くして genjii kii kahaanii (das jildoN meN) (源氏物語 (10 巻物)) あたりですかね。今のところはこんなところです。さらに考えてみます。

**伊藤** 『十帖』は巻によっては要約した巻もあれば、カッターナイフでぶつぶつと切っていくって、スポンと抜いちゃってくっつけた巻もあります。だから、厳密には 54 巻全部の要約とは言えないんです。

**須藤** 今の問題ともかかわるのですが、今日のご報告を聞いていて、ベンガル語のタイトルがもっとも気になりました。「男性用ランニングシャツや半袖のアンダーシャツ (英語の guernsey から)」の意味に取られかねない、ベンガル語の「源氏」というタイトルは、本当に苦笑いしてしまうようなものなのですが、たとえ、原文に忠実であったとしても、物語の顔でもあるタイトルがこうしたかたちになっているのは大きな問題ではないか、と思います。私は、きのうのパネルディスカッションでは「十帖」という語にこだわったのですが、それでも、『十

帖源氏』となれば、「源氏」が入ってきてしまいます。そこで考えたのですが、むしろ、「源氏」にこだわらなくてもよいのではないのでしょうか。というのも、『源氏物語』は、実は、いつの時代も『源氏物語』と呼ばれていたわけではなく、さまざまな名前では呼ばれていました。紫式部のことを意識したのか、紫の上のことを意識したのか分かりませんが、「紫のゆかり」ということもありました。『源氏物語』とは全く違ってきます。「光る源氏の物語」と呼ばれることもありました。そこで、たとえば、「光る君の物語」などとしてみてはどうでしょうか。タイトルだけではなくて、本文のところの「源氏」も「光る君」としてしまおう。これは、大きな決断ですが、時々には笑ってしまうよりは、よっぽどよいと思います。「源氏」ではなく「光る君」という。いかがでしょうか。

シェーク いいですねえ。

バス 私もそれに賛同します。

シェーク ちょっと今思いついたんですけども、本文の翻訳の中では「光」と同じ意味の「ジョティルモエ」というベンガル語の言葉を使っていますが、その「ジョティルモエ」というのもよくベンガルの男性の名前になるので、タイトルにもそのまま使えらと思いますね。

伊藤 平安時代には「光源氏の物語」という表記もありますから。「紫の物語」もあります。

麻田 僕もですが、余りにも『源氏物語』という書名や呼称にこだわりすぎていたんですね。いま出たさまざまな呼び名はネット上でも見つかりますよね。

伊藤 それはもう、幾らでも出てくる。「源氏物語 書名の由来」で検索をしてみてください。

麻田 書名の由来、ですね。これは課題として各自持ち帰っていただいて、それぞれ考えていただくことにしましょう。

伊藤 今も言った「紫」というのは意外と伝統的ですよ。

麻田 紫ねえ。でも別にすべての言語版の書名を同じにする必要はないんじゃないでしょうか？ 各言語で何かぴたっと来るような書名を探すと

とで。

伊藤 各言語ごとに変わるんですか。

須藤 笑ってしまうくらいなら、もう、『源氏物語』という書名にこだわる必要はないと思いました。

伊藤 言語別に書名が変わるのはどうかな。

高田 書名は言語ごとに変わってもいいとしても、データベースの名称には『源氏物語』や『十帖源氏』が入っていたほうがいいですよ。

伊藤 そうですね。いや、総タイトルと全てをくくるのは『十帖源氏』であって。

麻田 もちろん。

高田 当然。

伊藤 その下にそれぞれの担当言語によって『十帖源氏』をどういうふうに理解したかという、要するにタイトルの翻訳だよ。

高田 『十帖源氏』がいいんですか。

伊藤 タイトルはやっぱり『十帖源氏』が一番、もともとの固有名詞ですから。

麻田 それぞれの言語に適した何か、いろいろとひらめきがあるでしょうから、ネットで書名の由来とか調べてから再考していただければと。

伊藤 調べられると、やっぱり一番多いのは、古いところでは「源氏の」で、「の」が入るんですよ。私としては、「の」が入ったほうで訳してほしいなという気持ちですが。

麻田 「の」が入るか入らないかは日本語の問題で、外国語にも「の」を入れてほしいという話はおかしいですね。「の」が入らない『源氏物語』の英訳だって『The Tale of Genji』と「の」に相当する「of」が入っている。「源氏の物語」を英訳しろと言っても同じ訳になるでしょうね。これは言語の性質の問題ですから。ヒンディー語でもウルドゥー語でも文法上、「genjii kii kahaanii」と「の」に当たる「kii」を必然的に入れざるを得ないんです。何かひらめいて決まった場合は、伊藤先生のほうにお伝えください。

バス 現代語訳のバージョンについて聞きたかったのですが。どのバー

ジョンに基づいて翻訳をすればいいのでしょうか。

**伊藤** これは2016年1月バージョンですので最終版ではありません。

でも、ヒンディー語とウルドゥー語以外の方々に渡したものです。

**バス** 翻訳しているときに、セクション番号や小見出しはつけるんですか。

**伊藤** ありません。データベース化して出すときには、日本語のほうに番号などがついていますので。セクションごとに小見出しをつけて、さらにセルの小見出しがあって、そのグループごとに横並びで対照できるようにします。今後ともずらーっと横に並んでいきますので、この情報は統一用語で、日本語の現代語訳だけにつくものです。

**シェーク** 原文を訳す必要はないですね。

**伊藤** ないです。

**シェーク** 訳出する際の元の日本語は現代語訳ですね。

**伊藤** 現代語訳です。原文を訳されると日本人ですらさまざまな訳が出てくるので、海外の方はさらに混乱してしまいます。だからそれを避けるために、提供する日本語文は1つにしたわけです。

**シャーム** もう最初から番号をつけて送ったらとか、どうですか。

**麻田** その方がわかりやすいでしょうね。編集される方が、各言語の文字を解さずに各言語の翻訳分をセクションごとに区切るのは、かなり難しいはずですが。

**バス** たしかに、その方がわかりやすいですよ。

**伊藤** それはこちらにとってはありがたいことなのですが、ただ、皆さんの要求をすると送ってくるのが遅くなると予想されたもので。

**バス** 番号を入れるだけですよ。

**伊藤** では、区切りを入れてもらいましょうか。逆に言うと、英語訳の区切りに倣うことにはなりますが、現代語訳のセクションに従ってほしいと思っています。

**須藤** 今回は、とりあえず、皆様のご厚意に甘えることにして、セクション分けをした現代語訳を皆さんに送信する。それに従って、セクション分けを各自で行ってもらかたちでどうでしょうか。そうすれ

ば、我々の負担も大幅に軽減されると思います。

麻田 だから今回の場合は今現在の現代語訳にのっかって、各言語に翻訳をする。でも、後々、最終的に全文をまとめる段階で、日本語の現代語訳にも問題があるなら、そちらも改訂しながら各言語版の翻訳も新たに手直しをする可能性があるということですね。

須藤 現代語訳も次から次へとバージョンアップしていきますから、それが揺れてしまうと、翻訳をお願いしている皆さんも混乱すると思います。どこかで、これを決定しなければならないとは思っています。

高田 和歌に現代語訳はつけていないのですか。

伊藤 今のところ全くつけていません。つまり、和歌に訳をつけ出したら、それこそ 100 年経ってもできない。こんなのは 10 年あればできるんですけどね。

高田 和歌には現代語訳はつけない。

伊藤 原則、つけないんですが、ひそかにやっているのは仲間の渋谷栄一君が訳した『源氏物語』の訳がネット上に公開されているので、彼の訳を訳してもらおうかなと考えていますけれども、ただ彼の訳も多分に問題があつて。つまり、和歌の訳はいかに難しいかということです。

麻田 でもウルドゥー語訳では、それは使ったんじゃない？

村上 渋谷先生の現代語訳はネット上では有名なので、それを参考にしまして、ウルドゥー語版には和歌の訳も入れました。

伊藤 それでもいいんですけどね。ただほかの巻になると、うーんという、これはとてもじゃないなというのが出てくる。だから、寂聴もだめ、谷崎もだめ、となるんです。

須藤 どの翻訳であっても、一長一短があります。

伊藤 和歌の訳はいかに難しいかというのがあるので、だから今のところは見て見ぬふり、といつては申しわけないんですけども、どうしようもない。もう 1 つは、要するにダイジェスト版ですよ。和歌が突然出てくると、和歌の訳の中で前後をつなげる必要も出てくるんですよ。そうしないと、読めないですから。「幻」の巻なんて歌だ

らけでどうするんだってなりますから。だから、和歌の訳にちょっと前後の意味を入れたら話がつながる場合がある。その辺の技術は相当高度だと思えますね。オリジナルの和歌を訳すんじゃなくて、物語の中に埋まっている訳をつくるとなると、もうこれだけで相当なエネルギーがいるので、そういう意味では今のところは逃げていて、とにかくできたという形をとるには和歌を除いて訳してもらわなければならないんですよ。だから、そこはそのままに置いています。

高田 空白ってということ？

伊藤 はい、今はそうです。

須藤 今回のプロジェクトの方針として、和歌は訳さないという決まりがまずあります。だから、和歌には、現代語訳がない。でも、翻訳していただいた皆さんには、そのことが伝わっていなかったのではないのでしょうか。

伊藤 だからそのことを言わなかったのは、和歌を訳してくださいと改めて言うと、例えばタチアナ先生のように、和歌をロシア語に訳すのに15年かかったというようなことが起こるんです。和歌だけの訳でそんなに時間がとられてしまう……。だから、みなさんに和歌の訳は求めていません。でも、いろいろなものを見て訳して下さる方がたい、というスタンスです。

須藤 皆さんに訳したいという希望が強いのであれば、こちらで現代語訳を付けて、それを訳してもらったほうが……

カンナー 和歌を抜きにしても全体の流れは大丈夫ですかね。

須藤 『十帖源氏』全体の流れを見たとき、和歌はかなり重要な位置を占めています。でも、和歌があったとしても、『十帖源氏』にはぶつぶつ切れているところがいくつか存在しています。

カンナー それなら、昔やりかけた『おさな源氏』のほうがよかったの  
にね。和歌が少ないでしょ？

伊藤 いや、一緒です。

カンナー ああ、一緒ですか。

伊藤 だから余計にあればだめだったんですよ。とにかく、趣旨は和歌

のためにこのプロジェクトをとめたくないんです。

麻田 翻訳者の皆さんは、和歌があるならそれもそれぞれに理解して訳したいのでは？ これまでに出ている英訳とかを参照すれば理解できるのではないのでしょうか。ロシア語のタチアナ先生のやり方は知りませんが、ロシア語としての韻律なども考慮して訳すとなると大変ですよ。でも、物語の中に和歌が出てくるなら、その和歌を詩としてではなく、説明的な散文に訳してもいいんじゃないですか。

カンナー そうですね。それしかまた方法はないでしょうし。

伊藤 そうすると前後が2ページ、3ページとカットされていて、和歌が来た場合には、その流れを和歌で説明しなくちゃだめですよ。例えば和歌の前の2ページないしは3ページがないというときに、和歌の前と後ろをつなげる役割を和歌に持たせる必要があります。そうすると、今までの和歌の訳が使えなくなりますよね。和歌を純粋に訳したのでは、『十帖源氏』の中で完全に孤立しますから。余計にわけがわからなくなる。

入口 でも、それが『十帖源氏』なんです。だからそのままでもいい。変更する必要などないんです。

麻田 入口先生に同意します。

伊藤 でも、読者が……。

入口 当時の読者はわけがわからなかったかもしれないし、わけがわからなかったかもしれない。しかし読む人は和歌を読んでいるはず。その理解の仕方をすればいい。

ちょっとさっき言いましたけど、やっぱり『十帖源氏』で初めて読むわけです。『源氏物語』を読んだ人がわざわざ『十帖源氏』には戻らない。『十帖源氏』はまず入門ですから。そのために短くしているわけで。そこから読むわけです。その人たちは全体のストーリーなんかはそこではじめて読んでいくわけですね。そこに歌もある。伊藤先生や須藤さんは『源氏物語』全部が頭に入っているから、ここは足りないかと思うわけですね、当然。だけど初めて読む人は足りないか何かはわからないんです。ただ歌がそこあって、歌の意味をこんな意

味だろうと思って読んで次に行くわけで、足りない部分を補いながらとかいうことではないはずですよ。我々も同じようにそこを辿ってみる。

伊藤 きのもちょっと言ったんですけど、今整理する必要があると思っっているのは、私は3月までは日本の文化が翻訳でどう伝わっていくのかの研究をするための資料として訳をしてもらっている。今のお話は、ほとんどのお話が私にとっての4月以降のプランなんですよ。

須藤 長い目でみた場合のプランと、あくまでも、今回のプロジェクトで達成できる課題をしっかりと分けて考えなければならない、ということですか。

カンナー 現代語訳の英訳がありますよね。『十帖源氏』の英訳がありますよね。

村上 ジョン・C・カーンさんの訳。

カンナー そう、カーンさんの。

伊藤 あれはこちらから提供した情報で訳してもらっています。こちらから依頼して、それで謝金を払って訳してもらっています。もう1回申し上げますが、3月までは私の経費でやっています。

麻田 それは理解できます。

伊藤 4月以降は自分のやりたいことをしようと。皆さんのおっしゃっていることはわかっています。ただ、3月までに成果が出せるか。報告書に成果が出せるか。荒っぽいですが、何とかここまで来られたのは、3月までは私は公的資金でやってきた成果を出すという目標があったからです。

村上 でも、和歌を含めてですか。

伊藤 だから、和歌を含めてしまうととも出ないと踏んでいるわけですよ。でも、今聞いたら、そうじゃないような気になってきました。

須藤 つまり、伊藤先生は、和歌の翻訳は大変だから、期日に間に合わなくなる可能性があるという考えがあって、今回のような依頼の仕方になった、ということですか。

伊藤 そうです。

須藤 和歌の翻訳は大変だろうから、依頼してしまうと、きちんとした

成果が出ないのではないか、あるいは、どなたかが遅れて出せないかもしれない。

麻田 そう。

須藤 和歌の翻訳は難しくて、私たち自身にとっても、優れた現代日本語訳を作ることは難しい。そうした中で、皆さんが、和歌だからこそ、素晴らしい、よい訳をしたい、そんなふうにして取り組んでいたら期日に遅れてしまうのではないかという懸念があった。だから、今回のような依頼の仕方になった、ということですね。

カンナー それはわかります。

麻田 和歌の翻訳はいらないということを、翻訳担当者は聞かされていなかった。

バス 和歌は入ってるけど、その訳はいらないと知らなかったんです。

伊藤 つまり意識的に言わなかったということです。そこを酌んでほしい。つまり、3月までに成果が出るかどうかで、和歌を入れたら、私は出ないと踏んだ。

パンダ 和歌の翻訳なんですけど、今のところもちろんできると思います。他の方のことはわかりませんが、リーマさんとわたしは和歌の翻訳についても考えていますので、和歌の翻訳はお約束します。もちろん、今直すだけですから、多分大丈夫です。もしできない場合は、最後の最後に和歌を外してもいいでしょうね。

麻田 だから最初から今言ったようなことをはっきり言っておけばよかったんですけど、通常これを見て現代語訳がなくても、和歌は当然みんな考えますよね。和歌は難しいから抜いちゃおう、なんて思わないでしょ？

カンナー まじめな方々ですから。

麻田 そう、まじめですからね、皆さん。伊藤先生の話の聞いていると、ロシア語のタチアナ先生の和歌の翻訳に時間がかかったというのは、たぶん翻訳の方法が違うんじゃないですか。詩形とか韻律などのことを念頭に置いてきちんと訳すとか。そりゃ時間がかかるでしょう。皆さん詩人でもないし、詩的に訳そうとは思っていないでしょうから、

そんなに心配しなくてもいいと思うんですが。散文訳も大変だと思うならば、パンダさんがおっしゃったように、和歌を抜いた本文だけの訳を提出すればいいし。和歌にはそんなにこだわらずに。

**伊藤** 当初の予定どおり、我々としては2月にオンラインで公開したいと思っています。11月末でしたっけ、原稿の最終の締め切りは。そのときまでにいただいた原稿をもとに、我々は年末年始で版組みをします。ですから、そのときまでに和歌が入っているとありがたい。こちらからは特にお願いしなかったわけですから、ありがたい。私としてはやっぱり締め切りがあるので、つついこうという態度をとっていますけれども、済みません。事務的で申しわけない。ただ済みません。4月以降はいい仕事をしましょう。

**入口** 4月以降のために和歌の現代語訳は確かに必要ですよ。改めてご提示ください。

**伊藤** それは渋谷栄一君の現代語訳があるから。もう本人の了解も得ているし。仲間ですし。それから渋谷君のあのデータベース全てをNPO法人が管理しています。

**入口** ああ、そうですか。はい。

**伊藤** ですから、その辺りの権利は全て我々が持っているんです。あれを使ってもらえれば、問題は多々ありますが。だから、ほかの本から抜いてもらうと何かとあるので、できたら渋谷君のほうを使ってください。期日を優先したためで、ごめんなさい。

**麻田** はい、どうぞ、入口先生。

**入口** もうぼちぼち終わりに向けて。

**麻田** 翻訳する上での基本的な事柄について、きのう、きょうとで少しだけですが議論できたかと思います。あとは皆さんから原稿を出していただいて、それがオンライン版の報告書に掲載され、読者の方々に読んでもらい、有益な意見が出されるといいですね。そうした意見・感想・評価をもとに訳文がさらにブラッシュアップされることを期待したいです。その意味でも、今回提出していただく訳文ははたたき台という位置づけでしょうか。

伊藤 パンダ先生のきょうのお話の中で、3ページ目ですか、翻訳をするとき、自分の頭だけを使わないで、と下のほうに書いています。これを聞きながら、ロイヤル・タイラーさんがどうやって訳したかというのを少しお話しておきます。タイラーさんは全てネット上に公開されたんです。私も1996年～97年にタイラー先生が公開されている英語バージョンを見ましたし、そのディスカッションも同時進行で見えています。私には意味はわかりませんが、何をやっているかぐらいはわかって、つまりタイラーさんが頭中將をどういうふうに訳したかとか、いっぱいみんなが言ってくるんですよ。それで現在のタイラー訳が決まったんです。つまり、タイラーさんはネットを使って、バージョンアップするごとに、どんどん公開したんです。私ですら見る環境に置いてくださったんですよ。そのディスカッションも全部公開された。その結果、最終的訳文は相当変わったらしいです。だって世界中からみんながみんな言ってきますから。あのタイラーさんの訳をみんなが評価する点は、いろんな方からの意見を取り入れながら訳を進めていったこと。1回やってからもう1回見直している。それも最後になってまた意見が来て、そこからまたざっと見直してるわけですよ。普通は個人のタイラー訳ですけども、私なんかはみんなとコラボレーションする中で生まれたタイラー訳だと思っています。サイデステッカーはあくまでも1人で机の上で訳した。その違いが翻訳にも出てくるので、今回の「桐壺」が公開出来た時には、意見交換をしながらバージョンアップしていけばいいかなと思いますね。タイラー訳はそういう意味では画期的な翻訳でした。

そうすると、そのためにはこれはきのう私が言われたことですが、メーリングリストをつくれと。きのう私はいろんな失言をしました。現代語訳を見てくれとか、新バージョンを見てくれとか言ったら、見てくれはだめだろうと言われました。代わりに、メーリングリストを新たにつくって、そこにバージョンアップした旨流してくれ、とも言われました。ごもっともですので、早速メーリングリストをつくって、きょうのこともそこにまとめて流したいと思います。

麻田 それから最後にもう1点。ネイティブとノンネイティブのお二方に訳してもらおうと謳いながら、インドの諸言語に限っては片方しかないんですよね。適任者がなかなか見つからなかったのでしょうか、現在、訳者が両方いるのは何語ですか。

伊藤 まず英語。それからスペイン語とイタリア語、もうすぐロシア語ですかね。ああ、中国語も進んでいますね。済みません、これには謝金を払っているんです。だからできたと思ってもいます。それで、3月までは謝金が払えるんですが、4月以降は科研費がなくなりますので、謝金が一切払えない。今回の皆さんは謝金がないのに、非常に申しわけないと思いながら……（笑）。でも実際、謝金を払うと原稿が早く集まるんです。優秀な留学生が手を挙げてきます。謝金がないとなかなかうまくいきません。個人的なかかわりで拝み倒すしかないんです。だから片方ずつしかないというのは、済みません、そういう理由からです。

麻田 今回、ノンネイティブの日本人がかかわっているのはヒンディー語とウルドゥー語だけです。きちんと調査をすれば見つかるでしょうけど、漠然と考えていただけでは翻訳技術に長けた人は見つからないと思います。

伊藤先生は最初におっしゃったように、ネイティブならではの訳とノンネイティブならではの訳を求めたんですよね。何か理解の過程における文化的差異が出てくるとおもしろい、と考えられたような。でも、来年の3月までの科研の研究には間に合いませんよね。だから、翻訳ができる人ならば誰でもいいと思われたのでは？ ただし、その翻訳者は質のいい翻訳を目指さなければならない。自分で用意した訳稿を誰かに見てもらうとか、添削をしてもらうとか、当然そういう過程を経ると思うんですが、翻訳の質の問題についてはあまり考えておられない気がします。

伊藤 4月以降は、ネイティブ、ノンネイティブを私自身こだわってなくて、今から5年前に科研の申請書に書いたことを今実行しているだけです。これは3月に終わります。

麻田 ウルドゥー語の場合はノンネイティブは見つかったが、ネイティブは探さなくてもいいんですか。

伊藤 4月以降ですか。

麻田 はい、4月以降です。

伊藤 つまり、難しいのであれば仕方ないでしょう。

麻田 ノンネイティブを探すのが難しいとおっしゃいますが、誰が探すうとしていたんですか。

伊藤 私の知り合いを通じてです。たまたまタリクさんと出会って、話の中で今回の人選ができたわけでした。だからヒンディー語とウルドゥー語以外は、全部タリクさんを通じて一応……。突然展開したんです。それ以外に私の交友範囲はなかったわけですからね。

麻田 いや、それはネイティブですよ。ネイティブはいいんです。探そうとすれば探せるでしょう。人探しが難しいのはノンネイティブの場合です。たまたまヒンディー語とウルドゥー語に限っては日本人がいたからいいですが。まあ、それは大言語なので当然、運用能力を持つ人もそれなりにいるでしょうから。けどほかの言語となると、日本できちんとやられている人がいないに等しいですからね。

ということで、皆さんは今後とも『十帖源氏』の翻訳をたゆまなく続けていってください。どの言語の翻訳でも、完成すればそれなりにおもしろい結果が待ち受けていると信じています。きのう、きょう、長い時間を費やしてきましたけれども、基本的な問題点や課題は共有できたかと思います。そろそろ時間ですので、最後に伊藤先生から……。 (拍手)

伊藤 最後になりますけれども、さっきから実験とか縛りがあってとか、言いましたが、申しわけありません。5年前に書いた書類が採択されたがゆえに、その縛りの中でやってきましたが、来年4月以降は縛りはないわけですから、実験もしなくていいわけです。皆さんと好きな形で気の済むようにやれるな、と思います。期限内の成果も気にしないで済みますから、そのときはまた改めて皆さんと一緒に仕事をしたいなと思っています。いろんな勝手なことを言ってきましたが、

ここで改めてお詫びをし、お許しいただきたく存じます。4月以降のこのテーマ自体は、今持っているNPOも一緒にかかわっていくということになっていて、成果を出せる出口もあることが確認されています。つまり、地球上のどこにでも情報を流せる出口、場所は持っているということです。そのことだけご理解いただいて、ご協力していただけるとありがたいと思っています。本当にありがとうございました。  
(拍手)

入口 それでは、これにて散会とさせていただきます。

## 【付録】

### 各国語訳『十帖源氏』 「桐壺」翻訳データ

(現代語・マラヤーラム語・ヒンディー語・ウルドゥー語・  
ウルドゥー語 (デーヴァナーガリー文字)・  
パンジャービー語・ベンガル語・オディア語)



# 十帖源氏

原 作：『源氏物語』（紫式部）  
 底 本：国文学研究資料館所蔵  
 編 者：ののぐちりゅうほ野々口立圃  
 成 立：17世紀半ば  
 翻訳者（本文）：畠山 大二郎  
 翻訳者（和歌）：渋谷 栄一  
 翻訳補訂：浅川 槇子

## 『源氏物語』の誕生

〈村上天皇〉の十番目のお姫さまである〈選子内親王（大斎院）〉が、〈一条天皇〉の後である〈藤原彰子（上東門院）〉に「新作の物語はありませんか」と、お望みになりました。〈彰子〉は、《紫式部》を呼んで「がんばって《物語》を新しく作ってきてください」と、おっしゃいました。

《紫式部》は、《石山寺》に滞在して、この事を祈りました。すると、《八月十五夜の満月》が、《琵琶湖》の水面に映って、物語の風情が頭に浮かんだので、まず、須磨の巻から書いたそうです。『源氏物語』の巻の数は天台の教典六十巻をもとにして（現在の『源氏物語』は五十四巻）、巻の名前は四諦の法門、「有門、空門、亦有亦空門、非有非空門」という文を参考にして名付けました。

第一には物語の本文から、第二には和歌から、第三には本文と和歌から、第四には和歌にも本文にもないところから、巻の名前を決めました。もともと「藤式部」と呼ばれていたのを、この物語の一部で〈紫の上〉のことをとてもすばらしく書いていたことから、「紫式部」と呼び名が換えられたのです。

〈紫式部〉は、観音の化身だという伝説もあります。檀那院僧正に天台一心三観の血脈を許されたのです。

## 紫式部の系図

堤中納言兼輔—因幡守惟正—越前守為時—女（紫式部）

母は摂津守為信女の堅子です。

（注）一般的な説とは異なる部分もあります。類似した系図が『源氏物語』の注釈書である、『湖月抄』にあります。

〈絵1〉八月十五日の夜、石山寺で、〈紫式部〉が、『源氏物語』を書きはじめた場面

### 〔小見出し1〕

（桐壺）

いつの時代のことでしょうか、女御や更衣などといったお后が大勢いらした中に、特に高貴な身分ではなく、帝にとっても愛されていたりしゃる女性がいました（「いつの時代」とは、〈醍醐天皇〉の時代のことです。

帝に愛されていたりしゃった女性というのは、〈桐壺の更衣〉です）。

宮殿の梨壺という建物は照陽舎の別名です。桐壺という建物は淑景舎の別名、藤壺という建物は飛香舎の別名、梅壺という建物は凝花舎の別名、雷鳴壺という建物は襲芳舎の別名です（お後の名前は、それぞれの住んでいる建物の名前呼びます）。

この桐壺に住んでいる更衣を愛されたので、この時の帝のことを〈桐壺の帝〉ともいいます。大勢の女御や更衣たちはうらやんで、毎日〈桐壺の更衣〉が帝の近くにいることに、嫉妬をしてばかりいました。

### 〔小見出し2〕

そうやって、他の后たちの恨みをたくさん作った結果でしょうか、体が弱くなっていきました（重い病気です）。

心細い感じがして、実家に帰っていることが多い〈桐壺の更衣〉のことを、帝は、これまで以上にたまらなくお思いで、人々が悪口を言っても、愛情をお止めになることができません。

## 〔小見出し3〕

中国でもこういう恋愛関係が原因となって、世も乱れ、とんでもないことにもなると、世間の人もおもしろくない気がして、人々の悩みの種にもなり、中国で〈玄宗皇帝〉を夢中にさせた〈楊貴妃〉の話に例えられそうになりました。

## 〔小見出し4〕

この〈桐壺の更衣〉の父はすでに死んでいて、母親の〈北の方〉は、由緒のある家柄出身であり、古風な人なので、他のお后たちにも負けないようにしています。しかし、何か大事なことがある時には、頼るところがなく、心細い様子です。

## 〔小見出し5〕

〈桐壺の帝〉と〈桐壺の更衣〉は）前世でも約束が深かったのでしょうか、美しい玉のような皇子までも生まれました（この人を〈光源氏（光る君）〉といいます）。第一皇子は、〈右大臣の女御〉が生んだ子供なので、間違いなく皇太子になるだろうと、世間の人々も大切にしているのですが、この〈光源氏（若君）〉の美しさには、とうてい勝つことができません。

## 〔小見出し6〕

〈光源氏（若君）〉が生まれてからというもの、帝はこの〈光源氏〉をとても大切にしていってましたので、〈光源氏〉が、皇太子になるのではないかと、第一皇子の母である后は、心の中で心配しています。

## 〔小見出し8〕

帝が、たくさんのお后たちの部屋の前を素通りして、何度も何度もお通いになることに、他のお后たちが嫉妬しているのも、もっともなことです。あまりに〈桐壺の更衣〉が帝に呼び寄せられる回数が多くなっていきます。すると、打橋や渡殿といった宮殿の廊下など、〈桐壺の更衣〉が通る、あちらこちらの道にいたずらがされていました。それは、見送りや出迎

えの侍女の着物の裾が、まったく我慢できなくなるような、とんでもないことなどです。またある時は、〈桐壺の更衣〉が、絶対通らなければならぬ中廊下の扉を開けて、こちらとあちらで協力し、〈桐壺の更衣〉を閉じ込めて、ひどい目にあわせたり困らせたりすることも多いのです。

[小見出し 9]

帝はますます〈桐壺の更衣〉をかわいそうに思って、後涼殿という所に前から部屋をもらっていた身分が低い后を、他の場所へ移し、〈桐壺の更衣〉のもう一つの部屋としました。

部屋を他に移された後の恨みは、とうてい晴れることはありません。

[小見出し 10]

〈光源氏（若君）〉は、三歳になった年、袴着の儀式をしました。その様子は、第一皇子がこの儀式をしたときにも負けないほどです。見た目や性格が、めったにないほど素晴らしいので、〈光源氏（若君）〉を他の后たちも憎むことができません。

[小見出し 11]

その年の夏、母の御息所（〈桐壺の更衣〉のことです）は、病気になって実家へ帰ろうとしますが、〈桐壺の更衣〉がいつも体が弱いことに、帝は慣れてしまい、帰ることを絶対に許しませんでした。日に日に病気が重くなってきて、ひどく衰弱したので、〈桐壺の更衣〉の母は、泣きながらお願いをして、〈光源氏（若君）〉を宮中に残したまま、〈桐壺の更衣（御息所）〉だけ帰ることになりました。

[小見出し 12]

帝は、かわいらしい〈桐壺の更衣〉が、やつれて意識がはっきりしない様子を御覧になって、今までのことや将来のこと、いろいろなことを約束したりするけれども、〈桐壺の更衣〉は、返事をすることもできません。つらそうな顔をして、意識を失った状態です。帝が「死への旅にも、

共に行こうと約束しましたのに、私を残してはいけませんよ」と、おっしゃるのを、

[小見出し 13]

〈桐壺の更衣(女)〉も、とても嬉しく思い、次のように和歌を詠みました。

人の命には限りがあるものと、今、別れ路に立ち、  
悲しい気持ちですが、わたしが行きたいと思う路は、  
生きている世界への路でございます。

帝は、〈桐壺の更衣〉に輦車に乗ることを許し、〈桐壺の更衣〉は実家に帰りました。

[小見出し 14]

帝は胸がつまるほどに悲しんでいます。帝のお見舞いの使者が行って帰って来るほどの時間もたっていないほどに、「夜中を過ぎるころに、〈桐壺の更衣〉が息を引き取りになりました」と、お聞きになります。帝は、気も動転して、もう何の分別もつきません。

[小見出し 15]

帝は、〈光源氏(若君)〉をこんな時でも御覧になりたいと思うけれど、喪中の人が宮殿にいることは前例にないので、〈光源氏〉を母君の実家に帰らせました。〈光源氏(若君)〉も何が起きたのかもわかりません。〈光源氏〉は、周りの侍女たちが泣きわめき、帝も涙がとまらなくなっていられっしゃるのを、何だか変だと見えています。

[小見出し 16]

きまり通り、愛宕という所で、葬儀を行いました。

母君も、〈桐壺の更衣〉と一緒に、火葬の煙となって消えてしまいたいと、泣いて、見送りの侍女の車に、追いつくようにして乗ってでかけました。

[小見出し 18]

帝から使者があって、亡くなった〈桐壺の更衣〉に三位の位をお贈りになりました。

[小見出し 21]

帝は、第一皇子を御覧になっても、〈光源氏（若君）〉を恋しく思い出してばかりいて、侍女や乳母などをつかって、〈光源氏〉の様子をお聞きになります。風が強くて肌寒い夕暮れに、〈鞍負の命婦〉という女官を〈桐壺の更衣〉の母の所へ行かせました。

[小見出し 26]

帝からの手紙に書いてあった和歌です。

宮中の萩に野分が吹いて露を結ばせたり

散らそうとする風の音を聞くにつけ、幼子の身が思いやられる  
〈鞍負の命婦〉が、〈桐壺の更衣〉の母に会って詠んだ和歌です。

鈴虫が声をせいいっぱい鳴き振るわせても

長い秋の夜を尽きることなく流れる涙でございますこと

（〈鞍負の命婦〉が詠んだ和歌に対して、〈桐壺の更衣〉の母（祖母君）は次のように和歌を返しました。）

〈祖母君〉

ただでさえ虫の音のように泣き暮らしておりました荒れ宿に

さらに涙をもたらします内裏からのお使い人よ

[小見出し 32]

良い贈り物をする場合にはありませんので、〈桐壺の更衣〉が残した着物や装飾品を、手紙にそえてあげました。

[小見出し 34]

帝は夜更けになってもおやすみにならず、庭先に植えてある花を眺めながら、侍女を四、五人そばに控えさせて、お話をしていらっしゃいま

した。

[小見出し 35]

帝の手紙に対して詠んだ、〈桐壺の更衣〉の母の歌です。

荒い風を防いでいた木が枯れてからは  
小萩の身の上が気がかりでなりません

[小見出し 37]

〈桐壺の更衣〉の母（祖母君）の話や〈光源氏（若君）〉のことなどを話して、贈り物を見せると、帝は次のように和歌を詠みました。

〈帝〉

亡き更衣を探し行ける幻術士がいてくれればよいのだがな、  
人づてにでも魂のありかをどこそこと知ることができるように

[小見出し 39]

第一皇子の母、〈弘徽殿の女御〉は、長い間帝の側に呼ばれず、月の美しい夜に合奏をして遊んでいます。殿上人や侍女たちは、「具合の悪いことだ」と、その合奏の音を聞いています。

[小見出し 40]

帝は、〈桐壺の更衣〉の母（祖母君）の生活を心配して、次のように和歌を詠みました。

雲の上の宮中までも涙に曇って見える秋の月だ  
ましてやどうして澄んで見えようか、草深い里で

[小見出し 43]

月日が過ぎて、〈光源氏（若君）〉が宮殿にやってきました。美しく成長したので、神につれていかれたりしないかと大変不安に思われました。翌年の春、第一皇子が皇太子に決まったときも、帝は、〈光源氏〉に第一皇子を越えさせたいと思いましたが、世間が納得しないことだと、遠

慮して、表情にも出しません。

[小見出し 44]

あの〈桐壺の更衣〉の母（祖母君）は、心を慰めることもなかったからでしょうか、亡くなってしまいましたので、またしても帝は、悲しいことだと思いにになります。

[小見出し 45]

《光源氏（若君）》は《七歳》になりましたので、読書始めの儀式をして、勉強はいうまでもなく、琴や笛といった楽器もよくできて、宮殿の人々を驚かせました。

[小見出し 46]

そのころ《高麗人の相人》がやってきて、この《光源氏（若君）》の学問の才能がすぐれていて、《容姿も美しい》のをほめたたえて、「光る君」と名付け、贈り物などを差し上げました。帝は、この〈光源氏（光る君）〉を皇族から外すのは惜しいけれど、源氏の名字をつけて、臣下にするように決めました。

〈絵2〉〈光源氏〉七歳のときに、迎賓館で、〈光源氏〉が高麗の相人に占いをしてもらっているところ

[小見出し 51]

年月が過ぎても、帝は、〈桐壺の更衣（御息所）〉のことを忘れることがなく、心をなぐさめることもできません。前の天皇の四番目のお姫さままで、見た目がとても美しいということ、〈典侍〉という女官が、主人である帝に伝えました（その人を、〈藤壺〉といいます）。

[小見出し 52]

昔の〈桐壺の更衣（御息所）〉によく似ていて、

## 〔小見出し 55〕

身分も高いので、帝は、〈藤壺〉に自然とお気持ちに移っていきました。

## 〔小見出し 56〕

〈光源氏〉は、帝の近くから離れないので、〈藤壺〉のところにも《帝》と一緒によくついていきます。

## 〔小見出し 59〕

〈光源氏〉と〈藤壺〉は、《帝》にそれぞれにとっても愛されているので、〈藤壺〉のことを、〈光源氏〉の「光る君」に対して「輝く日の宮」とも呼びました。

## 〔小見出し 60〕

《光源氏》は、《十二歳》で《元服》と呼ばれる成人式をして、《左大臣（引き入れの大臣）》の娘で、皇女の母親をもつお姫さまを、妻にすることが決定しました（その妻が〈葵の上〉です）。

〈絵3〉〈光源氏〉十二歳のときに、宮殿で〈光源氏〉が元服の儀式をした場面

## 〔小見出し 65〕

〈帝〉

幼子の元服の折、未永い仲を

そなたの姫との間に結ぶ約束はなさったか

〈左大臣〉は返事として次のように歌を詠みました。

元服の折、約束した心も深いものとなりましよう

その濃い紫の色さえ変わらなければ

## 〔小見出し 66〕

左馬寮という役所が所有する馬に、藏人所という役所が所有する鷹を添えて、〈左大臣〉にあげました。

宮殿の階段のところに、上級の貴族や親王たちが立ち並んで、引出物などを位に応じて帝からもらいます。

[小見出し 67]

その夜、〈左大臣〉の家に〈光源氏〉は行きました（〈光源氏〉は十二歳、〈葵の上〉は十六歳です）。

[小見出し 69]

〈左大臣〉の息子の〈蔵人の少将〉は、〈右大臣〉の〈四の君〉と結婚することになりました。

[小見出し 70]

〈光源氏〉は、帝がいつも自分の側近くにお呼びになるので、ゆっくりと〈左大臣〉の家に落ち着くこともできません。〈光源氏〉は、〈藤壺〉のことを世の中にめったにないものと思って、〈藤壺〉のような女性と結婚したい、〈藤壺〉と似ている女性もいないなあと思うので、〈葵の上（大殿の君）〉とはあまり親しくなりません。

[小見出し 71]

大人になってからは、子供の時のように〈藤壺〉と同じ御簾の中にも入れません。合奏をする時々、琴や笛の音色に気持ちをこめ、かすかに聞えてくる〈藤壺〉の声を慰めにして、〈光源氏〉は宮殿でばかり過ごしています。

### ജ്യോജോ ഗെഞ്ചി അദ്യായം ഒന്ന് കിരിറ്റുസുബോ

വിവർത്തനം : അരുൺ ശ്യാം

#### [1T表]

ഗെഞ്ചികഥകളുടെ ഉത്ഭവം

ഒരുനാൾ മുറകമി ചക്രവർത്തിയുടെ പത്താമത്തെ മകളായ ദൈസൈയിൻ എന്നിക്കു പറഞ്ഞുതരുവാൻ പുതിയ കഥകളൊന്നുമില്ലേയെന്നു ഫുജിവാറ ശോഷി രാഞ്ചിയോട് ചോദിക്കുകയുണ്ടായി. രാഞ്ചി മുറസാക്കി ഷിഖിബുവിനെ വിളിപ്പിച്ച് പുതിയ കഥ രചിക്കുവാൻ ആജ്ഞാപിച്ചു. മുറസാക്കി ഇഷിയമ എന്ന് പേരുള്ള ക്ഷേത്രത്തിൽ വസിച്ച് ഒരു കഥയെകുറിച്ച് ധ്യാനിച്ചു. അങ്ങനെ ഒരു കൊയ്ത്തുകാല പൂർണിമ നാളിൽ ബിവാത്സാകത്തിൽ പ്രതിഫലിക്കുന്ന ചന്ദ്രനെ കണ്ട് ഒരു കഥ മനസ്സിൽപെട്ടു. ആദ്യം സുമ എന്ന പന്ത്രണ്ടാമത്തെ അദ്യായത്തിൽ നിന്നും എഴുതുവാൻ തുടങ്ങി. ബുദ്ധമതത്തിലെ തെൻദായ് വിഭാഗത്തിന്റെ 60 ഖണ്ഡം അടങ്ങിയ സൂക്തങ്ങളെ ആസ്പദമാക്കിയാണ് ഗെഞ്ചികഥയെ 54 അദ്യായങ്ങളായി വേർതിരിച്ചിരിക്കുന്നത്. ബുദ്ധമതത്തിൽ ദുഃഖം, ദുഃഖ കാരണം, ദുഃഖനിവാരണം, ദുഃഖ നിവാരണമാർഗ്ഗം എന്നീ ചതുരസത്യങ്ങളെ ആസ്പദമാക്കിയാണ് ഓരോ അദ്യായത്തിനും പേരുകൊടുത്തിരിക്കുന്നത്. അദ്യായത്തിന്റെ പേരുകളാകട്ടെ ഗദ്യത്തിൽ നിന്നും തിരഞ്ഞെടുത്ത വാക്കുകൾ, ജപ്പാനി 'വക' കവിതകളിൽ നിന്നും തിരഞ്ഞെടുത്തവ, മേൽപറഞ്ഞ രണ്ടിൽനിന്നും തിരഞ്ഞെടുത്തവ,

#### [2T表]

മറ്റുചിലേതു മേൽപറഞ്ഞ രണ്ടിലുംപെടാത്ത വാക്കുകളാണ്. കഥയുടെ രചയിതാവായ ഷിഖിബു ആദ്യം ഫുജി ഷിഖിബു എന്ന പേരിൽ അറിയപ്പെട്ടിരുന്നുവെങ്കിലും, കഥയുടെ ചില ഭാഗങ്ങളിൽ മുറസാക്കിയെന്ന കഥാപാത്രത്തെ മനോഹരമായി വർണ്ണിച്ചതിനാൽ

മുറസാക്കി ഷിഖിബു എന്ന പേര് നൽകപ്പെട്ടു. മുറസാക്കി ഷിഖിബു പശ്ചിമേഷ്യയിൽ കനോൻ ബോധിസത്യ എന്ന നാമത്തിൽ അറിയപ്പെടുന്ന അവലോകിതേശ്വരന്റെ അവതാരമാണെന്നും ചിലർ വിശ്വസിക്കുന്നു.

മുറസാക്കി ഷിഖിബു ദന്ന എന്ന ആശ്രമത്തിലെ ഉന്നത പദവിയിലുള്ള ബുദ്ധസന്യാസിയിൽനിന്നും തെൻദായ് സൂക്തങ്ങൾ പഠിച്ചു.

മുറസാക്കി ഷിഖിബുവിന്റെ വംശാവലി കനേസ്കെ തുത്സുമി, മധ്യനിയമഉപദേശ്ഛാവ്-കൊരമസ, ഇനബ സംസ്ഥാനത്തിന്റെ ഭരണകർത്താവ്-തമെതൊകി, എച്ചിസെൻ സംസ്ഥാനത്തിന്റെ ഭരണകർത്താവ്- മകൾ (മുറസാക്കി ഷിഖിബു). അമ്മ കെൻഷി, തുത്സുബ സംസ്ഥാനത്തിന്റെ ഭരണകർത്താവായ തമേനൊബുവിന്റെ പുത്രി.

(ചിത്രം1) ആഗസ്റ്റ് പന്ത്രണ്ട് രാത്രി, മുറസാക്കി ഷിഖിബു ഇഷിയമ ക്ഷേത്രത്തിൽ ഗെഞ്ചിയുടെ കഥ എഴുതുവാൻ തുടങ്ങിയ രംഗം.

ഏതുകാലഘട്ടത്തിലെ കഥയാണെന്നറിയില്ലെങ്കിലും ചക്രവർത്തിയുടെ അന്തഃപുരത്തിലെ സ്ത്രീകളിൽവെച്ചു ഉയർന്ന ജാതിയിൽപ്പെട്ടവളെങ്കിലും അദ്ദേഹത്തിന് ഏറ്റവും കൂടുതൽ പ്രിയപ്പെട്ട ഒരു സ്ത്രീയുണ്ടായിരുന്നു. ('ഏതുകാലഘട്ടത്തിലെ കഥ'യെന്ന പദം ദൈവോ ചക്രവർത്തി ഭരിച്ച കാലഘട്ടത്തെ സൂചിപ്പിക്കുന്നു. ചക്രവർത്തി സ്നേഹിച്ചിരുന്ന സ്ത്രീയുടെ പേരാണ് കിരിറ്റ്സുബോ.) നാഷിറ്റ്സുബോ അഥവാ ഷോയോശ, കിരിറ്റ്സുബോ അഥവാ ഷിഗേശ, ഫുജിറ്റ്സുബോ അഥവാ ഹിഗ്യോശ, ഉമെറ്റ്സുബോ അഥവാ ഗ്യോകശ, കന്നരിറ്റ്സുബോ അഥവാ ഷ്യൂഹോശ, ഇവയെല്ലാം രാജമന്ദിരത്തിനു ചുറ്റുമുള്ള കെട്ടിടത്തിന്റെ പേരുകളാണ് (അന്തഃപുരസ്ത്രീകൾ വസിച്ചിരുന്ന കെട്ടിടത്തിന്റെ പേരിലാണ് അവർ വിളിക്കപ്പെട്ടിരുന്നത്).

ചക്രവർത്തി കിരിറ്റ്സുബോ എന്ന കെട്ടിടത്തിൽ വസിച്ചിരുന്ന സ്ത്രീയെ

ഏറ്റവും കൂടുതൽ സ്നേഹിച്ചതിനാൽ അദ്ദേഹം കിരിറ്റ്സുബോയുടെ ചക്രവർത്തിയെന്നു വിളിക്കപ്പെട്ടു. ചക്രവർത്തിയും കിരിറ്റ്സുബോയും തമ്മിലുള്ള അടുപ്പം കണ്ട് കൊട്ടാരത്തിലെ പരിചാരികൾക്കും അന്തഃപുരസ്ത്രീകൾക്കും അവളോട് അസൂയ തോന്നി.

മറ്റു സ്ത്രീകളുടെ നീരസത്തിന്റെ ഫലമായിരിക്കാം, അവൾക്ക് സുഖമില്ലാതായി. ഗുരുതരമായ രോഗം ബാധിച്ച കിരിറ്റ്സുബോ തീരെ വയ്യാതെ നാട്ടിലേക്കു തിരിച്ചുപോവുക പതിവായി.

**[3丁表]**

പ്രജകൾ പ്രചരിപ്പിച്ച അപവാദങ്ങൾക്കൊന്നും ചെവികൊള്ളാതെ ചക്രവർത്തി അവളെ ആർദ്രമായി സ്നേഹിച്ചു.

മുൻപ് ചൈനയിൽ ഇങ്ങനെയൊരു പ്രേമബന്ധം രാജ്യത്ത് കലാപം സൃഷ്ടിച്ചിട്ടുണ്ട്. അന്യസ്ഥരായ പ്രജകൾ ഈ ബന്ധത്തെ അംഗീകരിച്ചില്ല. യാങ് ഗ്വിഫേയെ സ്നേഹിച്ചു മതിഭ്രമം ബാധിച്ച ചൈനയിലെ ശ്യാൻസോങ്ങ് ചക്രവർത്തിയുടെ അവസ്ഥയുമായി ജനങ്ങൾ താര്യതമ്യപ്പെടുത്തി.

കിരിറ്റ്സുബോയുടെ അച്ഛൻ നേരത്തെ മരണമടഞ്ഞു. അവളുടെ അമ്മ അന്തസ്സുള്ള കുടുംബത്തിൽ പിറന്ന ഒരു സ്ത്രീയായിരുന്നു. ചക്രവർത്തിയുടെ മറ്റു അന്തഃപുരസ്ത്രീകളിൽവെച്ച് വേറിട്ടുനിൽക്കുന്ന ഒരു സ്ത്രീയായി അവളെ വളർത്തി. പക്ഷെ ചില നിർണായകമായ അവസരങ്ങളിൽ ആശ്രയിക്കുവാൻ ആരുമില്ലാത്ത കാര്യം ആലോചിച്ചു അവർ ഏറെ വിഷാദിച്ചു.

അങ്ങനെയിരിക്കെ ഏതോ മുൻജന്മ ബന്ധം പോലെ കിരിറ്റ്സുബോ ഒരു സുന്ദരനായ യുവകുമാരനെ പ്രസവിച്ചു. (ഈ രാജകുമാരന്റെ പേരാണ് ഹികാരു ഗെജ്ഞി അഥവാ പ്രകാശിക്കുന്ന പ്രഭു). നാട്ടുനടപ്പ് അനുസരിച്ചു വലതുപക്ഷമന്ത്രിയുടെ പുത്രിയിൽ ഉണ്ടായ ആദ്യപുത്രൻ തന്നെ യുവരാജാവാണെന്ന കാര്യത്തിൽ ജനങ്ങൾക്കാർക്കും സംശയമുണ്ടായിരുന്നില്ല. അവർ യുവരാജാവിനെ വാത്സല്യത്തോടെ മനസ്സിൽ താലോലിച്ചിരുന്നുവെങ്കിലും കുമാരന്റെ സൗന്ദര്യത്തെ വെല്ലുവാൻ ആരുമുണ്ടായിരുന്നില്ല. കുമാരൻ പിറന്നതിനുശേഷം

**[4丁表]**

ചക്രവർത്തി അവനോടു കാണിക്കുന്ന സ്നേഹം കണ്ട് അവനെ ചക്രവർത്തിയാകുമോയെന്ന ഭയത്തിൽ യുവരാജാവിന്റെ അമ്മയുടെ മനസ്സ് ആകുലപ്പെട്ടു.

ചക്രവർത്തി മറ്റു അന്തഃപുരസ്ത്രീകളെ അവഗണിച്ച് പതിവായി കിരിറ്റ്സുബോയുടെ മുറി സന്ദർശിച്ചതിനാൽ മറ്റു സ്ത്രീകൾക്ക് അവളോട് അസൂയ തോന്നുന്നതിൽ ഒരത്ഭുതവുമില്ല. ചക്രവർത്തിയാണെങ്കിൽ കിരിറ്റ്സുബോയിനെ തന്റെ മുറിയിൽ നിത്യേന വിളിച്ചുവരുത്തി. കിരിറ്റ്സുബോ ചക്രവർത്തിയുടെ മുറിയിലേക്കു പോകുന്ന സമയത്ത് അന്തഃപുരസ്ത്രീകൾ പലവിധത്തിൽ അവളേ ശല്യപ്പെടുത്തി. കിരിറ്റ്സുബോയിനെ മാനം കെടുത്തുവാനായി ചക്രവർത്തിയുടെ മുറിയിലേക്ക് ആനയിക്കുന്ന ദാസിമാർ മനഃപൂർവ്വം അഴുക്കുപുരണ്ടു വസ്ത്രം ധരിച്ചു. ഒരുപ്രാവശ്യം കിരിറ്റ്സുബോ വസിച്ചിരുന്ന കെട്ടിടത്തിൽ നിന്നും ചക്രവർത്തിയുടെ മുറിയിലേക്കു പോകുന്ന വഴിയിലുള്ള വാതിൽ രണ്ടുവശത്തുനിന്നും അന്തഃപുരസ്ത്രീകൾ അടച്ചുപൂട്ടി. അവരിങ്ങനെ കിരിറ്റ്സുബോയിനെ പലവട്ടം ഉപദ്രവിച്ചു.

ഇതെല്ലാം കേട്ട് കുറ്റബോധം തോന്നിയ ചക്രവർത്തി കീഴ്ജാതിയിൽ പെട്ട ഒരു അന്തഃപുരസ്ത്രീയെ അവൾ വസിച്ചിരുന്ന കോര്യോദെൻ എന്ന കെട്ടിടത്തിൽ നിന്നും മറ്റൊരിടത്തേക്കു മാറ്റിപ്പാർപ്പിച്ച്, ആ മുറിയും കിരിറ്റ്സുബോയിന് കൊടുത്തു.

**[4丁裏]**

ഇത് അവൾക്ക് കിരിറ്റ്സുബോയിനോടുള്ള നീരസം ഇരട്ടിയാക്കിയതിൽ ഒരു സംശയവുമില്ല.

കുമാരന് മൂന്ന് വയസ്സ് തികഞ്ഞപ്പോൾ, കിരീടാവകാശിയായ ആദ്യപുത്രന്റെ ചടങ്ങ് ആഘോഷിച്ച അതേ ആഡംബരത്തോടുകൂടി രാജകുമാരന്റെയും 'കാൽച്ചട്ടയണിയൽ' ചടങ്ങ് ആഘോഷിച്ചു. രാജകുമാരന്റെ സൗന്ദര്യവും കൃഷീനതയും അന്തഃപുരസ്ത്രീകളുടെ വെറുപ്പിനെ കീഴ്പെടുത്തി.

അക്കൊല്ലത്തെ വേനൽക്കാലത്ത് കിരിറ്റ്സുബോയ്ക്ക് സുഖമില്ലാതായി. നാട്ടിലേക്കു തിരിച്ചുപോകുവാൻ ശ്രമിച്ചെങ്കിലും ചക്രവർത്തി അനുവാദം

നൽകിയില്ല. ദിനംപ്രതി ആരോഗ്യം മോശമാവുന്നതു കണ്ട കിരിറ്റ്സുബോയുടെ അമ്മ യുവകുമാരനെ കൊട്ടാരത്തിൽ ഏല്പിച്ചു അവളെ നാട്ടിലേക്കു തിരിച്ചുപോകുവാൻ അനുവദിക്കണമെന്ന് കരഞ്ഞുകൊണ്ട് യാജിച്ചു.

തളർന്നു അവശയായി കിടക്കുന്ന അദ്ദേഹത്തിന്റെ പ്രിയതമയെ കണ്ടപ്പോൾ ചക്രവർത്തി അവർ തമ്മിൽ പങ്കിട്ട പഴേ ഓർമകളെ കുറിച്ചും ഭാവിജീവിതത്തെ കുറിച്ച് വാഗ്ദാനങ്ങൾ നൽകിയെങ്കിലും ക്ഷീണിതയായ കിരിറ്റ്സുബോവിന് മറുപടി പറയാൻ ശേഷിയുണ്ടായിരുന്നില്ല.

**[5丁表]**

വേദന കടിച്ചമർത്തിയ മുഖഭാവത്തോടെ അവൾക്ക് ബോധം നഷ്ടപ്പെട്ടു. 'മരണത്തിലേക്കുള്ള യാത്ര നമ്മളൊരുമിച്ച് സഞ്ചരിക്കുമെന്നു എന്നിക്കു വാക്കു തന്നത്തലേ. നീ എന്നെ തനിച്ചാക്കി പോവുകയാണോ' എന്ന് ചക്രവർത്തി അവളോടു ചോദിച്ചു. ചക്രവർത്തിയുടെ ഈ വാക്കുകൾ കേട്ട കിരിറ്റ്സുബോ സന്തോഷഭരിതയായി ഒരു 'വക' കവിത ചൊല്ലി.

ദുഃഖത്താൽ വിടവാങ്ങുന്നു ഞാൻ,  
മുന്നിൽ ഒരുമിച്ചുള്ള സ്വപ്നങ്ങളുമായി.

ചക്രവർത്തി പല്ലക്കു കൊണ്ടുവരാൻ ആളയച്ചു. കിരിറ്റ്സുബോ നാട്ടിലേക്കുമടങ്ങി.

ചക്രവർത്തിയുടെ സങ്കടത്തിനു അതിരുകളില്ലായിരുന്നു. കിരിറ്റ്സുബോയുടെ വിവരമന്വേഷിക്കാൻ അയച്ച ദൂതന്മാർ നിന്നും കിരിറ്റ്സുബോയുടെ മരണത്തെക്കുറിച്ചറിഞ്ഞ ചക്രവർത്തി സ്തബ്ധനായി.

ചക്രവർത്തിക്ക് കുമാരനെ കാണുവാൻ ആഗ്രഹമുണ്ടായിരുന്നുവെങ്കിലും ആചാരമനുസരിച്ചു അവനെ മരണ വീട്ടിലേക്കു അയച്ചു. കൊട്ടാരത്തിലെ സഹായികളും ചക്രവർത്തിയും

**[5丁表]**

നിർത്താതെ കരയുന്നതു കണ്ട് യുവകുമാരനൊന്നും മനസ്സിലായില്ല. ആചാരമനുസരിച്ചു ഒതാഗിയിൽവെച്ച് സംസ്കാരക്രിയകൾ നടത്തി. കിരിറ്റ്സുബോയുടെ അമ്മ തന്റെ മകളുടെകൂടെ ചിതയിൽ ചാടി ഭസ്മമാക്കാൻ ആഗ്രഹിച്ചു. അവൾ കരഞ്ഞുകൊണ്ട് ശവസംസ്കാര ചടങ്ങിൽ പങ്കെടുത്ത സഹയാധികളുടെ പല്ലക്കിൽ കയറി ശവസംസ്കാര ഘോഷയാത്രയിൽ ചേർന്നു.

ചക്രവർത്തി പരേതയായ കിരിറ്റ്സുബോവിന് മൂന്നാം സ്ഥാന പദവി നൽകിയെന്ന് ദൂതൻ അറിയിച്ചു.

ചക്രവർത്തി കിരീടാവകാശിയായ ആദ്യപുത്രനെ കാണുമ്പോഴെല്ലാം കുമാരനെ കുറിച്ചുചോർത്തു. തന്റെ സഹയാധികളെയും വളർത്തമ്മയെയും വഴി അവന്റെ വിവരങ്ങൾ അന്വേഷിച്ചുകൊണ്ടിരുന്നു. ശരത്കാലത്തെ ഒരു തണുത്ത രാത്രിയിൽ,

ചക്രവർത്തി അഭേഹത്തിന്റെ യുഗേ മ്യോബുവെന്ന അന്തഃപുരസ്ത്രീയെ കിരിറ്റ്സുബോയുടെ അമ്മയുടെ വീട്ടിലേക്കയച്ചു.

ചക്രവർത്തിയുടെ കത്തിൽ ഒരു വക കാവ്യമുണ്ടായിരുന്നു.

മിയാഗി പ്രദേശത്തെ കാറ്റിൽ അലയുന്ന മഞ്ഞുതുള്ളികളുടെ ശ്രുതിയിൽ ഞാൻ കിരിറ്റ്സുബോയുടെ കുഞ്ഞിനെ ഓർക്കുന്നു.

യുഗേ മ്യോബു ഒരു കവിത വായിച്ചു.

**[6丁表]**

ചീവീടിനെ പോലെ തുടർച്ചയായി കരഞ്ഞിട്ടും മായാത്ത രാത്രിയുടെ ഇരുട്ടിൽ സദാ കണ്ണീർ ഒഴുകി.

അമ്മ മറുപടിയായി ഒരു വക കാവ്യം ചൊല്ലി.

ഈ കുടിലിന് ചുറ്റും തേങ്ങിക്കരയുന്ന ചീവീടിന്റെ ശബ്ദം  
മഞ്ഞുതുള്ളിപ്പോലെ വിരുന്നു വന്ന താങ്ങളുടെ വാക്കുകൾ  
എന്നിൽ സങ്കടം നിറച്ചു.

ചക്രവർത്തിക്ക് സമ്മാനിക്കുവാനായി ഒന്നും ഇല്ലാത്തതിനാൽ മകളുടെ  
കിമോണയും ആഭരണങ്ങളും താൻ എഴുതിയ കത്തിന്റെകൂടെ  
ചക്രവർത്തിക്കായി യുഗേ മ്യോബുവിന് കൊടുത്തു.

രാത്രി ഏറെ ചെന്നിട്ടും ഉറക്കം വരാത്ത ചക്രവർത്തി പുനോട്ടത്തിലെ ഒരു  
പുഷ്പത്തെ നോക്കി തന്റെ അന്തഃപുരസ്ത്രീകളുടെകൂടെ വർത്തമാനം  
പറഞ്ഞു.

കിരിറ്റ്സുബോയുടെ അമ്മ ചക്രവർത്തിയുടെ കത്തിന് മറുപടിയായി ഒരു  
കവിതകൂടി എഴുതിയിരുന്നു.

തണൽ നൽകിയ ആ മരം വാടി മരിച്ചു  
അതിന് ചുവട്ടിൽ വളരുന്ന തളിരിനെ കുറിപ്പോർത്തു  
ചിന്താവിഷ്ടയായി കഴിയുന്നു ഞാൻ

[6丁裏]

യുഗേ മ്യോബു കിരിറ്റ്സുബോയുടെ അമ്മ തന്നെ ഏല്പിച്ച സാധനങ്ങൾ  
ചക്രവർത്തിക്ക് കാണിച്ചു കൊടുത്തു. അമ്മയുടെയും കുമാരന്റെയും  
വിവരങ്ങൾ കേട്ട ചക്രവർത്തി ഒരു കാവ്യം ചൊല്ലി.

ഒരു മാന്ദ്രികനുമില്ലേ  
അവളുടെ ആത്മാവെവിടെയുണ്ടെന്ന് പറഞ്ഞുതരുവാൻ

യുവരാജാവിന്റെ അമ്മ കോക്കിദെനെ ചക്രവർത്തി കുറേകാലം  
അദ്ദേഹത്തിന്റെ മുറിയിലേക്കു വിളിച്ചില്ല. ഒരു നിലാവുള്ള രാത്രിയിൽ  
കോക്കിദെൻ തന്റെ പരിചാരികകളുടെകൂടെ പാട്ടുകൾ പാടി . ഈ കാഴ്ച  
മന്ത്രിമാർക്കും ദാസിമാർക്കും ഇഷ്ടപ്പെട്ടില്ല.

കിരിറ്റ്സുബോയുടെ അമ്മയെ കുറിച്ച് ചിന്താകുലനായ ചക്രവർത്തി ഒരു വക കാവ്യം രചിച്ചു.

ഇങ്ങ് രാജധാനിയിലും കണ്ണൂരീർ നിറഞ്ഞു തെളിച്ചമില്ലാത്ത ചന്ദ്രൻ  
അങ്ങ് ദൂരെ ചെറിയ കുടിലിൽ താമസിക്കുന്ന താങ്ങളെക്കുറിച്ചു  
ചിന്താകുലനായി

കുറച്ചു കാലത്തിനുശേഷം കുമാരൻ കൊട്ടാരത്തിലേക്കു മടങ്ങിവന്നു. സുന്ദരനായ ഒരു കുമാരനായിമാറിയ ബാലനെ ദൈവന്മാർ തട്ടിക്കൊണ്ടുപോകുമോ എന്ന് ചിലർ പരിഭ്രമിച്ചു. അടുത്ത വസന്തകാലത്ത് ചക്രവർത്തി തന്റെ ആദ്യപുത്രനെ യുവരാജാവായി പ്രഖ്യാപിച്ചു.

**[7丁表]**

കുമാരനെ അദ്ദേഹത്തിന്റെ പിൻഗാമിയായി നിയമിക്കാനായിരുന്നു ആഗ്രഹമെങ്കിലും കൊട്ടാരവാസികളും പ്രജകളും അതിന് തയ്യാറാവുകയില്ലെന്നു അറിയാമായിരുന്നതുകൊണ്ടു അദ്ദേഹം ഏലാം മനസ്സിൽ അടക്കിവെച്ചു.

കിരിറ്റ്സുബോയുടെ അമ്മ ദുഃഖം സഹിക്കവെയ്യാതെ ആവാം മരണമടഞ്ഞു. ചക്രവർത്തി വീണ്ടും ദുഃഖിതനായി.

കുമാരന് വയസ്സ് ഏഴ് തികഞ്ഞപ്പോൾ 'വിദ്യാരംഭ' ചടങ്ങ് നടന്നു. പാണ്ഡിത്യത്തിന് പുറമെ ഓടുകുഴൽ, തന്ദ്രി വാദ്യമായ കൊതൊ എന്നിങ്ങനെ പല വാദ്യോപകരണങ്ങളിൽ വിദഗ്ദ്ധനായി. യുവകുമാരന്റെ കഴിവ് കൊട്ടാരവാസികളെ അത്ഭുതപ്പെടുത്തി.

ഇക്കാലത്ത് കൊറിയയിൽനിന്നും കൊട്ടാരത്തിലെത്തിയ പ്രവാചകൻ യുവകുമാരന്റെ പാണ്ഡിത്യവും സൗന്ദര്യത്തെ കുറിച്ച് പ്രശംസിച്ചു സംസാരിച്ചു. 'ഹികാരു (പ്രകാശിക്കുന്ന) പ്രഭു' എന്ന പേരും കുറെ സമ്മാനങ്ങളും നൽകി.

ദുഃഖത്തോടെ ചക്രവർത്തി കുമാരന്റെ രാജകീയ പദവി എടുത്തുമാറ്റി മിനാമോതോ അഥവാ ഗെജ്ഞി എന്ന ഒരു സാധാരണ കുലനാമം നൽകി.

**[7丁裏]**

(ചിത്രം 2) ഹികാരു ഗെജ്ഞിയ്ക്ക് ഏഴു വയസ്സുള്ളപ്പോൾ കൊറിയയിൽ നിന്നും വന്ന പ്രവാചകൻ വിദേശാതിഥികളുടെ കൊട്ടാരത്തിൽവെച്ച് ഭാവിപ്രവചനം നടത്തുന്ന രംഗം.

**[8丁表]**

കാലങ്ങൾ കടന്നുപോയിട്ടും കിരിറ്റ്സുബോയുടെ ഓർമ്മകൾ തന്നെ വേട്ടയാടി. ചക്രവർത്തി ശോകാകുല ചിത്തനായി ഇരുന്നു. അങ്ങനെയിരിക്കെ കിരിറ്റ്സുബോയുടെ രൂപസാമ്യമുള്ള മുൻചക്രവർത്തിയുടെ നാലാമത്തെ പുത്രിയായ ഫുജിറ്റ്സുബോയെക്കുറിച്ചു ചക്രവർത്തി നൈഷിനോസ്കെ എന്ന അന്തഃപുരസ്ത്രീയിൽ നിന്നുമറിഞ്ഞു.

മരിച്ചുപോയ കിരിറ്റ്സുബോയുടെ രൂപസാമ്യത, പോരാത്തതിന് മേൽജാതിയും. സ്വാഭാവികമായി ചക്രവർത്തിക്ക് അവളോട് ഇഷ്ടം തോന്നിത്തുടങ്ങി.

ചക്രവർത്തിയുടെ കൂടെ എപ്പോഴും ഉണ്ടായിരുന്ന ഹികാരു ഗെജ്ഞിയും തന്റെ പിതാവിന്റെകൂടെ ഫുജിറ്റ്സുബോയെന്നെ കാണുവാൻ പോയി.

ചക്രവർത്തി ഇരുവരെയും തുല്യമായി സ്നേഹിച്ചിരുന്നതിനാൽ, ഗെജ്ഞിയുടെ പ്രകാശിക്കുന്ന പ്രഭു എന്ന പേരുപോലെ ഫുജിറ്റ്സുബോയെന്നെ സൂര്യനെപ്പോലെ പ്രകാശിക്കുന്ന പ്രഭി എന്ന ഓമനപ്പേര് നൽകി.

പന്ത്രണ്ടുവയസ്സുതികഞ്ഞ ഗെജ്ഞിയുടെ 'ഗെൻപുക്യു' എന്നറിയപ്പെടുന്ന പ്രായപൂർത്തി ചടങ്ങ് നടന്നു. ഇതേസമയം ഇടതുപക്ഷ മന്ത്രിയുടെയും രാജകുമാരിയുടെയും മകളായ ആവോയിമായുള്ള കല്യാണവും ഉറപ്പിച്ചു.

**[8丁裏]**

(ചിത്രം 3) കൊട്ടാരത്തിൽ പന്ത്രണ്ടുവയസ്സുതികഞ്ഞ ഗെജ്ഞിയുടെ പ്രായപൂർത്തി ആഘോഷങ്ങൾ നടക്കുന്ന രംഗം.

**[9T表]**

കെട്ടിടങ്ങളുടെ മൂല്യനിർണ്ണയം കൈമാറ്റം ചെയ്യുന്നതിനുള്ള ചട്ടങ്ങൾ  
ഈ രണ്ടുപേരുടെ സന്നദ്ധതയോടെ എക്സിക്യൂട്ടീവ് കമ്മിറ്റിയിൽനിന്നും

ചക്രവർത്തിയുടെ ഈ വാക്കുകൾക്ക് മറുപടിയായി വലതുപക്ഷ മന്ത്രി

ഇങ്ങനെയൊരു വക കാമ്പും ചെയ്തില്ല.

ഗെജ്ഞിയുടെ മൂല്യനിർണ്ണയം ഞാൻ എന്റെ പ്രദേശം കോർത്തിണക്കി  
മണ്ണാതിരിക്കട്ടെ കേൾക്കുക പട്ടണത്തിന്റെ വയലറ്റ് നിറം പോലെ  
ഈ ബന്ധവും

വലതു കോട്ടാര കുതിരലായത്തിലെ ഒരു കുതിരയും കോട്ടാരത്തിന്റെ  
അന്തരംഗകാര്യസ്ഥൻ ഒരു പരുന്തിനെയും വലതുപക്ഷ മന്ത്രിക്ക് സമ്മാനിച്ചു. കോട്ടാര  
പടിക്കെട്ടിൽ പ്രഭുക്കന്മാരും യുവരാജാക്കന്മാരും പദവിയനുസരിച്ച് വരിവരിയായി  
ചക്രവർത്തിയിൽ നിന്നും അവരവരുടെ സമ്മാനങ്ങൾ ഏറ്റുവാങ്ങി.

അന്നു രാത്രി ഹികാരൂ ഗെജ്ഞി വലതുപക്ഷ മന്ത്രിയുടെ വീട്ടിൽ ചെന്നു. ഗെജ്ഞിക്ക്  
പന്ത്രണ്ടു വയസ്സ്, ആവോഴിക്ക് പതിനാറും.

വലതുപക്ഷ മന്ത്രിയുടെ കോട്ടാര ഉപകാര്യസ്ഥനായ മകന്റെയും ഇടതുപക്ഷ  
മന്ത്രിയുടെ നാലാമത്തെ മകളുമായുള്ള വിവാഹം ഉറപ്പിച്ചു.

ചക്രവർത്തി ഇടക്കിടെ ഗെജ്ഞിയെ തന്റെ അരികിലേക്കു  
വിളിച്ചുവരുത്തിയതിനാൽ

**[9T裏]**

വലതുപക്ഷ മന്ത്രിയുടെ വീട്ടിൽ വിശ്രമിക്കാൻ സമയം കിട്ടിയില്ല. എന്നാൽ  
ഗെജ്ഞിയുടെ പ്രദേശത്തിൽ സ്ഥാനം പിടിച്ചുപറ്റിയത് തന്റെ പത്നിയായ

ആവോയി ആയിരുന്നില്ല. ആ സ്ഥാനത്ത് ഫുജിറ്റ്സുബോ ആയിരുന്നു. അവളെ പോലെ ഒരു സ്ത്രീയെ വിവാഹം കഴിക്കാൻ ഗെജ്ഞി ആഗ്രഹിച്ചു.

പ്രായപൂർത്തിയായ ഗെജ്ഞിക്ക് പണ്ടത്തെപ്പോലെ ഫുജി റ്റ്സുബോയുടെ മുറിയിൽ പ്രവേശിക്കാൻ അനുവാദമില്ലായിരുന്നു.

കൊട്ടാരത്തിൽ സംഗീതക്കച്ചേരി നടക്കുമ്പോൾ അവളുടെ നേരിയ ശബ്ദത്തിൽ ആശ്വാസം തേടി ഗെജ്ഞി ഓടുകുഴലിലൂടെയും കൊതോയിലൂടെയും തന്റെ മനോവികാരം അവളെ അറിയിച്ചു. കഴിയുന്നത്രയും നേരം ഗെജ്ഞി കൊട്ടാരത്തിൽ ചിലവഴിച്ചു.



## गेंजि की कहानी (संक्षिप्त)

Tomoko Kikuchi

"गेंजि की कहानी" का जन्म

जापान के सम्राट मुराकामि की दसवीं राजकुमारी सेन्शिनाइशिन्नो (दाइसइइन) ने सम्राट इचिजोइन की रानी फुजिवरानो शोशि (जोतोमोइन) से पूछा, "क्या आपके पास कोई नई कहानी है ?" रानी शोशि ने मुरासाकिशिकिबु को बुलाकर बताया, "आप हमारे लिए एक नई कहानी लिखने का प्रयास करें"

मुरासाकिशिकिबु इशियामादेरा मंदिर गई और वहाँ ठहर कर नई कहानी के लिए प्रार्थना की । 15 अगस्त की पूर्णिमा की रात को बिवाको सरोवर में उसने चंद्रमा की परछाई देखी । इतने में उसके मन में कहानी की कल्पना उमड़ने लगी और उसने प्रथम खंड "सुमा" को लिखना शुरू किया । बौद्ध धर्म की टीयंटाइ शाखा में 60 सूत्र बताए जाते हैं, उसी के आधार पर गेंजि की कहानी के भी 60 खंड लिखे गए । ( वर्तमान की "गेंजि की कहानी" के सिर्फ 54 खंड पाए जाते हैं ) बौद्ध धर्म में चार सत्य का सिद्धान्त बताया जाता है कि "अस्तित्व, शून्य, अस्तित्व एवं शून्य और गैर अस्तित्व एवं गैर शून्य" । उनके आधार पर "गेंजि की कहानी" के खंडों का नाम रखा गया । खंडों के शीर्षक उन चार तरीकों के आधार पर रखे गए । पहले तरीके में शीर्षक कहानी के आधार पर रखे गए, दूसरे तरीके में शीर्षक कविता के आधार पर रखे गए, तीसरे तरीके में शीर्षक कहानी और कविता दोनों के आधार पर रखे गए और चौथे तरीके में शीर्षक का कहानी और कविता से कोई संबंध नहीं है । मुरासाकिशिकिबु पहले "तोशिकिबु" नाम से जानी जाती थी । उसने गेंजि की कहानी में रानी "मुरासाकिनोउए" की सुंदर अभिव्यक्ति की, इसलिए उसे बाद में मुरासाकिशिकिबु के नाम से बुलाया जाने लगा । ऐसी किंवदंती है कि "मुरासाकिशिकिबु" अवलोकितेश्वर का अवतार हैं । उसने पुरोहित दान्नाइनसोजो से टीयंटाइ के सिद्धान्त पर आधारित प्रबोधन की दीक्षा ली ।

मुरासाकिशिकिबु का वंशवृक्ष

त्सुत्सुमिचूनगोनकनेसुके - इनाबानोकामिकोरेमासा - एचिजेननोकमितामेतोकि - पुत्री (मुरासाकिशिकिबु)

माता का नाम केंशि है जो सेत्सुनोकमितामेनोबु की पुत्री है  
टिप्पणी ; उपर्युक्त वंश वृक्ष के कुछ अंश प्रचलित मान्यता से भिन्न हो सकते हैं  
। "गेंजि की कहानी" की टीका "कोगेत्सुशो" में उपर्युक्त वंश वृक्ष का लगभग  
समान रूप पाया जाता है ।

[小見出し 1]

(करित्सुबो)

प्राचीन काल की बात है, उस समय कलि में संझली रानी, छोटी रानी आदि कई पदों की रानियाँ एक साथ रहती थीं । सम्राट को एक रानी से बहुत प्यार हुआ, पर वह बहुत ऊंचे कुल की नहीं थी । ( यह कहानी सम्राट दाइगो के युग की है और उस रानी का नाम छोटी रानी करित्सुबो है ) कलि में रानियों के कई कमरे थे और प्रत्येक कमरे का नाम भी था । रानियों को अपने कमरे के नाम से बुलाया जाता था । एक रानी के कमरे का नाम नाशित्सुबो था और उसका दूसरा नाम शोयोशा था । ठीक उसी प्रकार, करित्सुबो नामक कमरे का दूसरा नाम शगिइशा था, फुजित्सुबो नामक कमरे का दूसरा नाम हगियोशा था, उमेत्सुबो नामक कमरे का दूसरा नाम ग्योकाशा था और कमनारनित्सुबो नामक कमरे का दूसरा नाम शूहोशा था । उस समय का सम्राट करित्सुबो नामक कमरे में रहने वाली छोटी रानी से बहुत प्यार करते थे, इसलिए उनको "करित्सुबो का सम्राट" नाम भी दिया गया । करित्सुबो की छोटी रानी हमेशा सम्राट के साथ रहती थी, इसलिए अन्य रानियाँ उससे बहुत खीझती थी और ईर्ष्या से जल रही थी,

[小見出し 2]

शायद उसी के कारण होगा कि किरित्सुबो की छोटी रानी कमजोर होने लगी । ( काफी बीमार हो गई ) रानी घबरा गई और अक्सर मायके में चली जाने लगी । सम्राट किरित्सुबो की छोटी रानी को और भी चाहने लगे । किले में लोग सम्राट के व्यवहार की निंदा करने लगे, परंतु वे प्रेम को नहीं रोक सके ।

[小見出し 3]

लोग उस घटना की याद कर बहुत चिंता करने लगे कि किसी जमाने में चीन में

सम्राट गेंसु (कुंजुन) और रानी युकिहि (यन गुडुफै) के प्रेम के कारण समाज बहुत बर्बाद हु गयल थल । इसललल लुगुुं कु सुंदेह थल कु कलरलत्सुबु भी रानी युकिहि कु तरह सम्राट कु आकर्षलत कर सकतल है ।

[लुललुलु 4]

कलरलत्सुबु कु लुठुल रानी के पलतल कु सुवर्गवलस हु कुकु थल । उनकु मलतल कुलबधु थल और पारंपारलक वलचलर कु थल, इसललल अलने कु अन्य रनलतुं से कुम न दलखने के ललल हमेशल खयलल रखतल थल । परंतु कुभी कुभी उनकु बडु कुल अकेलल नलपटलनल पडुतल है, तु कुकुई आशुरय न हुने के कारण वह अकेललपन महसूस कर उदलस हु कुतल थल ।

[लुललुलु 5]

कलरलत्सुबु कु सम्राट और कलरलत्सुबु कु लुठुल रानी के पूर्व कुनुम कु गहरल संबुंध रहल हुगल, दुनुुं के बीच बहुत सुंदर रलकुमार कु कुनुम हुआ और उसे हलकरुगुंकु (हलकरुनुकुमल) कु नलम दलल कुल । उससे पहले उपमहलतुरी कु संकुलुल रानी के यहुँ प्रथम रलकुमार कु कुनुम हुआ थल, इसललल उनुहुं कु युवरलकु मलनल कुतल थल और लुग उनकु सनुनलन करते थे । फलर भी हलकरुगुंकु के सुनुंदरुतु के सलमने उनकु लुवल भी कुषलण हु कुतल थल ।

[लुललुलु 6]

कुब से हलकरुगुंकु कु कुनुम हुआ, तुब से सम्राट उस पर वलशेष धुयलन रखने लगे । प्रथम रलकुमार कु मलतल बेचुन हुने लगी कु कुहुं हलकरुगुंकु कु युवरलकु कु पद न दलल कुल ।

[लुललुलु 8]

अनुय रनलतुं ईशुरुतुल से कुलतल थल, कुतुंकु उनके कुमरुुं के सलमने से नलकलकर सम्राट केवल कलरलत्सुबु कु लुठुल रानी के पास बलर बलर कुतल थे । सम्राट भी कलरलत्सुबु कु लुठुल रानी कु बलर बलर अलने पास बुललते थे । कुले में उकुललशलशल और वलतलदुनुु नलमक रलसुते से नलकल कर कलरलत्सुबु कु लुठुल रानी सम्राट के पास कुतल थल, उस रलसुते पर कुई अपुरलतु कुल कुल कुल लगे । वह हद से बलहर

हो गया जब परिचारिकाएँ रानी को छोड़ने और लेने के लिए उसी रास्ते पर आती थीं तो उनके कपड़ों का किनारा बेहद खराब हो जाता था । ऐसा भी हुआ कि जब किरित्सुबो की छोटी रानी को जिस रास्ते से निकालना था, उसी रास्ते के आगे और पीछे वाले दरवाजों को किसी ने बंद करवाया और रानी को उसी रास्ते पर काफी समय तक खड़ी रहना पड़ा । इतना ही नहीं, अन्य अनेक तरीकों से उनको परेशान किया जाता था ।

[小見出し 9]

यह देख कर सम्राट को किरित्सुबो की छोटी रानी पर और भी दया आई । गोर्योदेन नामक जगह में एक नीचे कुल की रानी का कमरा था । सम्राट ने उस रानी के लिए दूसरे जगह पर कमरा दिलवाया और उस कमरे को किरित्सुबो की छोटी रानी को दे दिया । अब किरित्सुबो की छोटी रानी को दो कमरे मिल गए । उस रानी को बहुत बुरा लगा और किरित्सुबो की छोटी रानी से बड़ी घृणा हुई ।

[小見出し 10]

जब हिकारुगेंजि की उम्र 3 साल की हो गई, तब उनके हाकामागि-संस्कार का आयोजन हुआ । [ "हाकामागि" पाजामा जैसा जापानी पोशाक है, जिसे इस संस्कार में लड़के को पहली बार पहनवाया जाता है और इस संस्कार के साथ लड़का किशोरावस्था से युवावस्था में प्रवेश करता है ] इस से पहले प्रथम राजकुमार के लिए उस संस्कार का बड़ा आयोजन हुआ था, परंतु आज का आयोजन उससे भी कम नहीं था । हिकारुगेंजि का अनोखा रूप-सौन्दर्य और अनन्य व्यक्तित्व था, ऐसी एक भी रानी नहीं थी जो उसकी बुराई कर सके ।

[小見出し 11]

उस साल की गर्मी के मौसम में मिसोकुंदोकोरो यानि हिकारुगेंजि की माता (किरित्सुबो की छोटी रानी) बीमार हो गई और उसने मायके पर जाना चाहा । किरित्सुबो की छोटी रानी अक्सर कमजोर रहती थी, इसलिए सम्राट ने उसका खास ध्यान नहीं दिया और मायके जाने की अनुमति नहीं दी । धीरे धीरे उसकी हालत गंभीर होने लगी और बहुत कमजोर हो गई । किरित्सुबो की छोटी रानी

की माता ने रो रो कर सम्राट से अनुरोध किया कि किरित्सुबो की छोटी रानी (मिसोकुंदोकोरो) को मायके पर भेज दें और हिकारुगेजि को किले में अपने पास रखें । सम्राट ने अनुमति दी

[小見出し 12]

और उनको अचानक यह पता चला कि उनकी प्यारी किरित्सुबो की छोटी रानी बहुत कमजोर हो चुकी है, बेहोश सी पड़ी हुई है । वे पिछले दिनों और भविष्य के बारे में रानी से बात करने लगे और तरह तरह के वादे भी किए, परंतु किरित्सुबो की छोटी रानी की हालत इतनी खराब हो गई कि ठीक से उत्तर भी नहीं दे पा रही । उसका चेहरा असहनीय दर्द को बता रहा था और बेहोश हो रही थी । सम्राट ने कहा, "तुमने वादा किया था कि हम दोनों यमलोक की यात्रा साथ करेंगे, तुम मुझे छोड़कर नहीं जा सकती ।"

[小見出し 13]

यह सुनकर किरित्सुबो की छोटी रानी को बहुत आनंद मिला और उसने एक कविता लिखी ।

सम्राट की अनुमति से किरित्सुबो की छोटी रानी गाड़ी पर चढ़ कर मायके पर वापस चली गई ।

[小見出し 14]

सम्राट का कलेजा कट रहा था । उन्होंने एक दूत को किरित्सुबो की छोटी रानी के साथ भेजा । वह दूत वापस भी नहीं आया, तब सम्राट को यह खबर मिली कि आधी रात को किरित्सुबो की छोटी रानी की मौत हुई । सम्राट एकदम घबरा कर विचलित हो गए ।

[小見出し 15]

सम्राट को हिकारुगेजि से मिलने की बहुत इच्छा हुई, परंतु उसको अपनी माता के घर भिजवाने की जरूरत थी, क्योंकि इस सामय उसका किले में रहना अशुभ माना जाता था । हिकारुगेजि को कुछ समझ में नहीं आया और असुविधा महसूस

हुई कि सारी परिचारिकाएं ज़ोर से रो रही थी और सम्राट का भी आंसुओं का तार बह रहा था ।

[小見出し 16]

परंपरानुसार अतागो नामक जगह पर उसका दाह संस्कार किया गया । किरित्सुबो की छोटी रानी की माता ने अपनी बेटी के साथ वहीं अपने को भी खत्म करना चाहा । पर वह रोते रोते किसी तरह परिचारिकाओं के साथ गाड़ी में बैठ गई और रवाना हुई ।

[小見出し 18]

सम्राट ने वहाँ दूत भेजा और किरित्सुबो की छोटी रानी को "संमि नो कुराई" नामक पद देकर सम्मानित किया ।

[小見出し 21]

जब भी सम्राट प्रथम राजकुमार से मिलते हैं, तो उनको हिकारुगेंजि की याद आती है । वे हिकारुगेंजि की खबर लेने के लिए परिचारिकाओं और आयाओं को वहाँ बार बार भेजते हैं । एक दिन शाम को हवा तेज चल रही थी और मौसम ज़रा ठंडा था, सम्राट ने युगेइनोम्योबु नामक परिचारिका को किरित्सुबो की छोटी रानी की माता के पास भेजा ।

[小見出し 26]

सम्राट के पत्र में एक कविता थी ।

[小見出し 31]

किरित्सुबो की छोटी रानी की माता से मिल कर युगेइनोम्योबु परिचारिका ने एक कविता लिखी ।

युगेइनोम्योबु परिचारिका की कविता का उत्तर देते हुए किरित्सुबो की छोटी रानी की माता (नानी) ने एक कविता लिखी ।



[小見出し 43]

कुछ महीने बाद हिकारुगेँजि किले में वापस आए । वह इतना सुंदर हो गया और लोगों को बहुत चिंता होने लगी कि कहीं ईश्वर उसे अपने पास न ले जाए । अगले साल के वसंत में प्रथम राजकुमार को युवराज के रूप में निर्धारित किया गया । सम्राट मन में चाहते थे कि हिकारुगेँजि ही युवराज बन जाए, लेकिन उन्हें यह भी पता था कि दुनिया नहीं मानेगी, इसलिए उन्होंने अपनी इच्छा का किसी को भी पता होने नहीं दिया ।

[小見出し 44]

इतने में किरित्सुबो की छोटी रानी की माता (नानी) अपनी बेटी के पास चली गई, शायद वे जीवन से विमुख हो गई थी । सम्राट को बहुत दुख हुआ ।

[小見出し 45]

अब हिकारुगेँजि सात साल का हो गया और उसके लिए पाठ आरंभ करने का संस्कार किया गया ।

[小見出し 46]

वह न केवल पढ़ाई में ही अच्छा था, बल्कि कोतो, बांसुरी आदि जापानी शास्त्रीय वाद्यों को भी बहुत अच्छा बजाता था, जिसे देख कर किले के लोग हैरान हो जाते थे ।

[小見出し 47]

एक दिन कोरिया से ज्योतिषी आया ।

[小見出し 50]

उसने हिकारुगेँजि की प्रतिभा और सौन्दर्य की बहुत प्रशंसा की और उसे "हिकारुकिमि" का नाम देकर कई उपहारों की भेंट की । सम्राट हिकारुगेँजि को राजपरिवार से अलग नहीं करना चाहते थे, परंतु करना ज़रूरी हो गई और मुसीबत में उन्होंने उसे गेंजि का कुलनाम देकर अनुचर के रूप में अपने पास रखने का तय किया ।

किले के स्वागत कक्ष में कोरिया का ज्योतिषी सात साल के हिकारुगेजि को देखता है ।

[小見出し 51]

कई साल बीत गए, परंतु सम्राट किरित्सुबो की छोटी रानी (मिसोकुंदोकोरो) को बिलकुल नहीं भूल सके और बहुत उदास रहते थे । नाइशिनोसुके नामक परिचारिका ने सम्राट को बताया कि पूर्व सम्राट की चौथी रानी बहुत सुंदर है । ( उस रानी का नाम फुजित्सुबो है )

[小見出し 52]

वह ठीक किरित्सुबो की छोटी रानी (मिसोकुंदोकोरो) जैसी थी

[小見出し 55]

और ऊंचे कुल की थी । धीरे धीरे सम्राट फुजित्सुबो से आकर्षित होने लगे ।

[小見出し 56]

हिकारुगेजि हमेशा सम्राट के साथ रहता था और फुजित्सुबो के पास भी उनके साथ जाया करता था ।

[小見出し 59]

सम्राट को हिकारुगेजि और फुजित्सुबो दोनों से प्यार था, इसलिए जैसे वे हिकारुगेजि को "राजकुमार प्रियदर्शन" नाम से बुलाते थे, वैसे ही फुजित्सुबो को "राजकुमारी प्रियदर्शिनी" नाम से बुलाने लगे ।

[小見出し 60]

बारह साल की उम्र में हिकारुगेजि का "गंपुकु" हुआ जो वयस्क होने का संस्कार है

[小見出し 63]

और विवाह के लिए एक राजकुमारी चुनी गई । उसके पिता महामंत्री थे जो "हिकिइरे" यानि ताज पहनवाने का महत्वपूर्ण कर्मकांड करने वाले थे और माता राजमहिला थी । उस रानी का नाम आओइनोउए था ।

किले में बारह साल के हिकारुगेँजि का गेंपुकु नामक संस्कार किया जा रहा है ।

[小見出し 65]

सम्राट ने ऐसी कविता लिखी ।

महामंत्री ने उत्तर देते हुए कविता लिखी ।

[小見出し 66]

सामार्यो नामक सरकारी दफ्तर में घोड़े की देखभाल की जाती थी, वहाँ से एक घोड़ा महामंत्री को भेंट किया गया । कुरोदोदोकोरो नामक सरकारी दफ्तर में बाज का इंतजाम किया जाता था, वहाँ से एक बाज उन्हें दिया गया । इस शुभ अवसर पर किले की सीड़ियों पर अभिजात लोग और कई राजकुंअर खड़े हो जाते थे और सम्राट सभी को अपने पद के अनुसार विभिन्न भेंट देते रहे ।

[小見出し 67]

उस रात को हिकारुगेँजि महामंत्री के घर गया । हिकारुगेँजि बारह साल का था और आओइनोउए सोलह साल की थी ।

[小見出し 69]

महामंत्री के पुत्र कुरोदोनोशोशो के विवाह के लिए उपमहामंत्री की चौथी राजकुमारी चुनी गई ।

[小見出し 70]

सम्राट ने हिकारुगेँजि को हमेशा अपने पास रखना चाहा, इसलिए हिकारुगेँजि को महामंत्री के घर पर ठहरने के लिए ज्यादा समय नहीं मिल रहा था । हिकारुगेँजि का फुजित्सुबो से खास आकर्षण था इसलिए वह फुजित्सुबो जैसी रानी से विवाह

करना चाहता था । लेकिन उसको वैसी रानी कहीं नहीं दिख रही थी, आओइनोउए (ओतोनोनोकिमि) से भी ज्यादा आकर्षित नहीं हो रहा था ।

[小見出し 71]

जब छोटा था तब वह फुजित्सुबो के पदरे के अंदर आ सकता था, परंतु अब बड़ा हो गया, ऐसा करना मना था । संगीत समरोह में दूर बैठी हुई फुजित्सुबो के लिए वह कोतो वाद्य और बांसुरी बजाता है और उनकी हल्की सी आवाज सुनने का प्रयास करता है । इस प्रकार हिकारुगेंजि का समय अकसर किले में ही बीत जाता था ।



## گنجی کی کہانی

Asuka Murakami

2

ہزار سال سے زیادہ پرانی بات ہے، جاپان کے باسٹھویں شہنشاہ «موراکامی» کی دسویں شہزادی «نوبوکو» نے چونٹھویں شہنشاہ «ایچی جو» کی ملکہ «آکیکو» سے فرمائش کی کہ کیا کوئی نئی کہانی نہیں ہے؟ ملکہ نے اپنی استانی «موراساکی شیکیبو» کو بلا کر کہا کہ کسی نہ کسی طرح نئی کہانی تصنیف کر کے لے آؤ۔ «موراساکی شیکیبو» نے «ایشی یاما» مندر میں گوشہ نشینی کرتے ہوئے دعا کی کہ مجھ پر نئی کہانی نازل ہو جائے۔ اگست کی چودھویں رات تھی۔ جب اس نے «بی وا» جھیل کی سطح پر چمکتے چاند کا عکس دیکھا تو اس کے ذہن میں کہانی کے مناظر ابھر آئے اور بارہواں باب «سوما» سے کہانی لکھنا شروع کی۔

اس کہانی پر بدھ مت کے «ٹینڈانی» فرقے کا بڑا اثر ہے۔ کہا جاتا ہے کہ اس فرقے کی مقدس کتاب ساٹھ ابواب پر مشتمل ہے لہذا «موراساکی شیکیبو» نے «گنجی کی کہانی» بھی ساٹھ ابواب میں لکھی تھی۔ لیکن موجودہ کہانی صرف چوں ابواب کی ہے۔ اس کہانی کا موضوع بھی بدھ مت کے چار حقائق سے لیا گیا، یعنی اس دنیا میں زندہ رہنے کا کوئی مطلب بھی ہے یا نہیں اور اس کا جواب ہاں بھی ہو سکتا ہے اور نہ بھی۔ باب کا نام پہلے تو کہانی کے متن سے، دوسرے نظم سے، تیسرے متن و نظم سے اور چوتھے کہیں اور جگہ سے لیا گیا۔

در اصل مصنفہ «تو نو شیکیبو» کہلاتی تھی لیکن اس نے اس کہانی میں «گنجی» کی بیوی «موراساکی» کے بارے میں اتنے شاندار انداز میں لکھا کہ لوگ اسے «موراساکی شیکیبو» پکارنے لگے۔ یہ روایت بھی ہے کہ «موراساکی شیکیبو» انسان نہیں بلکہ رحم و کرم کی دیوی کا اوتار ہے۔ «ٹینڈانی» فرقے کے نامور پروبت «کاکاؤن» نے اسے اپنی شاگرد بنا کر «ٹینڈانی» فرقے کے عقیدے سے روشناس کرایا۔

ر» موراساکی شیکیبو» کا سلسلہ نسب

و» تسو تسومی چونگون» یعنی درمیانی درجے کا کونسلر «کانے سوکے» --- «ایناہا» کا ضلع دار «کورے ماسا ---»

» «ایچی زین» کا ضلع دار «تامے توکی» --- «موراساکی شیکیبو»

اس کی ماں «سیٹسو» کے ضلع دار «تامے نوبو» کی بیٹی «کاتاکو» ہے۔

اس سلسلہ نسب میں مختلف خیالات بھی ہیں لیکن اس جیسا شجرہ نسب «گنجی کی کہانی» کی شرح «کوگے تسو شو» میں ملتا ہے۔

3

(تصویر ۱) اگست کی چودھویں رات کو "ایشی یاما" مندر میں "موراساکی شیکیبو" نے "گنجی کی کہانی" لکھنا شروع کی۔

4

کس شہنشاہ کا زمانہ تھا، شاہی محل میں بہت سی رائیاں رہتی تھیں۔ ان میں سے ایک، جس کا عہدہ کچھ خاص بلند نہ تھا، شہنشاہ کی منظور نظر بن گئی۔ (یہ زمانہ شہنشاہ «ڈائیگو» کا تھا اور یہ منظور نظر رانی «کیریتسویو» تھی۔)

شاہی محل کے اندر رانیوں کی کئی قیام گاہیں تھیں اور ہر قیام گاہ کا الگ الگ نام تھا جیسے «ناشی تسویو»، «کیری تسویو»، «فوجی تسویو» وغیرہ۔ اور رانیوں کو بھی اسی قیام گاہ کے نام سے پکارا جاتا تھا جہاں وہ مقیم ہیں۔ چونکہ یہ شہنشاہ «کیری تسویو» میں رہنے والی رانی سے بہت پیار کرتا تھا اس لیے لوگ اسے شہنشاہ «کیری تسویو» بھی کہتے ہیں۔ وہ رانی «کیری تسویو» کو ہمیشہ اپنے پاس رکھتا تھا۔ دوسری رانیوں کو یہ بات بالکل پسند نہ تھی اور سب اس سے جلتی اور

نفرت کرتی تھیں۔

5

اس طرح بغض و حسد کا شکار بننے کا نتیجہ یہ ہوا کہ رانی «کیری تسویو» روز بروز کمزور ہوتی گئی اور آخر سخت بیمار ہو گئی۔ وہ اداسی اور پریشانی میں مبتلا ہو کر زیادہ وقت میکے میں گزارنے لگی۔ رانی کی یہ حالت دیکھ کر شہنشاہ پہلے سے بھی بڑھ کر محبت سے پیش آنے لگا۔ محبت کا یہ عالم دیکھ کر لوگ شہنشاہ کی برائیاں بھی کرنے لگے لیکن اس کو کوئی پروا نہ تھی۔

6

لوگوں میں شکایتیں اور پریشانیاں پیدا ہو گئیں۔ کیونکہ چین میں اس طرح کی اندھی محبت ملک کی تباہی و بربادی کا سبب بن چکی تھی۔ لوگ «یانگ کونفی» کی مثال دینے لگے جو چین کے شہنشاہ «منگ ہوانگ» کی ملکہ تھی اور اسے اپنی اداؤں کا غلام بنا کر برباد کر دیا تھا۔

7

رانی «کیری تسویو» کے باپ کا انتقال ہو چکا تھا۔ اس کی ماں ایک شریف خاندان سے تعلق رکھنے والی شائستہ بزرگ عورت تھی۔ شوہر نے نہ بونے کے باوجود اس نے اپنی بیٹی کی پرورش کا اتنا خیال رکھا کہ اسے دوسری رانیوں کے مقابلے میں کوئی کمی محسوس نہ ہو۔ مگر جب کبھی کوئی مصیبت نازل ہو جاتی تو اسے تنہائی کا شدید احساس ہوتا تھا اور بے چین رہتی تھی۔

8

معلوم ہوتا ہے کہ پچھلے جنم میں بھی شہنشاہ اور رانی کے درمیان محبت کا مضبوط رشتہ رہا ہو۔ کچھ عرصے بعد اس رانی نے ایک چاند سا شہزادے کو جنم دیا۔ سب سے بڑا شہزادہ رانی «کوکیٹین» کے بیٹے سے پیدا ہوا تھا جو وزیر یمن الدولہ کی بیٹی تھی۔ لوگوں کو کوئی شک نہیں تھا کہ یہی شہزادہ ولی عہد بنے گا۔ اس لیے سب اس کی عزت کرتے تھے۔ لیکن یہ اتنا خوبصورت نہیں تھا جتنا وہ چھوٹا شہزادہ۔

9

شہنشاہ اس خوبصورت شہزادے کو بہت چاہتا تھا۔ رانی «کوکیٹین» کو یہ گمان ہونے لگا کہ کہیں شہنشاہ اس چھوٹے شہزادے کو ولی عہد نہ بنائے۔

11

شہنشاہ دوسری رانیوں کی قیام گاہوں کے سامنے سے گزرتے ہوئے صرف رانی «کیری تسویو» کے یہاں آیا کرتا تھا۔ دوسری رانیاں کیوں نہ جلتیں۔ جب شہنشاہ اس کو بار بار اپنے پاس طلب کرتا اور یہ بلاؤ حد سے بڑھ جاتا تو رانی «کیری تسویو» کو پریشان کرنے کے لیے اس کے راستے میں طرح طرح کی حماقتیں کرنے سے دل کا غبار نکال دیتی تھیں۔ کبھی اس کے راستے میں گندی گندی چیزیں پھیلا دیتی۔ حالانکہ وہ خود تو پالکی میں چلتی تھی مگر اس کے ساتھ چلنے والی کنیز ان کے لباس اتنے گندے ہو جاتے کہ برداشت کرنا ہی مشکل تھا۔ کبھی اندر کی رابداری کے آگے پیچھے کے دروازوں پر قفل لگا کر اسے پھنسا دیتیں۔

12

رانی کی تکلیفوں کو دیکھ کر شہنشاہ کو رحم آ گیا۔ اور اپنی رہائش گاہ کے نزدیک «کوریوٹین» نامی محل میں اسے منتقل کر دیا۔ جو رانی پہلے سے «کوریوٹین» میں رہتی تھی اس کو دوسری جگہ منتقل ہونا پڑا۔ اس کے دل میں جلتی ہوئی آگ اور تیز ہو گئی۔

1 3

جب چھوٹا شہزادہ تین سال کا ہو گیا تو اسے پہلی بار رسمی لباس پہنانے کی تہنیتی تقریب اس قدر دھوم دھام سے منائی گئی کہ بڑے شہزادے کے وقت سے کچھ کم نہ تھی۔ یہ شہزادہ بے حد حسین اور نہایت خوش اخلاق تھا۔ اسی وجہ سے دوسری رانیاں بھی اسے نفرت نہیں کر سکتی تھیں۔

1 4

اس سال موسم گرما میں اس کی ماں یعنی رانی «کیری تسویو» پھر بیمار ہو گئی اور شہنشاہ سے میکے واپس جانے کی اجازت مانگی۔ چونکہ وہ ہمیشہ بیمار ہی رہتی تھی اس لیے شہنشاہ نے نہ تو اس کی باتوں پر کوئی خاص توجہ دی نہ واپس جانے کی اجازت دی۔ اس کی صحت روز بروز خراب تر ہوتی گئی اور وہ نہایت کمزورسی ہو گئی۔ اس کی ماں نے رو رو کر شہنشاہ سے فریاد کی کہ اب میری بچی کو گھر واپس بھیج دیا جائے۔ آخرکار یہ طے ہوا کہ رانی «کیری تسویو» چھوٹے شہزادے کو چھوڑ کر اکیلی چلی جائے گی۔

1 5

وہ بہت دہلی پٹلی ہو گئی اور اس کے چہرے سے تو پتا ہی نہیں چل رہا تھا کہ وہ ہوش میں ہے یا نہیں۔ اپنی پیاری رانی کی یہ صورت دیکھ کر شہنشاہ گھبرا گیا اور اس سے ماضی اور مستقبل کے بارے میں طرح طرح کے وعدے کرنے کی کوشش کی۔ لیکن رانی «کیری تسویو» میں اب جواب دینے کی طاقت تک باقی نہیں رہی۔ اس کا چہرہ درد آمیز تھا اور وہ بے ہوش پڑی ہوئی تھی۔ شہنشاہ نے کہا «ہم دونوں نے قسم کھائی تھی کہ زندگی کا آخری سفر بھی ہم ساتھ ہی طے کریں گے۔ تم مجھے چھوڑ کر نہیں جا سکتی!»۔

1 6

یہ سن کر رانی بھی خوش ہو گئی اور یہ شعر کہا۔  
شعر کا مطلب: ہم دونوں زندگی کے دورابے پر کھڑے ہیں۔ اب الگ الگ راہ پر چلنا ہو گا۔ میں غم زدہ ہوں۔ کیا اچھا ہوتا کہ میں بھی حیات کی راہ پر چل سکتی۔

شہنشاہ نے رانی «کیری تسویو» کو پالکی میں بیٹھنے کی اجازت دے دی اور وہ اپنے میکے واپس چلی گئی۔

1 7

جب سے وہ چلی گئی شہنشاہ رنج و غم کے گہرے سمندر میں ڈوبتا رہا۔ اس نے رانی کی مزاج پرسی کے لیے شاہی قاصد بھیج دیا۔ اب زیادہ دیر نہیں ہونی کہ وہ واپس آ گیا اور یہ خبر سنائی کہ آدھی رات کو رانی «کیری تسویو» کا انتقال ہو گیا ہے۔ یہ خبر سنتے ہی شہنشاہ کا ہوش باختہ ہو گیا۔

1 8

اسی حالت میں بھی وہ چھوٹے شہزادے کو دیکھنا چاہتا تھا۔ مگر ماضی میں کوئی ایسی مثال نہیں تھی کہ سوگ وار شاہی محل میں موجود ہو۔ لہذا چھوٹے شہزادے کو بھی نانی کے یہاں بھیج دیا گیا۔ شہزادے کی سمجھ میں نہیں آ رہا تھا کہ کیا ہوا ہے اور کیوں اسے نانی کے یہاں بھیجا جا رہا ہے۔ کنیزان کو چخیں مار مار کر روتے ہوئے اور اپنے باپ شہنشاہ کو مسلسل آنسو بہاتے ہوئے دیکھ کر وہ عجیب سا محسوس کر رہا تھا۔

1 9

دستور کے مطابق ایک مقررہ جگہ "اتاگو" پر اس کی میت کو جلانے کی رسم ادا کی گئی۔ رانی کی ماں نے روتے ہوئے کہا "کاش میں بھی اپنی بیٹی کی میت کے ساتھ دھواں بن کر خود کو مٹا سکتی!" اور اُن جہانی رانی کو الوداع کہنے کے لیے جو کنیزان موجود تھیں ان کی گاڑی میں وہ بھی سوار ہو کر "اتاگو" کے لیے روانہ ہو گئی۔

2 1

شہابی محل سے ایک ایلچی آیا اور اُن جہانی رانی کو درباری منصب سوم عطا کیا۔ بڑے شہزادے کو دیکھ کر بھی شہنشاہ چھوٹے شہزادے کو یاد کرتا تھا اور کوئی کنیز یا دانی کو بھیج کر چھوٹے شہزادے کی خبر پوچھتا رہتا تھا۔ ایک دن شام کو تیز اور ٹھنڈی ہوا چل رہی تھی۔ شہنشاہ نے اپنے ترکش بردار کی لڑکی کے ہاتھ اُن جہانی رانی کی ماں کے نام ایک خط بھیجوا یا۔

2 6

اس میں یہ شعر لکھا ہوا تھا۔  
شعر کا مطلب: جب میں محل کے پھولوں کو شبنم آلود کرنے والی خزانہ ہواؤں کی آواز سنتا ہوں تو میرے غم زدہ دل میں ایک نئے ہونے کے خیال آتا ہے۔

3 1

اور ترکش بردار کی لڑکی نے اُن جہانی رانی کی ماں سے مل کر یہ شعر کہا۔  
شعر کا مطلب: جس طرح جھینگر پورا زور لگا کر رات بھر جھیں جھیں کی آواز نکالتے ہیں اس طرح خزاں کی اس لمبی رات کو میری آنکھوں سے مسلسل آنسو بہ رہے ہیں۔

ماں نے جواب دیا۔

شعر کا مطلب: اس ویران اقامت گاہ میں جھنجھانے والے حشرات کی طرح میں ویسے ہی زار زار رو رہی تھی۔ تو پھر یہاں شہابی محل سے ایک پیامی آنسوؤں کی شبنم لائی ہے۔

3 2

چونکہ یہ شہنشاہ کو اچھا سا تحفہ نذر کرنے کا موقع نہیں تھا اس لیے اس نے جوابی خط کے ساتھ اُن جہانی رانی کا روایتی لباس اور کچھ آرائش کی چیزیں ترکش بردار کی لڑکی کے ہاتھ بھیجوا دیں۔

3 4

رات گہری ہو چکی تھی مگر شہنشاہ ابھی تک سویا نہیں تھا اور آنگن میں کھلے ہوئے پھولوں کا نظارہ کرتے ہوئے چار پانچ کنیزان کے ساتھ باتیں کر رہا تھا۔

3 5

ترکش بردار کی لڑکی نے اسے ماں کا خط دیا جس میں یہ شعر تھا۔  
شعر کا مطلب: جب سے طوفانی ہوا سے بچانے والا درخت بےجان ہو گیا ہے مجھے تو اس نونہال کے احوال کی فکر رہتی ہے۔

3 7

جب ترکش بردار کی لڑکی نے شہنشاہ کو اُن جہانی رانی کی ماں اور چھوٹے شہزادے کا حال سنایا اور ماں کا دیا ہوا تحفہ دکھایا تو اس نے یہ شعر کہا۔  
شعر کا مطلب: کاش کوئی ایسا جادوگر ہوتا جو اُن جہانی رانی کو تلاش کر لیتا اور مجھے بتا دیتا کہ اس کی روح اب کہاں رہتی ہے۔

3 9

چونکہ بڑے شہزادے کی ماں یعنی رانی «کوکیٹین» کو مدت سے شہنشاہ کی خدمت میں حاضر ہونے کا موقع نہیں مل رہا تھا اس لیے اب چاندنی رات کو وہ کسی کے ساتھ ساز چھیڑنے میں لطف اندوز ہوتی تھی۔  
درباری عہدے دار اور شاہی کنیزان اس خوف سے یہ نغمگی سن رہے تھے کہ یہ حرکت شہنشاہ کو ناپسندیدہ لگے۔

4 0

شہنشاہ نے اُن جہانی رانی «کیری تسویو» کی ماں کی فکر کرتے ہوئے یہ شعر کہا۔  
شعر کا مطلب: بادلوں سے بھی بلند مقام پر واقع شاہی محل سے بھی خزاں کا چاند آنسوؤں میں دھندلا دکھائی دیتا ہے۔ لمبی اور گہنی گھاسوں سے بھری مضافات سے کیسے صاف نظر آئے گا؟

4 3

وقت گزرتا گیا اور آخر چھوٹے شہزادے کے شاہی محل میں واپس آنے کا دن آ گیا۔ وہ اتنا خوبصورت ہو گیا کہ لوگ کہنے لگے «خدا نہ خواستہ کہیں خدا بھی اس کی حسن سے متاثر ہو کر اپنے پاس نہ بلائے»۔  
اگلے سال کے موسم بہار میں بڑے شہزادے کو ولی عہد مقرر کیا گیا۔ شہنشاہ چھوٹے شہزادے کو تخت کا وارث بنانا چاہتا تھا مگر اس کو معلوم تھا کہ اس خوابش کو دنیا تسلیم نہ کرے گی۔ چنانچہ وہ اپنے اظہار رائے میں محتاط رہا۔

4 4

چھوٹے شہزادے کی نانی پھر اکیلی ہو گئی۔ اب جینے کا کوئی سہارا نہیں رہا تو وہ بھی اس دنیا سے چل بسی۔ شہنشاہ پر پھر غم کے بادل چھا گئے۔

4 5

جب چھوٹا شہزادہ سات سال کا ہوا تو اس کی مکتب نشینی کی تقریب ہوئی۔

4 6

نہ صرف پڑھنے میں بلکہ بریط اور بانسری بجانے میں بھی اس کی قابلیت اور مہارت دیکھ کر محل میں رہنے والے سب حیران رہ جاتے تھے۔

4 7

اس زمانے میں کوریا سے ایک چہرہ شناس آیا۔

5 0

وہ چھوٹے شہزادے کی علمی صلاحیت اور شکل و صورت کی خوبصورتی کی تعریف کرتے ہوئے اسے «بیکارو» یعنی «روشن» کا نام دیا اور اس کے ساتھ بہت سے تحفے پیش کیے۔  
دربار میں شہزادہ «بیکارو» کا کوئی سرپرست نہیں تھا اور اس کا شہزادہ رہنا ہی لوگوں کے شک و شبہ کا باعث بنتا تھا کہ کہیں اسے ولی عہد مقرر نہ کیا جائے۔ لہذا شہنشاہ افسوس کے ساتھ «بیکارو» کو شاہی خاندان سے خارج کرنے اور اسے «گینچی» کا خاندانی نام دے کر اپنی رعیت شاہی میں شامل کرنے کا فیصلہ کیا۔

繪 2

(تصویر ۲) شاہی مہمان خانے میں کوریائی چہرہ شناس سات سالہ «بیکارو گینچی» کے قیامے اور بشرے کو دیکھ رہا ہے۔

5 1

سال با سال گزر گئے۔ مگر وقت بھی اُن جہانی رانی کی یاد کو مٹا نہ سکا اور شہنشاہ ابھی بھی دکھی ہی رہتا تھا۔ ایک شاہی کنیز نے اپنے مالک شہنشاہ کو بتایا کہ سابق شہنشاہ کی چوتھی شہزادی کے حسن کی بڑی شہرت ہے۔ کچھ دنوں بعد اسے دربار میں پیش کیا گیا اور ملکہ «فوجی تسویو» کہلانے لگی۔

یہ ملکہ اُن جہانی رانی «کیری تسویو» کی جیتی جاگتی تصویر تھی

اور اس کا عہدہ بلند تر تھا۔ یہ فطرت کی بات تھی کہ شہنشاہ کا دل آہستہ آہستہ ملکہ «فوجی تسویو» کی طرف مائل ہونے لگا۔

5 8

«بیکارو گینچی» اپنے باپ سے کبھی الگ نہیں رہتا تھا اور باپ کے ساتھ ملکہ «فوجی تسویو» کی چلمن کے اندر بھی اکٹرا جایا کرتا تھا۔

5 9

شہنشاہ ان دونوں کو بہت چاہتا تھا۔ جس طرح لوگ «گینچی» کو اس کے حسن کی وجہ سے «بیکارو گینچی» کہتے تھے اس طرح اس حسین ملکہ کو «ملکہ خورشید» کہتے لگے۔

6 0

بارہ سال کی عمر میں «بیکارو گینچی» کے بالغ ہونے کی تقریب منعقد ہوئی

6 3

اور اس کی شادی وزیر یسار الدولہ کی بیٹی «اؤنی» سے طے ہو گئی جس کی ماں خود شہزادی تھی۔  
(تصویر ۳) بارہ سالہ «بیکارو گینچی» کے بالغ ہونے کی تقریب ہوئی۔

6 5

اس موقع پر شہنشاہ نے یہ شعر کہا۔

شعر کا مطلب: جب تم نے نابالغ طفل کے بالوں کو دھاگے سے باندھ دیا تب کیا تم نے یہ دعا بھی مانگی کہ یہ دھاگا دونوں گھرانوں کے رشتے کو ہمیشہ کے لیے مضبوط باندھ دے۔

وزیر یسار الدولہ نے جواب دیا۔

شعر کا مطلب: گہرے بینگنی رنگ کا دھاگا باندھتے وقت میں نے خلوص کے ساتھ جو وعدہ کیا تھا وہ ہمیشہ برقرار رہے گا بشرطیکہ اس دھاگے کا رنگ بدل نہ جائے۔

6 7

شہنشاہ نے وزیر یسار الدولہ کو شاہی اصطبل سے ایک گھوڑا اور شاہی شکار خانے سے ایک شکرہ تحفے میں دے دیے۔ محل کے زینے پر دیگر شہزادے اور امرا بھی تحفے کے انتظار میں ایک صف بنا کر کھڑے ہو گئے اور شہنشاہ نے سب کو عہدے کے مطابق تحفہ دے دیا۔

6 8

اسی رات کو «بیکارو گینچی» وزیر یسار الدولہ کی حویلی میں گیا۔ «بیکارو گینچی» بارہ سال کا اور «اؤنی» سولہ سال کی تھی۔

6 9

وزیر یسار الدولہ کے بیٹے کی شادی وزیر یمین الدولہ کی چوتھی بیٹی سے طے ہو گئی۔

7 0

شہنشاہ اب بھی «بیکارو گینچی» کو اپنے پاس رکھنا چاہتا تھا اس لیے اس کو وزیر یسار الدولہ کی حویلی میں آرام سے ٹھہرنے کا وقت نہیں ملتا تھا۔ ویسے بھی اس کا دل «اؤنی» سے نہیں لگتا تھا۔ وہ اپنے دل کی گہرائیوں میں سوچتا تھا کہ «ملکہ «فوجی تسویو» واقعی بے نظیر ہے۔ کاش میری شادی بھی ایسی لڑکی سے ہوتی۔ مگر آخر ایسی لڑکی ہے کہاں؟»

7 1

بالغ بونے كے بعد وہ ملكه «فوجى تسوبو» كى چلمن ميں پہلے كى طرح داخل نهيں بو سكتا تھا. اس ليے جب وہ ساز بجاتا تھا تو اپنى محبت كو بربط يا بانسرى كى سريلي نغمگى ميں بم آبنگ كر كے ملكه كے پاس پہنچانے كى كوشش كرتا تھا. اور كيهي كيهي چلمن كے اندر سے آبهتہ آبهتہ سنائى دينے والى ملكه كى آواز سے تسكين حاصل كرتا تھا. چنانچہ «بيكارو گنجى» بميشه شابى محل ميں بي ربتا تھا.



## गेन्जी की कहानी की तखलीक

Dr. Mohammad Naushad Kamran (University of Allahabad)

हजार साल से पुरानी बात है जापान के बासठवे शहनशाह मुराकामी की दसवीं शहजादी "नोबूको" ने चौसठवे शहनशाह "इजिजो" की मलिका "आकिको" से फ़रमाइश की कि कोई नई कहानी नहीं है? मलिका ने अपनी उस्तानी "मुरासाकी शिकिबू" को बुलाकर कहा कि किसी न किसी तरह नई कहानी तसनीफ़ करके ले आओ! "मुरासाकी शिकिबू" ने "इशियामा" मंदिर में गोशा नशीनी करते हुए दुआ की कि मुझ पर नई कहानी नाज़िल हो जाए। अगस्त की चौदहवीं रात थी जब उसने "बीवा" झील की सतह पर चमकते चाँद का अक्स देखा तो उसके ज़हन में कहानी के मनाज़िर उतर आये और बारहवाँ बाव "सुमा" से कहानी लिखना शुरू की।

इस कहानी पर बुद्ध मत के "टेन्डाई" फिरके का बड़ा असर है। कहा जाता है कि इस फ़िरके की मुकद्दस किताब साठ अबवाब पर मुश्तकिल है लिहाज़ा मुरासाकी शिकिबु ने गेन्जी की कहानी भी साठ अबवाब में लिखी थी। लेकिन मौजूदा कहानी सिर्फ़ चव्वन (54) अबवाब की है। इस कहानी का मौजू भी बुद्ध मत के चार हक़ायके से लिया गया यानी इस दुनिया में जिन्दा रहने का कोई मतलब भी है या नहीं और इसका जवाब हाँ भी हो सकता है और न भी। बाव का नाम पहले कहानी के मत्न से दूसरे नज़म से तीसरे मत्न व नज़म से और चौथे कहीं और जगह से लिया गया।

दरअसल मोसन्निफ़ा "टोनोशिकिबु" कहलाती थी लेकिन उसने इस कहानी में गेन्जी की बीवी "मुरासाकी" के बारे में इतने शानदार अंदाज में लिखा कि लोग उसे "मुरासाकी शिकिबु" पुकारने लगे। ये रिवायत भी है कि "मुरासाकी शिकिबु" इंसान नहीं बल्कि रहम व करम की देवी का अवतार है। "टेन्डाई"

फिरके के नामवर पुरोहित "काकूऊन" ने उसे अपनी शार्गिद बनाकर "टेन्डाई" फिरके के अकीदे सो रूश्नास कराया ।

मुरासाकी शिकिबु का सिलसिलए नसबः

"त्सू त्सूमी चूनागोन" यानी दरमियानी दर्जे का काउनसलर "काने सूके".... "ईनाबा" का ज़िलादार "कोरेमासा"....." "इचिजेन" का ज़िलादार "तामेतोकि" ". ...." "मुरासाकी शिकिबू" उसकी माँ "सेत्सू" के ज़िलादार "तामेनोबु" की बैटी "काताको" है ।

इस सिलसिल-ए-नसब में मुख्यतलिफ़ ख्यालात भी हैं लेकिन इस जैसा शजरा-ए-नसब गेन्जी की कहानी का शरह "कोगेत्सूशो" में मिलता है ।

अगस्त की चौदहवीं रात को इशियामा मंदिर में "मुरासाकी शिकिबू" ने गेन्जी की कहानी लिखना शुरू की ।

किस शहनशाह का जमाना था शाही महल में बहुत सी रानियाँ रहती थीं । उनमें से एक जिसका ओहदा कुछ खास बलन्द न था शहनशाह की मंजूर-ए-नज़र बन गई । (ये जमाना शहनशाह "डाइगो" का था और ये मंजूर-ए-नज़र रानी "सीरीत्सुबो" थी) शाही महल के अंदर रानियों की कई क़याम गाहें थी और हर क़याम गाह का अलग-अलग नाम था । जैसे "नाशित्सुबो", "कीरीत्सुबो", "फूजित्सुबो" वगैरह और रानियों को भी उसी क़याम शाह के नाम से पुकारा जाता था जहां वो मुकिम हैं । चूंकि ये शहनशाह

कीरीत्सुबो में रहने वाली रानी से बहुत प्यार करता था इस लिए लोग उसे शहनशाह कीरीत्सुबो भी कहते हैं।

वो रानी कीरीत्सुबो को हमेशा अपने पास रखता था दूसरी रानियों को ये बात बिल्कुल पसन्द न थी और सब उससे जलती और नफ़रत करती थी।

इस तरह बुग़ज व हसद का शिकार बनने का नतीजा ये हुआ कि रानी कीरीत्सुबो रोज़ बरोज़ कमजोर होती गई और आख़िरकार सख़्त बीमार हो गई। वो उदासी और परेशानी में मुब्तला होकर ज़्यादा वक़्त मौक़े में गुज़ारने लगी। रानी की ये हालत देखकर शहनशाह पहले से भी बढ़कर मोहब्बत से पेश आने लगा। मोहब्बत का ये आलम देखकर लोग शहनशाह की बुराईयां भी करने लगे लेकिन उसको कोई परवाह न थी।

लोगों में शिकायतें और परेशानियां पैदा हो गईं। क्यों कि चीन में इस तरह की अंधी मोहब्बत मुल्क की तबाही व बरबादी का सबब बन चुकी थी। लोग “ यॉंगकूइफ़ी” की मिसाल देने लगे जो चीन के शहनशाह “भींगह्वांग” की मलिका थी और उसे अपनी अदाओं का गुलाम बनाकर बरबाद कर दिया था।

रानी कीरीत्सूबो के बाप का इंतिकार हो चुका था उसकी मां एक शरीफ़ खानदान से ताल्लुक़ रखने वाली शाइस्ता बुज़र्ग औरत थी। शौहर के न होने के बावजूद उसने अपनी बेटी की परवरिश का इतना ख़्याल रखा कि उसे दूसरी

रानियों के मुकाबले में कोई कमी महसूस न हो। मगर जब कभी कोई मुसीबत नाज़िल हो जाती तो उसे तनहाई का शदीद एहसास होता था और बेचैन रहती थी।

मालूम होता है कि पिछले जनम में भी शहनशाह और रानी के दरमियान मोहब्बत का मजबूत रिश्ता रहा हो कुछ अरसे बाद इस रानी ने एक चांद सा शहजादे को जन्म दिया। सबसे बड़ा शहजादा रानी कोकीडेन के पेट से पैदा हुआ था जो वज़ीर यमीन उद्दौला की बेटी थी। लोगों को कोई शक नहीं था कि यही शहजादा वलीअहद बनेगा। इसलिए सब उसकी इज़्ज़त करते थे। लेकिन ये इतना ख़ूबसूरत नहीं था जितना वो छोटा शहजादा।

शहनशाह उस ख़ूबसूरत शहजादे को बहुत चाहता था। रानी कोकीडेन को ये गुमान होने लगा कि कहीं शहनशाह इस छोटे शहजादो को वलीअहद न बनाए।

शहनशाह दूसरी रानियों की कयामगाहें के सामने से गुजरते हुए सिर्फ़ रानी कीरीत्मुको के यहां आया करता था दूसरी रानियां क्यों न जलतीं। जब शहनशाह उसको बार—बार अपने पास तलब करता और ये बुलावा हद से बढ़

ऑतुतु तुरु रानी कीरीतुसुबुरु कुरु डुरेशुऑन करनु कुरु ललरु उरुसुकु रुरुसुतु डुडु तरह-तरह की हलडुडुकुरतुडु करनु से डल कुरु गुडुडु नलकल डुडुती थुडु। कडुी उरुसुकु रुरुसुतु डुडु गनुडुी-गनुडुी ऑीऑु डुडुलु डुडुती। हललुडुलु कुरु डुडु खुडु तुरु डुडुलकी डुडु ऑलतुी थुी डुडुगर उरुसुकु सुलथ ऑलनु वलुी कनुीऑुऑन कुरु ललडुडुस इतनु गनुडु हुरु ऑुतु कुरु डुडु डुडुडुशुत करनु हुरु डुडुशुकल थु। कडुी अंडर की सहडुडुरी कुरु आगु डुडुऑु कुरु डुडुवरुवुऑु डुडु कुरुडुल लगलकर उरुसु डुडुसु डुडुती।

रानी की तकलीडुडु कुरु डुडुखकर शहनशुह कुरु रहडु आ गडु। अुरु अडुनी कुरुडुडु शुह कुरु नऑुडुीक "कुरुरलुडुडुन" नलडुी डुडुहल डुडु उरुसु डुडुनतकल कुरु डुडुडु। ऑु रानी डुडुहलु से कुरुरलुडुडुन डुडु रहतुी थुी उरुसुकु डुडुसुरी ऑुगह डुडुनतकल हुरुनल डुडु। उरुसुकु डल डुडु ऑलतुी हुरुई आगु अुरु तुरुऑु हुरु गुरुई।

ऑु डुडु ऑुऑु शहऑुऑुडु तुरुन सुल कुरु हुरु गडु तुरु उरुसु डुडुहलु डुडुरल रसडुी ललडुडुस डुडुहनलनु की तहनुडुडुतुी तकरुीडु इस कडुर धुडुधलडु से डुडुनलरुई गुरुई कुरु डुडु डुडु शहऑुऑुडु कुरु वकुरतु से कुरुऑु कडु न थुी। डुडु शहऑुऑुडु डुडुहडु हसुीन अुरु नलहलडुत खुश अखललकुर थु। इसुी वऑुह से डुडुसुरी रलनुडुडु डुडु उरुसुसु नऑुडुरत नहुी कर सुकतुी थुी।

उस साल मौसम—ए—गरमा में उसकी मां यानी रानी कीरीत्सुको फिर बीमार हो गई और शहनशाह से मैके वापस जाने की इजाज़त मांगी। चूंकि वो हमेशा बीमार ही रहती थी इसलिए शहनशाह ने न तो उसकी बातों पर कोई खास तवज्जे दी न वापस जाने की इजाज़त दी। उसकी सेहत रोजबरोज ख़राबतर होती गई और वो निहायत कमज़ोर सी हो गई। उसकी मां ने रो—रो कर शहनशाह से फ़रयाद की कि अब मेरी बच्ची को घर वापस भेज दिया जाए। आख़िरकार ये तो हुआ कि रानी कीरीत्सुबो छोटे शहजादे को छोड़कर अकेली चली जाएगी।

वह बहुत दुबली पतली हो गई और उसके चेहरे से तो पता ही नहीं चल रहा था कि वो होश में है या नहीं। अपनी प्यारी रानी की ये सूरत देखकर शहनशाह घबरा गया और माज़ी और मुसतक्रबिल के बारे में तरह—तरह के वादे करने की कोशिश की। लेकिन रानी कीरीत्सुबो में अब जवाब देने की ताक़त तक बाक़ी नहीं रही। उसका चेहरा दर्द आमज़ था और वो बेहोश पड़ी हुई थी। शहनशाह ने कहा हम दोनों ने क़सम खाई थी कि ज़िन्दगी का आख़िरी सफ़र भी हम साथ ही तय करेंगे। तुम मुझे छोड़कर नहीं जा सकती।



दसतूर के मोताबिक एक मोकररा जगह “आतागो” पर उसकी मैयत को जलाने की रस्म अदा की गई। रानी की मां ने रोते हुए कहा, काश मैं भी अपनी बेटी की मैयत के साथ धुवां बनकर खुद को मिटा सकती। और आजहानी रानी को अलविदा कहने के लिए जो कनीज़ान मौजूद थी उनकी सवारी में वो भी सवार हो कर “आतागो” के लिए रवाना हो गई।

शाही महल से एक एलची आया और आनजहानी रानी को दरबारी मनसब—ए—सोम अता किया।

बड़े शहजादे को देखकर भी बादशाह छोटे शहजादे को याद करता था और कोई कनीज या दाई भेजकर छोटे शहजादे की खबर पूछता रहता था। एक दिन शाम को तेज और ठण्डी हवा चल रही थी, बादशाह ने अपने तरकश बारदार की लड़की के हाथ आंजहानी रानी की मां के नाम एक खत भिजवाया

इसमें ये शेर लिखा हुआ था। शेर का मतलब

जब मैं महल के फूल को शबनमआलूद करने वाली खिजानी हवाओं की आवाज़ सुनता हूँ तो मेरेगमज़दह दिल में एक नन्हे पौदे का ख्याल आता है

और तरकश बरदार की लड़की ने आन्जहानी रानी की मां से मिल कर यह शेर कहा।

जिस तरह झींगुर पूरा ज़ोर लगाकर रातभर झी-झी की आवाज निकालते हैं इस तरह खिजां की इस लम्बी रात को मेरी आंखों से मोसलसल आंसू बहते रहते हैं। माने जवाब दिया।

शेर का मतलब: इस वीरान एकामतगाह में झिनझिनाने वाले हशरात की तरह मैं वैसे ही ज़ार-ज़ार रो रही थी तो फिर यहां शाही महल से एक पयामी आंसुओं की शबाम लायी है।

चूंकि ये शहनशाह को अच्छा सा तोहफ़ा नज़ करने का मौक़ा नहीं था इसलिए उसने जवाब में आंजहानी रानी का रिवायती लिबसा और कुछ आरायिश की चीजें तरकशबरदार की लड़की के हाथ भिजवा दी।

रात गहरी हो चुकी थी मगर शहनशाह अभी तक सोया नहीं था और ऑगन में खिले हुए फूलों का नज़ारा करते हुए चार पांच कनीज़ के साथ बातें कर रहा था, तरकशबरदार की लड़की ने उसे मां का खत दिया जिसमें ये शेर था।

शेर का मतलब: जब से तूफानी हवा से बचाने वाला दरख्त बेजान हो गया है मुझे तो इस नौनिहाल के अहवाल की फिक्र रहती है।

जब तरकशबरदार की लड़की ने शहनशाह को आनजहानी रानी की मां और छोटे शहजादे का हाल सुनाया और मां का दिया हुआ तोहफ़ा दिखाया तो उसने ये शेर कहा।

शेर का मतलब: काश कोई ऐसा जादूगर होता जो आनजहानी रानी का तलाश कर लेता और मुझे बता देता कि उसकी रूह अब कहां रहती है।

अूकल डडे शहआदे की आं आनी रानी “कोकेडेन” को मुदत से शनहशाह की खलदमत में हाअर होने का मौक़ा नहीं मिल रहा था इसलिए अब आंदनी रात में वो किसी के साथ साअ छेड़ने में लुतफ़अन्दोज़ होती थी। दरबारी ओहदेदार और शाही कनीआन इस ख़ौफ़ से ये नगमगी सुन रहे थे कि वे हरकत शहनशाह को ना पसन्दीदा लगे।

शहनशाह ने आनजहानी रानी कीरीत्सुबो की आं की फ़िक्र करते हुए ये शेर कहा।

शेर का मतलब: बादलो से भी बलन्द मक़ाम पर वाक़े शाही महल से भी ख़िजों का आंद आंसुओं में धुधला दिखाई देता है। लम्बी और धनी आसों से भरी मोज़ाफ़ात से कैसे साफ़ नज़र आएगा।

वक़्त गुज़रता गया और आख़िर छोटे शहआदें के शाही महल में वापस आने का दिन आ गया। वह इतना ख़ूबसूरत हो गया कि लोग कहने लगे “

खुदा न ख़ास्ता कहीं खुदा भी इसके हुस्न से मोतास्सिर होकर इस अपने पास न बुलाए।”

अगले साल के मौसम—ए—बहार में बड़े शहज़ादे को वली अहद मोकर्रर किया गया। शहनशाह छोटे शहज़ाद को तख़्त का वारिस बनाना चाहता था मगर उसको मालूम था कि इस ख़्वाहिश को दुनिया तसलीम न करेगी। चुनां चे वो अपने इज़हार—ए—राय में मोहतात रहा।

छोटे शहज़ादे की नानी फिर अकेली हो गई अब जीने का कोई सहारा नहीं रहा तो वह भी दुनिया से चल बसी। शहनशाह पर ग़म के बादल छा गये।

जब छोटा शहज़ादा सात साल का हुआ तो उसकी मक़तब नशीनी की तक़रीब हुई।

न सिर्फ पढ़ने में बल्कि बरबत और बांसुरी बजाने में भी उसकी काबिलियत और महारत देखकर महल में रहने वाले सब हैरान रह जाते थे।

इस जमाने में कोरिया से एक चेहर शिनास आया।

वह छोटे शहजादे की इल्मी सलाहियत और शक्लो सूरत की खूबसूरती की तारीफ करते हुए उसे "हीकारू" यानी "रौशन" का नाम दिया और उसके साथ बहुत से तोहफे पेश किये।

दरबार में शहजादा "हीकारू" का कोई सरपरस्त नहीं था और उसका शहजादा रहना ही लोगों के शक व शुब्हे का बाइस बनता था कि कहीं उसे वलीअहद मोकरर न किया जाए। लेहाजा शहनशाह अफसोस के साथ हीकारू को शाही खानदान से खारिज करने और उसे "गेन्जी" का खानदानी नाम देकर अपनी रइयत-ए-शाही में शामिल करने का फैसला किया।

शाही मेहमान खाने में कोरियाई चेहरा शिनास सात सालह "हीकारू गेन्जी" के क्याफे और बशरे को देख रहा है।

सालहासाल गुजर गए मगर वक़्त भी आंजहानी रानी की याद को मिटान सका और शहनशाह अभी भी दुःखी ही रहता था। एक शाही कनीज़ ने अपने मालिक शहनशाह को बताया कि साबिक शहनशाह की चौथी शहज़ादी के हुस्न की बड़ी शोहरत है कुछ दिन बाद उसे दरबार में पेश किया गया और मालिका “फूजीत्सूबो” कहलाने लगी।

ये मालिका आजहांनी रानी “कीरीत्सुबो” की जीती जागती तस्वीर थी

और इसका ओहदा बुलन्दतर था। ये फ़ितरत की बात थी कि शहनशाह का दिल आहिस्ता आहिस्ता “फूजीत्सूबो” की तरफ़ माएल होने लगा।

“हीकारू गेन्जी” अपने बाप से कभी अलग नहीं रहता था और बाप के साथ मालिका “फूजीत्सूबो” की चिलमन के अंदर भी अकसर जाया करता था।

शहनशाह इन दोनों को बहुत चाहता था। जिस तरह लोग “गेन्जी” को उसके हुस्न की वजह से “हीकारू गेन्जी” कहते थे उसी तरह इस हसीन मलिका को “मलिका खुरशीद” कहने लगे।

बारह साल की उम्र में हीकारू गेन्जी के बालिग होने की तकरीब मुनअक़िद हुई और उसकी शादी वज़ीर यसारूद्दौला की बेटी “आओई” से तय हो गई जिसकी मां खुद शहजादी थी

बारह सालह “हीकारू गेन्जी” के बालिग होने की तकरीब हुई।

इस मौके पर शहनशाह ने यह शेर कहा।

शेर का मतलब जब तुम ने नाबालिग तिफ़ल को धागे से बाँध दिया तब क्या तम ने येदुआ भी माँगी कि ये धागा दोनों घरानों के रिश्ते को मजबूत बाँध दे

वज़ीर यसारूद्दौला ने जवाब दिया।

शेर का मतलब: गहरे बैगनी रंग का धागा बांधते वक़्त मैंने खुलूस के साथ जो वादा किया था वो हमेशा बरकरार रहेगा बशर्ते कि इस धागे का रंग बदल न जाए।

शहनशाह ने वज़ीर यसारुद्दौला को शाही अस्तबल से एक घोड़ा और शाही शिकार ख़ाने से एक शकरा तोहफ़े में दे दिये। महल के जीने पर दीगर शहज़ादे और उमरा भी तोहफ़े के इतेजार में एक सफ़ बनाकर खड़े हो गए और शहनशाह ने सबको ओहदे के मोता बिक तोहफ़े दिये।

उसी रात को “हीकारू गेन्जी” वज़ीर यसारुद्दौला की हवेली में गया। “हीकारू गेन्जी” बारह साल का और “आओई” सोलह साल की थी।

वज़ीर यसारुद्दौला के बेटे की शादी वज़ीर यमीनुद्दौला की चौथी बेटी से तय हो गई। शहनशाह अब भी “हीकारू गेन्जी” को अपने पास रखना चाहता था। इसलिए उसकी वज़ीर यसारुद्दौला की हवेली में आराम से ठहरने का मौक़ा नहीं मिलता था। वैसे भी उसका दिल “आओई” से नहीं लगता था। वह अपने दिल

की गहराईयों में सोचता था कि मलिका “फूजीत्सूबो” वाकई बेनज़ीर है। काश मेरी शादी भी ऐसी लड़की से होती। मगर आखिर ऐसी लड़की है कहां?

बालिग होने के बाद वो मलिका “फूजीत्सूबो” की चिलमन में पहले की तरह नहीं दाखिल हो सकता था। इस लिए जब साज़ बजाता था तो अपनी मोहब्बत को बरबत या बांसुरी की सुरीली नगमगी में हम आहंग करके मलिका के पास पहुंचाने की कोशिश करता था और कभी-कभी चिलमन के अंदर से आहिस्ता-आहिस्ता सुनाई देने वाली मलिका की आवाज़ से तसकीन हासिल करता था। चुनांचे “हीकारू गेन्जी” हमेशा शाही महल में ही रहता था।



# ਰਾਜਕੁਮਾਰ ਗੋਜੀ ਦੀ ਸਾਰਾਂਸ਼ ਕਹਾਣੀ

## ਪਹਿਲਾ ਚੈਪਟਰ - ਕਿਰੀਤਸੁਖੇ

Reema Singh

(1 丁裏)

ਗੋਜੀ ਦੀ ਕਹਾਣੀ (ਗੋਜੀ ਮੋਨੇਗਤਾਰੀ) ਦਾ ਜਨਮ

ਸਮਰਾਟ ਮੁਰਾਸਾਕੀ ਦੀ ਦਸਵੀਂ ਰਾਣੀ ਸੇਨਸੀ ਨਾਈਸ਼ਿੰਨੋ (ਦਾਈਸਾਈਇਨ) ਨੇ ਫੂਜੀਵਾਰਾ ਸ਼ੇਸ਼ੀ ਨੂੰ ਪੁੱਛਿਆ, "ਕੋਈ ਨਵੀਂ ਕਹਾਣੀ ਹੈ ਕੀ?"

ਫਿਰ ਫੂਜੀਵਾਰਾ ਸ਼ੇਸ਼ੀ ਨੇ ਮੁਰਾਸਾਕੀ ਸ਼ਿਕੀਬੂ ਨੂੰ ਬੁਲਾਇਆ ਤੇ ਕਿਹਾ, "ਮੇਹਰਬਾਨੀ ਕਰਕੇ ਕੋਈ ਨਵੀਂ ਕਹਾਣੀ ਲਿੱਖੋ।" ਮੁਰਾਸਾਕੀ ਸ਼ਿਕੀਬੂ ਨੇ ਇਸ ਹੁਕਮ ਨੂੰ ਮੰਨ ਕੇ ਇਸ਼ਿਯਾਮਾ ਮੰਦਰ ਵਿਚ ਇਸ ਕੰਮ ਲਈ ਪ੍ਰਾਰਥਨਾ ਕੀਤੀ।

ਉਸੀ ਵੇਲੇ ਬੀਵਾ ਝੀਲ ਦੇ ਤੱਲ ਤੇ ਸਾਲ ਦੇ ਅਠਵੇਂ ਮਹੀਨੇ ਦੀ ਪੂਰਨਮਾਸ਼ੀ ਦੀ ਰਾਤ ਦਾ ਪੂਰਾ ਚੰਨ ਚਮਕਿਆ, ਤਾਂ ਮੁਰਾਸਾਕੀ ਸ਼ਿਕੀਬੂ ਨੂੰ ਇਕ ਨਵੀਂ ਕਹਾਣੀ ਲਿੱਖਣ ਦਾ ਖਿਆਲ ਮੰਨ ਵਿਚ ਆ ਗਿਆ। ਸਭ ਤੋਂ ਪਹਿਲੇ ਉਸਨੇ ਸੁਮਾ ਅਧਿਆਏ ਤੋਂ ਕਹਾਣੀ ਲਿਖਣੀ ਸ਼ੁਰੂ ਕੀਤੀ।

ਗੋਜੀ ਦੀ ਕਹਾਣੀ ਬੁੱਧ ਧਰਮ ਦੇ ਤੋਂਦਾਈ ਸੂਤਰਾਂ ਦੇ ਸੱਠ ਉਪਦੇਸ਼ਾਂ ਤੇ ਆਧਾਰਿਤ ਹੈ।

ਗੋਜੀ ਦੀ ਕਹਾਣੀ ਦੇ ਹੁਣ ਚੁਰੰਜਾ ਅਧਿਆਏ ਹੱਠ। ਕਹਾਣੀ ਦੇ ਅਧਿਆਏ, ਆਰੀਏ ਸੱਤ ਨਾਮਕ ਬੁੱਧ ਧਰਮ ਦੇ ਚਾਰ ਸਰੇਸ਼ਠ ਸਿਧਾਂਤਾਂ ਤੇ ਆਧਾਰਿਤ ਹੈ। ਪਹਿਲੇ ਅਧਿਆਏ ਦਾ ਸਿਰਲੇਖ ਗੋਜੀ ਦੀ ਕਹਾਣੀ ਤੋਂ ਲਿਆ ਗਿਆ ਹੈ। ਦੂਜੇ ਅਧਿਆਏ ਦਾ ਸਿਰਲੇਖ ਜਪਾਨੀ ਦੀ ਵਾਕਾ ਸ਼ੈਲੀ ਦੀਆਂ ਸਰੇਸ਼ਠ ਕਵਿਤਾਵਾਂ ਤੇ ਆਧਾਰਿਤ ਹੈ। ਤੀਜਾ ਅਧਿਆਏ ਦੋਨੇ ਕਹਾਣੀ ਤੇ ਵਾਕਾ ਸ਼ੈਲੀ ਦੀਆਂ ਕਵਿਤਾਵਾਂ ਤੇ ਆਧਾਰਿਤ ਹੈ।

(2 丁裏)

ਚੋਥੇ ਅਧਿਆਏ ਦਾ ਸਿਰਲੇਖ ਨਾਂ ਹੀ ਜਪਾਨੀ ਕਵਿਤਾਵਾਂ ਵਾਕਾ ਤੋਂ ਤੇ ਨਾਂ ਹੀ ਗੋਜੀ ਦੀ ਕਹਾਣੀ ਤੋਂ ਲਿਆ ਗਿਆ ਹੈ।

ਅਸਲ ਵਿਚ ਮੁਰਾਸਾਕੀ ਸ਼ਿਕੀਬੂ ਦਾ ਨਾਂ ਕਹਾਣੀ ਦੇ ਕਈ ਹਿੱਸਿਆਂ ਵਿੱਚ ਇਕ ਮੰਨੀ-ਪ੍ਰਮੰਨੀ ਮੁੱਖ ਸਲਾਹਕਾਰ ਦੇ ਤੌਰ ਤੇ ਲਿਖਿਆ ਜਾਂਦਾ ਹੈ। ਕਈ ਕਥਾਵਾਂ ਦੇ ਮੁਤਾਬਕ, ਮੁਰਾਸਾਕੀ ਸ਼ਿਕੀਬੂ ਨੂੰ ਬੁੱਧ ਧਰਮ ਦੇ ਦਿਆਲੂ ਬੇਧੀਸੱਤਵ ਅਵਲੋਕੀਤੇਸ਼ਵਰ ਦਾ ਅਵਤਾਰ ਮੰਨਿਆ ਜਾਂਦਾ ਹੈ।

ਮੁਰਾਸਾਕੀ ਸ਼ਿਕੀਬੂ ਦੀ ਵੰਸ਼ਾਵਲੀ

ਚੂਨਾਗੋਨ ਕਾਨੇਸੁਕੇ - ਕੋਰੇਮਾਸਾ - ਤਾਮੇਤੋਕੀ - ਮੁਰਾਸਾਕੀ ਸ਼ਿਕੀਬੂ (ਪੁਤ੍ਰੀ)

ਉਸਦੀ ਮਾਂ ਦਾ ਨਾਂ ਕੇਨਸੀ ਸੀ। (ਇਹੋ ਜਹੀ ਇੱਕ ਵੰਸ਼ਾਵਲੀ "ਗੋਜੀ ਮੋਨੇਗਤਾਰੀ" ਦੀ ਜਪਾਨੀ ਕਿਤਾਬ ਦੀ ਟਿੱਪਣੀ ਵਾਲੇ ਹਿੱਸੇ "ਕੋਗੋਤਸੂ-ਸ਼ੋ" ਵਿਚ ਵੀ ਹੈ।)

(2 丁裏)

(ਤਸਵੀਰ ਇਕ): ਸਾਲ ਦੇ ਅਠਵੇਂ ਮਹੀਨੇ ਦੀ ਪੂਰਨਮਾਸ਼ੀ ਦੀ ਰਾਤ, ਇਸ਼ਿਯਾਮਾ ਮੰਦਰ ਵਿਚ ਗੋਜੀ ਦੀ ਕਹਾਣੀ ਲਿੱਖਣਾ ਸ਼ੁਰੂ ਕਰਦੀ ਹੋਈ ਮੁਰਾਸਾਕੀ ਸ਼ਿਕੀਬੂ

(3 丁表)

### ਕਿਰੀਤਸੁਖੇ

ਉਸ ਵਕਤ ਦੀ ਗੱਲ ਹੈ ਜਦੋਂ ਸਮਰਾਟ ਦਾਈਗੇ ਰਾਜ ਕਰਦਾ ਸੀ। ਉਸ ਵਕਤ ਇਕ ਰਾਜੇ ਦੀਆਂ ਕਈ ਰਾਣੀਆਂ ਹੁੰਦੀਆਂ ਸਨ। ਸਮਰਾਟ ਦਾਈਗੇ ਦੀਆਂ ਵੀ ਕਈ ਰਾਣੀਆਂ ਸਨ ਤੇ ਉਨ੍ਹਾਂ ਰਾਣੀਆਂ ਵਿੱਚੋਂ ਇਕ ਰਾਣੀ ਜਿਹੜੀ ਕੋਈ ਖਾਸ ਸ਼ਾਹੀ ਪਰਿਵਾਰ ਦੀ ਨਹੀਂ ਸੀ, ਉਸਨੂੰ ਸਮਰਾਟ ਦਾਈਗੇ ਸਭਤੋਂ ਵੱਧ ਪਿਆਰ ਕਰਦਾ ਸੀ। ਉਸਦਾ ਨਾਂ ਰਾਣੀ ਕਿਰੀਤਸੁਖੇ ਸੀ।

ਰਾਜਮਹਲ ਦੇ ਉੱਤਰ-ਪੂਰਬੀ ਦਿਸ਼ਾ ਦੇ ਪਿੱਛਲੇ ਹਿੱਸੇ ਵਿਚ ਨਾਸ਼ੀਸੁਖੇ ਨਾਂ ਦਾ ਇਕ ਹਿੱਸਾ ਹੁੰਦਾ ਸੀ। ਉਸਦੇ ਨਜ਼ਦੀਕ ਹੀ ਇਕ ਹੋਰ ਹਿੱਸਾ ਕਿਰਿਤਸੁਖੇ ਨਾਂ ਦਾ ਸੀ ਜਿਸਨੂੰ ਸ਼ਿਹੋਸ਼ਾ ਵੀ ਕਿਹਾ ਜਾਂਦਾ ਸੀ। ਫੁਜੀਤਸੁਖੇ ਨਾਂ ਦੇ ਹਿੱਸੇ ਨੂੰ ਹਿਗੋਸ਼ਾ ਵੀ ਕਿਹਾ ਜਾਂਦਾ ਸੀ। ਉਮੇਤਸੁਖੇ ਨਾਂ ਦੇ ਹਿੱਸੇ ਨੂੰ ਗਿਕਾਸ਼ਾ ਤੇ ਕਨਾਰੀਸੁਖੇ ਨਾਂ ਦੇ ਹਿੱਸੇ ਨੂੰ ਸ਼ਿਹੋਸ਼ਾ ਕਿਹਾ ਜਾਂਦਾ ਸੀ। (ਜਿਸ ਹਿੱਸੇ ਵਿਚ ਰਾਣੀਆਂ ਰਹਿੰਦੀਆਂ ਸਨ, ਉਨ੍ਹਾਂ ਨੂੰ ਉਸ ਹਿੱਸੇ ਦੀ ਇਮਾਰਤ ਦੇ ਨਾਂ ਨਾਲ ਜਾਣਿਆ ਜਾਂਦਾ ਸੀ।) ਕਿਰੀਤਸੁਖੇ ਹਿੱਸੇ ਵਿਚ ਰਹਿਣ ਵਾਲੀ ਰਾਣੀ ਨੂੰ ਰਾਜਾ ਸਭਤੋਂ ਵੱਧ ਪਿਆਰ ਕਰਦਾ ਸੀ, ਇਸਲਈ ਉਸ ਵਕਤ ਸਮਰਾਟ ਦਾ ਨਾਂ ਕਿਰੀਤਸੁਖੇ ਦਾ ਸਮਰਾਟ ਵੀ ਪੈ ਗਿਆ। ਸਮਰਾਟ ਹਰ ਰੋਜ਼ ਕਿਰੀਤਸੁਖੇ ਨਾਲ ਬਹੁਤ ਵਕਤ ਬਿਤਾਂਦਾ ਸੀ, ਇਸਕਰਕੇ ਬਾਕੀ ਦੀਆਂ ਰਾਣੀਆਂ ਕਿਰੀਤਸੁਖੇ ਨਾਲ ਬੜੀ ਈਰਖਾ ਕਰਦੀਆਂ ਸਨ। ਸ਼ਾਇਦ ਇਹ ਦੂਜੀਆਂ ਰਾਣੀਆਂ ਦੀ ਈਰਖਾ ਕਰਨ ਦਾ ਅਸਰ ਸੀ ਕਿ ਕਿਰੀਤਸੁਖੇ ਸ਼ਹੀਰ ਤੋਂ ਕਮਜ਼ੋਰ ਹੁੰਦੀ ਗਈ। ਉਸਨੂੰ ਇਕ ਗੰਭੀਰ ਰੋਗ ਹੋ ਗਿਆ ਤੇ ਉਹ ਇਕੱਲੇਪਨ ਦਾ ਵੀ ਸ਼ਿਕਾਰ ਹੋ ਗਈ। ਉਹ ਅਕਸਰ ਆਪਣੇ ਮਾਂ-ਪਿਉ ਦੇ ਘਰ ਜਾਣ ਲੱਗ ਪਈ। ਹੁਣ ਸਮਰਾਟ ਉਸਨੂੰ ਪਹਿਲੇ ਤੋਂ ਵੀ ਵੱਧ ਚਾਹੁਣ ਲਗਾ।

(3 丁裏)

ਲੋਕਾਂ ਦੇ ਕੁਝ ਵੀ ਕਹਿਣ ਤੇ ਉਸਨੇ ਕਿਰੀਤਸੁਖੇ ਨੂੰ ਚਾਹੁਣ ਦੀ ਇੱਛਾ ਘੱਟ ਨਾ ਕੀਤੀ। ਚੀਨ ਮੁਲਕ ਵਿਚ ਵੀ ਇਸ ਤਰਾਂ ਦੀਆਂ ਪਿਆਰ ਦੀਆਂ ਘਟਨਾਵਾਂ ਨਾਲ ਬੜੀ ਹਫੜਾ - ਦਫੜੀ ਮੱਚੀ ਹੋਈ ਸੀ। ਉਥੋਂ ਦੇ ਲੋਕ ਵੀ ਇਨ੍ਹਾਂ ਘਟਨਾਵਾਂ ਤੋਂ ਬੜੇ ਨਾਰਾਜ਼ ਹੋਣ ਲਗੇ ਤੇ ਇਹ ਘਟਨਾਵਾਂ ਮੁਲਕ ਦੇ ਲੋਕਾਂ ਲਈ ਚਿੰਤਾ ਦਾ ਕਾਰਣ ਬਣ ਗਈਆਂ। ਸਮਰਾਟ ਕਿਰੀਤਸੁਖੇ ਦਾ ਇਹ ਕਿੱਸਾ ਵੀ ਚੀਨ ਮੁਲਕ ਦੇ ਤਾਂਗ ਸਮਰਾਟ ਸ਼ੁਆਨ ਜੋਗ ਤੇ ਯਾਂਗ ਗੁਇਏ ਦੇ ਕਿੱਸੇ ਨਾਲ ਜੋੜਿਆ ਜਾਣ ਲਗਾ। ਕਿਰੀਤਸੁਖੇ ਦੇ ਪਿਤਾ ਮੱਰ ਚੁਕੇ ਸਨ ਤੇ ਉਸਦੀ ਮਾਂ ਜਿਹੜੀ ਕੀ ਬੜੇ ਪੁਰਾਣੇ ਸ਼ਿਅਾਲਾਂ ਦੀ ਸੀ, ਉਸਨੇ ਆਪਣੀ ਧੀ ਨੂੰ ਹੋਰ ਰਾਣੀਆਂ ਤੋਂ ਹਾਰਣਾ ਨਾ ਦਿੱਤਾ, ਪਰ ਜਦੋਂ ਵੀ ਕੋਈ ਔਖੀ ਘੜੀ ਆਂਦੀ, ਤਾਂ ਉਹ ਆਪਣੇ ਆਪ ਨੂੰ ਬੜਾ ਇਕੱਲਾ ਮਹਿਸੂਸ ਕਰਦੀ ਸੀ। ਸ਼ਾਇਦ ਸਮਰਾਟ ਕਿਰੀਤਸੁਖੇ ਤੇ ਰਾਣੀ ਕਿਰੀਤਸੁਖੇ ਦਾ ਪਿਛਲੇ ਜਨਮ ਦਾ ਕੋਈ ਰਿਸ਼ਤਾ ਰਿਹਾ ਹੋਏਗਾ ਕਿ ਉਨ੍ਹਾਂ ਦਾ ਇਕ ਹੀਰੋ ਵਰਗਾ ਰਾਜਕੁਮਾਰ ਜੰਮਿਆ। ਸਮਰਾਟ ਦਾ ਪਹਿਲੇ ਵੀ ਇਕ ਪੁੱਤਰ ਸੀ, ਜਿਹੜਾ ਕਿ ਉਪ-ਮਹਾਂਮੰਤਰੀ ਦੀ ਪਤਨੀ ਨਾਲ ਪੈਦਾ ਹੋਇਆ ਸੀ। ਲੋਕ ਸੋਚਦੇ ਸਨ ਕਿ ਸਮਰਾਟ ਦਾ ਉਹੀ ਪੁੱਤਰ ਰਾਜਗੱਦੀ ਤੇ ਬੈਠੇਗਾ ਪਰ ਰਾਜਕੁਮਾਰ ਹਿਕਾਰੂ ਗੋਜੀ ਦੇ ਰੂਪ ਦਾ ਕੋਈ ਮੁਕਾਬਲਾ ਨਹੀਂ ਸੀ।

(4 丁表)

ਸਮਰਾਟ ਬਚਪਨ ਤੋਂ ਹੀ ਰਾਜਕੁਮਾਰ ਹਿਕਾਰੂ ਗੋਜੀ ਦੀ ਕਦਰ ਕਰਦਾ ਸੀ, ਇਸ ਕਰਕੇ ਸਮਰਾਟ ਦੇ ਪਹਿਲੇ ਪੁੱਤਰ ਦੀ ਮਾਂ ਬੜੀ ਫਿਕਰਮੰਦ ਰਹਿੰਦੀ ਸੀ ਕਿ ਕਿਤੇ ਰਾਜਕੁਮਾਰ ਗੋਜੀ ਹੀ ਰਾਜਗੱਦੀ ਤੇ ਨਾ ਬੈਠ ਜਾਏ। ਜਦੋਂ ਵੀ ਸਮਰਾਟ ਰਾਣੀਆਂ ਦੇ ਕਮਰਿਆਂ ਅੱਗੋਂ ਲੰਘ ਕੇ ਰਾਣੀ ਕਿਰੀਤਸੁਖੇ ਨੂੰ ਮਿਲਣ ਲਈ ਜਾਂਦਾ ਸੀ ਤਾਂ ਬਾਕੀ ਦੀਆਂ ਰਾਣੀਆਂ ਬੜੀ ਈਰਖਾ ਕਰਦੀਆਂ ਸਨ। ਸਮਰਾਟ ਰਾਣੀ ਕਿਰੀਤਸੁਖੇ ਨੂੰ ਪਹਿਲੇ ਤੋਂ ਵੀ ਜ਼ਿਆਦਾ ਆਪਣੇ ਮਹੱਲ ਵਿਚ ਬੁਲਾਉਣ ਲਗਾ। ਜਦੋਂ ਵੀ ਰਾਣੀ ਕਿਰੀਤਸੁਖੇ ਸਮਰਾਟ ਨੂੰ ਮਿਲਣ ਬਰਾਡੇ ਪਾਰ ਕਰਕੇ ਰਾਜਮਹਲ ਲਈ ਜਾਂਦੀ ਤਾਂ ਉਸਦੇ ਰਸਤੇ ਵਿਚ ਕਈ ਸ਼ਰਾਰਤਾਂ ਕਰਕੇ ਉਸਨੂੰ ਪ੍ਰੇਸ਼ਾਨ ਕੀਤਾ ਜਾਂਦਾ। ਜਿਹੜੀਆਂ ਦਾਸੀਆਂ ਰਾਣੀ ਨੂੰ ਸਮਰਾਟ ਦੇ ਮਹੱਲ ਤਕ ਛੱਡਣ ਤੇ ਲੈਣ ਜਾਂਦੀਆਂ ਸਨ, ਉਨ੍ਹਾਂ ਦੇ ਚੋਗੇ ਥੱਲੇ ਮਿੱਟੀ ਨਾਲ ਭਰ ਜਾਂਦੇ ਸਨ। ਇਕ ਵਾਰੀ ਦੂਜਿਆਂ ਰਾਣੀਆਂ ਨੇ ਬਰਾਡੇ ਦੇ ਵਿਚਕਾਰ ਵਾਲੇ ਰਸਤੇ ਦਾ ਦਰਵਾਜ਼ਾ ਬੰਦ ਕਰਕੇ, ਰਾਣੀ ਕਿਰੀਤਸੁਖੇ ਨੂੰ ਬਹੁਤ

ਪ੍ਰਸ਼ਾਨ ਕੀਤਾ। ਇਹ ਵੇਖ ਕੇ ਸਮਰਾਟ ਨੂੰ ਰਾਣੀ ਕਿਰੀਤਸੁਬੇ ਤੇ ਹੋਰ ਵੀ ਤਰਸ ਆਉਣ ਲਗਾ। ਇਸ ਕਰਕੇ ਸਮਰਾਟ ਨੇ ਰਾਣੀ ਨੂੰ ਮਹਲ ਦੇ ਗੋਰਯੋਦੈਨ ਵਾਲੇ ਪਾਸੇ ਦਾ ਕਮਰਾ ਦੇ ਦਿੱਤਾ ਜਿਸ ਨਾਲ ਛੋਟੇ ਦਰਜੇ ਦੀ ਰਾਣੀ ਕਿਰੀਤਸੁਬੇ ਦਾ ਔਹਦਾ ਉੱਚਾ ਹੋ ਗਿਆ। ਕਮਰਾ ਬਦਲ ਜਾਣ ਵਾਲੀ ਰਾਣੀ ਦੀ ਨਰਾਜ਼ਗੀ ਹੋਰ ਵੀ ਵੱਧ ਗਈ।

(4 丁裏)

ਜਦੋਂ ਰਾਜਕੁਮਾਰ ਹਿਕਾਰੂ ਗੋਜੀ ਤਿੰਨ ਸਾਲ ਦਾ ਹੋਇਆ ਤਾਂ ਉਸਦੀ ਹਕਾਮਾ ਪਾਣ ਦੀ ਰਸਮ ਕੀਤੀ ਗਈ। ਇਹ ਰਸਮ ਵਿਚ ਰਾਜਕੁਮਾਰ ਗੋਜੀ ਦਾ ਰੂਪ ਪਹਿਲੇ ਰਾਜਕੁਮਾਰ ਦੇ ਰੂਪ ਤੋਂ ਵੱਧ ਸ਼ਾਨਦਾਰ ਲੱਗ ਰਿਹਾ ਸੀ ਤੇ ਦੂਜੀਆਂ ਰਾਣੀਆਂ ਵੀ ਉਸਨੂੰ ਨਾਪਸੰਦ ਨਹੀਂ ਕਰ ਸਕੀਆਂ। ਉਸੀ ਸਾਲ ਦੀਆਂ ਗਰਮੀਆਂ ਵਿਚ ਰਾਜਕੁਮਾਰ ਗੋਜੀ ਦੀ ਮਾਂ ਰਾਣੀ ਕਿਰੀਤਸੁਬੇ ਬਿਮਾਰ ਹੋ ਗਈ ਤੇ ਉਸਨੇ ਆਪਣੀ ਮਾਂ ਦੇ ਘਰ ਜਾਣ ਦੀ ਕੋਸ਼ਿਸ਼ ਕੀਤੀ ਪਰ ਸਮਰਾਟ ਨੇ ਉਸਨੂੰ ਜਾਣ ਨਾ ਦਿੱਤਾ। ਦਿਨੋਦਿਨ ਰਾਣੀ ਦੀ ਹਾਲਤ ਖਰਾਬ ਹੁੰਦੀ ਗਈ। ਕਿਰੀਤਸੁਬੇ ਦੀ ਮਾਂ ਨੇ ਅੱਖਾਂ ਵਿਚ ਹੰਝੂ ਭਰਕੇ ਆਪਣੀ ਬੇਟੀ ਨੂੰ ਆਪਣੇ ਪੁੱਤਰ ਰਾਜਕੁਮਾਰ ਹਿਕਾਰੂ ਗੋਜੀ ਨੂੰ ਰਾਜਮਹਲ ਵਿਚ ਹੀ ਛੱਡ ਕੇ ਆਪਣੇ ਘਰ ਆਉਣ ਦੀ ਇਜਾਜ਼ਤ ਸਮਰਾਟ ਤੋਂ ਮੰਗੀ। ਜਿਸਤਰਾਂ ਹੀ ਸਮਰਾਟ ਨੇ ਕਿਰੀਤਸੁਬੇ ਨੂੰ ਬੇਹੋਸ਼ ਹੁੰਦੇ ਵੇਖਿਆ ਤਾਂ ਉਸਨੇ ਕਿਰੀਤਸੁਬੇ ਨੂੰ ਆਪਣੇ ਨਾਲ ਕੀਤੇ ਵਾਦੇ ਯਾਦ ਕਰਾਏ ਪਰ ਰਾਣੀ ਕਿਰੀਤਸੁਬੇ ਕੋਈ ਜਵਾਬ ਨਾ ਦੇ ਸਕੀ।

(5 丁表)

ਬੜੇ ਦੁੱਖ ਭਰੇ ਚਿਹਰੇ ਨਾਲ ਉਹ ਪੂਰੀ ਤਰ੍ਹਾਂ ਬੇਹੋਸ਼ ਹੋ ਗਈ। ਉਸਨੂੰ ਬੇਹੋਸ਼ ਵੇਖ ਕੇ ਸਮਰਾਟ ਨੇ ਕਿਹਾ, "ਤੂੰ ਮੈਨੂੰ ਇਸ ਤਰ੍ਹਾਂ ਛੱਡ ਕੇ ਨਹੀਂ ਜਾ ਸਕਦੀ, ਅਸੀਂ ਇਕੱਠੇ ਮਰਨ ਦਾ ਵਾਦਾ ਕੀਤਾ ਸੀ।" ਇਹ ਸੁਣਦੇ ਹੀ ਰਾਣੀ ਕਿਰੀਤਸੁਬੇ ਹੋਸ਼ ਵਿਚ ਆ ਗਈ ਤੇ ਉਸਦਾ ਦਿਲ ਖੁਸ਼ੀ ਨਾਲ ਭਰ ਆਇਆ। ਉਸਨੇ ਫਿਰ ਵਾਕਾ ਸ਼ੈਲੀ ਵਿਚ ਇਕ ਕਵਿਤਾ ਸਮਰਾਟ ਨੂੰ ਸੁਣਾਈ।

"ਇਹੋ ਜਿਹਾ ਵਿਛੋੜਾ ਕਰੇ ਬੜਾ ਉਦਾਸ,

ਫਿਰ ਵੀ ਮੈਂ ਜੀਣ ਦੀ ਆਸ ਰੱਖਦੀ ਹਾਂ।"

ਇਹ ਸੁਣ ਕੇ ਸਮਰਾਟ ਨੇ ਉਸਨੂੰ ਪਾਲਕੀ ਵਿਚ ਬੈਠ ਕੇ ਮਾਂ ਦੇ ਘਰ ਜਾਣ ਦੀ ਇਜਾਜ਼ਤ ਦੇ ਦਿੱਤੀ। ਸਮਰਾਟ ਦਾ ਦਿਲ ਦੁੱਖ ਤੇ ਉਦਾਸੀ ਨਾਲ ਭਰ ਗਿਆ। ਸਮਰਾਟ ਨੇ ਇਕ ਹਰਕਾਰਾ ਰਾਣੀ ਕਿਰੀਤਸੁਬੇ ਦਾ ਹਾਲ ਪੁੱਛਣ ਲਈ ਭੇਜਿਆ। ਉਹ ਹਰਕਾਰਾ ਜਦੋਂ ਤਕ ਰਾਣੀ ਦਾ ਹਾਲ ਪੁੱਛ ਕੇ ਸਮਰਾਟ ਕੋਲ ਵਾਪਿਸ ਪਹੁੰਚਿਆ ਤਾਂ ਤਕ ਰਾਣੀ ਦੇ ਮਰਣ ਦੀ ਖ਼ਬਰ ਆ ਚੁਕੀ ਸੀ। ਇਹ ਸੁਨੇਹਾ ਮਿਲਦੇ ਹੀ ਸਮਰਾਟ ਆਪਣੀ ਸੁਖਬੁੱਧ ਖੇ ਬੈਠਾ। ਇਸ ਦੁੱਖ ਦੇ ਵੇਲੇ ਸਮਰਾਟ ਰਾਜਕੁਮਾਰ ਹਿਕਾਰੂ ਗੋਜੀ ਨੂੰ ਆਪਣੇ ਕੋਲ ਹੀ ਰੱਖਣਾ ਚਾਹੁੰਦਾ ਸੀ, ਪਰ ਇਸ ਸੋਗ ਦੀ ਘੜੀ ਵਿਚ ਪੁੱਤਰ ਨੂੰ ਰਾਜਮਹਲ ਵਿਚ ਨਹੀਂ ਰੱਖ ਸਕਦੇ ਸੀ, ਇਸਲਈ ਸਮਰਾਟ ਨੇ ਰਾਜਕੁਮਾਰ ਗੋਜੀ ਨੂੰ ਉਸਦੀ ਨਾਨੀ ਦੇ ਘਰ ਭੇਜ ਦਿੱਤਾ। ਰਾਜਕੁਮਾਰ ਗੋਜੀ ਨੂੰ ਵੀ ਇਸ ਦੁੱਖ ਦੀ ਘੜੀ ਵਿਚ ਕੁਝ ਸਮਝ ਨਹੀਂ ਆ ਰਿਹਾ ਸੀ। ਸਮਰਾਟ ਤੇ ਦਾਸੀਆਂ ਨੂੰ ਰੋਂਦੇ ਵੇਖ, ਰਾਜਕੁਮਾਰ ਗੋਜੀ ਹੋਰ ਵੀ ਪ੍ਰਸ਼ਾਨ ਹੋ ਗਿਆ।

(5 丁裏)

ਪਰੰਪਰਾ ਅਨੁਸਾਰ ਰਾਣੀ ਕਿਰੀਤਸੁਬੇ ਦਾ ਦਾਹ ਸਸਕਾਰ ਅਤਾਗੇ ਨਾਮਕ ਸਥਾਨ ਤੇ ਕਰ ਦਿੱਤਾ ਗਿਆ। ਉਸ ਦੀ ਖੁੱਫ਼ੀ ਮਾਂ ਆਪਣੀ ਧੀ ਦੀ ਚਿਖਾ ਦੇ ਸੂਝੇ ਨਾਲ ਆਪ ਵੀ ਉੱਡ ਜਾਣਾ ਚਾਹੁੰਦੀ ਸੀ। ਹੰਝੂ ਵਗਾਉਂਦੇ ਹੋਏ ਉਹ ਦਾਸੀਆਂ ਦੀ ਗੱਡੀ ਦੇ ਪਿਠੈਪੀਰੇ ਚਲੀ ਗਈ। ਸਮਰਾਟ ਨੇ ਰਾਣੀ ਕਿਰੀਤਸੁਬੇ ਦੇ ਮਰਦੇ ਹੀ, ਹਰਕਾਰੇ ਨੂੰ ਭੇਜ ਕੇ ਉਸਨੂੰ ਤੀਜੇ ਦਰਜੇ ਦਾ ਉੱਚਾ ਔਹਦਾ ਦੇ ਦਿੱਤਾ। ਜਦੋਂ ਵੀ ਸਮਰਾਟ ਵੱਡੇ ਰਾਜਕੁਮਾਰ ਨੂੰ ਵੇਖਦਾ ਸੀ, ਉਸਨੂੰ ਰਾਜਕੁਮਾਰ ਗੋਜੀ ਬਹੁਤ ਯਾਦ ਆਉਂਦਾ ਸੀ। ਉਸੀ ਵਕਤ ਉਹ ਕਿਸੀ ਦਾਸੀ ਯਾ ਦਾਈ ਨੂੰ ਭੇਜ ਕੇ, ਉਸਦਾ ਹਾਲ-ਚਾਲ ਮੰਗਵਾਂਦਾ ਸੀ। ਇਕ ਠੰਢੀ ਸ਼ਾਮ ਜਦੋਂ ਤੇਜ਼ ਹਵਾਵਾਂ ਚਲ ਰਹੀਆਂ ਸਨ, ਸਮਰਾਟ ਨੇ ਦਰਬਾਰਏ ਮਿਯੋਬੂ ਨੂੰ ਇਕ ਚਿੱਠੀ ਦੇ ਕੇ ਰਾਣੀ ਕਿਰੀਤਸੁਬੇ ਦੀ ਮਾਂ ਦੇ ਘਰ ਭੇਜਿਆ। ਉਸ ਚਿੱਠੀ ਵਿਚ ਸਮਰਾਟ ਨੇ ਵਾਕਾ ਦੀ ਇਕ ਕਵਿਤਾ ਲਿਖੀ।

"ਮਿਯਾਗੀ ਦੇ ਪੱਤਝੜ ਦੀ ਔਸ ਦੀਆਂ ਬੂੰਦਾਂ ਲੈ ਜਾਂਦੀਆਂ ਹਵਾਵਾਂ,  
ਮੇਰੇ ਖ਼ਿਆਲਾਂ ਵਿੱਚ ਆਉਂਦਾ ਏਂ ਤੂੰ ਹਾਗੀ ਦਾ ਫੁੱਲ ਬਣਕੇ ।"  
ਦਰਬਾਰਣ ਮਿਯੋਬੂ ਨੇ ਵੀ ਇਕ ਕਵਿਤਾ ਰਾਣੀ ਕਿਰੀਤਸੁਬੇ ਦੀ ਮਾਂ ਨੂੰ ਸੁਣਾਈ ।  
(6 丁表)

"ਜਿਵੇਂ ਟਿੱਡੀਆਂ ਵੀ ਆਪਣਾ ਦੱਮ ਲਗਾਕੇ ਰੋਂਦੀਆਂ ਨੇ,  
ਇਹ ਅਥਰੂ ਵੀ ਪੂਰੀ ਰਾਤ ਲਗਾਤਾਰ ਵਹਿੰਦੇ ਨੇ ।"

ਰਾਣੀ ਕਿਰੀਤਸੁਬੇ ਦੀ ਮਾਂ ਨੇ ਵੀ ਜਵਾਬ ਵਿਚ ਵਾਕਾ ਦੀ ਇਕ ਕਵਿਤਾ ਸਮਰਾਟ ਨੂੰ ਲਿਖੀ ।

"ਬੰਜਰ ਘਾਹ ਦੇ ਖੇਤਾਂ ਵਿਚ ਟਿੱਡੇ ਹੋਰ ਵੀ ਜ਼ੋਰ ਦੇ ਰੋਂਦੇ ਨੇ,  
ਬੱਦਲਾਂ ਵਿਚ ਦਿਸਦਾ ਮਨੁੱਖ ਹੋਰ ਵੀ ਅਥਰੂ ਵਗਾਉਂਦਾ ਏ ।"

ਇਹ ਕੋਈ ਉਪਹਾਰ ਦੇਣ ਦਾ ਵੇਲਾ ਨਹੀਂ ਸੀ ਇਸਲਈ ਕਿਰੀਤਸੁਬੇ ਦੀ ਮਾਂ ਨੇ ਚਿੱਠੀ ਦੇ ਨਾਲ ਆਪਣੀ ਧੀ ਦੇ ਕੱਪੜੇ ਤੇ ਹਾਰ -  
ਸਿੰਗਾਰ ਦੀਆਂ ਚੀਜ਼ਾਂ ਸਮਰਾਟ ਨੂੰ ਭਿਜਵਾ ਦਿੱਤੀਆਂ । ਇਕ ਸੋਵਿਕਾ ਕਿਰੀਤਸੁਬੇ ਦੀ ਮਾਂ ਵੱਲੋਂ ਵਾਕਾ ਵਿਚ ਆਯਾ ਜਵਾਬ ਸਮਰਾਟ  
ਨੂੰ ਸੁਣਾ ਰਹੀ ਸੀ ।

"ਹਵਾਵਾਂ ਤੋਂ ਸੁਰੱਖਿਆ ਦੇਣ ਵਾਲਾ ਚਲਾ ਗਿਆ,  
ਉਸ ਹਾਗੀ ਦੇ ਫੁੱਲ ਦਾ ਖ਼ਿਆਲ ਮੈਨੂੰ ਬੇਚੈਨ ਕਰਦਾ ਏ ।"

ਦਰਬਾਰਣ ਨੇ ਸਮਰਾਟ ਨੂੰ ਕਿਰੀਤਸੁਬੇ ਦੀ ਮਾਂ ਤੋਂ ਰਾਜਕੁਮਾਰ ਹਿਕਾਰੂ ਗੋਜੀ ਬਾਰੇ ਦੱਸਿਆ। ਉਸਨੇ ਕਿਰੀਤਸੁਬੇ ਦੀਆਂ ਨਿਸ਼ਾਨੀਆਂ  
ਵੀ ਵਿਖਾਈਆਂ। ਉਹ ਸਾਰੀਆਂ ਨਿਸ਼ਾਨੀਆਂ ਵੇਖ ਕੇ ਸਮਰਾਟ ਨੇ ਇਕ ਹੋਰ ਵਾਕਾ ਦੀ ਕਵਿਤਾ ਸੁਣਾਈ ।

"ਯਾਗ ਗੁਇਏ ਨੂੰ ਤਲਾਸ਼ਣ ਗਿਆ ਜਾਦੂਗਰ ਜੇ ਮੇਰੇ ਕੋਲ ਹੁੰਦਾ,  
ਤਾਂ ਮੈਂ ਵੀ ਉਸਨੂੰ ਉਸ ਰੂਹ ਦਾ ਪਤਾ ਤਲਾਸ਼ਣ ਲਈ ਭੇਜਦਾ ।"

ਲੰਬੇ ਅਰਸੇ ਤੋਂ, ਸਮਰਾਟ ਨੇ ਆਪਣੀ ਪਹਿਲੀ ਰਾਣੀ ਕੋਕੀਦੇਨ ਨੂੰ ਬੁਲਾਵਾ ਨਹੀਂ ਭੇਜਿਆ ਸੀ । ਰਾਣੀ ਕੋਕੀਦੇਨ ਚਾਂਦਨੀ ਰਾਤ ਵਿਚ  
ਸੰਗੀਤ ਦਾ ਅਨੰਦ ਉਠਾ ਰਹੀ ਸੀ । ਉਸਦਾ ਸੰਗੀਤ ਸੁਣ ਕੇ ਰਾਜਮਹਲ ਵਿਚ ਕੰਮ ਕਰਨ ਵਾਲੇ ਅਧਿਕਾਰੀ ਤੇ ਸੇਵਕ - ਸੇਵਕਾਵਾਂ  
ਸੋਚ ਰਹੇ ਸੀ ਕਿ, "ਇਹ ਕੋਈ ਚੰਗੀ ਗੱਲ ਨਹੀਂ ।" ਉਨ੍ਹਾਂ ਨੂੰ ਰਾਜਕੁਮਾਰ ਗੋਜੀ ਦੀ ਨਾਨੀ ਦਾ ਖਿਆਲ ਆ ਰਿਹਾ ਸੀ । ਸਮਰਾਟ ਨੇ  
ਰਾਣੀ ਕਿਰੀਤਸੁਬੇ ਦੀ ਮਾਂ ਦਾ ਫਿਕਰ ਕਰਕੇ ਇਕ ਵਾਕਾ ਦੀ ਕਵਿਤਾ ਕਹੀ ।

"ਇਸ ਮਹੱਲ ਦੇ ਬਦਲਾਂ ਤੋਂ ਪਰੇ ਵੀ,  
ਪੱਤਝੜ ਦਾ ਹਨੇਰਾ ਇਸ ਚੰਨ ਨੂੰ ਹੋਰ ਵੀ ਕਾਲਾ ਕਰ ਰਿਹਾ ਹੈ,  
ਤੁਸੀਂ ਉਨ੍ਹਾਂ ਉਜਾੜ ਘਾਹ ਦੇ ਖੇਤਾਂ ਵਿਚ  
ਕਿਵੇਂ ਰਹਿੰਦੇ ਹੋ?"

ਕਈ ਮਹੀਨੇ ਗੁਜ਼ਰ ਗਏ । ਰਾਜਕੁਮਾਰ ਗੋਜੀ ਰਾਜਮਹਲ ਵਿਚ ਵਾਪਿਸ ਆ ਗਿਆ। ਉਹ ਇਤਨਾ ਸੋਹਣਾ ਨੌਜਵਾਨ ਦਿਸਦਾ ਸੀ ਕਿ  
ਲੋਕੀ ਫਿਕਰਮੰਦ ਸਨ ਕਿ ਕਿਤੇ ਪੁਰਾਤਮਾ ਉਸਨੂੰ ਖੋਹ ਨਾ ਲਵੇ ।

(7 丁表)

ਅਗਲੇ ਸਾਲ ਬਸੰਤ ਦੀ ਰੁੱਤ ਵਿਚ, ਜਦੋਂ ਵੱਡੇ ਰਾਜਕੁਮਾਰ ਨੂੰ ਰਾਜਗੱਦੀ ਤੇ ਬਿਠਾਣ ਦਾ ਵਕਤ ਆਯਾ, ਤਾਂ ਸਮਰਾਟ ਚਾਹੁੰਦਾ ਸੀ ਕਿ ਰਾਜਕੁਮਾਰ ਹਿਕਾਬੂ ਗੋਂਜੀ ਨੂੰ ਰਾਜਗੱਦੀ ਤੇ ਬਿਠਾਇਆ ਜਾਏ। ਸਮਰਾਟ ਜਾਣਦਾ ਸੀ ਕਿ ਉਸਦੀ ਇਹ ਇੱਛਾ ਕੋਈ ਵੀ ਸਵੀਕਾਰ ਨਹੀਂ ਕਰੇਗਾ। ਇਸਲਈ ਉਸਨੇ ਆਪਣੀ ਇਕ ਇੱਛਾ ਚੇਹਰੇ ਤੇ ਨਾ ਆਣ ਦਿੱਤੀ। ਦੂਜੇ ਪਾਸੇ ਧੀ ਦੇ ਗ਼ਮ ਵਿਚ ਰਾਣੀ ਕਿਰੀਤਸੁਬੇ ਦੀ ਮਾਂ ਗੁਜ਼ਰ ਗਈ। ਸਮਰਾਟ ਨੂੰ ਇਕ ਹੋਰ ਸਦਮਾ ਲਗਾ।

ਜਦੋਂ ਰਾਜਕੁਮਾਰ ਹਿਕਾਬੂ ਗੋਂਜੀ ਸੱਤ ਸਾਲ ਦਾ ਹੋਇਆ ਤਾਂ ਸਮਰਾਟ ਨੇ ਉਸਦੇ ਵਿਦਿਆ ਗ੍ਰਹਿਣ ਕਰਨ ਦੀ ਰਸਮ ਕੀਤੀ। ਹਿਕਾਬੂ ਗੋਂਜੀ ਨੇ ਸਿਰਫ਼ ਵਿਦਿਆ ਹੀ ਨਹੀਂ, ਕੋਤੇ ਤੇ ਬਾਂਸੁਰੀ ਵਰਗੇ ਸੰਗੀਤ ਦੇ ਯੰਤਰ ਵਜਾਣ ਵਿਚ ਵੀ ਨਿਪੁਣਤਾ ਹਾਸਿਲ ਕਰਕੇ ਰਾਜਮਹਲ ਦੇ ਲੋਕਾਂ ਨੂੰ ਅਚੰਭਿਤ ਕਰ ਦਿੱਤਾ। ਉਸ ਵਕਤ ਕੋਰੀਆ ਮੁਲਕ ਤੋਂ ਚਿਹਰਾ ਪੜ੍ਹਨ ਵਾਲਾ ਇਕ ਜੋਤਸ਼ੀ ਆਇਆ। ਉਸਨੇ ਹਿਕਾਬੂ ਗੋਂਜੀ ਦੀ ਯੋਗਤਾ ਤੇ ਹੁਨਰ ਦੀ ਬੜੀ ਉਸਤੱਤ ਕੀਤੀ। ਜੋਤਸ਼ੀ ਨੇ ਹਿਕਾਬੂ ਗੋਂਜੀ ਦਾ ਨਾਂ ਪ੍ਰਿਯਦਰਸ਼ਨ ਰਾਜਕੁਮਾਰ ਰੱਖ ਦਿੱਤਾ ਤੇ ਉਸਨੂੰ ਬਹੁਤ ਸਾਰੇ ਉਪਹਾਰ ਵੀ ਭੇਟ ਦਿੱਤੇ। ਸਮਰਾਟ ਨੇ ਪ੍ਰਿਯਦਰਸ਼ਨ ਰਾਜਕੁਮਾਰ ਹਿਕਾਬੂ ਗੋਂਜੀ ਨੂੰ ਰਾਜਸੀ ਪਰਿਵਾਰ ਤੋਂ ਹਟਾ ਕੇ, ਮਿਨਾਮੇਤੇ ਵੰਸ਼ ਦਾ ਇਕ ਸਾਧਾਰਣ ਨਾਗਰਿਕ ਬਣਾ ਦਿੱਤਾ।

(7 丁裏)

(ਤਸਵੀਰ ਦੂਜੀ): ਕੋਰੀਆ ਤੋਂ ਆਏ ਜੋਤਸ਼ੀ ਵੱਲੋਂ ਆਪਣੀ ਭਵਿੱਖ ਬਾਣੀ ਸੁਣਦਾ ਹੋਇਆ ਸੱਤ ਸਾਲ ਦਾ ਹਿਕਾਬੂ ਗੋਂਜੀ

(8 丁表)

ਕਈ ਸਾਲ ਬੀਤ ਗਏ, ਸਮਰਾਟ ਕਿਰੀਤਸੁਬੇ ਦੀ ਮੌਤ ਨੂੰ ਭੁਲਾ ਨਹੀਂ ਸਕਿਆ ਤੇ ਕੋਈ ਵੀ ਗੱਲ ਉਸਨੂੰ ਮਨ ਨੂੰ ਦਿਲਾਸਾ ਨਾ ਦੇ ਸਕੀ। ਰਾਜਮਹਲ ਦੀ ਇਕ ਸੇਵਕਾ ਨੇ ਸਮਰਾਟ ਨੂੰ ਪਿਛਲੇ ਸਮਰਾਟ ਦੀ ਚੌਥੀ ਰਾਜਕੁਮਾਰੀ ਫੁਜੀਤਸੁਬੇ ਦੇ ਬਾਰੇ ਦੱਸਿਆ। ਫੁਜੀਤਸੁਬੇ ਦੀ ਸ਼ਕਲ ਸੁਰਗਵਾਸੀ ਕਿਰੀਤਸੁਬੇ ਨਾਲ ਬਹੁਤ ਮਿਲਦੀ-ਜੁਲਦੀ ਸੀ।

ਉਹ ਬੜੇ ਵੱਡੇ ਰਾਜਸੀ ਪਰਿਵਾਰ ਵਿਚ ਪੈਦਾ ਹੋਈ ਸੀ। ਹੌਲੇਹੌਲੇ ਸਮਰਾਟ ਦਾ ਮਨ ਫੁਜੀਤਸੁਬੇ ਦੀ ਤਰਫ਼ ਝੁੱਕਦਾ ਗਿਆ। ਰਾਜਕੁਮਾਰ ਹਿਕਾਬੂ ਗੋਂਜੀ ਵੀ ਆਪਣੇ ਪਿਤਾ ਦੇ ਨਾਲ ਅਕਸਰ ਫੁਜੀਤਸੁਬੇ ਨੂੰ ਮਿਲਣ ਲਈ ਜਾਂਦਾ ਸੀ। ਸਮਰਾਟ ਹਿਕਾਬੂ ਗੋਂਜੀ ਤੇ ਫੁਜੀਤਸੁਬੇ, ਦੋਨਾਂ ਨੂੰ ਬਹੁਤ ਪਿਆਰ ਕਰਦਾ ਸੀ। ਇਸ ਕਰਕੇ ਲੋਕੀ ਫੁਜੀਤਸੁਬੇ ਨੂੰ ਵੀ ਪ੍ਰਿਯਦਰਸ਼ਨ ਰਾਜਕੁਮਾਰ ਹਿਕਾਬੂ ਗੋਂਜੀ ਦੀ ਤਰਾਂ ਪ੍ਰਿਯਦਰਸ਼ਨੀ ਰਾਜਕੁਮਾਰੀ ਬੁਲਾਣ ਲੱਗ ਪਏ।

ਬਾਰਾਂ ਸਾਲ ਦੀ ਉਮਰ ਵਿਚ ਹਿਕਾਬੂ ਗੋਂਜੀ ਦੀ ਬਾਲਿਗ ਹੋਣ ਦੀ ਰਸਮ ਨਿਭਾਈ ਗਈ। ਇਸ ਰਸਮ ਵਿਚ ਮਹਾਮੰਤ੍ਰੀ ਦੀ ਧੀ ਆਉਈ, ਜਿਸਦੀ ਮਾਂ ਇਕ ਰਾਜਸੀ ਪਰਿਵਾਰ ਤੋਂ ਸੀ, ਨੂੰ ਹਿਕਾਬੂ ਗੋਂਜੀ ਦੀ ਪਤਨੀ ਬਣਾਣ ਦਾ ਫ਼ੈਸਲਾ ਲਿਆ ਗਿਆ।

(8 丁裏)

(ਤਸਵੀਰ ਤੀਜੀ): ਬਾਰਾਂ ਸਾਲ ਦੀ ਉਮਰ ਵਿਚ ਹਿਕਾਬੂ ਗੋਂਜੀ ਦੀ ਬਾਲਿਗ ਹੋਣ ਦੀ ਰਸਮ ਦੀ ਤਸਵੀਰ

(9 丁表)

ਇਸ ਸੁਹਾਣੇ ਸਮੇਂ ਤੇ ਸਮਰਾਟ ਨੇ ਇਕ ਵਾਕਾ ਦੀ ਕਵਿਤਾ ਪੜ੍ਹੀ।

“ਬਾਲਿਗ ਉਮਰ ਦੇ ਕੇਸਾਂ ਦੀ ਪਹਿਲੀ ਗੰਢ ਦੇ ਨਾਲ,  
ਕੀ ਤੂੰ ਵਿਆਹ ਦੀ ਲੰਬੀ ਉਮਰ ਦੀ ਵੀ ਇੱਛਾ ਕੀਤੀ?”

ਉਪਮਹਾਮੰਤ੍ਰੀ ਨੇ ਇਸ ਕਵਿਤਾ ਦੇ ਜਵਾਬ ਵਿਚ, ਇਕ ਹੋਰ ਕਵਿਤਾ ਪੜ੍ਹੀ ।

"ਇਸ ਗੂੜ੍ਹੇ ਬੈਂਗਣੀ ਰੰਗ ਦੇ ਧਾਗੇ ਦੀ ਗੰਢ,

ਕਿਸਮਤ ਦੇ ਰੰਗ ਵਰਗੀ ਗੂੜ੍ਹੀ ਹੈ।

ਇਸ ਰਿਸਤੇ ਦਾ ਰੰਗ ਕਦੀ ਵੀ ਫਿੱਕਾ ਨਾ ਪਏ.. "

ਸ਼ਾਹੀ ਅਸਤਬਲ ਵੱਲੋਂ ਮਹਾਮੰਤ੍ਰੀ ਨੂੰ ਇਕ ਘੋੜਾ ਤੇ ਸ਼ਾਹੀ ਸ਼ਿਕਾਰ - ਖਾਨੇ ਵੱਲੋਂ ਇਕ ਬਾਜ਼ ਭੇਟ ਦਿੱਤਾ ਗਿਆ ।

ਰਾਜਮਹਲ ਦੇ ਉੱਚੇ-ਉੱਚੇ ਅਧਿਕਾਰੀ ਤੇ ਰਾਜਕੁਮਾਰਾਂ ਨੇ ਰਾਜਮਹਲ ਦੀਆਂ ਪੌੜੀਆਂ ਤੇ ਨਜ਼ਰਾਨੇ ਪਾਣ ਲਈ ਲੰਬੀਆਂ-ਲੰਬੀਆਂ ਕਤਾਰਾਂ ਲਾਈਆਂ । ਸਾਰਿਆਂ ਨੂੰ ਆਪਣੇ ਔਹਦੇ ਦੇ ਮੁਤਾਬਕ ਨਜ਼ਰਾਨੇ ਮਿਲੇ ।

ਉਸ ਰਾਤ, ਪ੍ਰਿਯਦਰਸ਼ਨ ਰਾਜਕੁਮਾਰ ਹਿਕਾਰੂ ਗੋਜੀ ਮਹਾਮੰਤ੍ਰੀ ਦੇ ਨਿਵਾਸ ਸਥਾਨ ਤੇ ਗਿਆ ।

(ਇਸ ਵਕਤ, ਹਿਕਾਰੂ ਗੋਜੀ ਦੀ ਉਮਰ ਬਾਰ੍ਹਾਂ ਤੇ ਉਸਦੀ ਪਤਨੀ ਆਉਈ ਦੀ ਉਮਰ ਸੋਲ੍ਹਾਂ ਸਾਲ ਸੀ।)

ਸ਼ਾਹੀ ਸ਼ਿਕਾਰ - ਖਾਨੇ ਦੇ ਮੁੱਖ ਪ੍ਰਧਾਨ, ਮਹਾਮੰਤ੍ਰੀ ਦੇ ਪੁੱਤਰ ਦਾ ਵਿਆਹ, ਉਪਮਹਾਮੰਤ੍ਰੀ ਦੀ ਚੌਥੀ ਧੀ ਨਾਲ ਕਰਾਇਆ ਜਾ ਰਿਹਾ ਸੀ। ਉਸੀ ਵਕਤ ਸਮਰਾਟ ਨੇ ਹਿਕਾਰੂ ਗੋਜੀ ਨੂੰ ਆਪਣੇ ਕੋਲ ਵਾਪਸ ਬੁਲਾ ਲਿਆ ।

(9 丁裏)

ਇਸਲਈ ਹਿਕਾਰੂ ਗੋਜੀ ਮਹਾਮੰਤ੍ਰੀ ਦੇ ਨਿਵਾਸ ਸਥਾਨ ਤੇ ਜ਼ਿਆਦਾ ਦੇਰ ਅਰਾਮ ਨਾਲ ਵਕਤ ਨਾ ਗੁਜ਼ਾਰ ਸਕਿਆ । ਹਿਕਾਰੂ ਗੋਜੀ ਅਕਸਰ ਫੁਜੀਤਸੁਬੋ ਦੇ ਬਾਰੇ ਸੋਚਿਆ ਕਰਦਾ ਸੀ । ਉਸਨੂੰ ਲੱਗਦਾ ਸੀ ਕਿ ਫੁਜੀਤਸੁਬੋ ਵਰਗੀ

ਦੁਨੀਆਂ ਵਿਚ ਕੋਈ ਹੋਰ ਨਹੀਂ ਹੋ ਸਕਦੀ । ਉਹ ਉਸ ਵਰਗੀ ਹੀ ਕਿਸੀ ਔਰਤ ਨਾਲ ਵਿਆਹ ਕਰਨਾ ਚਾਹੁੰਦਾ ਸੀ । ਉਸਦਾ ਆਪਣੀ

ਪਤਨੀ ਆਉਈ ਨਾਲ ਕੋਈ ਖਾਸ ਲਗਾਵ ਵੀ ਨਹੀਂ ਸੀ । ਵੱਡਾ ਹੋਕੇ ਉਹ ਪਹਿਲੇ ਦੀ ਤਰ੍ਹਾਂ ਫੁਜੀਤਸੁਬੋ ਦੇ ਨਿਵਾਸ ਸਥਾਨ ਤੇ ਵੀ

ਨਹੀਂ ਜਾਂਦਾ ਸੀ । ਕਦੀ - ਕਦੀ ਕੋਤੇ ਤੇ ਬੰਸਰੀ ਦੇ ਨਾਲ ਆਉਂਦੀ ਫੁਜੀਤਸੁਬੋ ਦੀ ਆਵਾਜ਼ ਸੁਣਕੇ ਹਿਕਾਰੂ ਗੋਜੀ ਆਪਣੇ ਆਪ ਨੂੰ

ਤਸੱਲੀ ਦੋਂਦਾ ਹੋਇਆ ਆਪਣੇ ਮਹਲ ਵਿਚ ਹੀ ਰਹਿ ਕੇ ਆਪਣਾ ਸਾਰਾ ਵਕਤ ਗੁਜ਼ਾਰਦਾ ਸੀ ।

\*\*\*\*\*

# রাজকুমার জ্যোতির্ময়ের কাহিনী

## প্রথম অধ্যায়: খিরিৎসুবো

অনুবাদক: তারিক শেখ

“গেঞ্জির কাহিনী”র উৎস

সম্রাট মুরাকামী-র দশম রাজকন্যা দাইসাই-ইন সম্রাট ইচিজো-র মহারানী জোতোমনইন কে যখন জিজ্ঞাসা করলেন, “কোনো নতুন কাহিনী আছে কি?”, তখন জোতোমনইন শিকিবুকে ডেকে বললেন “একটি নতুন কাহিনী লিখে আনুন”। শিকিবু নিজেকে ইশিয়ামা মন্দিরে বন্দি করে প্রার্থনা আরম্ভ করলেন। আশ্বিন মাসের মনোরম পূর্ণিমা চাঁদ বিওয়া হ্রদের জলে প্রতিফলিত হতেই শিকিবুর মস্তিষ্কে কাহিনীর উৎপত্তি হয় এবং “সুমা” নামক অধ্যায় থেকে লেখা শুরু করেন। “গেঞ্জির কাহিনী”র অধ্যায়ের সংখ্যা নির্ধারণ করা হয় বৌদ্ধ ধর্মের তেন্দাই পন্থের ৬০টি অধ্যায়ের অনুযায়ী। অধ্যায়ের নামগুলি চতুরার্য সত্যের মার্গগুলিকে (সকল বস্তু অস্তিবান, সকল বস্তু অস্বিহীন, সকল বস্তু অস্তিবান এবং অস্বিহীন, সকল বস্তু না অস্তিবান না অস্বিহীন) ভিত্তি করে রাখা হয়েছিল। অধ্যায়ের নামগুলি প্রথমত গদ্য থেকে, দ্বিতীয়ত পদ্য থেকে, তৃতীয়ত গদ্য এবং পদ্য দুটি থেকেই, এবং চতুর্থত গদ্য এবং পদ্য কিছুতেই নেই এমন ভাবে বাছাই করা হয়। প্রথমে লেখিকার নাম ‘তো শিকিবু’ হিসেবে প্রচলিত হলেও, এই কাহিনীর চরিত্র ‘মুরাসাকি নো উয়ে’র বৃত্তান্ত এতটাই চিত্তাকর্ষক হয়ে ওঠে যে লেখিকার নাম পরবর্তী কালে ‘মুরাসাকি শিকিবু’তে পরিবর্তিত করা হয়। এমনও লোককাহিনী আছে যে মুরাসাকি শিকিবু আসলে অবলোকিতেশ্বর বোধিসত্ত্বের এক অবতার। দাল্লা-ইন মন্দিরের উচ্চ পুরোহিতের কাছে তিনি তেন্দাই পন্থের “এক মন তিন চিন্তা” দর্শনের জ্ঞান অর্জন করেছিলেন।

মুরাসাকি শিকিবুর বংশাবলী :

কানেসুকে (৭সুৎসুমি মধ্যবর্তী পরামর্শদাতা) ---- কোরেমাসা (ইনাবার প্রশাসক)  
---- এচিজেনের প্রশাসক থামেতোকি ---- কন্যা (মুরাসাকি শিকিবু)

ওনার মা তামেনোবুর কন্যা কেন্-শি।

< প্রথম চিত্র > আশ্বিন মাসের মনোরম রাতে ইশিয়ামা মন্দিরে মুরাসাকি শিকিবুর “গেঞ্জির কাহিনী” লেখা শুরু করার দৃশ্য।

[小見出し 1]

কোন সম্রাটের যুগ ছিল তখন? প্রাসাদের অসংখ্য রানীদের মধ্যে একটি মহিলাকে সম্রাট বিশেষ স্নেহ করতেন, যাঁর পদ তেমন উঁচু ছিল না। ( “কোন সম্রাটের যুগ” বলতে আসলে দাইগো সম্রাটের যুগ, এবং যে মহিলাকে “সম্রাট বিশেষ স্নেহ করতেন”, তিনি হলেন থিড়িৎসুবো নামক এক রাজ-পরিচারিকা। )

প্রাসাদের মধ্যে শোশোশা নামক যে অট্টালিকা আছে তার আরেক নাম নানীৎসুবো। শিগেইশা অট্টালিকার আরেক নাম থিরিৎসুবো। হিগিযোশা অট্টালিকার আরেক নাম ফুজিৎসুবো। গিয়োকাসা অট্টালিকার আরেক নাম উমেৎসুবো। শোহোশা অট্টালিকার আরেক নাম খান্নারি-নো-ৎসুবো।

থিরিৎসুবো অট্টালিকায় যে পরিচারিকা থাকতেন, তাকে সম্রাট বিশেষ পছন্দ করতেন, এবং তাই সম্রাটের আরেক নাম ছিল “সম্রাট থিরিৎসুবো”। অন্যান্য পরিচারিকারা এতে অত্যন্ত ঈর্ষা বোধ করতেন এবং থিরিৎসুবোর প্রতিদিন সম্রাটের পাশে থাকাকে দ্বেষের চোখে দেখতেন।

[小見出し 2]

হয়তো অন্য পরিচারিকাদের ঈর্ষার কারণেই, থিরিৎসুবোর শরীর ক্রমশ দুর্বল হয়ে পরে (বেশ কঠিন রোগ)। থিরিৎসুবো অসহায় বোধ করার ফলে নিজের বাড়িতে ফিরে বসবাস করা শুরু করলেন এবং থিরিৎসুবোর অনুপস্থিতিতে সম্রাট আরও দুঃখবোধ করতে লাগলেন। নানান রকম গুজব ছড়ানো সত্ত্বেও সম্রাট নিজের প্রবল অনুভূতিকে নিয়ন্ত্রণ করতে পারছিলেন না।

[小見出し 3]

চীনেও একই রকম একটি প্রেমের সম্বন্ধের কারণে বিশৃঙ্খলা ছড়িয়ে পরে এবং নানান

সমস্যার সৃষ্টি হয়। আশেপাশের মানুষকেও সম্রাটের এই পরিস্থিতির কারণে নানান রকম অসুবিধার মুখোমুখি হতে হয়, এবং সম্রাটের তুলনা ইয়াং গুইফেই-এর প্রেমে বিভোর হওয়া চীনের সম্রাট শুএনসুঙ-এর সাথে করা শুরু হলো।

[小見出し 4]

এই থিরিংসুবো নামক পরিচারিকার বাবা আগেই দেহত্যাগ করেছিলেন, এবং তাঁর মা (বাবার প্রধান পত্নী) বেশ সম্ভ্রান্ত পরিবারের মেয়ে ছিলেন। একটু পুরোনো ধ্যান ধারণার মানুষ ছিলেন বলে তিনি পুরোপুরি চেষ্টা করতেন যাতে তাঁর কন্যা অন্যান্য রাজ-পরিচারিকাদের থেকে পিছিয়ে না পড়ে। কিন্তু কিছু জরুরি দরকার পড়লে এমন কেউ ছিল না যার কাছে তিনি যেতে পারতেন, এবং এই কারণে তিনিও খুবই অসহায় বোধ করতেন।

[小見出し 5]

হয়তো আগের জন্মেও সম্রাট থিরিংসুবো এবং পরিচারিকা থিরিংসুবোর কোনো গভীর সম্বন্ধ ছিল, তাই তাদের এক উজ্জ্বল রঞ্জের মতো রাজকুমার জন্ম নেয়। (এই রাজকুমারকে আমরা প্রভু হিকারু, অর্থাৎ প্রভু জ্যোতির্ময়, বলি) সম্রাটের প্রথম পুত্র সন্তান তাঁর প্রধান মন্ত্রীর কন্যার গর্ভ থেকে জন্ম নেয় বলে সেই সন্তানেরই পরবর্তীকালে যুবরাজ হওয়া নিশ্চিত ছিল, কিন্তু এই তরুণ প্রভু হিকারু গেঞ্জির অপূর্ব রূপের সাথে কোনো তুলনা অসম্ভব হয়ে উঠেছিল।

[小見出し 6]

হিকারু গেঞ্জির জন্ম থেকেই সম্রাট তাকে অত্যন্ত স্নেহ করতেন বলে সম্রাটের প্রথম পুত্র সন্তানের মা এই চিন্তায় মগ্ন হলেন যে হতে পারে হিকারু কেই যুবরাজ করে দেওয়া যেতে পারে।

[小見出し 8]

সম্রাট রাজপ্রাসাদের অন্যান্য মহিলাদের ঘরের দরজা পার করে থিরিংসুবোর ঘরে বারবার যাওয়া আশা করায় সেই সব মহিলারা ঈর্ষা বোধ করতেন সেটা স্বাভাবিক। সম্রাটের ঘরে থিরিংসুবোর পুনঃপুনঃ ডাক পড়তে থাকলো। রাজপ্রাসাদের বিভিন্ন বারান্দা বা সংযোগ স্থাপক পথ, যেগুলি থিরিংসুবো যাতায়াতের জন্য ব্যবহার

করতেন, সেগুলিতে নানান রকম দুষ্ট আচরণ করে রাখা হতো। ওনার সাথে যে সঙ্গিনীরা যাওয়া আশা করতো তাদের গোড়ালি পর্যন্ত লম্বা কাপড়ে মাটি লেগে যাওয়ার মতো অসহনীয় ঘটনাও ঘটতো। আরেকবার যখন থিরিংসুবোকে একটি অভ্যন্তরীণ বারান্দার মধ্যে দিয়ে যেতেই হতো, সেটির দরজা বন্ধ করে দিয়ে, একাধিক মহিলাদের সহযোগিতা নিয়ে থিরিংসুবোকে চারিদিক থেকে বন্ধ করে তাকে অতিরিক্ত অসুবিধার মুখে ফেলা হয়।

[小見出し 9]

সম্রাটের থিরিংসুবোর প্রতি দয়ার ভাব ক্রমশ বাড়তে থাকলো এবং উনি থিয়োরিয়োদেন নামক প্রাসাদের অংশের মহিলা বাসিন্দাকে অন্য জায়গায় স্থান পরিবর্তন করিয়ে থিরিংসুবোকে আরেকটি ঘর বানিয়ে দিলেন। যে মহিলাকে সরিয়ে দেয়া হয় তারও অসুবিধার নিশ্চই শেষ ছিল না।

[小見出し 10]

হিকারু গেঞ্জির বয়স ৩ বছর পূর্ণ হওয়ায় পাংলুন পরার অনুষ্ঠান (হাকামা-গি) আয়োজিত হয়। অনুষ্ঠানের আড়ম্বর ততটাই ছিল যতটা প্রথম রাজকুমারের অনুষ্ঠানে ছিল। তাঁর সৌন্দর্য এবং স্বভাব এতই অসাধারণ ছিল যে অন্যান্য মহিলারাও তাকে অপছন্দ করতে পারছিলো না।

[小見出し 11]

সেই বছরের গ্রীষ্মকালে হিকারু গেঞ্জির মা থিরিংসুবো অসুখে পরে নিজের বাড়ি যাওয়ার পরিকল্পনা শুরু করলেন। সম্রাট ততদিনে থিরিংসুবোর রুগ্ন অবস্থায় অভ্যস্ত হয়ে উঠেছিলেন এবং তাই ওনাকে কিছুতেই বাড়ি ফিরে যেতে দিচ্ছিলেন না। যখন থিরিংসুবোর শরীর নিতান্তই দুর্বল হয়ে পড়লো, তখন থিরিংসুবোর মা অনেক কান্না কাটি করে হিকারু গেঞ্জিকে প্রাসাদে ছেড়ে শুধু থিরিংসুবোকে ফিরে যাওয়ার অনুমতি করিয়ে নিলেন।

[小見出し 12]

সম্রাট তাঁর সুন্দরী থিরিংসুবোকে দুর্বল হয়ে অজ্ঞান হয়ে যেতে দেখে তাঁদের অতীত এবং ভবিষ্যতের নানান কথা বললেন, নানান প্রতিশ্রুতি দিলেন, কিন্তু থিরিংসুবো

কোনো কথারই উত্তর দিতে পারলেন না। খিরিংসুবো অজ্ঞান হয়েই থাকলেন এবং তাঁর মুখে শুধু যন্ত্রনা ফুটে উঠলো। সম্রাট বললেন “মনে আছে, আমরা একে অপরকে প্রতিশ্রুতি দিয়েছিলাম যে মৃত্যুর দ্বারও আমরা একসাথে পার করবো, তুমি এভাবে আমাকে ফেলে যেতে পারো না”।

[小見出し 13]

খিরিংসুবো এই কথা শুনে আবেগে উচ্ছ্বসিত হয়ে এই কবিতাটি লিখলেন - এইভাবে বিচ্ছিন্ন হওয়ার কি দুঃখ, এখনো বেঁচে থাকার কি প্রত্যাশা। সম্রাট খিরিংসুবোকে পালকিতে চড়ার অনুমতি দিলেন এবং খিরিংসুবো নিজের বাড়ি চলে গেলেন।

[小見出し 14]

সম্রাটের বুক দুঃখে ফেটে যাচ্ছিলো। সম্রাটের দূতের খিরিংসুবোর কাছে গিয়ে ফিরে আসতে যতটুকু সময় লাগে, তার মধ্যেই জানা গেলো যে “খিরিংসুবো তাঁর শেষ নিশ্বাস ত্যাগ করেছেন”। সম্রাট স্তব্ধ হয়ে গেলেন এবং কিছু বোঝার অবস্থায় থাকলেন না।

[小見出し 15]

সম্রাট হিকারু গেঞ্জির মুখ দেখতে চাইছিলেন, কিন্তু শোক পালনের সময় প্রাসাদে থাকার নিয়ম নেই বলে হিকারু গেঞ্জিকে তার মায়ের বাড়ি পাঠিয়ে দেয়া হলো। হিকারু গেঞ্জিও বুঝতে পারছিলেন না যে কি হয়েছে, তিনি শুধু তাঁর আসে পাশের পরিচারিকাদের কাঁদতে দেখলেন এবং বুঝলেন যে কিছু খারাপ ঘটেছে।

[小見出し 16]

প্রধানযায়ী অন্ত্যেষ্টিক্রিয়া ওতাগি নামক জায়গায় আয়োজিত হলো। খিরিংসুবোর মা তাঁর মেয়ের চিতাতেই ধোঁয়া হয়ে যেতে চান, এমন ইচ্ছা প্রকাশ করে কাঁদতে থাকলেন এবং এক পরিচারিকার গাড়িতে আরোহণ করে রওনা দিলেন।

[小見出し 18]

সম্রাট একটি দূতের মাধ্যমে খিরিংসুবোকে ভূতীয় পদের মর্যাদা প্রদান করলেন।

[小見出し 21]

সম্রাট নিজের প্রথম পুত্রকে দেখা মাত্রই হিকারু গেঞ্জির কথা মনে করতেন এবং পরিচারিকা বা সেবিকাদের দিয়ে হিকারু গেঞ্জির খবর নিতেন। একদিন শীতল বাতাসের সন্ধ্যায় তিনি তাঁর দেহরক্ষীর এক পরিচারিকাকে থিরিংসুবোর মায়ের বাড়িতে পাঠালেন।

[小見出し 26]

সম্রাটের চিঠিতে এই কবিতাটি লেখা ছিল: মিয়াগি মাঠের শিশির উড়িয়ে ফেলা বাতাসের আওয়াজে, ছোট্ট হাগি ফুলটির কথা মনে পরে।

[小見出し 31]

দেহরক্ষীর পরিচারিকা থিরিংসুবোর মাকে এই কবিতাটি লিখে দিলেন : ঝাঁঝি পোকারা তীব্রতম স্বরে ডেকে গেলেও, অশ্রুপূর্ণ এই দীর্ঘ রাতের যেন শেষ নেই।

থিরিংসুবোর মা এই কবিতাটি লিখে উত্তর দিলেন : এই অগভীর ঘাসে (মাঠের মাঝের ঘরে) ঝাঁঝি পোকার আওয়াজ যেন আরো তীব্র, আরও শিশির (অশ্রু) বয়ে যায়, হে মেঘের (প্রাসাদের) মানুষ।

[小見出し 32]

ভালো উপহার দেয়ার উপলক্ষ ছিল না বলে থিরিংসুবোর মা চিঠির সাথে থিরিংসুবোর ব্যবহার করা পোশাক এবং অলঙ্কার বেঁধে দিলেন।

[小見出し 34]

রাত অনেক গভীর হওয়া সত্ত্বেও সম্রাট ঘুমোতে যাননি। বাগানের একটি ফুলের দিকে তাকিয়ে থেকে চার পাঁচজন রানীর সঙ্গিনীদের নিয়ে গল্প করতে থাকলেন।

[小見出し 35]

সম্রাটের কবিতার উত্তরে থিরিংসুবোর মা এই কবিতাটি লিখে পাঠিয়েছিলেন : ঝোড়ো বাতাসকে আটকে রাখতো যে গাছ তা শুকিয়ে যাওয়ার পরে এখন শুধু ছোট্ট হাগির ফুলটির চিন্তায় মন ভরে ওঠে।

[小見出し 37]

রানীর সঙ্গিনীরা যখন খিরিৎসুবোর মা এবং হিকারু গেঞ্জির গল্প করছিলেন, তখন সম্রাট এই কবিতাটি লিখলেন : এমন কোনো যদি জাদুকর থাকতেন যিনি (খিরিৎসুবোর আত্মাকে) খুঁজে দিতে পারতেন, তাহলে জানতে পারতাম তাঁর আত্মা এখন কোথায় আছে।

[小見出し 39]

প্রথম রাজকুমারের মা (কোকিদিন ভবনের রানী) অনেকদিন সম্রাটের সান্নিধ্যের সৌভাগ্য পাননি, তাই তিনি মনোরম পূর্ণিমা রাতে বাদ্যযন্ত্র বাজিয়ে সময় কাটাতেন। তাঁর সঙ্গিনীরা সেই সংগীত শুনতে শুনতে ভাবলেন : “কি করুন অবস্থা।”

[小見出し 40]

খিরিৎসুবোর মা কিভাবে জীবনযাপন করবেন সে কথা চিন্তা করে সম্রাট এই কবিতাটি লেখেন: এই মেঘের উপর (প্রাসাদ) থেকে দেখলেও চোখের জলে ঝাপসা হয়ে ওঠে শরতের চাঁদ, কে জানে ওঁরা কিভাবে কাটাচ্ছেন দিন ঐ অগভীর ঘাসের ঘরে।

[小見出し 43]

বেশ কিছুদিন কেটে যাবার পর হিকারু গেঞ্জি একদিন রাজপ্রাসাদে ফিরে এলেন। তরুণ হিকারু গেঞ্জির সৌন্দর্য এতই অপূর্ব যে সকলে চিন্তা করতে লাগলেন যে ওনাকে ভগবানেরা না নিয়ে চলে যায়। পরের বছরের বসন্তে যখন প্রথম পুত্র সন্তানকে যুবরাজ ধার্য করা হয়, তখনও সম্রাট এই দ্বিধায় ছিলেন যে প্রথম রাজকুমারকে সরিয়ে হিকারু গেঞ্জিকে যুবরাজ করে দেবেন কিনা, কিন্তু লোকজন সেটা কিছুতেই মেনে নিতে পারবে না, এই কথা ভেবে সম্রাট চোখেমুখে নিজের অনুভূতি প্রকাশ করলেন না।

[小見出し 44]

খিরিৎসুবোর মা কন্যার মৃত্যুর বেদনা থেকে কিছুতেই উঠে দাঁড়াতে না পেরে কিছুদিনের মধ্যেই শেষ নিশ্বাস ত্যাগ করলেন। সম্রাট আবার গভীর দুঃখে ডুবে গেলেন।

[小見出し 45]

রাজকুমার হিকারু গেঞ্জির বয়স যখন সাত বছর হলো তখন তাঁর লেখা এবং পড়ার অনুষ্ঠান আয়োজিত হলো।

[小見出し 46]

লেখাপড়া তো বটেই, কোতো বা বাঁশির মতো বাদ্যযন্ত্রতেও নিদারুণ দক্ষতা দেখিয়ে তিনি রাজপ্রাসাদের সকলকে অভিভূত করে তুললেন।

[小見出し 47]

ঠিক এই সময়ে কোরিয়া থেকে এমন একটি মানুষ আসলেন যিনি মুখ বা হাবভাব দেখে চরিত্র নির্ণয় করতে পারেন।

[小見出し 50]

তিনি হিকারু গেঞ্জি কে দেখে তাঁর বিদ্যা এবং সৌন্দর্যর প্রশংসা করলেন এবং হিকারু (জ্যোতির্ময়) নামকরণ করলেন। সম্রাট অনিচ্ছা সত্ত্বেও তাকে রাজপরিবার থেকে সরিয়ে দিলেন, কিন্তু গেঞ্জি কুলনাম দিয়ে তাকে এক সাধারণ মানুষের পদ-মর্যাদা দিলেন।

<চিত্র ২> সাত বছর বয়সী হিকারু গেঞ্জি বিদেশিদের জন্য নির্ধারিত ভবনে কোরীয় জ্যোতিষীর কাছে ভবিষ্যৎবাণী শুনছেন

[小見出し 51]

বহুদিন কেটে যাওয়া সত্ত্বেও সম্রাট খিরিৎসুবোর কথা কিছুতেই ভুলতে পারছিলেন না এবং মনকে ভোলাতে পারছিলেন না। এক রাজ-পরিচারিকা সম্রাটকে খবর দিলেন যে এক প্রাক্তন সম্রাটের চতুর্থ রাজকন্যা দেখতে অপূর্ব সুন্দরী। (সেই রাজকন্যার নাম ফুজিৎসুবো)

[小見出し 52]

তাকে দেখতে অনেকটা পুরোনো দিনের খিরিৎসুবোর মতো ছিল।

[小見出し 55]

সেহেতু ফুজিৎসুবো খুবই উচ্চ পরিবারের কন্যা ছিলেন, সেহেতু সম্রাটেও তাঁর প্রতি আকৃষ্ট হলেন।

[小見出し 56]

হিকারু গেঞ্জি সম্রাটের কাছে সবসময় থাকতেন বলে সম্রাটের সাথে তিনিও ফুজিৎসুবোর ঘরে যেতেন।

[小見出し 59]

সেহেতু সম্রাট হিকারু গেঞ্জি এবং ফুজিৎসুবো দুজনকেই খুবই স্নেহ করতেন, সেহেতু লোকজন ফুজিৎসুবোর নাম হিকারু গেঞ্জির সাথে মিলিয়ে জ্যোতির্ময়ী রাজকুমারী রেখে দিলেন।

[小見出し 60]

বারো বছর বয়সে হিকারু গেঞ্জির গেম্পুকু নামক সাবালিক হওয়ার অনুষ্ঠান আয়োজিত হলো।

[小見出し 63]

বাম দিকের মন্ত্রী এবং এক রাজকন্যার কন্যার সাথে সম্রাটের বিবাহ ঠিক হলো।  
(এই কন্যার নাম কুমারী আওই)

<চিত্র ৩> বারো বছর বয়সী হিকারু গেঞ্জির গেম্পুকু অনুষ্ঠানের দৃশ্য

[小見出し 65]

<সম্রাট> তরুণ বালকের দীর্ঘ চুলের বন্ধনে, বেঁধে দিয়েছেন কি সুদীর্ঘ বিবাহিত জীবনের প্রতিশ্রুতি।

<বাম দিকের মন্ত্রীর জবাব> যেরকম গাঢ় বেগুনি রঙের বন্ধন বেঁধে দিলাম, সেরকমই এই বিবাহের রং কোনোদিন তেজ হারাতে না।

[小見出し 66]

বাম দিকের মন্ত্রী মহাশয় কে বাম দিকের আস্থাবল থেকে একটি ঘোড়া এবং রাজকীয় তস্বাবধায়কের কার্যালয় থেকে একটি বাজপাখি উপহার দেওয়া হলো। রাজপ্রাসাদের সিঁড়ির কাছে উচ্চপদস্থ কুলীন আধিকারিকরা এবং রাজকুমাররা একে একে নিজস্ব পদ অনুযায়ী সম্রাটের কাছ থেকে উপহার গ্রহণ করছিলেন।

[小見出し 67]

সেদিন রাত্রে হিকারু গেঞ্জি বাম দিকের মন্ত্রীর বাড়ি গেলেন। (হিকারু গেঞ্জির বয়স ১২ বছর এবং কুমারী আওইর বয়স ১৬ বছর)

[小見出し 69]

বাম দিকের মন্ত্রীর পুত্র তস্বাবধায়ক সেনাপতির বিবাহ ডান দিকের মন্ত্রীর চতুর্থ কন্যার সাথে ঠিক হয়েছিল।

[小見出し 70]

হিকারু গেঞ্জিকে সম্রাট সবসময় নিজের পাশে রাখতেন বলে তিনি বাম দিকের মন্ত্রীর বাড়িতে আরাম করতে পারছিলেন না। হিকারু গেঞ্জি মনে করতেন যে ফুজিৎসুবোর মতো অপূর্ব মহিলা পৃথিবীতে আর নেই এবং তিনি ফুজিৎসুবোর মতো কোনো মহিলার সাথেই বিবাহ করতে চান, এবং তাই কুমারী আওই-এর সাথে তার কিছুতেই ঘনিষ্ঠ হতে পারছিলেন না।

[小見出し 71]

বড়ো হওয়ার পর থেকে আর ছোটবেলার মতো তাঁকে ফুজিৎসুবোর সাথে একই বাঁশের পর্দার মধ্যে থাকতে দেওয়া হতো না। কেবল সংগীতানুষ্ঠানের সময় ফুজিৎসুবোর গানের অস্পষ্ট শব্দের সাথে কোতো বা বাঁশি বাজিয়ে নিজেকে সান্ত্বনা দিতেন এবং বেশিরভাগ সময়ই প্রাসাদে কাটাতেন।

# ଗେଞ୍ଜି ର କାହାଣୀ - ଏକ ସଂକ୍ଷିପ୍ତ ବିବରଣୀ

ଲେଖିକା: ମୁରାସାକୀ ଶୀକାରୁ

ଅନୁବାଦକ: ନବୀନ ପଣ୍ଡା

["ଗେଞ୍ଜି ର କାହାଣୀର" ର ଜନ୍ମ ରେ ଦେଖାଯାଉଥିବା ନାୟକ, ନାୟିକା]

ମୁରାସାକୀ ଶୀକାରୁ → "ଗେଞ୍ଜି ର କାହାଣୀର" ର ଲେଖିକା, ମହାରାଣୀ ଫୁଜିବାରା ଶୋଶା ଙ୍କ ସେବିକା  
 ସମ୍ରାଟ ମୁରାକାମୀ : ଜାପାନର 62ତମ ସମ୍ରାଟ  
 ରାଜକୁମାରୀ ସେଂଶି ନାଇସିନ : ସମ୍ରାଟ ମୁରାକାମୀଙ୍କର ଦଶମ କନ୍ୟା, ଅନ୍ୟ ନାମ 'ଦାଇସାଇନିନ୍'  
 ସମ୍ରାଟ ଇଚିୟା : ଜାପାନର 66ତମ ସମ୍ରାଟ, ସମ୍ରାଟ ମୁରାକାମୀଙ୍କ ନାତି  
 ଫୁଜିବାରା ଶୋଶା : ସମ୍ରାଟ ଇଚିୟା ଙ୍କ ମଝିଆ ରାଣୀ, ଅନ୍ୟ ନାମ 'ଜୋତମନ୍‌ଇନ୍'

[ ପ୍ରମୁଖ ନାୟକ ନାୟିକା ]

ହିକାରୁ ଗେଞ୍ଜି : ଭୂମିକାର ନାୟକ ଏବଂ ସମ୍ରାଟ କିରିସୁବୋ ଙ୍କ ଦ୍ୱିତୀୟ ପୁତ୍ର  
 ସମ୍ରାଟ କିରିସୁବୋ : ହିକାରୁ ଗେଞ୍ଜି ଏବଂ ସୁୟାକୁଇନ ଙ୍କ ପିତା  
 ରାଣୀ କିରିସୁବୋ : ହିକାରୁ ଗେଞ୍ଜି ଙ୍କ ମାତା  
 କୋକିଦେନ ର ମଝିଆ ରାଣୀ : (ଅନ୍ୟ ନାମ ନୋମିକ ର ମଝିଆ ରାଣୀ), ସୁୟାକୁଇନ ଙ୍କ ମାତା  
 କାତା ନ କାତା : ରାଣୀ କିରିସୁବୋ ଙ୍କ ମାତା  
 ସୁଗେଇ ନୋ ମୋ୍ୟାତୁ : ସମ୍ରାଟଙ୍କ ଆଦେଶ କ୍ରମେ କାତା ନ କାତା ଙ୍କ ଘରକୁ ଯାଇଥିବା ରାଜ ପରିଚାରିକା  
 ଫୁଜିସୁବୋ : ସମ୍ରାଟ ଙ୍କ ଚତୁର୍ଥ ରାଣୀ , ହିକାରୁ ଗେଞ୍ଜି ଙ୍କ ସାବତ ମାତା  
 କୋରିଆ ର ଜ୍ୟୋତିର୍ବିଦ୍ : ହିକାରୁ ଗେଞ୍ଜି ଙ୍କ ଭବିଷ୍ୟ ଦାଣୀ ଦେଇଥିବା ବ୍ୟକ୍ତି  
 ମହାମନ୍ତ୍ରୀ : ହିକାରୁ ଗେଞ୍ଜି ଙ୍କ ଗେମ୍ବୁକୁ ସମାରୋହ ପାଳନ ସମୟର ସହଯୋଗୀ, ଆଓଇ ନ ଉଏ ଏବଂ  
 ସେନାଭପାଖକ ପିତା  
 ଆଓଇ ନ ଉଏ : ହିକାରୁ ଗେଞ୍ଜି ଙ୍କ ବିଧି ହିସାବରେ ବିବାହିତା ପତ୍ନୀ, ମହାମନ୍ତ୍ରୀ ଙ୍କ କନ୍ୟା

## 一丁裏

"ଗେଞ୍ଜି ର କାହାଣୀ" ର ଜନ୍ମ

ଜାପାନ ର ସମ୍ରାଟ ମୁରାକାମୀ ଙ୍କର ଦଶମ ରାଣୀ ସେଂଶାନୋଇସିନୋ (ଦାଇସାଇନିନ), ସମ୍ରାଟ ଇଚିଜୋଇନ ଙ୍କ ରାଣୀ ଫୁଜିବାରା ଶୋଶା (ଜୋନୋମାଇନୋ) ଙ୍କୁ "ଆପଣଙ୍କ ପାଖରେ କିଛି ନୁଆ କାହାଣୀ ଅଛିକି?" ବୋଲି ପ୍ରଶ୍ନ କଲେ । ରାଣୀ ଶୋଶା, ମୁରାସାକୀ ଶୀକାରୁ ଙ୍କୁ ଡାକି " ଆମ ପାଇଁ ଏକ ନୁଆ କାହାଣୀ ଲେଖିବା ପାଇଁ ପ୍ରୟାଶ କରନ୍ତୁ" ବୋଲି କହିଲେ ।

ମୁରାସାକୀ ଶୀକାରୁ, ଇଶାୟାମା ମନ୍ଦିର କୁ ଯାଇ ନୁଆ କାହାଣୀ ପାଇଁ ପ୍ରୀଥନା କଲେ । ଅଷ୍ଟମ ମାସର ପନ୍ଦରତମ ଦିବସର ପୁର୍ଣ୍ଣିମା ରାତ୍ରରେ ସେ ବିବାକୋ ହ୍ରଦରେ ଚନ୍ଦ୍ରମା ର ପ୍ରତିବିମ୍ବ ଦେଖିବାକୁ ପାଇଲେ । ଏତିକିରେ ତାଙ୍କ

ମନରେ କାହାଣୀର କଳ୍ପନା ଉଦ୍ଭାବନ ହେଲା ଏବଂ ସେ ପ୍ରଥମରେ କାହାଣୀର "ସୁମା" ଖଣ୍ଡ କୁ ଲେଖିବା ଆରମ୍ଭ କଲେ ବୋଲି କୁହାଯାଉଅଛି ।

ବୌଦ୍ଧ ଧର୍ମ ର ଚେତନା ଶାଖାରେ 60 ଖଣ୍ଡ ସୂତ୍ର ଅଛିବୋଲି କୁହାଯାଉଛି । ଏହି ସୂତ୍ର ଉପରେ ଆଧାର କରି ଗୋଜି ର କାହାଣୀ ମଧ୍ୟ 60 ଖଣ୍ଡ ଲେଖାଗଲା । (ଦର୍ଶମାନ ର "ଗୋଜି ର କାହାଣୀ" ରେ କେବଳ 54 ଖଣ୍ଡ ହିଁ ଦେଖାଯାଉଛି । ) ବୌଦ୍ଧ ଧର୍ମରେ "ଅସ୍ଥିତ୍ୱ, ଶୂନ୍ୟ, ଅସ୍ଥିତ୍ୱ ଏବଂ ଶୂନ୍ୟ, ଦିନା ଅସ୍ଥିତ୍ୱ ଏବଂ ଦିନା ଶୂନ୍ୟ" କହିବା ଚାରୋଟି ସତ୍ୟର ସିଦ୍ଧାନ୍ତ ଅଛି ।

ଏହି ସବୁ ସିଦ୍ଧାନ୍ତକୁ ନେଇ "ଗୋଜି ର କାହାଣୀ"ର ଖଣ୍ଡ ଗୁଡ଼ିକର ନାମ ରଖାଯାଇଛି । ପ୍ରଥମ ଖଣ୍ଡର ଶୀର୍ଷକଟି କାହାଣୀ ଉପରେ ଆଧାର କରି ଲେଖାଯାଇଅଛି । ଦ୍ୱିତୀୟ ଖଣ୍ଡର ଶୀର୍ଷକଟି କବିତା, ଏବଂ, ତୃତୀୟ ଖଣ୍ଡର ଶୀର୍ଷକଟି କାହାଣୀ ଓ କବିତା ଉପରେ ଆଧାରିତ ହୋଇଅଛି ।

### 二丁表

ଚତୁର୍ଥ ଖଣ୍ଡ ର ଶୀର୍ଷକଟି କାହାଣୀ କିମ୍ବା କବିତା ସହିତ କିଛି ସମ୍ପର୍କ ନାହିଁ ।

ଏହି କାହାଣୀର ଲେଖିକାଙ୍କ ପ୍ରଥମ ନାମ "ତୋଷିକିରୁ" ଥିଲା । କିନ୍ତୁ ସେ “ ଗୋଜିର କାହାଣୀ” ରେ ରାଣୀ "ମୂରା ସାକୀ ନୋ ଉଏ" ଙ୍କୁ ଏତେ ପ୍ରାଞ୍ଜଳ ଭାବରେ ବର୍ଣ୍ଣନା କଲେ ଯେ, ଯା ଯୋଗୁଁ, ତାଙ୍କୁ ମୂରାସାକୀ ଶାକୀରୁ ନାମରେ ନାମିତ କରାଗଲା । ଏମିତି କିମ୍ବଦନ୍ତୀ ମଧ୍ୟ ଅଛି ଯେ, ମୂରାସାକୀ ଶାକୀରୁ ସୁୟା\* ଅବଲୋକିତେଶ୍ୱର (ଅଥବା ବୁଦ୍ଧଦେବ) ଜୀବ ଅବତାର ହିଁ ଅଟନ୍ତି । ପୁଣି ସେ, ପୁରୋହିତ ଦାନାଇନସୋଜିଙ୍କ ଠାରୁ ତେଜାଜି ସିଦ୍ଧାନ୍ତ ଉପରେ ଆଧାରିତ ପ୍ରବୋଧନର ଦୀକ୍ଷା ମଧ୍ୟ ନେଇଥିଲେ ।

ମୂରାସାକୀ ଶାକୀରୁ ଜୀବ ବଂଶ ଦୃଷ୍ଟ

ସୁସୁମୀ କନେସୁକେ, ମଧ୍ୟମ ପରାମର୍ଶଦାତା - କରେମାସା, ଜନାତା ର ରାଜ୍ୟପାଳ - ତାମେତୋକି, ଏଡିଏନ ର ରାଜ୍ୟପାଳଙ୍କ ସୁପୁତ୍ରୀ (ମୂରାସାକୀ ଶିକୁରୁ) । ମାତାଙ୍କ ନାମ, କେସି\*, ଯିଏକି ସେସୁ ର ରାଜ୍ୟପାଳ ତାମେନୋବୁଙ୍କ ସୁପୁତ୍ରୀ ଅଟନ୍ତି ।

ବିପଣା: ଉପରସୁକ୍ତ ବଂଶଦୃଷ୍ଟର କିଛିଅଂଶ ପ୍ରତଳିତ ମାନ୍ୟତାରୁ ଭିନ୍ନ ହୋଇପାରେ । ତେବେ, ଏହା "ଗୋଜି ର କାହାଣୀ" ର "କାଗୋସୁଗୋ" ରେ ଉଲ୍ଲେଖିତଃ ଥିବା ବଂଶଦୃଷ୍ଟ ସହିତ ପ୍ରାୟ ଏକା ଅଟେ ।

### 二丁裏

絵 : 1 ଅଷ୍ଟମ ମାସର ପନ୍ଦରତମ ଦିବସର ରାତ୍ରରେ ମୂରାସାକୀ ଶାକୀରୁ ଜଣାଯାଏ ମଝିରରେ "ଗୋଜି ର କାହାଣୀ" ଲେଖା ଆରମ୍ଭ କରିବା ଦୃଶ୍ୟ ।

### 三丁表

(କିରିସୁବୋ)

ଏହା କେଉଁ ସୁଗର କଥା ଅଟେ କି? ସେହି ସମୟରେ ମଝିଆ ରାଣୀ, ଛୋଟ ରାଣୀ ଇତ୍ୟାଦି ବିଭିନ୍ନ ପଦର ରାଣୀ, ଏବଂ ରାଜ ପରିଚାରିକା ମାନେ ପ୍ରାସାଦରେ ରହୁଥାନ୍ତି । ତନ୍ମଧ୍ୟରେ ଏକ ମହିଳା ମଧ୍ୟ ଥିଲେ ଯେକି ଅତ୍ୟନ୍ତ ଭଜ କୁଳର ନଥିଲେ, କିନ୍ତୁ, ଯାହାଙ୍କୁ ସମ୍ରାଟ ବହୁତ ପସନ୍ଦ କରୁଥିଲେ । (କେଉଁ ସୁଗର କଥା ଅଟେ କି କହିଲେ, ...)

ଏହା ସମ୍ରାଟ ଦାଇଗୋଙ୍କ ସ୍ମୃତର କଥା ଅଟେ, ଏବଂ, ସମ୍ରାଟ ପସନ୍ଦ କରୁଥିବା ମହିଳା ଜଣକଙ୍କ ନାମ ଛୋଟରାଣୀ କିରିସୁବୋ ଅଟେ । )

ପ୍ରାୟାଦ ରେ ରାଣୀ ମାନଙ୍କ ପାଇଁ ଅନେକ କଷ୍ଟ ଥିଲା । ଏକ ରାଣୀଙ୍କର କଷ୍ଟର ନାମ ନାରାୟୁବୋ ଥିଲା ଓ ସେହି କଷ୍ଟର ଅନ୍ୟ ନାମ ଶୋୟୋଶା ଥିଲା । ଠିକ ଏହି ପ୍ରକାର ଭାବରେ କିରିସୁବୋ ନାମକ କଷ୍ଟର ଅନ୍ୟ ନାମ ବିଗେଇଶା, ଫୁଜିସୁବୋ କଷ୍ଟର ଅନ୍ୟ ନାମ ହୀରାୟାଶା, ଉମେସୁବୋ କଷ୍ଟର ଅନ୍ୟ ନାମ ଗ୍ୟାକାଶା, କାମିମାରୀସୁବୋ କଷ୍ଟର ଅନ୍ୟ ନାମ ଶୁହୋଶା ଥିଲା । ପ୍ରତ୍ୟେକ ରାଣୀ ନିଜନିଜର କଷ୍ଟର ନାମରେ ଜଣା ଯାଉଥିଲେ ।

ଯେଉଁଥି ପାଇଁ କି ସମ୍ରାଟ କିରିସୁବୋ କଷ୍ଟରେ ରହୁଥିବା ରାଣୀଙ୍କୁ ବହୁତ ପସନ୍ଦ କରୁଥିଲେ, ସେଥି ଯୋଗୁଁ ସମ୍ରାଟଙ୍କୁ କିରିସୁବୋ ସମ୍ରାଟ ବୋଲି ମଧ୍ୟ କୁହାଯାଉଥିଲା । କିରିସୁବୋ ର ଛୋଟ ରାଣୀ ସର୍ବଦା ସମ୍ରାଟଙ୍କ ପାଖରେ ରହୁଥାନ୍ତି । ତେଣୁ ଅନ୍ୟ ରାଣୀ ମାନେ ତାଙ୍କୁ ହିଂସା କରୁଥାନ୍ତି ଏବଂ ଈର୍ଷାରେ ଜଳୁଥାନ୍ତି ।

ବୋଧହୁଏ ଏହି କାରଣ ଯୋଗୁଁ କିରିସୁବୋ ର ଛୋଟରାଣୀଙ୍କର ସ୍ୱାସ୍ଥ୍ୟ ଅବନୃତି ହେବାକୁ ଲାଗିଲା ( ସେ କୌଣସି ଏକ ଗମାର ବୋଗରେ ଆକ୍ରାନ୍ତ ହେଲେ ) । ଏସବୁ କଥାରେ ଉଦାଶ ହୋଇ ସେ ବାରମ୍ବାର ସିଦ୍ଧାଳୟକୁ ଫେରିଯିବାକୁ ଲାଗିଲେ । ଏଇଥି ଯୋଗୁଁ ସମ୍ରାଟ ଛୋଟରାଣୀ ଙ୍କୁ ପୂର୍ବ ଠାରୁ ମଧ୍ୟ ଅଧିକା ଦାହିବାକୁ ଲାଗିଲେ । ଲୋକେ ସମ୍ରାଟଙ୍କର ଏହି ଭାବକୁ ନିନ୍ଦା କଲେ ମଧ୍ୟ,

### 3 丁裏

ସେ ଛୋଟରାଣୀଙ୍କ ପ୍ରତି ଥିବା ନିଜର ମନୋଭାବକୁ ବୋକି ପାରୁନଥିଲେ ।

ତାନରେ ମଧ୍ୟ ଥରେ ଏ ପ୍ରକାର ପ୍ରେମ ଜନିତ ଘଟଣା କୁ ନେଇ ସେଠାକାର ସମାଜରେ ଅଶୁଖିଳା ଓ ଦିଭ୍ରାଟ ଜାତ ହୋଇଥିଲା । ପ୍ରାୟାଦର ଲୋକେ ସମ୍ରାଟଙ୍କର ଏହି ଭାବକୁ ତାନର ସମ୍ରାଟ ଗୋସପ ଓ ରାଣୀ ଯାଜ ଗୁଇଫେଇ ଙ୍କ ମଧ୍ୟରେ ଥିବା ପ୍ରେମ ଘଟଣା ସହିତ ତୁଳନା କରି ତିନିତ ଓ ବ୍ୟସ୍ତ ହୋଇପଡୁଥିଲେ ।

ଏହି କିରିସୁବୋ ର ଛୋଟ ରାଣୀଙ୍କର ପିତାଙ୍କର ସର୍ବଦାସ ହୋଇସାରିଥିଲା । ତାଙ୍କରି ମା, ସିଏକି ତାଙ୍କରି ପିତାଙ୍କର ମୁଖ୍ୟ ସ୍ତ୍ରୀ ଥିଲେ, ଏକ କୁଳବଧୁ ଥିଲେ, ଏବଂ, ପୁରୁଣା ପରମ୍ପରାର ମହିଳା ଥିଲେ । ତେଣୁ ସେ ନିଜ ନିଆକୁ ଅନ୍ୟ ରାଣୀ ମାନଙ୍କର ତୁଳନାରେ କୌଣସି ଭାବରେ ନିମ୍ନମ ମୁର୍ଦ୍ଦ କହି ନେଖେଇନା ପାଇଁ ସର୍ବଦା ପ୍ରୟାସ କରୁଥିଲେ । ତେବେ, କୌଣସି ଜଟିଳ ସମସ୍ୟାରେ ସମ୍ମୁଖିନୁ ହେଲେ, ସାହାଯ୍ୟ ଲୋଡ଼ିବା ପାଇଁ କେହିମଧ୍ୟ ନଥିବା ଯୋଗୁଁ, ଉଦାଶ ମଧ୍ୟ ହୋଇପଡୁଥିଲେ ।

"କିରିସୁବୋ ସମ୍ରାଟ" ଏବଂ "କିରିସୁବୋ ର ରାଣୀ" ଙ୍କ ମଧ୍ୟରେ, ବୋଧହୁଏ ପୂର୍ବ ଜନ୍ମରେ କିଛି ଦୃଢ଼ ସମ୍ପର୍କ ଥିଲା, ଯାହାଯୋଗୁଁ ସେମାନଙ୍କର ମଧ୍ୟରେ ଏକ ସ୍ୱର୍ଣ୍ଣ ତୁଲ୍ୟ ଶିଶୁପୁତ୍ରଟିଏ ଜନ୍ମ ଲାଭ କଲା । ଏହି ଶିଶୁଟିର ନାମ "ହିକାରୁ ଗେଞ୍ଜି (ହିକାରୁ କିମି)" ରଖାଗଲା । ଉପମହାମନ୍ତ୍ରୀଙ୍କର ମଧ୍ୟମ ରାଜକୁମାରୀ ମଧ୍ୟ ସମ୍ରାଟଙ୍କର ପତ୍ନୀ ଥିଲେ, ଏବଂ ତାଙ୍କ ତରଫରୁ ମଧ୍ୟ ପୂର୍ବରୁ ଏକ ରାଜକୁମାର ଜନ୍ମ ଗ୍ରହଣ କରିଥିଲେ । ଲୋକେ ଏହି ପୁତ୍ର ଟି ଭବିଷ୍ୟତରେ ଯୁଦ୍ଧରାଜ ହେବ କହି ସମ୍ମାନ ଦେଉଥିଲେ । କିନ୍ତୁ, ହିକାରୁ ଗେଞ୍ଜିଙ୍କର ସାମନାରେ ସେହି ଶିଶୁଟିର ଛଦି ଲିଖନୁ ହୋଇଯାଉଥିଲା ।

ଯେବେଠାରୁ ହିକାରୁ ଗେଞ୍ଜିଙ୍କର ଜନ୍ମ ହେଲା, ସେହିଦିନ ଠାରୁ ସମ୍ରାଟ

### 四丁表

ତାଙ୍କରି ଉପରେ ବିଶେଷ ଧ୍ୟାନ ଦେବାକୁ ଲାଗିଲେ ।

ଏଥିରେ ପ୍ରଥମ ରାଜକୁମାରଙ୍କ ମାତା, ହିକାରୁ ଗେଞ୍ଜି ଙ୍କୁ ତ କାଳେ ଯୁଦ୍ଧରାଜ ଦୋଷଣା କରିଦିଆ ନଯିବ ଏଭଳି

କଥା ମନକୁ ଆଣି ଅତ୍ୟନ୍ତ ବ୍ୟତିବସ୍ତୁ ହୋଇ ପଡୁଥିଲେ ।

ଅନ୍ୟ ରାଣୀମାନେ ମଧ୍ୟ ଇର୍ଷାରେ ଜନ୍ମୁଥିଲେ, କାରଣ ସମ୍ରାଟ ବାହାରକୁ ବାହାରି ସେମାନଙ୍କର କକ୍ଷ ଦେଇ କେବଳ କିରସ୍ତୁବା ଓ ଛୋଟ ରାଣୀଙ୍କ ପାଖକୁ ହିଁ ବାରମ୍ବାର ଯାଉଥିଲେ । ପୁଣି, ସମ୍ରାଟ ମଧ୍ୟ କିରସ୍ତୁବୋର ଛୋଟରାଣୀ ଙ୍କୁ ହିଁ ବାରମ୍ବାର ନିଜ କକ୍ଷକୁ ଡକାଉଥିଲେ ।

କିରସ୍ତୁବୋ ର ଛୋଟରାଣୀ ପ୍ରସାଦର "ଉଚିହସି", "ଖାତାଦୋନୋ" ଇତ୍ୟାଦି ରାସ୍ତା ଅତିକ୍ରମ କରି ସମ୍ରାଟଙ୍କ କକ୍ଷକୁ ଯାଆନ୍ତି । ଅନ୍ୟ ମାନେ ଏହି ରାସ୍ତା ଗୁଡ଼ିକରେ ଏତେ ଅସ୍ତ୍ରଧାରୀ ଘଟଣା ସୃଷ୍ଟି କରିଦିଅନ୍ତି ଯେ, ଛୋଟରାଣୀଙ୍କୁ ସମ୍ରାଟଙ୍କ ନିକଟକୁ ନିଆଯିବା କରିବା ପରିଦାରିକା ଗଣଙ୍କର କାମନା ( ଜାପାନର ପରମ୍ପରା ଯୁକ୍ତ ପୋଷାକ) ର ଧଡ଼ି ଗୁଡ଼ିକ ଅସନା ହୋଇଯାଉଥାଏ । ପୁଣି, ସମୟେ ସମୟେ ଅନ୍ୟରାଣୀ ମାନେ ମିଳିମିଶି କିରସ୍ତୁବୋ ର ଛୋଟରାଣୀ ଅତିକ୍ରମ କରିବା ରାସ୍ତାର ଗୁଡ଼ିକୁ ଆଗ ଏବଂ ପଛପଟରୁ ବନ୍ଦ କରି ଛୋଟରାଣୀଙ୍କୁ ବନ୍ଦୀ କରିଦିଅନ୍ତି । ଏଭଳି ଭାବରେ ସେମାନେ ଛୋଟରାଣୀଙ୍କୁ ବହୁତ ନିର୍ଯ୍ୟାତନା କରନ୍ତି

ଏହା ଦେଖି ସମ୍ରାଟଙ୍କର "କିରସ୍ତୁବୋ ର ରାଣୀ" ଙ୍କୁ ପ୍ରତି ଦୟା ଭାବ ଆସିଲା । ତେଣୁ ସେ "ଗୋୟନେନ" ନାମକ କକ୍ଷରେ ରହୁଥିବା ଏକ ନିଜକୁଳର ରାଣୀଙ୍କୁ ଅନ୍ୟ କକ୍ଷକୁ ପଠାଇ, ସେହି କକ୍ଷକୁ "କିରସ୍ତୁବୋ ର ରାଣୀ" ଙ୍କୁ ପ୍ରଦାନ କଲେ । ଏଥି ଦ୍ୱାରା "କିରସ୍ତୁବୋ ର ରାଣୀ"ଙ୍କର ଦୁଇଟି କକ୍ଷ ହୋଇଗଲା ।

### 4丁裏

ଅନ୍ୟ ଜାଗାକୁ ପଠାଯାଇଥିବା ରାଣୀଙ୍କର କ୍ରୋଧ କୌଣସି ମତେ କମନଥିଲା ।

ସେହି ଦର୍ଶ ହିକାରୁ ଗେଞ୍ଜି (ଖାକା ଗିମି) ଯେତେବେଳେ ଦିନି ଦର୍ଶର ହୋଇଗଲେ , ତାଙ୍କରି ପାଇଁ "ହାକାମାଗି" ଉତ୍ସବ ପାଳନ କରାଗଲା । {ହାକାମାଗି, ଜାପାନର ପୋଷାକ ପରିଧାନ କରିବା ଏକ ଦିଅଁ ଅଟେ, ଯେଉଁଠିରେ ବାଳକ ମାନେ ପୋଷାକ ପିନ୍ଧି କିଶୋରାବସ୍ଥାରୁ ଯୁବାବସ୍ଥା ରେ ପ୍ରବେଶ କରନ୍ତି ବୋଲି ମନାଯାଏ । } ଏଥି ପୂର୍ବରୁ ପ୍ରଥମ ବାଜକୁମାର ପାଇଁ ମଧ୍ୟ ଏହି ଉତ୍ସବ ପାଳିତ ହୋଇଥିଲା, କିନ୍ତୁ ବର୍ତ୍ତମାନର ଆୟୋଜନ ପୂର୍ବର ଆୟୋଜନ ଅପେକ୍ଷା କୌଣସି କ୍ରମେ କମନଥିଲା । ହିକାରୁ ଗେଞ୍ଜି (ଖାକା ଗିମି) ଙ୍କର ରୂପ, ସୌଧର୍ଯ୍ୟ ଓ ବ୍ୟକ୍ତିତ୍ୱ ଏତେ ଉଲ୍ଲସ୍ଥ ଥିଲା ଯେ, ପ୍ରସାଦର ଅନ୍ୟ ମହିଳା ମାନେ ତାଙ୍କୁ ଦୃଶ୍ୟ କରିବାକୁ ଚାହଁଲେ ମଧ୍ୟ ଦୃଶ୍ୟ କରିପାରୁନଥିଲେ ।

ସେହି ଦର୍ଶର ଗ୍ରୀଷ୍ମ ଋତୁରେ ମିସୋକୁୟାକୋରୋ, ଯଥା, ହିକାରୁ ଗେଞ୍ଜିର ମାତା ("କିରସ୍ତୁବୋ ର ରାଣୀ") ଅସୁସ୍ଥ ହୋଇ ପିତ୍ରାଳୟକୁ ଯିବାକୁ ଚାହଁଲେ । ଏମିତିରେ "କିରସ୍ତୁବୋ ର ରାଣୀ" ସର୍ବଦା ରୋଗୀଣୀ ରହୁଥିଲେ, ତେଣୁ ସମ୍ରାଟ ବର୍ତ୍ତମାନର ଅବସ୍ଥାକୁ ଏତେ ଧ୍ୟାନ ନଦେଇ ପିତ୍ରାଳୟକୁ ଫେରିବା ପାଇଁ ଅନୁମତି ଦେଲେନାହିଁ । ଦିନକୁ ଦିନ ତାଙ୍କରି ଦେହ ଖରାପ ଦିଗକୁ ଗତି କଲା ଏବଂ ସେ ବହୁତ ହିଁ ଦୁର୍ବଳ ହୋଇପଡ଼ିଲେ । ଏହି ଅବସ୍ଥା ଦେଖି "କିରସ୍ତୁବୋ ର ରାଣୀ" ଙ୍କ ମାତା, ହିକାରୁ ଗେଞ୍ଜିଙ୍କୁ ପ୍ରସାଦରେ ରଖି, କେବଳ "କିରସ୍ତୁବୋ ର ରାଣୀ"ଙ୍କୁ ହେଲେ ମଧ୍ୟ ନିଜ ଘରକୁ ପଠାଇବା ପାଇଁ ଅଶୁଭରା ନୟନରେ ସମ୍ରାଟ ଙ୍କୁ ଦିନତିକଲେ ।

ଯେତେବେଳେ ସମ୍ରାଟ ଜାଣିଲେ ଯେ "କିରସ୍ତୁବୋ ର ରାଣୀ" ପ୍ରକୃତରେ ଦୁର୍ବଳ ହୋଇପଡ଼ିଛନ୍ତି, ସେ ରାଣୀଙ୍କୁ ଦିଗତ ଦିନର ଓ ଆଗାମୀ ଦିନର କଥା ସବୁ କହିବାକୁ ଲାଗିଲେ ଏବଂ ବିଭିନ୍ନ ପ୍ରତିଜ୍ଞା ଭି କଲେ । କିନ୍ତୁ ଛୋଟ ରାଣୀ ଏତେ ଦୁର୍ବଳ ହୋଇପଡ଼ିଥିଲେ ଯେ ଉତ୍ତର ମଧ୍ୟ ଦେଇପାରୁନଥିଲେ । ତାଙ୍କରି ମୁଖରେ ବ୍ୟଥା ପ୍ରକାଶ ପାଉଥିଲା

### 5丁表

ଓ ସେ ସମ୍ଭାହାନ ହୋଇ ପଡୁଥିଲେ ।

ସମ୍ରାଟ ଛୋଟରାଣୀଙ୍କୁ କହିଲେ, "ଆମେ ତ ମୃତ୍ୟୁରତି କୁ ମଧ୍ୟ ଏକାସାଙ୍ଗରେ ଯାତ୍ରା କରିବାପାଇଁ ପ୍ରତିଜ୍ଞାବଦ୍ଧ ହୋଇଛେ । ତେଣୁ ତୁମେ ମୋତେ ଏକା ଛାଡ଼ି କେମିତିଯେ ଯାଇପାରିବ?" "

ରାଣୀଙ୍କୁ , ସମ୍ରାଟଙ୍କର ଏହି କଥା ଦହୁତ ଆନନ୍ଦ ପ୍ରଦାନ କଲା, ଏବଂ, ସେ ସମ୍ରାଟଙ୍କୁ ପରବର୍ତ୍ତୀ କବିତା ଶୁଣାଇଲେ ।

ଏପରି ଓଲଗା ହେବା ତ ବିଶେଷ କଷ୍ଟ ଦାୟକ  
 ଇଚ୍ଛାହୁଏ ଆଉ କିଛିଦିନ ବଞ୍ଚି ରହିଥାନ୍ତି

ରାଣୀ, ସମ୍ରାଟଙ୍କ ଅନୁମତିକ୍ରମେ ସଦାଚାରରେ ବସି ନିଜ ଘରକୁ ପ୍ରସ୍ଥାନ କଲେ ।  
 ସମ୍ରାଟଙ୍କର ଦୁଃଖ ଦୁଃଖରେ ଭରିଉଠୁଥିଲା । ସେ ରାଣୀଙ୍କୁ ଛାଡ଼ିବା ପାଇଁ ପରିଚାରକ ପଠାଇଲେ । ପରିଚାରିକ ଜଣକ ରାଣୀଙ୍କୁ ନିଜ ଘରେ ପହଞ୍ଚାଇ ଫେରିବା ଆଗରୁ, ସମ୍ରାଟଙ୍କ ନିକଟରେ ଖବର ପହଞ୍ଚିଲା ଯେ, "କିରିସୁବୋ ର ଛୋଟ ରାଣୀ" ରାତି ଯାହିବା ପୂର୍ବରୁ ପରଲୋକ ଗମନ କରିଗଲେ । ସମ୍ରାଟ ସ୍ତମ୍ଭିତ ହୋଇ, କିଂ କର୍ତ୍ତବ୍ୟ ବିମୁହ୍ନ ହୋଇଗଲେ ।

ସମ୍ରାଟ, ବର୍ତ୍ତମାନ ହିକାରୁ ଗେଞ୍ଜି (ୱାକା ଗିଫି)ଙ୍କ ସହିତ ମିଶିବା ପାଇଁ ଇଚ୍ଛା ପ୍ରକାଶ କଲେ । କିନ୍ତୁ ମୃତ୍ୟୁକ ଘରର ଲୋକ ପ୍ରାୟଦବେ ରହିବା ଅଶୁଭ ମନାଯାଉଥିବାରୁ ହିକାରୁ ଗେଞ୍ଜି (ୱାକା ଗିଫି) ଙ୍କୁ ନିଜ ମାତାଙ୍କ ଘରକୁ ପଠାଇ ଦିଆଗଲା ।

ହିକାରୁ ଗେଞ୍ଜି (ୱାକା ଗିଫି) କଣ ସବୁ ଘଟୁଛି ଜାଣିପାରୁନଥାନ୍ତି । ତାଙ୍କ ଚାରିପଟରେ ଥିବା ପରିଚାରିକା ଗଣ କାହିଁ କି ଯେ କାନ୍ଦୁଅଛନ୍ତି, ଏବଂ ସର୍ବୋପରି, ସମ୍ରାଟ ମଧ୍ୟ କାହିଁକି ଅଶୁ

5 丁裏

ସମରଣ କରିପାରୁନାହାନ୍ତି, ସେ ବୁଝିପାରୁନଥିଲେ ।

ପରମ୍ପରା ଅନୁଯାୟୀ "ଓତାଗା" ନାମକ ଜାଗାରେ ରାଣୀଙ୍କର ଦାହ ସଂସ୍କାର କରାଗଲା । "କିରିସୁବୋ ର ଛୋଟରାଣୀ" ଙ୍କ ମା ନିଜ ଝିଅଙ୍କର ତିତାସ୍ତ୍ର ଚଳେ ନିଜକୁ ମଧ୍ୟ ଲୀନ କରି ଚେପାକୁ ଡାହୁଁଥିଲେ । କିନ୍ତୁ କୌଣସି ପ୍ରକାର ଭାବରେ ଅଶୁ ବୁଝାଇ ପରିଚାରିକାଙ୍କ ବାହନରେ ବସି ସେଠାରୁ ବାହାରିଲେ ।

ସମ୍ରାଟଙ୍କର ଦୂତ ଆସି "କିରିସୁବୋ ର ଛୋଟରାଣୀ" ଙ୍କୁ "ସଂମି ନୋ କୁରାଇ", ଅଥବା, "ତୁତାୟ ପଦବୀ" ରେ ସମ୍ମାନିତ କଲେ ।

ସମ୍ରାଟ ଯେବେ ବି ପ୍ରଥମ ରାଜକୁମାର ଙ୍କୁ ଦେଖନ୍ତି, ତାଙ୍କରି "ହିକାରୁ ଗେଞ୍ଜି (ୱାକା ଗିଫି)" ଙ୍କ କଥା ମନରେ ଆସିଯାଏ । ତେଣୁ ସେ ପରିଚାରିକା କିମ୍ବା ଧାଇ ଙ୍କୁ "ହିକାରୁ ଗେଞ୍ଜି (ୱାକା ଗିଫି)"ଙ୍କ ଭଲ ମନ୍ଦ ବୁଝିବା ପାଇଁ ବାରମ୍ବାର ପଠାନ୍ତି । ସେଦିନ, ପବନ ଜୋରରେ ବୋହୁଥାଏ ଏବଂ ପାଗ ଥଣ୍ଡା ଥାଏ । ସମ୍ରାଟ ସୁଗେଲ ନୋ ମେଘାକୁ ନାମକ ଏକ ପରିଚାରିକା ଙ୍କୁ "କିରିସୁବୋ ର ଛୋଟରାଣୀ" ଙ୍କ ମାଙ୍କ ଘରକୁ ପଠାଇଲେ ।

ସମ୍ରାଟଙ୍କର ପତ୍ର ରେ ଏଭଳି କବିତା ଥିଲା ।

ମିୟାଗା ର ଶିଶିର ବିନ୍ଦୁ ବୋହି ନେଉଥିବା ପବନର ସ୍ୱର  
 ହାଗା ର ସେହି ଛୋଟ ଫୁଲର କଳ୍ପନା ମୋ ମନକୁ ଚାଣି ଆଣେ

ସୁଗେଲ ନୋ ମେଘାକୁ "କିରିସୁବୋ ର ଛୋଟରାଣୀ" ଙ୍କ ମାତା ଙ୍କୁ ମିଶି ଏଭଳି କବିତା ପଢ଼ିଲେ ।

## 6 丁表

ଝିଙ୍କାରି ଯେମିତି ନିଜବଳ ଲଗାଇ ସର୍ବଦା କାନ୍ଦୁଥାଏ  
ଠିକ ସେଭଳି ଆଖିର ଅଶ୍ରୁ କେବେବି ବନ୍ଦ ନହୁଏ

ପ୍ରତ୍ୟୁତ୍ତର ରେ "କିରିସୁବୋ ର ଛୋଟରାଣୀ" ଜ୍ଞ ମା, ବା, ହିକାରୁ ଗୋଢ଼ି ଜ୍ଞ ଆଇ ଏଭଳି କବିତା ପଢ଼ିଲେ ।

ଖାଲି ଘାସର କ୍ଷେତରେ ଝିଙ୍କାରି ଆଉରିବି ଅଧିକ ଜୋରରେ କାନ୍ଦେ  
ବାଦଲରେ ରହିଥିବା ମନୁଷ୍ୟ ବି ସେମିତି ଅଧିକ ଲୁହ ବୁହାଏ

ଏହି ସମୟ ବି ସୁନ୍ଦର ଉପହାର ପଠାଇବା ପାଇଁ ପ୍ରୟତ୍ନ ନଥିବା ଯୋଗୁଁ "କିରିସୁବୋ ର ଛୋଟରାଣୀ" ଜ୍ଞ ମା,  
"କିରିସୁବୋ ର ଛୋଟରାଣୀ" ଜ୍ଞର କିଛି ପୋଷାକ ଓ ଗହଣା ନିଜ ପତ୍ର ସହିତ ସମ୍ରାଟ ଜ୍ଞ ନିକଟକୁ ପଠାଇଲେ ।

ସେପଟ, ଦେଉ ରାତ୍ର ହୋଇଯାଇଥିଲେ ମଧ୍ୟ ସମ୍ରାଟ ଜ୍ଞ ଆଖିକୁ ନିଦ୍ରା ଆସୁ ନଥାଏ । ସମ୍ରାଟ ତାରି, ପାଞ୍ଚ ଜଣ  
ପରିଚାରିକା ଜ୍ଞ ଗହଣରେ ବଗିଚାର ଫୁଲ ନିରୀକ୍ଷଣ କରିକରି କଥାହେଉଥାନ୍ତି ।

"କିରିସୁବୋ ର ଛୋଟରାଣୀ" ଜ୍ଞ ମା ସମ୍ରାଟଙ୍କ ପତ୍ରର ଉତ୍ତର ସ୍ୱରୂପ ନିମ୍ନ କବିତା ପଠାଇଥିଲେ ।

ତୋଫାନ ରୁ ରକ୍ଷା କରିବା ମଣିଷ ତ ବାଲି ଯାଇଛି  
କିନ୍ତୁ, ହାଗାର ସେ ଫୁଲର ସୁରକ୍ଷା ମୋତେ ବ୍ୟତିବ୍ୟସ୍ତ କରେ

## 6 丁裏

ସମ୍ରାଟ "କିରିସୁବୋ ର ଛୋଟରାଣୀ" ଜ୍ଞ ମା, ଅଥବା, ହିକାରୁ ଗୋଢ଼ି ଜ୍ଞ ଆଇ ଓ ହିକାରୁ ଗୋଢ଼ି ଜ୍ଞ ଖବର  
ନେଲେ, ଏବଂ ଉପହାର ଗୁଡ଼ିକୁ ଦେଖି ଏହି ପ୍ରକାରର କବିତା ଲେଖିଲେ ।

ଯଦି, ଯାଙ୍ଗ ଗୁଇଫେଇ ର ତଳାଣରେ ଯାଇଥିବା ଯାଦୁଗର ଏଠାରେ ଥାଆନ୍ତା  
ତାଙ୍କରି ଆମ୍ଭକୁ ଖୋଜିବା ପାଇଁ ମୁଁ ବି ପଠାଇଥାନ୍ତି

ସମ୍ରାଟ ଦିର୍ଦ୍ଦ ଦିନ ୧ରି ପ୍ରଥମ ରାଜକୁମାରଙ୍କ ମା, "କୋକିଦେନ ର ମଝିଆ ରାଣୀ"ଙ୍କୁ ମିସି ନଥିଲେ । ତେଣୁ  
ମୋଝିଆରାଣୀ ସୁନ୍ଦର ଚନ୍ଦ୍ରମା ରାତ୍ରରେ କୋତୋ ଇତ୍ୟାଦି ର ସଙ୍ଗୀତ ଆୟୋଜନ କରି ଆନନ୍ଦ ମେଉଥାନ୍ତି ।  
ପ୍ରାସାଦର ଲୋକ ଏବଂ ପରିଚାରିକା ବୃନ୍ଦ ଏହା ଦେଖି ଦୁଃଖ ପ୍ରକାଶ କରୁଥାନ୍ତି ।

ସମ୍ରାଟ "କିରିସୁବୋ ର ଛୋଟରାଣୀ" ଜ୍ଞ ମା, ଅଥବା, ହିକାରୁ ଗୋଢ଼ି ଜ୍ଞ ଆଇ ଜ୍ଞ ଜୀବନ ବିଷୟରେ ଚିନ୍ତାକରି  
ଏପ୍ରକାର କବିତା ଲେଖିଲେ ।

ଏ ପ୍ରାସାଦରେ ମଧ୍ୟ ମେଘର ଅଶ୍ରୁ, ଚନ୍ଦ୍ରମାର ରଙ୍ଗକୁ କଳା କରିଦିଏ  
ମୁଁ ଭାବେ, ଆପଣ ସେହି ଭଦାଶ ଘାସ କ୍ଷେତରେ କେମିତି ରହୁଥିବେ

କିଛି ସମୟ ଅତିବାହିତ ହେବାପରେ ହିକାରୁ ଗୋଢ଼ି (ଖିକା ଗିମି) ପ୍ରାସାଦ କୁ ଫେରିଆସିଲେ । ସେ ଏତେ ସୁନ୍ଦର

ହୋଇଯାଇଥିଲେ ଯେ, ଭଗବାନ ତ କେବେ ତାଙ୍କୁ ନିଜ ପାଖକୁ ଡାକି ନେଇନଯିବେ ଭାବି ଲୋକଙ୍କ ହୃଦୟରେ ବିଚ୍ଛା ଜାଗୁତ ହୋଇଯାଇଥିଲା । ପରବର୍ଷ ର ଦସନ୍ତ ରୁହୁରେ ପ୍ରଥମ ରାଜକୁମାର ଙ୍କୁ

### 7 丁表

ଯୁବରାଜ ରୂପେ ଘୋଷଣା କରାଗଲା ।

ଏ ସମୟରେ ସମ୍ରାଟ ହିକାରୁ ଗୋଜି ଙ୍କୁ ହିଁ ଯୁବରାଜ କରିବାପାଇଁ ମନ ଭିତରେ ଚାହୁଁଥିଲେ । କିନ୍ତୁ ସମ୍ରାଟ ଙ୍କୁ ଏହି କଥା ମଧ୍ୟ ଜଣାଥିଲା କି, ସମ୍ରାଜ ଏହି ବିଚ୍ଛାଧାରୀକୁ ସ୍ୱିକାର କରିବନାହିଁ , ତେଣୁ ସେ ମନର କଥାକୁ ମନରେହିଁ ରଖି ମୁଖରେ ପରିପ୍ରକାଶ ହେବାକୁ ଭି ଦେଲେନାହିଁ ।

ଇତିମଧ୍ୟରେ "କିରିସୁବୋ ର ରାଣୀ" ଙ୍କ ମାତାଙ୍କର ସର୍ବଦାସ ହୋଇଗଲା । ସେ ଜୀବନ ପ୍ରତି ବେଧଧୂଏ ବିମୁଖ ହୋଇଯାଇଥିଲେ । ସମ୍ରାଟ ଙ୍କୁ ବହୁତ ଦୁଃଖ ହେଲା ।

ବର୍ଷମାନ ହିକାରୁ ଗୋଜି (ଖାକା ଗିମି) ସାତ ବର୍ଷ ବୟସ ର ହୋଇଗଲେ ଏବଂ ତାଙ୍କରି ପୋଥି ଙ୍କୁଆଁ ବିଧାନ ଆରମ୍ଭ କରାଗଲା । ଦେଖୁ ଦେଖୁ ସେ କେବଳ ବିଦ୍ୟା ରେ ହିଁ ନୁହଁ, କୋଡୋ, ବଂଶୀ ଇତ୍ୟାଦି ଜାପାନୀ ଶାସ୍ତ୍ରୀୟ ସଂଗୀତ ରେ ମଧ୍ୟ ପାରଙ୍ଗମ ହୋଇଗଲେ । ତାଙ୍କରି ଏହି ପାରଙ୍ଗମତା କୁ ଦେଖି ପ୍ରାସାଦର ଲୋକେ ଆଶ୍ଚର୍ଯ୍ୟନିତ ହୋଇପଡୁଥିଲେ ।

ଏହି ସମୟରେ କୋରିଆ ରୁ ଏକ ବିଦ୍ୱାନ ଜ୍ୟୋତିର୍ବିଦ ପ୍ରାସାଦ କୁ ଆସି, ହିକାରୁ ଗୋଜି (ଖାକା ଗିମି) ଙ୍କର ଏହି ପ୍ରତିଭା ଓ ସୌନ୍ଦର୍ଯ୍ୟ କୁ ପ୍ରଶଂସା କରି, "ହିକାରୁ କିମି ବା ଜ୍ୟୋତିର୍ମୟ" ନାମରେ ନାମିତ କରି, ଅନ୍ୟାନ୍ୟ ଭପହାର ମଧ୍ୟ ପ୍ରଦାନ କଲେ ।

ସମ୍ରାଟ ହିକାରୁ ଗୋଜି (ଜ୍ୟୋତିର୍ମୟ) ଙ୍କୁ, ରାଜ ପରିବାର ରୁ ଅଲଗା କରିବାକୁ ଚାହୁଁନଥିଲେ । କିନ୍ତୁ ଏହା କରିବାକୁ ସେ ବାଧ୍ୟ ହୋଇ, ଗୋଜି ସଂଜ୍ଞା ଦେଇ ଅନୁଚର ରୂପରେ ପାଖରେ ରଖିବା ପାଇଁ ନିଷ୍ପତ୍ତି ନେଲେ ।

### 7 丁裏

絵 2 ପ୍ରାସାଦ ର ସ୍ୱାଗତ କକ୍ଷରେ କୋରିଆ ର ଜ୍ୟୋତିର୍ବିଦ ସାତ ବର୍ଷ ବୟସର ହିକାରୁ ଗୋଜି ଙ୍କୁ ଦେଖୁଅଛନ୍ତି ।

### 8 丁表

ବହୁତ ସମୟ ଅତିବାହିତ ହେବା ପରେ ଭି ସମ୍ରାଟ "କାରିସୁବୋ ଙ୍କ ଛୋଟରାଣୀ (ମାସୋଙ୍କୁଦକୋରୋ )" ଙ୍କୁ, ନା ଭୁଲିପାରୁଥିଲେ, ନା ନିଜ କୁ ସାନ୍ତୁନା ମଧ୍ୟ ଦେଇପାରୁଥିଲେ । ଏତିକି ସମୟରେ ନାଉଶାନସୁକେ ନାମକ ଏକ ପରିଚାରିକା ସମ୍ରାଟ ଙ୍କୁ କହିଲା ଯେ, ପୂର୍ବ ସମ୍ରାଟଙ୍କ ଚତୁର୍ଥ ରାଜକନ୍ୟା ଟି ବହୁତ ସୁନ୍ଦର ଅଟନ୍ତି । (ସେହି ରାଜକନ୍ୟା ଙ୍କ ନାମ ଫୁଜିସୁବୋ ଅଟେ । )

ପୁଣି, ଏହି ରାଜକନ୍ୟା ଦେଖିବାକୁ ମଧ୍ୟ, "କାରିସୁବୋ ର ଛୋଟରାଣୀ (ମାସୋଙ୍କୁଦକୋରୋ )" ଙ୍କ ଭଳି ଅଟନ୍ତି, ଏବଂ ଉଚ୍ଚ କୁଳର ମଧ୍ୟ ଅଟନ୍ତି ।

ସମ୍ରାଟ ଆସ୍ତେଆସ୍ତେ ଫୁଜିସୁବୋ ଙ୍କ ପ୍ରତି ଆକର୍ଷିତ ହେବାକୁ ଲାଗିଲେ ।

ହିକାରୁ ଗୋଜି ସର୍ବଦା ସମ୍ରାଟ ଙ୍କ ପାଖରେ ରହୁଆଅନ୍ତି ଓ ସମ୍ରାଟ ଙ୍କ ସହିତ ଫୁଜିସୁବୋ ଙ୍କ ପାଖକୁ ଭି ଯାଆନ୍ତି ।

ସମ୍ରାଟ ହିକାରୁ ଗୋଜି ଏବଂ ଫୁଜିସୁବୋ ଦୁଇ ଜଣଙ୍କୁ ହିଁ ଏକାଭଳି ଭଲ ପାଉଥିଲେ । ତେଣୁ, ପ୍ରାସାଦ ର ଲୋକେ



ଦୂରରେ ବସିଥିବା ଫୁଲିସୁବୋଙ୍କର ଧୀର ବାଣୀ ଚିକିତ୍ସିତ ଶୁଣିବାକୁ ସର୍ବଦା ପ୍ରୟାସ କରୁଥାନ୍ତି । ଏ ପ୍ରକାର ଭାବରେ  
ହିକାରୁ ଗୋଟିଜଣର ସମସ୍ତ ପ୍ରାସାଦ ଭିତରେ ହିଁ ବିଦିଯାଉଥାଏ ।



執筆者一覧 (敬称略・掲載順)

伊藤 鉄也

(国文学研究資料館／総合研究大学院大学・教授)

高田 智和

(国立国語研究所・准教授)

入口 敦志

(国文学研究資料館・准教授)

須藤 圭

(立命館大学 助教)

アルン・シャーム

(英語・外国語大学 / English and Foreign Languages University)

菊池 智子

(翻訳家)

村上 明香

(アラハバード大学・大学院生)

リーマ・シン

(デリー大学博士課程3年生 (文学翻訳))

タリク・シェーク

(ハイデラバード大学・准教授)

畠山 大二郎 (愛知文教大学・講師)

渋谷 栄一 (高千穂大学・名誉教授)

浅川 槇子 (国文学研究資料館・研究員)

ムハンマド・ノーシャード・カームラン

(アラハバード大学・大学院 (博士課程) 修了)

ナビン・パンダ (デリー大学)

## ◆ 編集後記

昨年の11月にインドで開催された、第8回インド国際日本文学研究集会の内容を反映した『海外平安文学研究ジャーナル インド編』をお届けします。

今号は、インドでの講演のほか、数年にわたり中心的に取り組んでいる『十帖源氏』の翻訳における問題点、およびインドの言語で翻訳されたデータを掲載しました。

あわせて、2日間にわたって活発な議論が展開された、パネルディスカッションとシンポジウムの内容も入った盛りだくさんな内容となっております。現地での熱気をみなさまにも感じていただけたら幸いです。

最後に、集会の開催にご尽力くださった方々、ご多忙の中、原稿をお寄せくださった方々にこの場を借りてお礼を申し上げます。

(浅川槇子)

インドには多くの言語があります。実際にその言語で書かれた文章をいただいて日本語と一緒に編集しようとする、事前に予想していた以上にさまざまな問題にぶつかりました。同じインドで使われている言葉なのに、始まりが左右で異なるもの、アラビア文字によく似たもの、絵文字のような文字を使用したものなど、バラエティ豊かでした。これほどの違いが生じるものなのかという驚きと同時に、これらの文字を正確に使って世間に広めることの難しさも実感しました。

国内はもちろん、遠く現地からも原稿を寄せてくださった参加者の皆様に感謝いたします。

(加々良恵子)

## 研究組織

### 研究代表者

伊藤 鉄也 (国文学研究資料館／総合研究大学院大学・教授)

### 研究分担者

野本 忠司 (国文学研究資料館／総合研究大学院大学・准教授)

### 連携研究者

マイケル, ワトソン (明治学院大学・教授)

清水 婦久子 (帝塚山大学・教授)

荒木 浩 (国際日本文化研究センター・教授)

ラリー, ウォーカー (京都府立大学・准教授)

藤井 由紀子 (清泉女子大学・准教授)

高田 智和 (国立国語研究所・准教授)

### 研究協力者

高木 香世子 (マドリード・アウトノマ大学・准教授)

緑川 眞知子 (早稲田大学・講師)

土田 久美子 (青山学院大学／東京工業大学・講師)

須藤 圭 (立命館大学・助教)

川内 有子 (立命館大学・大学院生)

テレサ, マルティネス (立命館大学衣笠総合研究機構・客員研究員)

庄 婕淳 (立命館大学・大学院生)

畠山大二郎 (愛知文教大学・講師)

村上明香 (インド・アラハバード大学・大学院生)

浅川 槇子 (国文学研究資料館・研究員)

加々良 恵子 (国文学研究資料館・補佐員)

科学研究費補助金 基盤研究 (A) 2013 年度研究報告書  
「海外における源氏物語を中心とした平安文学及び各国語翻訳に関する総合的調査研究」  
課題番号 [25244012] 研究代表者 伊藤 鉄也

# 海外平安文学研究ジャーナル

## 《インド編 2016》

Journal of Heian Literature Research Overseas: Indian version 2016

2017 年 03 月 30 日 発行  
〈非売品〉

編集兼発行者 国文学研究資料館 伊藤鉄也

<http://genjiito.org/>

「海外平安文学研究ジャーナル」

<http://genjiito.org/journals/>

I S S N 2 1 8 8 - 8 0 3 5

© 伊藤鉄也

本書を無断で複写・複製・転載することは  
法律で認められた場合を除き禁じられています。